

水路

渡谷 邦

を作る間、夫はわたしの傍を離れない。

「あんなに似た人間がいる意味は何なのかな」

食卓でポテトを口に詰め込みながら、夫は言った。

「そんなに似ているの？」他人事のようにわたしは聞いた。
「うん、似ている」

夫は断言すると、溶けだしそうなポテトを口に運び続けた。

一週間して夫はまたわたしに似た女を見た。その次の日も。女は水路の周辺に住んでいるにちがいない。それともあの辺りに勤め先があるのかもしれない。わたしもその女を見てみたい。わたしはパートの帰りにわざわざ水路脇の遊歩道を通ることにした。遊歩道のベンチにも坐ってみた。三月も終わろうとしていたが、夕方になると空気は肌寒い。

夫によればどうも水路の辺りにわたしに似た女がいるらしい。わたしはまだその女を見ていない。女を見かけたのは夫だ。その日夫は子どものように興奮して帰ってきた。玄関のドアを勢よく開けて、コートも脱がずにキッチンまでやって来ると、「さっききみによく似た女の人を見たぞ」と息を切らしながら言った。それから冷蔵庫から水のボトルを出してごくごく飲んだ。わたしはじゃがいもの皮を剥いていた。その日はポテトグラタンだった。

「すれ違ったとき、てっきりきみかと思ったよ。それにしてもよく似ていたなあ。あんなに似た人間が世の中にいるとはな」

夫はわたしの顔をつくづく眺めたあと、わたしの耳や鼻に触る。「やめてよ」とわたしは言った。ポテトグラタン

通行人はベンチに坐ってコートの襟を立てバッグの持ち手をぎゅっと握りしめて身を縮ませているわたしをじろじろ見た。居心地が悪くなり、近くのカフェに入った。カフェ

はビルの二階にあつて窓際の席から水路と遊歩道を行きかう人々がよく見えた。わたしは毎日のようにそのカフェに寄つて水路を覗いた。

「あの女の人がいたぞ」

ある日仕事から帰つて来るなり、夫が言った。夫は玄関の三和土で靴も脱がずに息を切らしていた。遊歩道のベンチにわたしに似た女が坐っていたのだ。それを見た夫は水路から走つてきたのだ。

「行つてみよう。さあ、早く」

夫は玄関で声を張りあげる。

「食事の支度をしなくちゃあ」

わたしはその日もじゃがいもの皮を剥いていた。その日もポテトグラタンだった。

「そんなことは後でいいよ。きみも見たがつていたじゃないか」

水を張ったボールに薄切りにしたじゃがいもを落とし、手を拭つてコートを引つけた。夫はわたしの腕をつかんで引きずるように通路を走り、エレベーターに押し込む。エレベーターはゆっくりと下降した。エレベーターを飛び出すとコンビニの角を曲がつて水路まで走つた。辺りにも

う暗かった。等間隔に立ち並ぶ昔のガス燈を模した街灯が遊歩道を照らしていた。

「あれ、いなくなつちやつたな」

先を走つていた夫ががっかりした声を出した。

「ほらこのベンチにすわつていたんだけどな」

夫は誰も坐つていないベンチを指さした。

「帰つちやつたのよ」

わたしは思わず笑いだしそうになった。でも夫は真剣だ。辺りをきよろきよろと見回した。落ちていた小枝を拾いあげ振り回しながら体を屈めて低木の茂みのあちこちを覗きこんだ。まるで女が小動物で茂みに隠れてでもいるように。

「ちよつと向こうを見て来るよ」

夫は水路に沿つてバス停の方へ歩いていった。わたしはさっきまでわたしに似た女が坐つていたベンチに腰かける。向こう側のビルの前を勤め帰りの人々が歩いているのが見えたが、水路の遊歩道を通る人はまれだった。わたしはコートのポケットに手をつ込み背を丸める。足元の敷石は所々剥がれてその下の泥炭のような土が黒々と光つていた。ベンチの横のゴミ箱からゴミがあふれ、誰かが並べたようにきれいな円形に広がっていた。蛍光黄緑のスポーツウェアの上下を着た中年の男がわたしの前を走つて通りすぎた。男はわたしをちらつと見てすぐに目を逸らす。しばらく走つてから男は振りかえつて、またわたしを見る。

夫がバス停の方からもどってきた。立ち止まってわたしをまじまじと見た。そして薄気味悪そうに「わあ、あの人かと思ったよ。よく似ているなあ」と言いながら隣に坐った。日が落ちると冬に逆戻りしたように冷たい風が吹いた。わたしはコートの前を掻き合わせ、両手をポケットに深く突っ込んだ。膝を小刻みに揺らすと「やめろよ」と夫が言った。「さあ、帰って飯を食おう」

わたしはうんと頷いたが、立ち上がらなかった。キッチンの水を張ったボールの底に沈んだじゃがいもを思い浮かべる。じゃがいもの芽には毒があるのだ。青い皮にも。じゃがいもを料理するたびに細心の注意を払わなければならない。

風がゴミ屑を足元に散らした。そのとき水路の反対側の遊歩道を女が歩いているのが見えた。肘で夫の脇腹をつつく。「ああ、あの女だ」と夫はすぐさま答えた。張り込み中の刑事のようにすばやく、だが何気なく立ちあがり、わたしたちは水路を挟んで女の後をつけた。ふたりの息はびったりだ。女のページジュのコートが木立に見え隠れした水門の上にかかる橋を、女のいる側へ渡った。女は食料品の入った大きなビニール袋を提げていた。水路沿いの食品スーパーに行ってきたらしい。荷物が重いのか、よろけるような足取りで、ときどき足を止めた。一度は立ち止まると、こちらをふり向いた。わたしは女の顔を見る。そんな

にわたしに似ているだろうか。女はわたしたちを不思議そうに見てまた前を向いて歩き出した。

「そんなに似てないじゃない」わたしは小声で言った。

「似ているさ」と夫はすぐさま答えた。

「少しは似ているかもしれないけれど。でもあんまり似ていない」

「似ている。似ている」

夫は平気な顔で繰り返した。わたしは急にばからしくなる。

「帰ろうよ」と夫に言った。

「静かにしろよ」

夫がわたしの腕を引っぱった。わたしたちは女の後姿にじっと目をやりながら歩く。女はわたしくらいの年齢に見えた。背丈も同じくらいだった。わたしと同じような髪型でわたしが着ているのと同じく似たページジュのコートを着ていた。

遊歩道の幅は狭くなり、いつのまにかむき出しの黒土の道になり、しまいには遊歩道はなくなり、でこぼこのアスファルトの道に吸収された。水路の周囲に絡み合うように生い茂った低木の茂みは市街地再生の手を逃れますす繁茂し、黒々とした水面にもつれた蔓を垂らしていた。カフェやレストランは見かけなくなり、古くてせせこましい家々が立ち並んでいた。粗大ごみ置き場に白い冷蔵庫がひ

るのが見えた。

「行こう」夫がわたしの手首をつかんだ。わたしたちは女の後について路地に入った。

細い路地を女は飛び跳ねるように進んだ。まるで買い物袋が急に軽くなったようだった。黄色い明かりが点いて、人声が漏れている路地は知っている場所を思い出させた。女たちが下駄ばきで歩き回って、よその家の裏口からずかずか上がりこんでいくような。でもそれは映画か何かで見ただけなのかもしれない。

右に曲がり左に曲がり、女はしなやかに移動した。夫もわたしも息を切らしていた。ほんとうに家に帰るところなのか。ここまで来たらついて行くしかなかった。水路からずいぶん遠ざかった気がした。急に空き地が現れ、その前に建つ二階建てのアパートの外階段を女はカンカン音をたてて上った。本当は公園なのかもしれない、その証拠に枯草の中に樹脂製の青いベンキがはげた象の遊具がひっそりと埋もれている空き地に入り、わたしたちはその象の背に腰かけた。象の鼻は途中で折れていて、鼻の内部には水が溜まっていた。アパートの部屋のドアを閉める前、女は空き地にいるわたしたちの方を振り返った。

女はさつき見たときよりわたしに似ている気がした。まるで追いかけられる間に少しずつわたしに似てきたようだった。

とつ置かれていた。小柄な老人が椅子に腰かけて水路の方をぼんやり見ていた。老人が背にしている木造家屋から水音が聞こえていた。

「気をつけるよ、そこのおふたりさん」

老人がしわがれ声を出した。

「ふらふら歩いているとはまっちゃんうぞ、ぼっちゃんな」

振り返ると、老人は歯を剥きだしてにっと笑ってみせた。

「なんだよ、あのじいさん」

夫がわたしの耳にささやく。

「知らないよ」とわたしは言う。

「知らないのか？」と老人が言う。

「半年前に男が水路に転落したはなし。新聞にも載ったし、テレビでもやったぞ。ちょうどこの真下だ。まだ若い勤め人だな。酔っぱらっていたわけでもないのに落っこちたんだ」

そんな話を聞いたことがあった。わたしは夫と顔を見合わせる。夫は立ち止まり、水路に身を乗りだした。わたしも横から覗きこんだ。水路には腰までしかない貧弱な手すりがついていた。遊歩道のあるあたりとは違って、思ったよりずっと深く、暗い水を湛えていた。

「気をつけるよ、おふたりさん」

老人は誰に言うともなく言った。女が右手の路地に曲が

「ほら、似ている」夫がわたしの耳元でささやいた。
「ほら、ほら、似ている、よく見ろよ」

「似ているかも」とわたしは言った。
変な気分だった。心臓がおかしなりズムを刻むのをうつむいてじっとやり過ごした。女の部屋に明かりがついた。空には雲が流れていた。雲と雲の隙間から星が見える。わたしたちはしばらく象に腰かけて黙っていた。誰も通らなかった。

「帰ろう」

夢から醒めたように夫は立ちあがり、コートの裾を払う。コートの裾には泥跳ねが付いていた。夫の靴もわたしの靴も泥で汚れていた。見ると、草の根元の土は湿っていて、靴がずぶずぶ沈む場所もあった。夫は舌打ちをして靴の先に付いた泥を指で拭いて象の頭になすりつける。

「沼みたいだな」と夫は言った。

青い象はさつきより地面にめり込んだように見えた。つま先立ちで空き地を出た。水路沿いを黙って歩いた。もつれた髪の毛のような灌木の枝が水面に垂れ下がっていた。覗き込むと引き込まれそうだった。

「でも似ていたなあ」と夫が言う。

「変な気分よ」消化不良の塊が体内に居すわっている気分だった。

「だろうな」と夫は言った。

夕飯は弁当を買ってかえることにした。弁当を買うためにコンビニに入った。コンビニの均一な明かりに晒されてわたしたちはほっとする。家に帰ると、ふたりの靴から念入りに泥を拭き取った。弁当を食べ終わり、ソファに並んで坐ってぼんやりテレビの画面を眺めた。ベッドに入ったものの眠れそうになかった。

「居場所なんか突き止めなければよかったなあ。突き止めてどうするつもりだったのかなあ。まさか三人で水路沿いのレストランにでも行くつもりだったのかなあ。身の上話をしあうか、それともよくあるだろう、漫画なんかでさ、よく似た二人が入れ替わるとか、最後はひとりの人間になっちゃうとか」

夫はひとりでしゃべり続ける。わたしは黙ってきいていた。

「あの女のことはもういいや」夫は突然そう言うのと、わたしに背を向けた。

そのうち隣で夫は寝息を立て始めた。暗闇に目を凝らし、わたしは息をひそめる。夢を見ているわけでもないのに映像が次々と現れ、エンドレスで再生された。ずぶずぶと足が沈みこむ水はけの悪い土地に建つみすばらしいアパート。それは別の土地に建つアパートだった。窓枠に小虫が湧き、排水口からは嫌な臭いがする。それはそこら中にあるアパート、以前わたしが住んでいたアパートだ。前の夫が

やって来て「入れろよ。いるんだろう」と、まるでテレビドラマのように執拗に戸を叩く。わたしは前の夫と暮らしていた家を出て、そのアパートを借りたのだった。がらんとした部屋の床でわたしは身を締め息を殺した。元夫が立ち去ってから外に出てみると、安普請のベニヤ貼りの戸は円形に陥没し、周囲に血液が付着していた。それは元夫の握りこぶしから出た血だ。その戸をどうやって修理したのだったっけ。

次の日、仕事から帰って冷蔵庫をあけると、昨日のじやがいもあるのに気づいた。まだ食べられるかどうか確信がもてない。濁った水に浸かったじやがいもを、考えた末、わたしは捨てた。夫から残業で遅くなるというメールが来た。夕食はいらないとあった。わたしは炒め物と味噌汁を作って食べた。点けっぱなしのテレビを見るときもなく見ていたが、コートをひっかけマンションを出た。

わたしは水路に沿って足早に歩いた。女のアパートへの道筋はうろ覚えだったが、たどり着ける気がした。ウォーキングをしている人のように背筋を伸ばし腕を大きく振ってまっすぐ前方を見すえ、足をリズムミカルに突き出す。遊歩道が途切れると狭い間口の家々が続いた。黄色い明かりとさざめきが漏れていた。きのうの老人が椅子に腰かけているのが見えた。まるでわたしを待ちかまえているようだ。「こんばんは」わたしは言った。

「水路へ落ちた男のはなし知っているか」

老人はわたしを引き止めようとするように暗闇をかき回すしぐさをする。仕方なくわたしは足を止めた。

「家内が誰かが水路に落ちるのを見たんだ。若い男でな。まだ朝の五時ころだったな」

老人は妻がいるのだろう背後の窓を指さしてみせる。窓の向こうに人影が見え、洗い物でもしているような水音が聞こえた。

「ちょうど通りがかった男と一緒にびしょ濡れになりながら水路から男を引っぱり上げたんだ。その横に水路へ降りる階段があつてな、そこから引っぱり上げたのさ。そうしたら家内がテルオちゃんに似ているって騒ぎ立てたんだ。テルオってのは近所に住む若い男でな。小学生のころのテルオはよく知っているが、もう何年も見かけていない。似ているようにも見えたが、わからなかったな。男は氣を失っていた。家内はテルオちゃんだ、テルオちゃんだ、どうしよう、と悲痛な声をあげていてな。救急車を呼んで家内を待たせておいて、わしはテルオの家まで走ったんだ。テルオの家はその角を曲がってちよつと行ったところだ。テルオの母親を叩き起こして家に上がりこんだ。テルオの部屋は内側から鍵がかかっていた。鍵がかかっているということは中にテルオがいるってことだろうから、わしは一安心したんだ。母親はテルオ、テルオ、と戸を揺すってわめ

いたがな」

老人はわたしのコートの袖口を指先でつかんで、紫色に見える唇から粘着性のある唾をとばした。通りすぎるわけにもいかず、わたしは老人の前に突っ立っていた。

「しばらくすると中でうめき声がして、眠りを中断された不機嫌そうなテルオが戸口にぬっと立った。わたしはテルオの全身を舐めまわすように見たよ。あたりまえだが、テルオは小学生のころとは様変わりしていた。それに溺れた男と似ているとは思わなかったな。テルオはわしの話を聞くと、ジャージのままよろよろついてきたよ。救急車がやって来て男を運び入れた。似てなんかないじゃないか、とテルオは男の顔を覗き込みながら言っていたな」

「似ていなかったんですね」
「や」とわたしは尋ねる。

「そうだな」

「なんだ」とわたしは言った。

「その人はどうなったんです？」

「死にはしなかったよ。大けがでずいぶん長い間入院していたがな。見舞いにも行ったよ。家内とふたりでな。これも何かの縁だろうよ。その男は退院してから菓子折りを持って訪ねてきた。家内がテルオの話をしたもんだから興味を持ってな。その後、テルオの家にも顔を出したらしいが、顔が似ていないのならいよいよ無関係なものにな。だが、

家内が言うにはその男はテルオと親しくなったらしい。気が合ったってわけだ。何回かテルオの家を訪ねたらしい。わからんもんだな」

老人は話し終わって安心したようにわたしの袖口の布地を見つめ、指を離した。

「落っこちるなよ。あとが大変だ」

そう言う老人は黙りこみ、水路の反対側の闇に眼を睜めた。急にわたしに興味を失くしたようだった。

わたしは見覚えのある角を曲がった。右へ曲がり、左へ曲がり、足が勝手に動くようだった。苦もなく女のアパートの前に出た。部屋には明かりが灯っていた。ためらうことなく外階段を駆け上がった。ドアの前で立ち止まった。自分が何をしたいのかわからなかった。あの女に会ってどうするとか。そのとき部屋の中からドスンと大きな物音がした。女の手切り声で聞こえた。慌てて戸口から離れ、換気扇の下に身を隠した。耳をすます。男の怒鳴り声が出た。「お前は、お前というやつは」と男は叫んでいた。また女が金切り声を出し、男がまたなにか怒鳴った。と、ドアが開き、男が出てきた。怒鳴り声に似合わない。男の横顔は色白でつるりとしていた。わたしは顔をそむける。男はゆっくり階段を下りていった。

わたしはドアを開けた。アパートのキッチン。がらんとして、新しく薄っぺらなフライパンや薬缶が台所の

テーブルに雑然と置かれ、天井灯に照らされていた。靴を脱いでリノリウム貼りの床の上に立った。床はひんやりしていた。眼を凝らすと、奥の部屋に女が仰向けに横たわっているのが見えた。女のそばに行った。明るすぎる電灯の下で、女の頬は青白く、目は大きく見開かれていた。髪は黒々ともつれて顔の周りに広がっていた。

「大丈夫ですか」おそろおそろわたしは尋ねた。

「誰？」女はわたしを見上げた。

「悲鳴が聞こえたから、勝手にあがりこみましたけれど」

「殴られただけ」と女はあっさりと言って、わたしを見据えた。女の右眼の周囲は青くなつて腫れていた。鮮やかな青だ。顔はぬめつたように光って、唇の端が切れていた。

わたしはその顔をじっと見た。目が離せなかった。女の横にべたりと坐つて、女の顔に触れた。その顔がわたしに似ているかどうか、わからなかった。女の髪を撫でた。髪はねばついていた。わたしは髪を撫で続けた。ほかに何をすればいいのかわからなかった。そうやってしばらく床に坐りこんだ。

「わたしを助けてくれるつもり？」と女が尋ねた。

「警察を呼びましょうか」とわたしは言った。

女は首を横に振った。怖がっているのはわたしのほうだった。自分からやって来たのに逃げ出したかった。傍に落ちていたレシートの裏に自分の住所と電話番号を書いて

女の手に握らせた。慌てて立ち上がり、階段を駆け下りた。カンカンという自分の足音が体中に響いた。脚がもつれた。いつのまにか水路に出た。あの老人はもういなかった。椅子だけが残っていた。途中のこぢんまりとしたイタリア料理の店から笑いながら出てきた若い男女のグループが走るわたしを見つめて一瞬押し黙った。それからけたたましい笑い声をあげた。立ち止まり息を整え、行きと同じように大きく腕を振り背筋を伸ばし大股で歩いた。マンシヨンのエレベーターに乗り込むと夫がいた。

「出かけていたの？」と夫が尋ねた。

「うん、ちょっと。買い忘れたものがあつたから」とわたしは答えた。

夫はわたしの足元をじっと見た。わたしは手ぶらで、泥で汚れたスエードの靴を履いていた。わたしの靴によく似ていたが、わたしの靴ではなかった。それなのに靴は自分の靴のように足になじんでいた。帰るとすぐ泥がついたままの靴を靴箱の奥に突っ込んだ。

文芸思潮広告承ります

文芸思潮の読者へ

読書好きの方に。お知らせください。特別割引

1/6P 5000円 アジア文化社広告部

「そういえば、あす水路沿いでバザールがあるんだったよな」と背後で夫が言う。

そうだった。すっかり忘れていた。年に数回開かれるバザールも氣に入ってわたしたちはこの水路近くのマンションを買ったのだ。

翌日はいい天気だった。テント張りのカフェやビストロが立ち並び、水路に張り出した簡易ステージでバンドが入れ替わり演奏した。やっと空いたテーブルで夫とわたしはラザニアを食べてワインを飲んだ。たくさんの人が遊歩道を行きかい、ベンチはどこも埋まっていて、敷石に坐ってしゃべっている人たちもいる。ワインを飲みながら、わたしはあたりを見回した。

「なんだよ、きよろきよろして」と夫が笑う。

わたしはあの女を探していた。別のバンドのジャズ演奏が始まった。ヒューっと歓声が上がった。水路の水は透きとおる小さな魚がたまに泳いでいる。水路の反対側をあつたが、もう女はいない。

「どうしたの」夫は演奏に氣を取られている。

「なんでもないよ」とわたしは答えた。

帰りに近くの無農薬の青果店に寄った。パートの帰りによく寄る店だ。じゃがいもをかごに入れていると顔なじみの小太りの女店主が「この間奥さんとよく似た人が店に来

そう言うって、女は顔をしかめる。しゃべると傷が痛むようだった。

「美しいものが好きでたまらないのに貧乏な人間って、どうすればいいのかなあ」

女をソファに坐らせるとコーヒーを入れた。ローテーブルの上にカップを二つ置くと女の横に坐った。脛にも大きな紫の痣があるのが見えた。女はしばらく黙りこんでいたが、そのうちぼつりぼつり話しはじめた。離婚したいのに夫が同意しないこと。夫が暴力をふるうこと。安いアパートを探して家を出たこと。前の仕事は辞めざるをえなかった。職場が遠くなりすぎたからだ。工場の仕事を見つけた。深夜の弁当工場だ。水路の近くまでマイクロバスが迎えに来る。深夜時間なので多少は時給がいい。昼間はアパートでうとうとし、深夜マイクロバスに乗り込むと隣の工場まで運ばれる。いつもマイクロバスには数人の女が乗り込んでいた。途中でバスは何回か停まり、女たちは増えていく。彼女らとはしゃべったりしない。ただ働くだけだ。その間何もかも忘れられる。帰りに二食分の弁当が手渡される。帰日もマイクロバスがまた水路まで運んでくれる。「そんな生活をしているのよ」と女はわたしを見つめた。

女の夫は女の行方を執拗に探し始めた。そうして行方を突き止める。わずかな貯金を取り崩して隠れるように暮らしていたアパートにやって来て、量販店で買い揃えた安物

てね。びっくりしたわよ」と笑った。「その人もじゃがいもをたくさん買って行ったのよ」

次の日、牛肉と玉葱を炒めてじゃがいもと人参を放り込んだとき、ピンポンが鳴った。ドアの前にあの女が立っていた。右眼の回りの黄色と紫の斑が午後の光に晒されていた。左のこめかみにも乾いた血のようなものがこびりついてた。わたしは後ずさりした。

「わたしの靴を履いて帰ったでしょう」女は面白そうにわたしを見た。女はわたしの靴を履いていた。靴には泥がたっぷり付いていた。女は靴をそろえると家にながり込んだ。

「いい匂いね」廊下を歩きながら女は言った。

「今日は何？」女はキッチンまでついてきて、鍋の中を覗きこんだ。

「ポトフよ」わたしが鍋の火を消そうとすると、「消さないで。邪魔しないから」と女は言った。女は親戚の家に遊びに来たこどものように、その辺のものに手を触れた。腫れあがった瞼の下から、ぶしつけで好奇心に満ちた視線を這わせながら、リビングをふらふらと歩き回る。ソファを撫で、ソファの背に掛かったバティック布をつまみ、ガジュマルの葉に触り、陶磁器の置物を指先でさする。

「お金持ちなのね。すごくいいものばかり。きれいなものばかり。うらやましいなあ」

の家具を蹴り上げる。「家に帰るんだ」と彼はどなった。「俺がいったい何をしたっていうんだよ」彼は狂ったような目で女を見た。女は夫が立ち去るのをじっと待つ。生き延びなければならぬ。彼は毎日のようにやって来る。ドアを執ように叩き、捨て台詞を残して帰っていく。わたしは物珍しい話でも聞くように女の口元を見つめていた。でも本当はその話を知っている。それはわたしのよく知っている話だ。

女はしゃべるのをやめない。女には話したいことが山のようにあるらしい。わたしは女のカップにコーヒーのおかわりを注ぐ。

「白い上下の作業服を着てね、髪の毛を束ねてネットを被ってね、その上から白い作業帽を被るのよ」と女は言う。「作業帽は眼のところだけが開いていて、目出し帽みたいな感じね。そして手をこしこし洗う。すごく清潔になるのよ、表面だけじゃなくて体の奥深くも」

女は笑ってみせる。

「代わりに行ってみようかしら。誰もわからないでしょ」とわたしは言う。女はふふんと鼻で笑って「面白いかもね」と言った。

夫が帰って来た。女とわたしをかわるがわる見た。

「お邪魔しています」と女は頭を下げた。

「いらっしやい」と言いながら、夫はわたしをキッチンま

で引っぱって行く。

「どうしてここにいるのさ」とわたしの耳元で囁いた。

「北村さんっていうのよ」わたしは女の名字を教えた。

ポトフは煮えたぎっていた。わたしは熱いポトフを深皿によそって食卓に運んだ。ポトフは大量の湯気をあげていた。わたしたちはふうふう言いながら、じゃがいもや人参を口に運んだ。ライ麦パンにアンチョビペーストを塗って口に押し込んだ。

「おいしいわ」と女はうつとりした顔で言う。

夫は女の目の周りの痣から目が離せないようだ。

「どうされたんですか、その怪我は」と夫が聞く。女はさっきたわたしにした身の上話をまた繰り返す。夫は困ったようにわたしを見た。わたしはにっこり笑ってみせるしかない。風呂に入った女はわたしのパジャマを着て、タオルで頭を拭いながらリビングをよるよる歩いた。「すごく眠いわ」と言うと、ソファの上にぐにやりと横たわる。いつのまにか夫がやって来て、わたしの隣に立っている。女が眠りの中にずるずると引っぱり込まれていくのを夫とわたしは息をひそめて見つめた。しばらくすると、女の喉からは風が吹いているような音がします。やがてその音が間遠になる。「毛布をかけてやらなきゃあ」と夫が言った。クロゼットから毛布を引っぱりだして女の体を包んでやった。女の姿を目の端に入れて、わたしたちは点けっぱなしのテレビ

画面が次々と変わるのをぼんやり眺めている。何か満ち足りた感じがする。女はまるでわたしたちの赤ん坊のようで、わたしたちは心配性の若い両親のようだ。

ベッドに入ったが、ふたりとも眠れなかった。並んで寝そべり、まっすぐ天井を見つめる。リビングとの間のドアを開けっ放しにしておく。夢でも見ているのか、女は時折かすかな唸り声をあげた。かわるがわる女のところに駆けつけ、肩を揺すったが、女は目を覚まさない。毛布の下から爪を短く切り揃えた白い足先のぞいていた。夫は毛布を伸ばして足先を包み込んでやる。女が急に大声を出すこともあった。喉をしばった悲鳴のようだ。

「どうしたんだ」夫は女の髪を撫でようとして慌てて手を引く。

「殴られている夢をみているのよ」

わたしは女の髪や頬を撫でた。わたしたちは二脚の椅子を女の向かいに引き寄せて坐る。冷蔵庫からビールを一本出し、かわるがわる飲む。

朝起きると女はまだ眠っていた。深い眠りの中にいるように朝食の食器がちやがちゃいう音にも目を覚まさない。「寝かしておいてやろう」と疲れた顔で夫が言った。夫はのろろ仕事に出かけ、そのあとわたしも家を出た。わたしは週に四回、知り合いがやっている雑貨屋を手伝っていた。夕方帰ってみると女はソファに腰かけて新聞を読ん

いる。眼の回りの打撲痕はさらに広がったようだ。女はわたしのジャージの上下を着ている。「掃除も洗濯もしてあるわよ」キッチンテーブルには畳まれた洗濯物がのっている。夕食の準備をするあいだ、女はテーブルを片付けたり皿を出したり野菜を刻むの手伝った。じゃがいもの皮も一緒に剥いた。いつまでも食器棚を覗き込んだりしていたと思うと、大きな鏡の前に立っていたりする。アールデコ風の枠がついた鏡で、結婚したときに商店街の今はもうない鏡店で買ったものだ。女はわたしを手招きして、わたしたちは並んで鏡の前に立った。女ははしゃいでいる。女の顔には生々しい傷跡がいくつもあつたし、目の回りが腫れていたから、わたしたちは似ているかどうかわからない。「素敵な鏡ね」と女は言った。インテリアに興味があるのだと女は言う。昼間はずっとリビングに置いてあったインテリアの雑誌を読んでいたらしい。帰ってきた夫は女がまだいるのでびっくりしたようだが、顔には出さなかった。夕食を食べながらわたしは水路の前にいた小さい老人の話をした。老人が話してくれた水路に落ちた男の話も。近所に住むというテロオという男のことも。男とテロオがあまり似ていなかった話も。

「なんだ、似てなかったのか」と夫が言う。

女もその話を面白がった。

その晩、女は仕事に行った。ジャージの上にページュの

コートをはおった。コートはだいぶくたびれていた。わたしも同じ色のコートを着て、一緒に水路まで歩いた。マイ

クロバスはもう着いていて、似たような女が十人ほど乗り込んでいてまっすぐ前を見つめていた。マイクロバスに乗り込むとき、女はわたしに小さく手を振った。わたしはぶらぶら歩いてマンションまで戻った。女は夕方帰ってきて、ソファに倒れ込むと毛布を被った。睡魔に抗えないようだ。夫とわたしは女の寝顔を見ながら朝食をとった。

そうやって女は夜工場に出かけ、朝帰って来ると昼過ぎまで寝ていた。時々必要なものを取りに自分のアパートに帰っているようだ。リビングの隅に女の持ち物が少しずつ増えていく。それには夫もわたしもいららす。暇があれば女はソファに身を投げ出してインテリア雑誌をめくった。わたしのマンションの調度品も気に入ったようだ。

「わたしはきれいなものが好きなのよ。すてきなカフェを出してみたいわ。あの水路の遊歩道沿いでカフェを出せたらどんなにいいかしら」

女は目を輝かせて言った。

「いつまでいるつもりなのか」

ある晩女が仕事に出かけたあと、夫が聞く。今や夫とふたりきりになれるのは女が夜仕事に出かけてから、わたしたちが眠るまでの間だけだ。

「夫がやって来るから別のアパートを探さないといけない

のよ」とわたしは言った。女の夫はまだ執ように電話をかけてくるのだ。

「いまに家に乗っ取られるんじゃないか」と夫はふざけて言う。

それでも女が出かけたあと、わたしたちは何か物足らない。女がベッドとして使っているソファの隅にわたしたちは並んで坐つてただぼんやりとする。ソファと毛布には女の匂いが貼りついている。わたしたちは体をひつつけ、その毛布にくるまった。女が弁当工場で働いているところを想像した。白い防護服のようなものを身に着けてネットを被った上に白い帽子を被り大きなマスクをつけて。あくろ朝、女はふらふらしながらもどつてきた。女は調子が悪そう。風邪を引いたみたいだ。

その晩、弁当工場に行ったのはわたしだ。女のパート証を首から提げて、ジャージの上下に茶色のコートを羽織った。

「わたしはあんたよ」とわたしは言った。

女は熱でうるんだ目でわたしを見あげた。夫はあきれ顔だ。わたしは別の弁当工場に行ったことがある。前の夫がわたしを探し出そうとしていたときに。だから仕事ははじめてではない。

水路沿いの黒土の道を酔っ払いが数人歩いていた。マイクロバスはもう着いてわたしを待っていた。乗り込んでい

た女たちに目をやると、彼女らは首をすこしすくめてみせた。後ろの席に坐った。弁当工場まで夜の街を揺られて行った。前の夫との結婚生活の寄る辺ない気持ち思い出した。弁当工場ではわたしに声をかける者はいなかった。わたしが誰かも知らなかった。担当者でさえも何も聞かなかった。タイムカードを押して、白い作業着に着替え、壁に大きく表示された手順通りに仕事をした。大きなステンレス台に弁当の容器がいっぱいに並べられていた。わたしは手早くレタスを敷きその上に長方形の何かの魚のフライを置く。弁当は何種類もあったが、ほとんどの弁当にそのフライが入っていた。フライは次々揚げられ運ばれてきて、冷まされた。明るい光の下、白い上下に白いエプロンをして目だけ出した人々が何人も行ったり来たりした。わたしはその中の一人だった。わたしは心地よい疲労を感じていた。それは私の体をやさしく包んだ。水路に戻ったとき、まだ夜は明けていなかった。新聞配達のパイクが通って行った。わたしはふらつきながらマンションへと急いだ。女はソファで熟睡していた。鼻孔からピーピー音が漏れていた。わたしは夫の隣にもぐりこむ。

「おかえり」と夫が目を瞑ったまま言った。

女の調子はだいたい良くなっていたが、次の日もその次の日もわたしは弁当工場に行った。どうして行くのか、自分でもわからない。「行くのか」と夫は言った。仕事の内容

はいつも一緒だ。フライの下に敷くレタスの葉っぱの大きさが違うくらいだ。黄緑のレタスの上の明るい茶色の長方形のフライ。それらは延々と並んでいる。マイクロバスがわたしを水路まで送り届け、明け方の白い光の中にわたしを降ろす。小さい老人がもう椅子に坐っていた。

「おはようございます」とわたしは言った。

「おうおう」と老人は答えた。わたしを見て「落ちるなよ」と老人はにっと笑った。まるで誰かが落ちるのを待っているみたいだ。

リビングは食べかけのフライドポテトやビザの生ぬるい匂いがした。ビールの空き缶が転がっていた。リビング全体がぬるくてぬめった寝床のようだ。掃除をしてほこりを払い家具を柔らかい布で拭く必要があった。そういえば、もう何日もそうしていない。夫と女は離れた場所で身を縮め、それぞれのリズムでちいさな軀をかいていた。夜が明けそうだった。わたしは女のバッグを引っ掻き回してアパートの鍵を見つけた。鍵を持って家を出た。水路の傍を歩き、老人の前を通り過ぎてアパートの階段を上った。奥の敷きっぱなしになっていた布団に倒れ込み眠った。眼が覚めると薬缶で湯を沸かしてカップラーメンを作って食べた。夫が何度もメールを入れていた。どうしたの？ どこにいるの？ 返信して。アパートに行った話をする、女は「馬鹿みたい」と笑った。わたしはただ行ってみただかつ

たのだ。

しばらくして女は新しいアパートを見つけた。バスで十分ほどのところらしい。新しいアパートの住所を女は教えてくれなかった。マンションの玄関でわたしたちは互に見つめあった。女の顔の痣はほとんど消えて、髪も艶やかになったようだ。さうならと女が言った。女がすると玄関を出て行くと、わたしはすぐさまドアを閉めて夕飯の支度を始めた。

水路の前に人だかりがしている。夫とわたしは傍のイタリア料理店から出てきたところだ。小さい老人がいた。老人は裏返ったような声を張りあげてその場を仕切っていた。わたしは人込みをかき分けるようにして水路に近づいた。手すりに下腹を押しつけて体を二つ折りにして水路を覗き込む。

「危ないじゃないか」

夫がわたしの二の腕をぎゅっとつかんだ。暗い水面に女の白い顔が見える。あの女に似ている気がした。中年の男が二人、腰まで水面に浸かって女を引き上げた。

「ゆっくりとな。気をつけろよ」老人が声を囁らした。

女が地面に引き上げられた。スカートが捲れて白い脚のぞいた。わたしは四つん這いになって近寄った。あの女に似ていないか。女はぐったりして気を失っているようだった。女の傍にかがみこもうとして夫に抱え込まれた。

救急車の音が近づいてきた。女は運び去られた。

「あの人に似ていたよね」

「似てないさ」夫は怒ったように呟いた。

「少し似ていた」

「全然似てなかったよ」

「少しだけ似ていた」わたしは言いづつた。

「それを言うなら、みんな少し似ているじゃないか」

夫に引きずられるように水路沿いを歩いてコンビニに入った。何も買うものはなかった。何も買わずにコンビニを出た。

マンションに帰ってブルーグレイのソファに腰かけた。

夫の肩に頭をもたせかける。

「ぼくたち幸せだよ」夫はわたしの髪を撫でた。

「そうね」とわたしは言う。

リビングには吟味しながら一つずつ買い足した調度品が置かれ、部屋はいい感じだ。休みの日には遊歩道沿いを散歩する。洒落たカフェに入ったり、気の利いたレストランで食事をする。水路沿いではバザールも頻繁に開かれる。ラザニアを食べ、ワインを飲み、大きな声で笑う。それはもう話したかも。透明な流れの中で小さな魚たちが寄り集まったり離れたりするたびに背びれがきらきら光ることも。自然食品の店で無農薬の野菜やじゃがいもを買う。

「この幸せを手放さないようにしないとね」とわたしは言

あるかいど 滋賀県

小説を書くことは生き直すこと

一九八二年七月に創刊された文芸同人誌『あるかいど』には現在二十三人の同人が参加している。年に二回発行し、最新刊は七六号となった。裏表紙には次のようなメッセージが記されている。

「大熊座の一部である北斗七星の柄杓の柄の先に位置する星がアルカイドである。一九八二年、若き書き手たちがこの星座の下に集い、物語を紡ぎはじめた。『あるかいど』の同人は『小説を書くことは、もう一度生き直すこと』を信じて書き続けている」

同人は天から転げ落ちてこの星にしがみついている限り地には落ちないとの思いで小説を書き続けている。小説の執筆を心の糧にしている者にとって『あるかいど』は、まさに拠となる星なのだ。

四十二年の歳月を経て、『あるかいど』にこれまで在籍した同人は約九十名にのぼる。初期のメンバーはほとんど知らない人達だが、所縁のある同人が『あるかいど』に刻んだ痕跡が霧散しないよう、創刊号から七五号までの目次、

う。

リビングの隅に女が忘れていったビニール袋がふたつあって、中には着古した洋服や化粧品、風邪薬、別の袋には架空のカフェを何枚も描いたスケッチブックが入っている、それらがリビングの統一感を少し乱しているが、わたしたちはさほど気にしない。

（『あるかいど』74号より転載）



渡谷邦

わたりだに くに

1955 広島市生まれ

岡山大学法文学部仏文科卒業

2013 年大阪文学学校入学

21 年より「あるかいど」同人

岡山市在住



創刊号



『あるかいど』74号



『あるかいど』合評会

編集後記、奥付や本誌に対する書評をまとめた『あるかいど四十二年の軌跡』を上梓した。ここでは、国際テロ組織が暗躍した影響で『アルカイド』から『あるかいど』に「改名」した経緯など、興味深い記事を目にすることができ。この歴史遺産を踏み台に、さらなる頂^{いただき}に向けて歩み続けたいと決意を新たにしたいところだ。

現在の編集方針として、最終締切りまでの途上で作者と編集委員による事前合評会を実施している。事前合評会を経ないものは原則的に掲載しない。まだ修正ができる段階ということであり、ときには辛辣な注文も出される。だが、けつして作品の存在を否定することはない。

「批評すれども否定せず」——それが『あるかいど』の立ち位置だ。

ひとつには、同人は小説を書きたいという思いが集まった仲間だということだ。同人の魂の叫びを安直に埋もれさせてはならないだろう。

さらにもうひとつの理由は、文学は常に変化し、前進しているということだ。旧套の価値観で同人の可能性を摘み取ってはならないと自戒している。

ほとんどの同人誌で合評会を重要なイベントとして位置づけている。『あるかいど』も例外ではなく、発行の翌月に合評会を開催している。合評会が作者の新たな成長を生み出す活力になることは疑いのないところだが、即効性が

ない点にジレンマがあった。構成の甘さを指摘されたところ

で、当該作では直しがきかない。中には誤字、誤用を指摘する者もいるが、すでに印刷されたものを直す手立てがなく、もやもやした思いを残すばかりである。そのため、合評会を少しでも有意義なものにしようと、従来の書籍と並行して電子書籍を出すことにした。

電子書籍の利点として容易に修正が可能という点が挙げられる。合評会で出された意見を踏まえて作者が書き直しをすることもできる。また誌上では、何号かに分けて連載をする作者もいるが、電子書籍では連載完結の際に、改めて第一回からまとめて掲載することも可能だ。

まだ市場に浸透しているとはいえない電子書籍ではあるが、同人誌の裾野を広げる一環として、あらゆる可能性を試していきたいと考えている。

同人の居住地は、関西を中心として東日本から沖縄まで分散している。合評会以外の場合で気軽に会うことができない。連絡手段としてグループLINEを活用しているが、新しい情報に流され継続性に劣る。そのため、ホームページを開設して、同人向けに発行までのスケジュールや近況を掲示するとともに、対外向けに活動報告や商業誌で取り上げられた書評を公開している。



あるかいどホームページへ

同人の投票による独自の賞を設けているのも特色のひとつだろう。『九嶺賞』という、先人を冠したこの賞は、その年に発表された二号分の作品の中から、各同人が一作だけ選び、最も多くの支持を受けた作品に贈られる。

文芸フリマにも積極的に参加している。遠方で開催されるものは資金的に困難だが、交通費の負担の少ない西日本で開催されるものについては、できる限り参加したいと考えている。ひとりでも多くの読手を増やすことが同人誌を持続させる道であろう。

この先の『あるかいど』の方向性も少し触れておこう。これまで同人加入の条件を大阪文学学校修了生に限ってき



あるかいど 42 年の軌跡

たが、今年規約改定をして、本条件を外した。門戸を広げた形だが、加入に際して作品審査がある。だが何よりも重視しているのは人間性だ。志を同じくする者達の集団にとって、不和ほど無用なものはない。

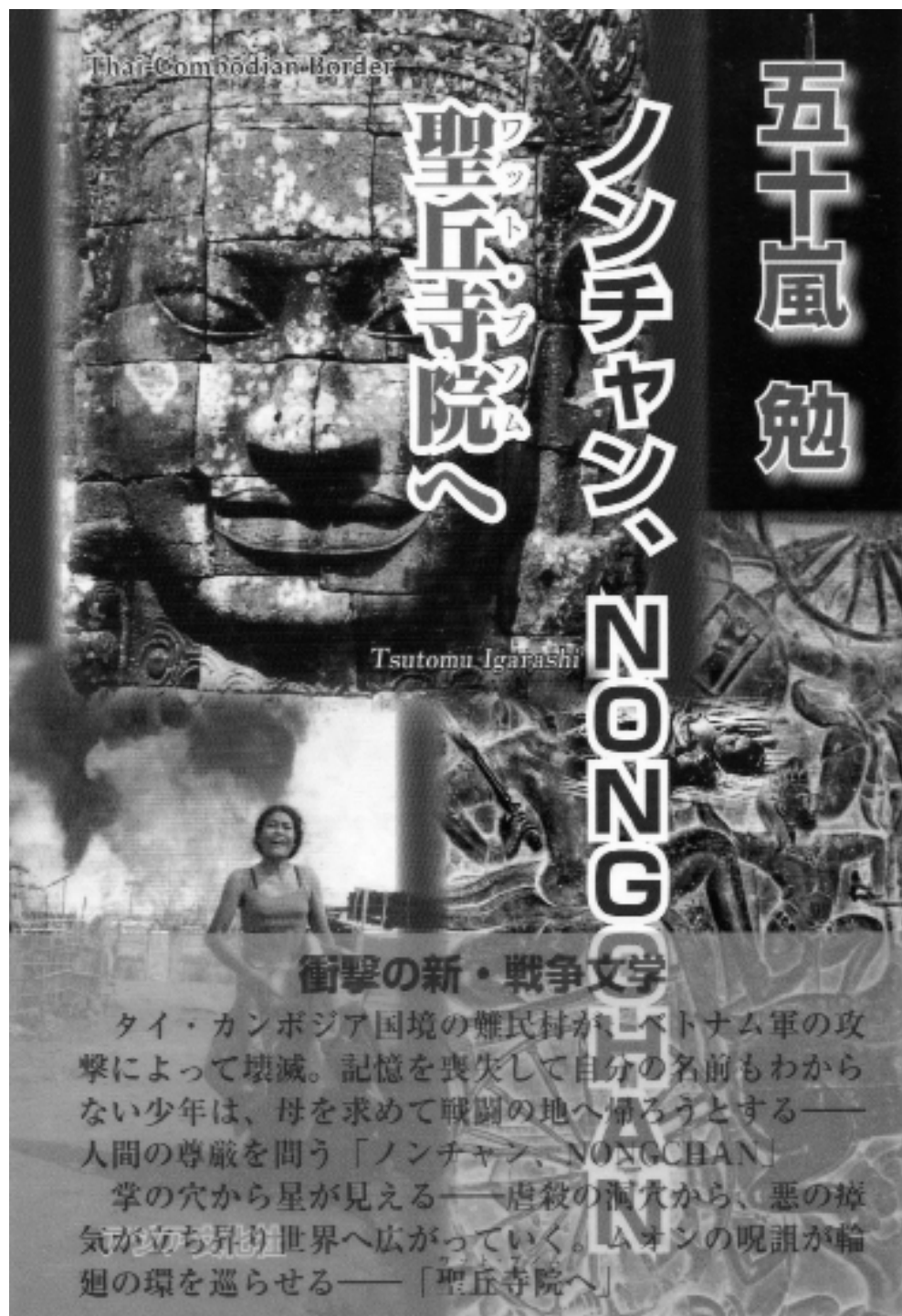
この先も長く楽しみながら小説を書き続けたいと『あるかいど』の同人の誰もが願っている。

(発行人／切塗よしを)

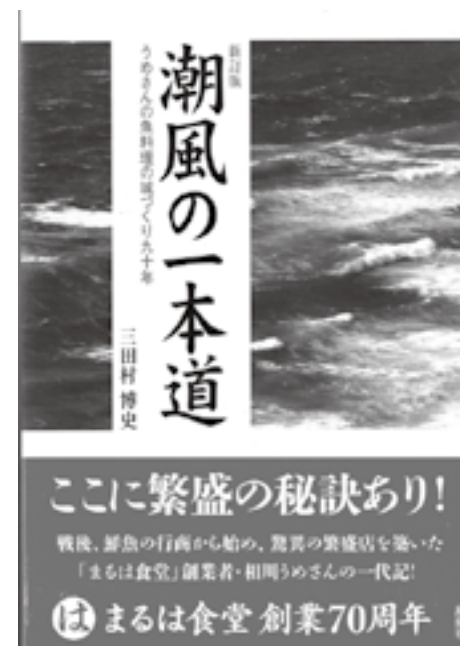


『あるかいど』75号

あるかいど
〒520-0232
滋賀県大津市真野六丁目24-1 田中方
発行人 切塗よしを
URL: <https://www.zcztv.ne.jp/kotonoha/>



五十嵐勉のカンボジア難民を描いた渾身の力作小説集
御注文はアジア文化社まで 送料とも1800円



1540円(税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで

お仙——続番町皿屋敷

高見直宏

『見るから冷たそうな青い火がちろちろと揺れると共に、若い女の姿がまぼろしのように浮きあがった。くずれた島田のおくれ毛が白い顔に振りかぶって、菊の模様の振袖を着ている女——それがお菊であることを播磨はすぐに知った。世間に伝えられる皿屋敷の幽霊を彼は今夜初めて見たのであった』

岡本綺堂著「番町皿屋敷」より

一

柴田十太夫は奥座敷に正座する青山播磨の前に三宝を置いた。播磨の視線が下がった。三宝には家宝の短刀、備前

と権次も神妙な顔付きで首を縦に振った。

「承知しました」

十太夫は播磨の背に置かれた屏風をたんだ。足が不由な権次は脇に座ったままだ。そのまま屏風を播磨の正面に運び、立て直した。播磨が顔を上げ、座したまま南に向きを変えた。十太夫は三宝を取り上げ、南面する播磨の前に置き換えた。

播磨が庭を見つめている。視線の先には、お菊の骸と青磁の皿を沈めた井戸が座している。知らぬ間に雨が小降りになっている。

播磨が顔を閉じ、黙想を始めた。十太夫は播磨の背後で太刀を八双に構えた。ただ一点、これから断ち切る主君の項を見据えた。

一陣の風が庭を横切った。井戸口にしな垂れた柳葉が舞い上がった。まるで和傘を開くように。雨滴が奥座敷まで飛び散り、播磨の頬を打った。すると播磨が目を見開き、三宝に置かれた備前則宗を手を取った。一気に自身の腹に突き立てる。

「ぐわっ！」

末期の呻きが奥座敷を切り裂いた。十太夫は躊躇る播磨の項めがけて刀を振り下ろした。物打が皮を斬り裂き、切っ先が骨を断ち切った。播磨の首が、まるで誰かに詫びるようにゆつくりと垂れ、身体から離れて地面に転がった。続

*刀の先三寸の、最もよく切れるところ

則宗が置かれている。播磨の装束は白。背には真白な屏風。主君、青山播磨はこれから切腹する。用人の十太夫は介錯を仰せつかった。

「待て、十太夫」

播磨が呟いた。俯いたままだ。

「何でしょう」

十太夫が応じる。やはり未練があるのか。

「庭を見て、腹を切りたい」

「庭を、ですか……」

切腹は北面して行うのが作法だ。庭を向けば南面になる。だが長く仕えた主君の最期の頼みだ。ないがしろにはできない。十太夫は脇に控える中間の権次に目を向けた。する

けて頭を失った全身が、どさりと音を立てて崩れ落ちた。

奥座敷は播磨の血で真紅に染まった。

「柴田様、お見事」

脇で見届けた中間の権次が感嘆を漏らした。介錯の任は初めてだった。しかもその初めてが、長年仕えた青山家の主君とは。十太夫は自責の念に駆られた。

十太夫は取り出した懐紙で刀身の血を拭い、鞘に収めた。続けて片膝を付き、事切れた播磨の半身を起こした。腹に突き刺さった家宝、備前則宗の短刀を引き抜く。そのとき傍らに座る権次が唸り声を上げた。権次の腹には既に匕首が突き刺されていた。

「権次、待て、早まるな！」

十太夫は叫んだ。

「柴田様……止めたって無駄でさあ……俺あ、追い腹切るんだ……さっき、殿からお許しもらったんだ……」

権次が両肩を震わせながら、手に持った匕首でゆつくりと己の腹を斬り裂く。十太夫は播磨の骸を抱えたまま動けない。

「柴田様……出家なさるんですよね……立派な坊様になってくだせえ……お菊を……お菊を、成仏させてやってくだせえ……」

「権次！」

権次が腹から匕首を引き抜き、その切っ先を己の首に突

き刺した。血飛沫が迸り、十太夫の頬を打った。十太夫は袖で頬を拭い、嗚咽を漏らした。五十を前にした老いの身にとつて、あまりに無残な仕打ちに思えたのだ。

播磨がお菊を手討ちにしたのは五年前、万治二年の春だった。発端は青山家に伝わる家宝、青磁の皿の毀損だった。花祭りの前夜、主君播磨が、旗本奴白柄組頭の水野十郎左衛門を屋敷に招き、酒宴を催した。播磨は白柄組に身を置いていた。そのとき女中のお菊が家宝の皿を一枚割った。皿は十枚組だった。

初めお菊は「粗相で皿を落とした」と播磨に申し立てた。でもそれは偽りだった。皿はお菊が自ら打ち砕いたのだ。十太夫はそれを下女のお仙から聞き、播磨に上申した。播磨はお菊を詰問し、お菊は皿の毀損を認めた。それでも播磨はお菊を許そうとした。二人が恋仲にあったからだ。

播磨はお菊に子細を問いただした。するとお菊は「殿の心を試しました」と答えた。播磨に縁談があるのを気に掛けていたのだ。そのとき播磨の心は決壊した。「そこまでして我が心を試すなど堪忍できん」と。挙げ句播磨はお菊を手討ちにし、骸を井戸に沈めた。更に残る九枚の皿も自ら砕いて同じ井戸に投げ捨てた。それは傍目から見れば哀れなほどの未熟さだったが、奉公衆はその未熟さに従うほかなかった。

た播磨は、たった一人の血縁である伯母の渋川真弓に往生際の悪さをなじられた。「頭と頼む水野殿が亡びた以上、お身達とても安穩では済むまい。何かの御咎めのないうちに、いっそ見事に腹を切りやれ」と。ここに青山家の命運は尽き果て、この夜の仕儀に至った。当主播磨はまだ三十を過ぎたばかりだった。

十太夫は、誰よりも長くこの屋敷に身を置き、誰よりも子細にこの屋敷内を把握していた。屋敷を預かる用人として、常の見廻りも欠かさなかった。

しかし十太夫は今に至るまで、お菊の幽霊はもとより、井戸の周囲を漂う鬼火すら見ていなかった。青山家に奉公していた者のうち、幽霊を見たと言言したのは鉄之丞ただ一人だ。でもきつと他にもいるに違いない。今際に発した言葉から推察すれば、権次もお菊の幽霊を見たのだろう。でなければ「お菊を成仏させてやってくだせえ」などと言に残すはずがない。思い起こせばお菊が手討ちにあったとき、最後まで播磨に助命嘆願したのは権次であった。権次は「人ひとりの命と一枚の皿を取り換えるのは無道」とまて言って播磨に許しを乞うた。あのとき権次は、お菊に連座して手討ちにされる事も覚悟していたに違いない。もしや……

権次はお菊に惚れていたのではあるまいか。死んでしまった今となつては、それともつまらぬ詮索に過

青山家の衰亡はこの一件から始まった。

或る雨の夜、若党の鉄之丞が井戸の上を漂う振袖姿の女を見た。その振袖は薄紫地で、白と黄の菊の大輪が染め出されていたという。お菊が手討ちにあった夜、身に付けていた振袖と同じだ。それから鉄之丞は神経を病んだ。

播磨はそんな鉄之丞を叱りつけた。十太夫も同様だった。公方様を警護する旗本家が、幽霊を恐れるなどもつての外だ。しかし、いくら叱りつけても鉄之丞の病は癒えず、程なく鉄之丞は屋敷から逃げ出した。鉄之丞は堀向こうの四谷を徘徊したあげく、市井の川に浮かんだ。白柄組と敵対する町奴共の仕業とも聞かぬが、定かなことは分からなかった。

青山家の不幸は続いた。明けて万治三年、今度は若党の弥五郎が刺殺された。更に三年後の寛文三年、中間の権六も喧嘩で命を落とした。兄弟分の権次も同じ喧嘩で足を痛め、まともに歩けぬ身となった。七百石の旗本青山家は衰退し、家臣は老いた用人の柴田十太夫と、不具となった中間の権次の二人だけになってしまった。旗本と町人の果てない喧嘩は続いた。女手のない屋敷は荒れ果て、塀の外から眺める外観はどうか体裁を保っているものの、門扉の内は雑草が生い茂り、廃屋さながらの有様となった。

明けて寛文四年春、遂に白柄組を束ねる水野十郎左衛門が騒動の責を問われ、切腹して果てた。水野の配下にあつ

ぎないが。

だが知り得た事もある。播磨とお菊の色恋だ。無論、播磨とお菊では身分に差がありすぎる。播磨がお菊を旗本の正妻として娶るのは、さすがに御身内衆が許さないだろう。ならば外に住ませ妾にすればよい。十太夫はお菊をその程度に考えていた。

お菊は生前から青山家内で浮いた存在だった。播磨とお菊の逢瀬にしても、それを用人の十太夫に知らせたのは下女のお仙だった。男ばかりの家中であつて、唯一同性のお仙にも見張られている。お菊は不幸な女だった。

お仙は出来た下女だった。正直者で、陰日向なく働いた。だが覗き見、盗み聞きの癖を持っていた。お仙はその癖ゆえに屋敷内で起きている様々な秘め事を知り、その正直さゆえに知り得た事実を逐一十太夫に密告した。十太夫はそんなお仙を使って屋敷内の諸事を取り仕切っていた。何事にも大雑把な播磨の下、旗本一家を守るには、お仙は都合のよい手駒だったのだ。

だがお菊手討ちの一件以来、お仙は何も話さなくなった。お仙は梅雨に入ると知行地の田植えを手伝うために里帰りし、そのまま屋敷に戻って来なかった。鉄之丞が鬼火を見たのはその後だった。

気が付けば庭に月光が射している。知らぬ間に雨が上

がつている。

十太夫は立ち上がり、井戸を見据えた。井戸の脇には柳が植わっている。その柳葉がときおり夜風に揺らめく。ゆらゆらと、まるで幽霊が舞うかのように。だが、それがどうした。

足下には主君、播磨の骸が横たわっている。奥座敷は夥しい血で穢されている。この凄惨な光景と比べれば、正体の定まらぬ幽霊に怯えるなど笑止だ。十太夫は叫んだ。

「お菊、出て来い！」

だが、お菊の霊は出てこない。

十太夫は諦めて後始末に取りかかった。まず播磨の首を拾い上げた。播磨の両眼は閉じられ、口は一文字に結ばれていた。苛烈な最期だったが、その死に顔は安堵の様相を呈していた。

二

寛文五年、三月初め。四谷の西春寺境内に梅の花が咲き誇っていた。

西春寺の僧、了春は客人来訪の報せを受け、山門に向かった。すると群青色の着物を纏った老女が一人、梅花を見上げていた。その凜とした後ろ姿から一目で洪川真弓と分かった。

「真弓様」

声を掛けると、真弓が振り向いた。

「おう、十太夫。久しぶりじゃな」

「もう、十太夫ではありません」

「おう、すまん。そうであつた。で、その……何と申した？」

「了春でございます」

「そうか、そうであつた。でも、まあ、いいではないか、十太夫のままで。剃髪したからといって、突然悟る訳でもなからう」

「確かに。返す言葉もございません」

了春は坊主頭を撫でて苦笑を浮かべた。

「それはそうと真弓様、新たな知行所の仕切り具合はいかがでしょうか」

真弓は小石川に屋敷を持つ洪川伊織助の母であり、切腹した青山播磨の伯母だ。早くに両親と死別した播磨にとつて、真弓はこの世でただ一人の血縁だった。断絶した青山家の知行七百石は、一旦お上に召し上げられた後、許されて縁故の洪川に下賜されていた。

「うまくもまずくもない。どこもかしこも似たようなものじゃ」

そう言つて真弓は目を伏せた。

「では本日お訪ねの用向きは？」

了春の問い掛けに真弓はゆっくりと首を持ち上げた。

「それが、少し申し上げにくくてな」

「それはまた。洪川の伯母上ほどの方が申し上げにくいとは。きっと大層難儀な事でしょうなあ」

了春の応えに真弓はくすりと一つ笑った。

「そう、難儀じゃ。じゃがそなたを見込んで申すでしょう。実は頼みがある」

「ほう、こんな愚僧に頼みが」

「そう、そなたにしか頼めぬ。青山家ゆかりの僧であるそなたにしかな」

それを聞いて了春は口元を引き締めた。

「もしや番町の青山屋敷の件では」

「聞きたくないか」

「わたくしの役目は全て済ませました」

「いや、まだ済んではおらん」

「なんと……」

真弓の眼は了春を責めるようでもあり、哀れむようでもあつた。

「まだやり残しがあると」

了春の問い掛けに真弓は小さく息を吐き、続けて意を決したように毅然とした口調で話し始めた。

「先日、上様から新たに下賜された知行所に行った。僅かな供を連れてじゃ。一面田畑が広がり、江戸とはさまの変わった所じゃ。同じ武蔵国じゃというにな」

「わたくしも青山家に居たころは時折訪ねておりました」

「皆、精出して畑を耕しておつた。有り難いこと。やはり知行所あつての旗本じゃ」

「おっしゃる通りです」

「名主の館で持て成しを受けた。そこに懐かしい者がいてな」

「はて、懐かしい者とは？」

「仙じゃ。仙が奉公しておつた」

「ほう、仙が。達者でしたか？」

「それがじゃ。六年前、突然江戸から戻つて以来、何も話さんらしい。何を聞いても頷くか、首を横に振るかかせん。それでも屋敷勤めが身についているゆえ、たいがいの仕事はそつなくこなす。役には立っているようじゃ。じゃが昔は自分からよく話す娘だったのに、この変わりようは尋常ではないと言われてな。そなた、何か心当たりはないか」

「仙は確かによくしゃべる娘でした。でもあの菊の一件以来、ぱたりとしゃべらなくなつてしまひまして。その年、知行所に田植えの手伝いで里帰りしたら、もう戻つて来ませんでした。菊の手討ちが余程応えたのでしょうか」

「そうか。やはりか」

「と、申しますと……」

「実は、あの一件は遠い知行所まで届いていてな。仙がしゃ

べらないのはそれが因じゃという、やっかいな噂が立つておる」

「それが因とは？」

「呪いじゃ。粗相で皿を割って咎められ、挙げ句手討ちにされた菊の怨みが一家に対する呪いを生んだ」

「粗相で皿を？」

「そう、手を滑らせて家宝の皿を割ったのじゃ。咎を受けるは当然としても、手討ちは行き過ぎであった」

真弓の物言いに了春は眉根を寄せた。

噂は歪められている。お菊は粗相で皿を割ったのではない。自ら打ち砕いたのだ。

お菊が毀損した皿は、了春が青山家用人として入ったとき既に家宝としてあった。その謂れは知らないが、粗相で家宝を壊せば追放、故意に毀損したとなれば手討ちが相当。そうでなければ他の奉公衆に示しが付かない。了春は少し考え、こう応じた。

「それはどうかと思ひます」

「ほう、なぜそう思う。家宝とはいえただの皿。それも十枚組の一枚というではないか。まだ九枚も残っている。それだけあれば客をもてなすには十分なはず。暇を出すのが妥当な仕儀じゃ」

「まだ皿が残っていると？」

「そうじゃ。まだ九枚残っております。雨の夜、鬼火の舞う

井戸の上で、振り袖姿の菊の霊が残った皿をひとつ、ふたつと数え始め、あと一枚はどこだと嘆く」

「菊が皿を数える？ ばかな。いったい誰がそんな戯言を」

「誰とも知れん。巷の噂じゃ」

これも事実と違う。お菊が割った皿は確かに一枚だ。だが残りの皿もあの夜怒り狂った播磨が自ら打ち壊した。毀損した皿は播磨の命で全て庭の井戸に放り込まれた。だから井戸にはお菊の骸と、家宝の皿十枚が一緒に葬られている。一枚足りないはずがない。

「真弓様、噂を信じてはいけません。わたくしはあの一件から播磨様が切腹なさるまで屋敷に住んでおりました。でもその間、菊の霊はもちろん鬼火すら見たことがありますん」

「皿を数える声もか」

「ありません。正気を失った鉄之丞から菊を見たときでしたが、彼の者も皿を数えたなどと言ってはおりません。わたくしには菊の霊など信じられません」

「そうか、そなたがそう言うのならむしろ都合がいい。菊の呪いなどないと言うなら、青山の屋敷に出向き、供養の経を上げるのも訳なからう」

「わたくしが供養の経を？」

「そうじゃ、番町皿屋敷でな」

「それはちよつと……」

三

了春は江戸城の外堀を渡った。去年の播磨切腹の始末を付けて以来だ。

番町はよく似た旗本屋敷が建ち並ぶ。ここに住む者でも道に迷う程だ。変化のない景観が続く通りを歩いて行くと、一際立派な桜の枝が屋敷の塀から外に顔を出している。何十年も見慣れた桜だ。この桜がなければここが青山屋敷だと了春も気付かないだろう。

塀の外から眺める桜は七分咲きといったところか。思い起こせば六年前、播磨がお菊を手討ちにした日、庭に時折残桜がはらはらと舞い落ちていた。去年、播磨が同じ庭で切腹したのも桜の季節だった。何か因縁めいたものを感じつつ、了春は主を失った屋敷の門をくぐった。足下に桜の花びらが積もっている。風が運び集めたのだろう。かがんで一枚拾う。掌に乗せ、息を吹きかける。桃色の花びらが生き返ったように飛び立ち、ひらひらと宙を舞う。主君、播磨が好んでした仕草だ。真夏も揃いの綿入れを着て市井を闊歩し、真冬も酒は冷やしか飲まない。粋が自慢の歌舞伎者だった。

門から続く敷石を踏み、玄関に向かった。玄関戸を開ける。人の香のしない煤けた空気が全身に纏わり付く。埃に

「なんじゃ、できぬと申すか」
「いえ、わたくしはまだ修行の身なれば。もつと名のある僧にお願いすべきかと」
「何を言う。さつき霊などいらないと言ったであらう」
「そうは言っております。菊の霊が出るなど信じられぬと言っただけ」
「同じことじゃ。なあ、十太夫。そなたは仙を不憫に思わんのか」
「それは、もちろん思います」
「かつては威勢の良かった青山家も存命なのはそなたと仙だけ。あとは皆、死んでしまった。もうそなたしか菊の供養はできん。そなたしか仙を救えん」
了春は返す言葉をなくした。考えてみれば巷で怖れられている番町皿屋敷に出向き、お菊供養の経を上げる僧など、国中探してもいないであろう。
「分かりました。真弓様にそこまで言われては、断る理由はありません。ただ先ほど申しした通り、わたくしは、まだ修行の身。まともに読める経といえど般若心経だけ。あとはひたすら南無阿弥陀仏を唱えることしかできません」
「それで十分。供養は心じゃ」
そこまで言うとき真弓は踵を返して門に向かって歩き始めた。了春は無言でその背を見送った。二人の間に一陣の春風が吹き、梅の香を運び去った。

まみれた廊下を抜け、奥座敷の障子戸を開けた。播磨と権次が切腹した間だ。その向こうに荒れ果てた庭が覆い被さるように広がっている。

表札代わりの桜が悶えるように枝を広げている。お菊の血で紅く染まった庭先は、立ち枯れた去年の雑草で覆われている。一面に広がる朽葉色の向こうに、お菊の骸を沈めた井戸がひっそりと座している。その脇に枝垂れ柳が植わっている。庭を彩る役者の顔ぶれは変わらないが、皆くたびれ果て息絶え絶えだ。

了春はかつて自分が使っていた部屋から小机と香炉を持ちだした。奥座敷の真中に置いて腰を下ろす。すると庭でがさりと音がした。視線を向けると井戸の前に野良犬が一匹寝そべっている。きつと立ち枯れた雑草の中に隠れているのだらう。見れば片方の目が太刀で切り裂かれている。番町の荒くれどもの仕業だらうか。思い起こせば権次や権六も、町奴との喧嘩に負けると、腹いせに刃をうろつく罪なき犬に刃を向けていた。江戸に暮らす生き物の命は軽い。人も犬も猫も鳥も、力有る者が気分次第で腕を刺す蚊のように殺してしまう。徳川の世になって五十年。四代目家綱様の治政を迎えた今でも巷に騒乱が溢れている。この世が犬も殺せぬ世であれば、きつと青山家の身代は今も安泰で、播磨とお菊は仲睦まじい主従のままであったらう。でもそれは幻想に過ぎない。伝え聞く戦国の世よりは幾分

ましかもしれないが、この世は相変わらず残酷なままだ。仏門に入り、異なる視点から世を眺めると、それまで見えなかったものが見えてくる。

思いを巡らせる内、陽が西に傾いてきた。今宵は新月。闇が現世を支配する。もしお菊が怨霊と化していたなら、闇こそがその住処に違いない。雲が月を覆い隠す雨の夜を選んで現れるのもその所為だらう。

了春は持参した懐炉から火を取り、香を焚いた。正面の井戸を見据える。柳葉が時折夜風に揺れてかざりと音を立てる。

了春は法衣の袖から数珠を取り出し、両手の親指に掛け合掌した。南無阿弥陀仏と十念唱える。次に般若心経を唱える。これをひたすら繰り返す。十念と心経を唱え終える毎に、数珠の珠を一つ送る。それを百八回繰り返す。数珠の珠が尽きれば今度は逆に珠を戻す。この一巡を終えるのにおよそ半日。まだ駆け出しの了春にできる供養はこれしかない。

お菊手討ちに至った因はお菊自身にある。自ら家宝の皿を打ち壊したこと。更には主君である播磨と密かに関係を保っていたこと。だが手討ちを決定付けた縁は十太夫に——この了春にある。お菊を許そうとした播磨に「故意に皿を打ち壊した」と上申したのだ。怨むならこの了春を怨むべき。お仙はお菊の行為をただ知らせたに過ぎない。奉公

人として当然のことをしただけだ。

了春の脳裏に初めて青山の門をくぐった日のお仙の姿が蘇った。汚れ髪は櫛も通さず適当にまとめただけ。着る服は端布を集めて縫い合わせた継ぎはぎだらけのもの。手に持った包みの中身は明日の着替え一着のみ。しかもまだ十三歳。不憫な思いが先に立ち、まず厨で食事を摂らせると、腹が満ちた嬉しさからか堰を切ったように話し始めた。死んだ父のこと、母のこと、兄のこと、田植えのこと、稲刈りのこと。独り身で過ごして来た了春にとつて、初めて接する素直さであった。だがそれゆえに、果たしてこの娘に旗本家の奉公が勤まるだらうか、との憂いも抱いた。いずれにせよ、お菊がお仙を怨むのはとんだ筋違いだ。そんな怨嗟なら、この了春が身を挺して断ち切らねばならない。了春は珠を一巡送り終えると、持参した小石を一つ、香炉の前に置いた。ふくろうの鳴き声が聞こえる。既に夜は深まり、起きているのは鳥獣の類いのみだらう。

了春は立ち上がって法衣を正し、座り直して竹筒の水を一口飲んだ。そのときだ。井戸の辺りで枯れ草が、がざりと音を立てた。了春が身構えると、夕刻に見かけた隻眼の犬が井戸の前に立っていた。

こいつ、供養の邪魔をするつもりか。

了春は犬を見据えた。犬は残された目で了春を一瞥すると、頭を垂れながらこちらに向かって歩いて来た。左の後

ろ足を引きずっている。きつと誰かに折られたのだらう。

此奴はどれだけ人に嘲られてきたのだらうか。犬は縁側の前まで来て歩を止め、頭を上げて了春に視線を向けた。きつと我にもっと近付きたいのだらう。でも折れた足では庭から座敷に上がれないのだ。あの足では立っているのも辛からう。犬は無言のまま了春を見つめている。

「権次……」

了春はぼつりと呟いた。人に嘲られ、不具を抱えた野良犬の姿が、同じ仕打ちに遭った中間の権次に重なったのだ。隻眼の犬はその名を聞くと、縁側の前に腰を下ろした。

了春は再び井戸を見据え、念仏を唱え始めた。続けて心経を唱え、珠を一つ送る。送れば送るほど人の罪深さが沁みてくる。お菊の罪、播磨の罪、我が罪。この世に罪無き者などいない。皆、誰かに罪を被せ、もたれ合って生きている。その繋がりの中では怨嗟など意味を持たない。だがそうと分かっている、そう思えないのが人なのだ。

闇夜に丑三つの鐘が響いた。相変わらず井戸に変化はない。今夜は現れないのか。それともお菊の霊など端からいないのか。了春の心に諦めが芽生え始めたそのとき、庭に蹲る彼の犬が首を持ち上げた。隻眼がじつと井戸を見つめている。春風が枝垂れ柳の葉を揺らした。了春が心経を唱え終え、数珠の珠を又一つ送ったそのとき、煩惱を数える珠が声を発した。

「ひとつ」

珠を送った右手が震えた。咄嗟に左手で押さえた。了春は井戸に眼を向けた。犬も井戸を覗んでいる。知らぬ間に井戸の上に、青い、いや青白い玉が一つ浮かんでいる。もしやこれが巷の言う鬼火か。了春は奥歯を噛みしめ、姿勢を正し、再び念仏を唱え始めた。

「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……」

唱える度に鬼火がゆらゆらと揺れる。続けて心経を唱える。

「……菩提薩婆訶 般若心経」

唱え終わると、了春は数珠を左手に持ち替えた。珠を見つめながら次の煩悩を送る。

「ふたつ」

また声がした。だが珠からではない。声は庭から、井戸の辺りから聞こえてきた。顔を上げて井戸を見ると、鬼火は二つに増えていた。

了春は鬼火を見つめた。青白い玉形の——いや、鬼火ではない。皿だ。あの家宝の皿だ。皿を数える声とはこの事か。了春は庭に蹲る犬に視線を向けた。相変わらず井戸を見つめている。人よりも遙かに優れた聴覚、嗅覚を持つ犬が平然と構えている。多分、辺りに危険はない。了春は氣を取り直して供養を続けた。念仏と心経を唱え、珠を送る。

「みつつ」

「よつつ」

「いつつ」

「むつつ」

皿の数が増えていく。この世のものとは思えない声が井戸の底から湧き出てくる。

了春の脳裏にお菊手討ちの光景が蘇った。権次と権六が袈裟切りにされたお菊を持ち上げる。人の亡骸は重い。ふらつく足でお菊を運び、井戸に落とそうとしたとき、お菊の肩を持っていた権次が一瞬躊躇した。権次はお菊の死に顔を見つめていた。そんな権次を播磨が叱りつけた。「どうした、早くせんか」と。権次は主君の叱責を浴び、力なく頭を垂れて、お菊を井戸に沈めた。

「ななつ」

「やつつ」

了春の念仏は続く。続けて脳裏に播磨切腹の光景が蘇った。介錯の後、了春は、いや十太夫は井戸を覗んだ。だがお菊も鬼火も現れなかった。その夜の己の姿が、喪失感がなぜかお菊を井戸に沈めたときの権次の姿に重なった。続けて切腹した播磨の死に顔が、見てもいないお菊の死に顔と重なった。播磨の死に顔は安らかだった。きつとお菊もそうであったに違いない。了春は次の珠を送った。

「このつつ」

井戸の上に九枚目の皿が浮かんだ。皿は揺らめきながら

来る。

だが金縛りに遭った了春に為す術はない。このままでは取り憑かれる。了春が絶望しかけたとき、咆吼が闇を切り裂いた。

「わおーん！」

隻眼の犬が吠えた。その遠吠えに驚いたのか、人型になり始めた靄が忽然と姿を消した。と同時に全身が一気に脱力し、了春はそのまま意識を失った。

気が付けば朝陽が奥座敷を照らしていた。焚いていた香は既に尽き、香炉の前に置かれた小石が昨夜の怪異の名残を残していた。

了春は立ち上がり、庭に下りた。

彼の犬はどこだ。

辺りを見回すが、姿が見えない。あのとき奴が吠えなければ、きつと霊に取り憑かれていただろう。やはり、奴は権次の生まれ変わりだ。

権次が助けてくれたのだ。

了春は自分に言い聞かせた。

了春は荒れ果てた庭を進み、井戸の前に立った。井戸の底を覗こうとしたが、流石に足が疎んだ。

怪異はあった。あの紫の靄はやはりお菊か。ならばお仙と会わねばならない。昨夜金縛りに遭ったとき、了春はど

ゆつくりと位置を変え、並びを変えていった。円から十字へ、十字から横一文字へ。その見事な舞に了春は目を奪われた。あと一枚で皿は揃う。きつと怨みなどない。了春はお菊の心を推量しながら心経を唱えた。唱え終わると数珠を左手に持ち替え、右手を自らの胸に当てた。

「南無阿弥陀仏！」

了春は念仏と共に十番目の珠を送った。瞬時、青山屋敷の庭が静寂に包まれ、それまで蹲っていた犬がゆつくりと立ち上がった。続けて脳裏で声が響いた。

(どこ……)

刹那、全身が固まった。眼を閉じることもできなくなつた。必死に声を出そうとするが声も出ない。身体は一瞬にして氷のように冷え、背筋に悪寒が走った。だが全身は硬直して震えず、ただ心のみが恐怖で粟立った。

これが金縛りか。

眼を閉じることも、耳を塞ぐことも、声を発することもできない。

ただ鋭く研ぎ澄まされた五感のみが残っている。

恐怖で意識が砕け散りそうだ。あの青磁の皿のように。傍らを生温かい風がするりと通り抜けた。庭の柳葉がゆらりと揺れた。井戸の上に突如紫色の靄が立ち込めた。靄はまるで生きているかのように渦を巻きながら、人型に姿を変え始めた。

うしても声を出せなかった。お仙もお菊の霊に声を奪われているのかもしれない。それをこの目で確かめなければ。だがなぜだ？

なぜ九つで止まる？

皿は全て播磨が毀損し、井戸に放り投げたはずなのに。それに最後に脳裏に響いた声。

(どこ……)

あれは皿に囚われたお菊の呻きか？

井戸は皿に呪われている。お菊は皿に囚われ、怨霊と化している。まず皿の呪いを解かなければ、お菊の供養はできない。

了春は井戸に向かって念仏を唱えた。我も怨念に触れてしまった。もうただでは済まないだろう。大変なものに首を突っ込んでしまった。了春は今になって後悔した。

四

旧青山家の知行所は江戸から歩いて一日の距離にある。名を高影村という。旧青山屋敷で金縛りを経験した了春は、休むことなくその足を高影村に向けた。年のせいか歩みが遅れ、昼七つに高影村に到着すると、直ぐ既知である名主の嘉兵衛を訪ねた。

「おや、柴田様。こりや一体どうなされたのです！」

嘉兵衛は了春の坊主姿を見て、驚きの声を上げた。「亡き殿と一緒に現世に別れを告げました。ほれ、この通り」

了春は剃髪を撫でながら苦笑を浮かべた。

「それは知りませんでした」

「今は四谷の西春寺で修行の身です。住職様から了春という法名も頂きました」

「なら、これからは了春様とお呼びしなければいけませんな」

「そうして下され」

嘉兵衛の館は番町の青山屋敷よりも広かった。玄関の土間だけでも数十畳あり、屋内に上がって直ぐの板の間もこれまた数十畳の広さだ。毎年の年貢の折にはここに村の組頭一同が集まる。

領主は既に渋川に変わっていたが、嘉兵衛の歓待ぶりは以前と変わらなかった。了春は板の間を抜けた先の客間に案内された。客間には既に行灯が灯されていた。広い板の間を抜けて客間に入ると、何となく窮屈な空間に押し込められたような気がした。突然の訪問にもかかわらず、嘉兵衛は夕餉の支度を調べてくれた。それも僧である了春に相応しい簡素な膳であった。夕餉には嘉兵衛も同座した。

「嘉兵衛殿、もう渋川の殿とは会われましたか」

了春が飯の碗を片手に持って尋ねた。

「いや、殿様はまだここにはいらしておりません。代わりに母御の真弓様が二度ほど訪ねて来られました」

嘉兵衛が白湯をすすりながら応じた。

「そのこと、わたくしも真弓様から聞いております」

「何でも亡き播磨様の伯母上様だとか」

「そうです。あまり顔は似ておりませんがね」

「いやいや、目元のきりっとした切りは播磨様そっくりでしたよ」

了春はそこまで話を聞くと、手に持っていた碗を膳に置いた。

「過日の不始末、迷惑をお掛けしました。亡き殿が変わってお詫びもうし上げる」

了春は嘉兵衛に向かって深々と頭を垂れた。

「いや、もう一年経ちましたし。それに柴田様に詫びられても……」

嘉兵衛も湯呑みを膳に置いた。

「亡き青山殿の御行状はこの遠い村まで聞こえていました。白柄とかいう旗本組で町奴と喧嘩に明け暮れる毎日だったとか。その勇ましさを殿は武士らしさだと思っていたのでしょうか。けれど、それでは命が幾つあっても足りませんまい。手前等のような百姓にとって義侠などつまらぬものです。あ、ちと口が過ぎましたか……」

「いや、同感です。あの頃、わたくしも日々それを憂慮し

ておりました。亡き殿はまるで争うことが旗本の役目であるかのように考えておられた。戦国時代の名残といえはそれまでですが」

了春は苦笑を浮かべながら言葉を繋いだ。

「徳川の世になってもう五十年。大坂の陣に参じた者の多くは天寿を全うしました。もう日の本で公方様に楯突く者などおりません。そろそろそうした旗本衆の思い違いを正さねばならぬ時期に来ていると思います」

「柴田様は相変わらずですな。争い事が嫌いでいらっしゃる」

「戦に勝って幾らの時代はもう過ぎました」

そこまで話すと了春は膳の上の湯呑みを手に取り、白湯を一口飲んだ。

「ところで嘉兵衛殿、こうして訪ねて来たのは実は訳ありでしてな」

「訳？ いかなる訳でしょうか？」

「先日、真弓様が西春寺にわたくしを訪ねて来られました。そこで聞いたのです。仙がこの屋敷で奉公していると。それは本当ですか？」

「仙なら四年前から内で下女奉公しております」

「そんな前から。毎年、年貢の時期には訪ねておるのに全く気付きませんでしたな」

「いや、仙のことでは迷惑をお掛けしました。六年前、突

然村に帰って来たと思つたら、もう江戸に戻ろうとしない。柴田様の恩情で年季明けとさせて頂き助かりました。仙も初めは実家の田畑を手伝つておりましたが、それでは暮らしが立ちゆかず、口減らしにこの屋敷に入りました」

「粗相なく勤めているでしょうか」

「それはもう。旗本屋敷の勤めが長かったお陰で何でもそつなくこなします。やはり外に出した方が人は育ちますな」

「それを聞いて安心しました。青山家での上つけが災いしておらぬかと、心配しておりました」

「ただ困ったこともありまして」

「と言われると？」

「実は江戸から戻つて以来一言も話さんのですよ。こちらからの注文に領いたり、首を振つたり、遠くで呼べば姿も見せるから耳は聞こえておるんでしょうけど。こんな村の名主の屋敷じゃそんなに切羽詰まった仕事もないので、それで十分と言えは十分なんです」

「そうですか……実はわたくしも真弓殿からその話を聞きました。今日訪ねたのは外でもない、その仙のことではない。嘉兵衛殿、しばし話を聞いて下され」

嘉兵衛が小さく頷き返す。

「仙が話さなくなったのは、青山屋敷で起きたある一件からでした」

「皿事件ですか」

了春は座り直して嘉兵衛に視線を移した。

「嘉兵衛殿、事の顛末をお話します。ただかつての主君、青山播磨の恥を晒しますゆえ、どうか他言無用でお願いしたい」

嘉兵衛が黙つて小さく頷いた。了春は法衣から数珠を取り出し、まず南無阿弥陀仏を十念唱え、続けて子細を語り始めた。

「六年前、菊が青山家に伝わる家宝の皿を一枚割つたのは事実です。ですが粗相で皿を割つたのではない。菊は自ら皿を打ち壊したのです」

それを聞いて嘉兵衛が目を見開いた。

「お菊が故意に家宝の皿を割つたと」

「いかにも」

「それは……一体何の目的で……でも、もしそれが事実なら、お菊の手扱ちは当然の仕儀」

「主君播磨はそれを知らず、粗相と思い菊を許しました。だが用人柴田十太夫がささず播磨に上申した。粗相ではない、故意に打ち壊したのだと」

「あなたが上申されたのですか」

「我が意は先程嘉兵衛殿が言われたのと同じ。菊は当然手討ちにすべき。そう上申しました。でも播磨は菊を許そうとしました」

「それは……慈悲ですか」

「そう、女中の菊が家宝の皿を割り、殿が手討ちにしました」

「それなら聞いております。手討ちにされた女中、お菊の骸は屋敷の井戸に葬られ、成仏できないお菊が怨霊と化した。仙はお菊の呪いを受け、言葉を失つたと」

「それは誰から？」

「誰からともなく。巷の噂です」

「その噂を詳しくお聞かせ下さい」

「わたくしが聞いたのは、雨の夜になると井戸から皿を数える声が出て、鬼火と共にお菊の怨霊が姿を現す。お菊の霊を見た者は只では済まない。仙もお菊の霊を見て、言葉を奪われたに違いないと」

「なるほど。真弓様から聞いた通りですな。では、嘉兵衛殿は菊が粗相で皿を割つた、それを殿が咎めて手討ちにした、そうお思いですか？」

「巷の噂はそうです。でも子細は知りません。当時、その場に居たであろう仙に聞いても、その件に関しては首を縦にも横にも振りません。実際何があつたのか。本当に江戸の御屋敷に、お菊の霊が取り憑いているのか。わたくしも柴田様に、いや了春様に聞きとうございます」

そう言うとき嘉兵衛は湯呑みを取り、白湯を一口飲み込んだ。

「わたくしもそれを伝えに来ました」

「慈悲ではありません。恋です。播磨と菊は隠れて逢瀬を重ねていました」

「有りそうな話ですな」

「柴田はそれを知っていた。知っていたゆえ、重ねて具申した。『殿が許してもこの十太夫が許さぬ』と。女中ごときに家宝を、家がないがしろにされて見過ごす訳にはいかん。そう柴田は考えました」

「分かります」

「用人柴田にそこまで言われ、播磨は改めてお菊を詮議しました。そこでお菊は播磨にこう答えた。『殿の心を試しました』と」

「はて、試すとは？」

「当時、播磨に縁談が持ち上がっていました。それも渋谷の真弓様から。播磨にとって真弓様はこの世で唯一の血縁しかもこの伯母上は押しが強い。菊は播磨がその押しに流されはしないかと不安に駆られた。そこで家宝の皿を壊し、播磨の心を試したのです。播磨がまこと自分を愛しているのなら、それを深くは咎めぬだろうと」

「そんな愚かな……」

「でも、お菊の答えに播磨は激高しました。『なぜ疑うのか』と。そして狂つたのです。ただお菊を手討ちにすれば良かったのに、それだけでは収まらず、自らの手で家宝の皿を一枚残らず打ち碎き、お菊の骸と一緒に庭の井戸に投

「捨てたのです」

嘉兵衛が手で顔を覆った。

「酷い……そんな理由であの皿を割ったのですか」

「そう、これが真実。菊は粗相で皿を割ったものではありません。それに、あの皿はもう一枚も残っておりません」

「くっ……」

嘉兵衛が顔を垂れ、右手で自身の太股を叩いた。了春は俯く嘉兵衛に声をかけた。

「嘉兵衛殿、どうされました？」

了春の問いに嘉兵衛が顔を上げた。両の拳が握り締められている。

「あの皿は、かつてこの高影の宝でした」

「えっ？ それはどういう意味でしょうか」

「柴田様は御存知ないでしょうが、あの青磁の皿は百年前、三河から江戸に転封された新領主様がこの地を謁見されたおり、高影から寄進したものです」

「何と！」

「先々代の名主が接待の折、あの皿を使いました。まだ豊臣の世でした。新領主の青山様、つまり播磨様の曾祖父様はあの皿をいたく気に入られ『譲って欲しい』と申されました。先々代はそれを断れませんでした。皿を大事にすれば村は安泰。ないがしろにすれば村は滅ぶ。そんな呪術が掛けられているとも言われてきました」

「それならわたくしも聞いています。毀損すれば家が亡ぶゆえに大事に扱えと。青山家にも伝えられてきました」

「しかし、それをお菊と播磨が打ち壊した！」

嘉兵衛が血走る眼で了春を睨んだ。

「これで青山家と高影村の契りは切れましたな」

了春は即座にその場にひれ伏した。

「お許し下され！ そうとは知らず、とんだ不始末！」

ひれ伏す了春を見て、嘉兵衛は肩を落とした。

「柴田様……いや、了春様でしたな。顔を上げて下され。今お話した皿の所以は代々村を治める名主にのみ口伝えされたもの。その他の者は知りません。今宵了春様に話したのは、了春様も青山家の不始末を明かしてくれたからです」

嘉兵衛の言葉を聞き、了春はゆっくりと顔を上げた。

「わたくしは何も知りませんでした。そうと知っていれば、高影ゆかりのあの皿を、一命を賭して守ったものを」

「皿は残らず碎け散り、旗本青山家も亡びました。全てが終わったのです」

嘉兵衛が力なく俯いた。了春は嘉兵衛を見つめた。

「嘉兵衛殿、まだ終わってはおりません」

了春は嘉兵衛に向けて言葉を繋いだ。

「わたくしは、洪川の真弓様から、菊の供養をし、仙にかけられた呪いを解くようにと頼まれました。わたくしは旧青山屋敷に出向き、菊が沈む井戸に向かって心経を唱えま

した。そこで見たのです。皿屋敷に取り憑く呪いを」

嘉兵衛の顔がゆっくりと持ち上がった。

「お菊の怨霊ですか」

「はい、それらしきものを。でも、もつとはつきり見たのは宙を舞う青磁の皿です。それがひとつ、ふたと姿を現しました。その数九枚」

「九枚？」

「そう、十枚に一枚足りません」

二人はしばし視線を合わせた。

「嘉兵衛殿。わたくしには井戸の底で二つの怨念が絡み合っているように思えます」

「と、言いますと」

「皿の呪いと、その呪術に縛られた菊の怨念です。皿の呪いを解かねば菊の供養はできません。仙も救えません」

部屋を照らす行灯の火がゆらりと揺れた。嘉兵衛が視線を逸らして苦笑を浮かべた。

「了春様、皿に呪いなどありませんよ。最後の一枚はお菊が自ら割った一枚。お菊は自分が割った皿を、自分で探しているのです」

嘉兵衛が肩を一回上下させ、その場に立ち上がった。

「では、酒の用意をさせます」

了春は慌てて首を振った。

「嘉兵衛殿、それはご容赦願います。わたくしは出家の身

なれば……」

「ま、そう言わずに。今宵はゆるりとお過ごし下さい」

嘉兵衛がくると背を向け部屋を出ていった。僅かの間を置いて、下女が新たな膳を運んできた。その顔を見て了春は思わず声を上げた。

「仙！」

番町の屋敷に居た頃より痩せて見えるが、仙に違いない。

「仙、わたしが分かるか。十太夫だ」

お仙が小さく頷いた。

お仙はそのまま歩を進めると、手にした膳を了春の前に置いた。膳の上には徳利と、盃と、肴を乗せた皿が並んでいた。了春は盃を手にとってお仙に渡した。

「仙、青山家では随分と苦勞をかけたな。今宵はまず、わが盃から受けてくれ」

お仙が黙って盃を手にとった。了春は徳利の酒を注いだ。お仙がそれを一息で飲み干し、了春に返した。了春は盃を受け取った。今度はお仙が徳利を手にとり酌をした。了春は苦笑して己の禿頭を撫でた。するとお仙が盃をぐつと飲み干す真似をした。

「仙、本当に話せないのか？」

お仙が小さく頷き、再び盃を飲み干す真似をした。了春は不憫な思いを押し殺して盃を傾けた。するとお仙が膳の皿を指差した。了春は皿を見た。肴のついている。これは

田楽か。だが、この皿は――

青磁の皿！

失われた十枚目がなぜここに！

「そなた……なぜこれを」

了春は目を見開いてお仙を見た。お仙が初めて口元を緩めた。

五

了春はお仙から青磁の皿を預かり、急ぎ江戸に戻った。

先に皿屋敷に向いてからまだ十日と経っていない。次の新月は二十日後だ。でも十枚目の皿を見つけた。それまで供養を待つてはいられない。二十日もあれば、どこかで雨の降る日もあろう。一刻も早く皿屋敷の怨嗟を解かねばならない。お仙のため、高影村のため、それに何より、お菊のため。

帰着三日後、西春寺の境内を掃いていると、燕が眼前を滑空した。目で追うと、雲が西の空を覆っていた。禿頭にぽつりと雨滴が落ちた。了春はすかさず供養の準備を始めた。

先回同様数珠に、小石に、火種を入れた懐炉。加えてお仙から託された十枚目の皿、それとも一つ、忘れてはならないものがある。

家宝の短刀、備前則宗だ。

あの夜聞いた怨霊の声。

(どこ……)

井戸に宿る怨霊は何かを探している。

それが青磁の皿の怨念なら解けるかもしれない。残る一枚を返せば。でも、お菊ならどうか。

名主の嘉兵衛は言った。「皿に呪いなどない」と。「お菊は自分が割った皿を、自分で探している」のだと。

だが了春は腹落ちできなかった。

了春は鮮明に覚えていた。あの日お菊が割った皿は、お菊がその手で井戸に投げ捨てたのだ。所在を知らぬはずがない。もし井戸に宿る怨念がお菊なら、探しているのは亡き想い人、青山播磨に違いない。播磨は備前則宗で自身の腹を切り裂いた。そこに播磨の思念が宿っているはず。

了春は前回より膨らんだ頭陀袋を肩に掛け、西春寺を出立した。

番町に着いたのは暮れ七つの頃だった。旧青山屋敷の桜は、そば降る雨に打たれながらも満開に咲き誇っていた。

了春は門扉を開け、敷石の滑りに気を付けながら玄関に向かった。玄関前で番傘を閉じ、一振り雨を払って軒先に置いた。玄関戸を開けて中に入る。玄関で濡れた足をふき、屋敷に上がった。廊下を抜け、奥座敷の襖を開けた。

「お主！」

了春は思わず声を上げた。奥座敷に彼の犬が寝そべっていたのだ。

「お主、また来てくれたのか」

了春は奥座敷に足を踏み入れた。すると犬がゆらりと立ち上がり、不自由な足を引きずりながら庭側へ移動した。まるで了春のために場所を空けるように。

「お主と会うのは二度目だな。二度ある事は三度ある。これからお主を権次と呼ばせてもらうぞ。いいな」

権次が隻眼で了春の持つ頭陀袋を睨み、「ふん」と一つ鼻を鳴らした。続けて首を持ち上げ、視線を了春に向けた。了春と権次はしばし視線を交わし、どちらからともなく座敷に腰を下ろした。権次は直ぐに寝そべり、首を庭の井戸に向けた。了春もつられて井戸を見た。井戸は枝垂れ柳に飾られ、ひっそりと座している。降り続く雨を受け、柳葉が時折ぽつりと雫を落とす。時がゆっくりと流れていく。でも……

此奴、どうやって座敷に上がった。

あの足では庭から縁に飛び乗ることはできない。屋敷に朽ちた穴でもあるのか。それとも何処かに足場があるのか。何の変哲もない野良犬に見えるが、結構知恵があるかもしれない。侮れない奴だ。

了春は頭陀袋から数珠と小石を出した。懐炉から火を

取ろうとするが、湿気と思うに任せない。それでも灰を除け、息を吹くなどしてどうにか火を取り、香を焚いた。

「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……」

了春は念仏を唱え始めた。ただひたすら、お菊になり代わり。

市ヶ谷で戌三つの鐘が鳴った。井戸は完全な闇に包まれている。降り続く雨さえ見えぬ中で、ただ雨音だけがその場限りの曲を奏でる。

暗夜に了春の心経が響く。

「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶 般若心経」

了春が数珠の珠の一つ送ったときだった。

「ひとつ」

始まった。だが……早い！了春の前にまだ小石は置かれていない。視線を庭に向けると、闇の中にぼんやりと青白い鬼火が現れた。ゆっくりと青磁の皿に姿を変え、皿の放つ光に照らされ、闇に隠れていた井戸が姿をみせた。青い満月に照らされているかのように。

美しい……

了春は思わず首を左右に振った。見とれてはいけけない。色即是空。眼前の光景は有るようで無いのだ。相手の術にはまってはいけけない。

手足の指を動かしてみる。大丈夫だ、まだ金縛りは始ま
ていない。そうだ、権次はどうした。了春は目の前に寝そ
べる権次に視線を向けた。後ろ姿しか見えないが、かすか
に息が聞こえる。居眠りでもしているのか。そうか、眠っ
てしまえば幻が眼に映ることはない。心を奪われることも
ない。

権次、流石だ。

了春は苦笑を浮かべ、念仏を再開した。十念、心経と唱
え、次の珠を送る。

「ふたつ」

二つ目の皿がふわりと現れた。雨中に二つの光が揺れて
いる。まるで囁き合うように。了春は脇に置いた頭陀袋を
撫でた。中身を確かめる。十枚目の皿は——有る。了春は
念仏を再開し、次々と珠を送った。

「みつつ」

「よつつ」

「いつつ」

闇夜に皿を数える声が響く。皿が次々と増えていく。だ
がこの男とも女とも付かぬ声は何だ。まさか皿の声か。

「むつつ」

「ななつ」

「やつつ」

光る皿が雨粒を照らし出す。照らし出された雨粒が皿を

突き抜けて落ちる。そうだ、やはり皿など存在しない。だ
が空即是色。呪いは無いようである。了春は心経を唱え、
珠を送った。

「ここのつ」

九番目の皿が井戸から姿を現した。九枚の皿が動き始め
る。円に、十字に、横一文字に、縦一文字に。探している。
最後の一枚を。今こそ十枚目の皿を出さねば。金縛りが皿
の呪いなら、呪術を繰り出すその前に。了春は左手に置い
た頭陀袋を探った。十枚目の皿を取り出し香炉の前に置く。
すると九枚の皿が動きを止めた。了春が念仏を始めると、
九枚の皿はそれに呼応するかのように明滅を始めた。

「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……」

九枚の皿が姿を消したかと思えば、二つの皿が光り出し、
また姿を消したかと思えば、別の四つが光り出す。皿は光
と闇を交互に奏で続けた。了春が十念を終え心経に入ると、
今度は九つの皿が一齐に光っては消え、光っては消えを繰
り返した。まるで了春と会話するかのよう。了春は心経
を唱え終えると、井戸の上を浮遊する皿たちに話し掛けた。
「青磁の皿よ。我は西春寺修行僧、了春。俗名、柴田十太
夫。主君の青山播磨、並びに女中の菊が犯した許されざる
大罪。その裁きはこの了春が一身に引き受ける」

了春は数珠を左手に持ち替え、右手を胸に押し当て姿勢
を正した。

た。

しまった！

身動きできない。続けて全身に悪寒が走った。真冬のよ
うな冷気が奥座敷を覆い、春だというのに吐息が白く凍っ
た。身体が極限まで固まり、震えたくとも震えず、ただ心
のみが戦慄した。目が閉じられない。その閉じられない目
に紫の靄が映り込む。不覚だ。この金縛りは皿の呪術では
ない。お菊の怨念だ。

来る！ 今度こそ！

これまで皿の呪いに縛られていたお菊の怨霊が、解き放
たれて姿を現す。解き放ったのは、この了春だ。

権次！

了春は凍てつく魂を奮い立たせた。

権次！ 助けてくれ！

了春は心で叫んだ。すると権次が振り向き、不自由な足
を引きずりながら了春に向かって歩き始めた。その権次を
追うように紫の靄も動き出した。

吠えろ、権次！ 吠えて怨霊を追い払え！

だが権次は応じない。無言でこちらに歩いて来る。靄が
それを追い掛ける。皿は知らぬ間に光を失い、闇と同化し
ている。権次の足がもつれている。きつと息も上がってい
るだろう。だが了春にその吐息は聞こえない。了春の聴覚
は、既にお菊に奪われている。

「これは菊手討ちの折、難を逃れた最後の一枚。今ここで
貴殿らにお返しする。合わせて此の身を差し出すゆえ、井
戸に捕らえた菊の霊を、どうか放って頂きたい」

すると九枚の皿が一点に集まり、まるで太陽のように輝
き始めた。庭が真昼のように明るくなった。強烈な光に眼
を覚ましたのか、それまで寝そべっていた権次の頭がゆっ
くりと持ち上がった。だが了春の周囲はそれでも夜を保っ
ていた。香炉の前に置かれた十枚目の皿が閃光を吸収して
いたのだ。この世ならざる光景に包まれながら、了春は最
後の珠を送った。

「とう！」

眼前の太陽が叫びを上げ、香炉の前の十枚目の皿めがけ
て突進した。了春は思わず身を伏せた。

程なく閃光は消え、辺りは再び闇に包まれた。了春は起
き上がり、辺りを見渡した。香炉は火を保っていた。その
前に置かれた皿は、闇の中でぼんやりと青白い光を放って
いた。その向こうに権次が立っていた。権次が井戸を見据
えている。そこには知らぬ間に、紫の靄が立ち込めていた。
(ど……)

靄がしゃべった。艶っぽい声音が直に了春の心を貫いた。
これは、お菊！

やはり探しているのだ。皿ではなく、亡き殿播磨を。
了春は頭陀袋に手を伸ばした。だが瞬時に身体が硬直し

遂に霨が権次を捕らえかけた。権次がもがくように両前足を大きく蹴り出した。権次の身体がふわりと浮き、動けない春の視界から消え去った。すると霨が向きを変えた。今度はこちらに向かってくる。刹那、香炉の前に置いた皿が、目覚めたようにほんやりと光を放った。仲間とはぐれた蜚のような微弱な光だが、霨はそこで動きを止めた。霨と皿が対峙する。霨が徐々に人型を創り始めた。かなわぬ恋に翻弄され、挙げ句怨霊と化したお菊が姿を現す。了春は覚悟を決めた。

最早、これまで。

そのときだ。再び視界に権次が飛び込んできた。口に何か咥えている。あれは、

備前則宗！

播磨が切腹に使った短刀。播磨の血を吸った青山家の家宝。お菊供養のために了春が持ち込んだそれを、権次が頭陀袋から抜き出したのだ。

権次がその場に崩れ落ちた。咥えた短刀が落ち、霨の前に転がった。すると朧な人型を示した紫の霨が、跪くように縮んだ。

(殿……)

了春の心に声が響いた。

(やつとお会いできましたね……)

お菊の声だ。瞬時、了春の身体が脱力し、金縛りが解け

受けた。お菊は御霊となり、殿と一緒に浄土へ旅立った。全てが終わったのだ。

六

翌月。西春寺に真弓が訪ねて来た。了春が境内に出ると、真弓がいつものように樹木を眺めていた。

「臯月が綺麗ですな」

了春は背後から声を掛けた。

「しばらくは見下ろす季節じゃ。次の紫陽花もな」

真弓が振り向いた。二人は視線を合わせた。

「足下を見て歩くも一興じゃ」

「そうですね。躡らずにすみます」

「またつまらぬことを言う」

真弓がけちらと笑うので、了春もつられて笑った。

「それはともかく、此度の供養、ご苦労じゃった」

「難儀でした。思い出したくないことばかりです」

「いや上出来じゃ。実は先日知行所を回って来た。仙も言葉を取り戻したぞ」

「なんと、それは吉報！ わたくしも仙の声が聞きとろございます。しばらく休んで身体も癒えました。また高影を訪ねるとしますかな」

「その必要はない。仙には水無月から渋川で奉公してもら

た。了春はすかさず合掌し、般若心経を唱えた。お菊の霊は蹲ったままで御経を聞いている。了春は心経を唱え終わると、お菊に向けて言葉を繋いだ。

「菊、観自在菩薩が迎えだ。殿と一緒に浄土を目指せ」

それまで蹲っていた霨が動き始めた。霨は形を変えながら備前則宗を包み込んだ。霨は二つに分離し、一つは紫の振袖姿に、もう一つは紺の羽織袴姿に形を変えた。

了春は喝に合わせて数珠の珠を送った。

「羯諦！」

二つの霨が交互に光を放ちながら庭に舞い降り、雨の夜空に昇っていった。

了春は二人の光が西の夜空に消え去るまで見送ると、その場がぐっくりと腰を落とした。疲労が一気に押し寄せ、そのまま深い眠りに落ちた。

翌朝。目覚めると奥座敷から備前則宗が消えていた。権次の姿もなく、消えた香炉の前に置かれた青磁の皿だけが昨夜の名残をとどめていた。

了春は立ち上がり、庭に下りた。空は何事もなかったように晴れ渡っていた。柳葉が時折吹く春風に煽られ、燦めく雨滴を振りまいていた。

了春は井戸に向かって歩を進めかけ、やめた。近付くまい。もう井戸に怨霊はいない。皿の呪いは此の一身に引き

う事にした」

「それはまた……名主の嘉兵衛がよく承知しましたな」

「この真弓が是非にと頼み込んだのじゃ。嘉兵衛も渋々承知しおった」

「相変わらず押しが強いですな」

「それにあの青磁の皿も持参する」

「えっ、青磁の皿？」

了春の口元が一瞬歪んだ。

「青山家家宝の青磁の皿じゃ。仙が言うにはそなたに預けてあるらしいがな。それを渋川に持参するそうじゃ。嘉兵衛も承知しておる」

「それは、大事にしなければ。なにせ最後の一枚。それに

あの皿は……」

我が命同然——と言いかけて、了春は口を噤んだ。それは己の問題だ。他者を巻き込む訳にはいかない。

「仙はあの皿に魅せられておる。お菊手討ちの夜、全て壊されては大変とこっそり一枚隠したそうじゃ。あの夜は屋敷中が動転していたな。皿が一枚足りないのに誰も気付かなかった。十太夫、そなたもじゃ。それで田植えの里帰りの折、こっそり田舎に持ち逃げした。なんと図太い女子よ。お陰で家宝の皿が残った。あれは使える。わらわは気に入ったぞ」

真弓がまたひと笑いした。了春は苦笑で返した。確かに

お仙は使える。それにあの皿。きつと魔除けになるだろう。怨霊と化したお菊でさえ、あの皿に近付けなかったのだから。

真弓は笑い終えると、今度は真顔で話し掛けてきた。

「なあ、十太夫」

「はい」

「そなたは平凡な武士じゃったな」

「まさしく」

「平凡ゆえ播磨に逆らえなんだ。だからお家も守れなかった。と、わらわは思うな」

「返す言葉もございません」

「じゃが、そなたは僧としては非凡なようじゃ」

「は？ また誰がそのような」

「誰とも知れん、巷の噂じゃ」

「また巷ですか」

「そうじゃ。そなた、これから忙しくなるぞ」

真弓はそう言って踵を返し、山門に向かって歩き出した。了春がその背を見送っていると、珍しく真弓が振り返った。

「そなたは仙を救った。有り難いことじゃ。わらわもこれからそなたを了春と呼んではやらうぞ」

真弓は再び了春に背を向けると、もう振り返らず山門を出て行った。

創 愛知県

名古屋の新興同人雑誌

「創」の創刊は二〇〇六年です。中日文化センターの講座「小説を創る」内で、当時の講師であった三田村博史氏が「せっかくだから受講生の作品をまとめて一つの冊子にしよう」と提案したのが始まりです。現在では受講生の有志及びOBによる同人誌として、一四号までは年一回、一五号からは年に二回発行しております。現在ようやく二〇号に到達したところで、同人誌としての歴史はまだまだ浅いと言えます。

スタートが受講生の作品集という形だったためか、主宰者はおらず、代表も固定では置かず、数人の編集委員の中から編集責任者を選んで冊子を制作しています。同人誌としては異例かもしれません。「小説を創る」講座の現講師であり中部ペンクラブ会員の名村和実氏が試行錯誤の上に創りあげたスタイルです。尚、名村氏は第一回まほろば賞を受賞しております。

「小説を創る」講座と同人誌の「創」は厳密には別物なのですが、「創」を語るためには講座に触れない訳にはいきませんので、まずは講座の紹介から始めます。

「小説を創る」講座は毎月第四木曜日に、名古屋・栄にあ

引用「番町皿屋敷」岡本綺堂著
参考「不便ですてきな江戸の町」永井義男著
「般若心経講義」高神覺昇著
(「創」20号より転載)



高見直宏 たかみ ただひろ

1962 静岡県浜松市生まれ
愛知県名古屋市在住
2018「弦の会」同人
20「掌編小説ムーの会」に加わる
23「創」に加わる



る中日ビル内の中日文化センターにて行われています。余談ですが、今年(二〇二四年)四月に中日ビルがリニューアルオープンし、ビルの工事中は別の場所での臨時教室だったのが、真新しいビルで学べることとなりました。新しい教室は窓が大きく見晴らしが良く、眼下には緑あふれる公園が望めます。

そんな教室で受ける二時間の講座では、主に受講生が提出した練習作品を、他の受講生がテキストとして読み、合評します。さらに講師からもアドバイスを意見などをもらいます。様々な批評を受けた上で受講生は自らの作品をブラッシュアップしていきます。自分の作品に意見をもらえることももちろん勉強になりますが、他の受講生の作品を読むことで、その作品の良いところ・悪いところを自らの作品にフィードバックできるという点でも、創作の力にな



「創」合評会 2024.5.23 中日文化センターにて

ります。文化センターの講座なので受講生の入れ替わりはありますが、長く受講している会員が多いためか皆仲が良く、講座後には講師も交えて喫茶店でお茶会をしたりもします。実はこのお茶会も、講座と同じくらい有意義です。コーヒを飲みながらのざっくばらんな雰囲気、教室での意見交換とはまた違った雑談をすることで、創作意欲が刺激されるのです。「創」についての話し合いもこのお茶会で行われます。

「創」はこの講座で合評を受けた作品を掲載することが出来ます。通常の同人誌は発刊後に合評会を行うと思いますが、冊子になる前に掲載予定作品を他人に評してもらえるというのは、「創」の強みかなと思います。小説とは自分の心の内を吐露するものですので、執筆中は客観的に考えられないことが多いです。書く作業も基本的には一人ですから、気づけば独善的な考えに凝り固まってしまうのです。そうして生み出した作品をそのまま活字にせず、一度他人の目を通して内容を改めてから発表するのも大切かと考えます。

「創」の特徴をもう一つ挙げると、現役世代の会員が数名いる点です。仕事をしながら講座には年休等を上手く使って出席しています。リタイア後の趣味と考えられがちがな同人雑誌ですが、現役世代でも参加できることを体現しています。

二〇号に至るまで「創」も紆余曲折ありました。特に新型コロナウイルスの流行時には、編集委員が集まって編集作業をするというスタイルを一変させねばならず、作業が遅れることもあり、悶々としたものです。それでも、非接触でも行なえる製作手法を皆で探り出し、時期のずれは生じたものの毎年無事に刊行できたのは、ひとえに会員の熱意の賜物であったと自負しております。

「創」の会員やOBの中には、他の同人誌で活躍されている方が多々おります。中には各賞を取っている方もおりますが、「創」に掲載された作品が同人雑誌優秀賞に選出されるというのは、二〇号にして今回が初めてです。作者の高見直宏も他誌で活躍中でしたが、二〇号より「創」に参加し、いきなりの快挙です。制作に携わるものとしては大変誇らしく、また今後の「創」を引っ張ってくれる存在になると大いに期待しております。

「創」の「表紙のことば」には、こう書かれています。

「創」は〈SOW〉——。

白い紙に〈種を蒔いて〉、創作、創造の花を咲かせたいとの願いを込めました。

実は、現在二二号を製作中ですが、二二号より装丁をリニューアルし、誌名も〈SOW〉となります。新たなスター

トを切る〈SOW〉でも、このような賞をいただける作品を生み出せたらと思います。

〔「創」二〇号編集責任者／小野さとみ〕



『創』

〒458-0007

愛知県名古屋市長区笠山1丁目三〇番地

TEL 090・7677・6545

小野さとみ

カミンチュ
神女

大城由乃

1

名嘉山武志が経営する不動産会社丸一エステートは、追いかまやまたけし
い詰められていた。狭い事務所に鳴り響く電話の着信音が、けたたましい目覚まし時計のベルのようにストレスを与え続けている。

父親の善三郎が、建前として社長に収まっではいるが、認知症が進んだ現在、実質的経営は息子の武志に委ねられていた。

バブル崩壊以降、不況に煽られるままに中小企業が多額の負債を抱え、姿を消すケースが多くなっている。このままでは自分たちもそれに飲み込まれる危うさを武志はひしひしと感じていた。父親が抱いた夢は、今逆に悪夢に変わ

ろうとしている。

武志が大学を卒業して父親の跡を継ぐと丸一エステートに入ったとき、善三郎は、それまでの集大成として大きな賭けに出ようとしていた。沖縄本島最南端の広大な土地を手に入れ、そこにリゾート・ホテルを建てるプロジェクトに手を染めるところだった。そのビジョンには、武志も陶醉し、共感して、いっしょに夢へ翔ける企業の躍動感を覚えていた。

父の善三郎の夢には壮大な視野があった。台湾、中国、韓国、フィリピンなど近隣諸国二十億人口の、地理的優位性のある那覇空港が、近い将来、必然的に東アジア・ゲートウェイの開放に伴って世界水準の国際リゾートとなることを予想しての計画だった。

沖縄の海は美しい。世界でもこのような海の美しさは稀有で、それだけでリゾート地としての価値は高い。しかも慶良間列島と沖縄本島の間の青い海には、ザトウ鯨が、秋から冬にかけて出産と育児のために南下して遊泳する。そのザトウ鯨の迫力ある泳ぎや親子を見ることが、観光の大きな目玉になる。青い世界が目の前に広がる丘からは、その時期になるとザトウ鯨のスパイホップや、テールスクラップ、運が良ければ母子鯨のペンタンクルアーチが見られるのだ。

各部屋に高性能望遠鏡やカメラを設置して、寛ぎながらホエールウォッチングを可能にする……。

東支那海が一望できる沖縄本島の最南端に、この海を満喫できるリゾート・ホテルを建て、国際リゾート地としての先駆けをつくれれば、必ず成功する。それは不動産業に携わる者として魅せられずにはいられない大きな夢だった。

善三郎が銀行の融資を取り付けてその土地の購入に走ったのは、もう一つ理由がある。坪単価が信じ難いほど、安価だったからだ。

確かにその土地は、荒地地で、農地としてもサトウキビはできず、他の農作物も育たない。凸凹が多く、鍾乳洞のような穴がボコボコ開いている。それらに立て籠もつての沖縄戦最後の激戦地でもあった。しかしその荒地を変える新しいリゾート地の開発こそが、沖縄の未来を切り開くと

信じていた。農地から住宅地へ商業地への転用は煩わしいが、我慢強くやればなんとかなる。穴だらけの地も費用と時間はかかるが、お金さえつぎこめばクリアできる。難題を強い意志で乗り越えようと、父親の善三郎は当初ダイナミックに動いていた。

しかし、土地整備のための土木業者の仕事が始まり、設計士にリゾート・ホテルのプランを告げて滑り出したその事業は、なぜか次々にアクシデントに襲われた。土木業者のトラックが交通事故を起こしたり、現地調査に入った設計士がハブに咬まれたり、不思議に計画を遅滞させる事故が続いた。当初精力的に動いていた善三郎も、建築費用をさらに借り入れた直後、急に動きが鈍くなった。腰が重くなり、すべての動作が緩慢になった。その急変が心配になって病院で診てもらうと、認知症が始まっていた。返済は三年後に始まる。会社は父の所有する五つのアパートと四棟の賃貸マンションで当面の経営は回るが、返済が始まったら、それらはすべて呑み込まれてしまうだろう。もはや父親を頼ることはできず、自分がすべてを背負って動き出さなければならなかった。

善三郎を病院へ送り届けたあと、武志は、最南端のその予定地に独り車を走らせて、自らの足で現場を散策した。父親からは聞いていなかったが、その摩文仁の一角に、古いラブ・ホテルが一軒建っていた。今は廃屋になっている。

近くの民家で聞くと、当初は米兵のドライブイン・ホテルとしてそこそこ栄えていたが、奇妙な幽霊が出るという噂が立ち、清掃員が次々に辞めてしまった。それから急にさびれて、人がその建物にいづなくなつたということだった。

沖縄南部の先祖崇拜信仰や、地縛霊、怨霊への恐れは根強く、このような日く付きの物件は買い手がなかなか現れない。いまさらながら、なぜその土地の値段があまりに安かつたのか理解されたが、すでに引き返すこともできず、ただ、迫ってくる返済の重圧がひしひしと高くなるだけだった。

武志は、気になって、社員の池野洋介に、さらにその近隣の調査を頼んだ。三日後、池野は勤務後の酒場で生酔いの顔に、眉間に皺を寄せて報告してきた。六年前、あの近くで少年の幽霊を見た者がいるという。何人もがそれを見ているということだった。

「どう考えても、あの土地はヤバイッすよ。あれだけ目撃者がいるんですから……オヤジさんはそれを知っていて、購入されたんですかね？」

月末に鳴る電話は、大概、アパートやマンションの滞納金の件や引越し立ち退きの通告だった。電話を銀行からの計画の進捗状況の確認と間違えるほど、計画の実行期限が迫っていた。マンションやアパートの新規の転入は、今

矢を立て、いっしょに連れ立って、廃墟同然になつたラブ・ホテルの建物に案内した。

天音は炎天下に空を仰ぐようにしてから祈りを捧げ、瞑目してしばらく憑依に体を預けた。そして突然カッと目を見開き、何かが見たような表情になつた。

やがてその口から、はつきり告げられた。「二階の角の部屋に子供の幽霊が棲みついている」

さらに天音は続けた。

「男の子だ。歳の頃は十歳くらいかねえ……その窓からずっと海を見渡しているさあ。なんでかね？ 悲しい目をしている……ちゃんと供養してあげんといけんよ。怒っている」

年老いた天音の目尻の深い皺には、薄っすらと光るものがあった。

「男の子ですか……」

「そう……」

天音は頷いたが、悲観的な顔で決定的な言葉を告げた。首を横に振り「自分の力では、とてもなだめられない」と言う。

「この子に引いてもらわないと、ホテルは建たない。でも、私にはできない。私の力では無理。悪いことが続いて起こる」

そんなことが——武志は茫然として、本島でも最高位と

はインターネットで容易に見つかる。家賃を基本に仲介手数料と、薄利物件を小まめに転がしていけば、なんとか凌げるはずであるにもかかわらず、なぜか不安になる。すでに設計図も、工事施工会社も決まって、あとは実際に建設に取り掛かれればいだけなのに、銀行返済のことが妙に重くのしかかってくるのだった。このプロジェクトはほんとうにうまくいくのだろうか。何か大きな罫が待ち構えているのではないか。引かかるものが胸奥に日々重くなっていた。

地鎮祭を三日後に控えたとき、神主が带状疱疹にかかつて、延期を申し込んできた。武志はもともとあまり地縛霊など沖縄の民間信仰を信じる方ではなく、本土のようなやり方での地鎮祭で十分として、半分の開始儀礼を沖縄のやり方で別の日に残すものの、半分は銀行が勧める本土の神主形式で進めるつもりでいたが、さすがにこう重なること、土地に対する沖縄の信仰に目を向けざるを得なくなった。

武志の母親も沖縄の土着信仰をそれなりに尊んでいる。最近の武志の不安な状態を憂い、そちらの専門筋に聞いてみることを勧めてきた。沖縄の土着信仰を司るユタに、相談してみたらと言う。何か取り憑いているものがあるのかもしれない。ユタに除霊してもらつたらとまで言ってきた。

武志は、半信半疑だったが、ひとまず有力なユタを探し、県内でも霊力が高いと名の知れた天音あまねというユタに白羽の

聞いていたユタの天音を見送った。

2

ラブ・ホテルの調査以来、プロジェクトに投げやりだった池野が、あるときから突然人が変わったように前向きになつた。訝しく思いつつ、変わりようを尋ねると、ある人物を紹介してくれると言う。

「そこら辺の古い師や霊能者とはわけが違う。専務も一度会つてみた方が絶対いいですって！」

池野は自信に満ちて断言した。

武志は、藁わらにも縋すがる思いだった。池野の言葉に促されるようにして、早急にその人物と会うことへ傾いた。

その人物にぜひ会いたい意思を池野に伝えると、彼は「変な場所ですよ」と前置きして、ある酒場を告げてきた。

池野が告げた場所は、敗戦後のアメリカ世の名残を残している人影もまばらな廃れた飲み屋街だった。

コンクリートに施された塗装や英文字が剥がれ落ち、灰色のブロック壁が剥き出た低い建物で軒を連ねていた。

点在する飲み屋のくたびれた照明の下で、客待ちのホステスが何やらヒソヒソと話し込んでいる。野良猫にエサを投げている姿もある。人通りのめっきり少ない「新世界通

り」だった。

客らしい人影を察知すると、ホステスたちは一斉に目を怪しく光らせて、ネズミを見つけた猫の如く獲物を追う。スカートの丈が脹脛あたりで尻に合せて揺れているのを見ると、暗闇でも若い女ではないのがわかる。腕を下がり気味のバストの前で組み、何気に近付いて来て、いよいよ仕留めの体制に入る。

「遊んで行かない？ お兄さん」

哀れなほどに媚びを含んだ声で鳴いてみせるのだ。まるで昭和から取り残された時代ドラマのセットを想起させた。場末のホステスは、街の若くて煌びやかなお嬢とは程遠く、サンダル履きは当たり前で、ピンヒールは時代の狭間に置いて来たらしいで立ちだ。黒服で身を包み込むのは、年季が築き上げた厚い皮下脂肪の存在を少しでも目立たなくするためだった。ハイカラな服を脱ぎ捨ててきた代わりに、立派な数珠を二重にも三重にも手首に巻き付けたりしている。

いつの間にか、武志の腕に巻き付いていた中年ホステスの腕を何気に解きながら、「シャーッ」と牙を向けられる前に愛想笑いで逃げた。

九月とは言え、黒潮に乗った温かな海風が、不快な湿気を運んで来る。雨の粉を含んだような蒸し暑さが夜の闇に紛れ、暖色系のネオンライトが膨張して淫靡な雰囲気を漂

わせていた。

腕を巻き付けられた女の香水の香りと、うっすら汗ばんだ腕の脂肪の感触が武志の意識から、なかなか離れないのも、たつぷりと塩分を含んだ湿度のせいであろう。

「シスター」「チャリー」「明星」「アポロ」……もの哀しい響きのある看板たちは、憐れそうに風化し、鉄枠の腐食で斜めに外れていたりした。こんな所には、もう管理組合や縄張りを主張するヤクザもいない。忘れ去られた街……時代から置き去りにされた街だった。

赤茶色に錆びたシャッターの空き店舗と、店内が剥き出しの畳屋の間の、細い路地に入ると、うす暗い袋小路に出た。ブロック塀に染み込んだアンモニア臭が鼻をついた。そこに身を隠すように、その店があった。部下の池野からは、その店は看板を出していないということを聞いていた。しかし案内容易に見つかって、武志はホッとした。

沖繩の深海を想わせる群青色の亚克力板のドアは、客を歓迎しているように見えなかった。針金で施された、妙な取手が不器用に付いている。足元を照らすだけの小さな電球が低い位置に灯っていた。

息を止め、突き出た針金を思い切り引いた。酒と煙草と牛肉がジワリジワリと発酵したような陰湿な空気が、この店の下賤な歴史を感じさせ、武志の気を重くさせた。

薄らと紫煙の漂うカウンター席の中央に、女と老人が

座っているのが目に入った。突然の客に二人とも目を見張ったが、女が煩わしそうに立ち上がった。

「いらつしやいませ」

その女が、池野が言っていた仲村梓なのだと分かった。気後れながら武志はカウンターの隅の席に腰を下ろした。

オールド・パーとソフトドリンク、それぞれのグラスが、額から見事に上げ上がった七十年配の常連らしき老人の目の前のカウンターテーブルに仲良く並んでいた。とんだ邪魔者が入った——二人ともそんな顔をしていた。

梓はいっしょに座っていた老人を気遣いながら、立って、武志の方に、注文を聞いてきた。武志がビールを注文すると、瓶の栓をおさなりに抜いて、グラスに注いだ。

彼女は目を合わせない。武志のどうしても梓と会わなければならぬ理由を梓は知る由もないはずだった。武志自身は、池野によって彼女の情報がある程度知っている。混血だと聞いていた梓は、想像以上に美しい顔立ちをしていたものの、品位には欠けていた。プラスチック製のバレッタで、長い髪を無造作に留めていたし、キャミソールドレスに羽織るボレロは、引っかけずが所々に目立っていた。鎖骨と、粗めのレースに透ける彼女の肩肌が露わになる。当然客は酒が進むだろう。極め付けは彼女の口は前歯が一部欠けていた。それは流石に哀れに思えた。

年の頃は二十四、五歳、エキゾチックな美しい顔立ちに

その歯はないぜ……武志は少しばかり残念な気持ちになった。同時にその女を、何とか本来の姿に変身させたいという思いが頭の隅で過った。梓は正に女盛りで、初めて会った男にもそう思わせる程の魅力も秘めていた。

気まずい空気が暫く続いていた。間を持て余した老人がカウンターに立つ梓に、カラオケをリクエストした。彼が裕次郎に甘く酔いしれているうちに、武志は梓に声を掛けた。

「初めて伺いましたが、とても落ち着く店ですね。何だか懐かしい時代を思い出しますよ」

取りあえず好印象を与えるために思い付く言葉を並べたが、実際は落ち着くはずもない。小汚いし、しみつたれた空気も気に入らない。正面のカウンタボードに男性器を象徴したオブジェが呪いの如くそり立っていて、薄らと埃のペールを被っている。水商売の縁起物だか何だか知らないが、立派な木彫りのそのモノは、何十年もこの場所に監禁されている哀れな花婿にも思えた。

猥雑な雰囲気漂っている。しかし、目の前の女の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。今の武志にとっては彼女の力が必要だった。

「紹介してもらったんですよ。ここを」

梓は、斜めに掛かった前髪を指で払い、自分の煙草に火をつけた。

白い肌と桜貝のようなぷっくりとした唇が、異人の血を引いているのを物語っている。軽く首をかがげ、深く吸ってクールに煙を吐き出す。その動作に愛い加わる。

「どなたから？」

彼女の人差し指と中指の間から立ちのぼる紫煙は、やがて得体の知れない生き物が蠢き始めたように緩やかに広がり、ぼんやりと二人の間を隔てていく。女の長い睫毛の奥の灰色の瞳には、少しばかりの疑念が宿っていた。

池野から会うとき注意された点が二つだけあった。彼女に不信感を抱かれてはいけないこと。酒を無理に勧めないこと。

池野から聞いて、ここを訪ねてきたことを伝えた。

「……ああん、洋ちゃんのこと？ 大和んちゆのくせに色の黒い奴」

少し間を置いて梓が笑った。池野はすでに何回も来ているらしい。

「会社がいっしょで仲がいいんですよ。池野はよく来てるんでしょ？」

「最後に会えたのはいつだったかな？ よくわかんない……」

梓は、爪を染めていない指で口元を押さえ、前歯を隠すように声を出して笑った。彼女には人並みの理性はありそうだ。

できた。やはり白人の血が混じっている。手足はスラリと細く長い。気だるい話し方になった。もしかしたら精神に問題があるのかもと思った。

梓は、ホステスの常識的な乾杯の所作も割愛して、茶を一気に飲み干した。

武志と梓の会話はそう長く続かなかった。池野が言うように、彼女には何か、ただならぬ雰囲気がある。

これから先、慎重に事を運んで行けるように、今夜はひとまず帰ることにした。後ろ髪が引かれるのは、武志の中に早く事を進めたい焦燥が渦巻いているからだだった。

3

再び梓を訪ねたのは数日経ってからだった。焦りはあったが、もう失敗はできないことが、武志を慎重にさせていた。池野が外勤先から早めに会社へ戻った際、二人で梓の店に出掛けることにした。

梓の店の針金仕立てのドアノブを池野が引くたびに鍵が掛かっていた。

「ちよっと早過ぎましたかね？ 金曜だから休みってことはないと思いますよ。でも彼女マイペースだからなあ、どうしましょうか、専務」

辺りを見渡すと「餃子」の幟が目に入った。

「初めまして、名嘉山武志と言います。ママさんと呼んでいいのかな？ お近付きに何か飲まれませんか。池野もお世話になっていることですし、乾杯しましょう、お好きな物をどうぞ」

「ありがたい。ウチさあ、こう見えても、あまりお酒は飲めないのよね。まさかと思ったでしょ？ トロいからいつも酔っぱらいだつて勘違いされるけど……。じゃ、お言葉に甘えて、さんぴん茶をいただくわね。それと、ウチはママじゃないわよ。この店のママはねえ、肝臓患って半年前に死んだわ、可哀想に……飲み過ぎよね。きつと」

梓は頭が良いとは思えない。目の前の客に、腹一杯飲まず術を知っているのなら少しはマシな服を買うだろうし、美容院で流行のセットアップもするだろう。そしてあげくにママは酒の飲み過ぎで死んだときた。心の正直な人だと好意を持った。彼女はこの商売には向いていない。武志は心の中で苦笑した。

裕次郎オールドソングに酔っていたはずの老人が、武志を一瞥して不機嫌そうに会計を済ませた。彼は肩をそびやかして、派手に下駄を鳴らして出て行った。梓は特別見送りもせず、缶の茶の栓を抜き、グラスに注いで武志の前に立った。

「梓です、よろしく」

カウンター照明のもと、彼女の顔をじっくり見ることが

「先に飯でも食っておくか」

近くのラーメン屋で、梓が出勤するのを待った。

池野は、食前のビールと飯を前に、気持ち弾んで見えたが、武志のほうは緊張してどちらに進まない。

レンジがカランと乾いた音を立てた。

「そろそろ、ローズへ行きましょうか」

井を汁まで空にした池野が席を立った。あの店の名が「ローズ」という名なのを武志はこの時初めて知った。

ラーメン屋を出て、通りを横切ると、ローズの入口付近の電球が点いているのが微かに見えた。先客がいないことを願った。池野が話した梓の能力が真実だとすれば、できるだけ早く話を進めなければならない。

ドアの開く気配に梓が振り向いた。

梓は今しがた出勤した様子だった。カウンター席に座り、まだ乾き切らない長い髪を、指で揺らしながら梳いていた。「んっ……洋ちゃん？ 久し振りいー」

梓は目を凝らし池野を捉えようと、直ぐに笑顔になった。「ご無沙汰してすみません、今日は専務のお供なんですよ」

ラーメン屋で飲んだビールが効いているのか、池野はテンションが高く、とても嬉しそうだった。そのせいか梓の雰囲気がい前会った時よりも、もっと気だるく感じる。

「えーっと……武志さんでしたね？」

「覚えていてくれて嬉しいです。先日はとても楽しかったですよ」

武志も明るく振る舞った。今宵、梓は真っ赤なミニのドレスを着ていた。

靈感のあるらしい梓は、自分の気持ちを全てお見通しかも知れない。不意にそう思っただけに出た。

「梓さんがもしよろしければ、今夜は貸し切りでお願いできませんか？ 池野ともゆっくり飲みたいし、梓さんのお話も色々聞きたいですしね。一番上等な酒を出してくださいよ。梓さんも遠慮なく好きなものを飲んでください」

緊張しながら伝えると、梓は快諾し、すぐに入口の鍵をロックした。

今の状況が煮詰まるのなら、朝までとことん飲んでやろうと思った。

カウンター・ボードに閉じ込められた、豊かな裸婦像の陶器製ボトルを梓はおろして、そのボディに癒着した粘性の埃を、おしぼりで丁寧に拭いた。

「これ、ウイスキーかしら？」

漏液が浸み込んだ薄い栓封じのシールを剥がそうとモタついている梓の手から、武志はコニヤックを奪って、シヨットグラスとチェイサーを用意させた。

小さなグラスを掌で包み込み、生のソレを舌の上で転がしてから飲み込んだ。

武志にも梓が何を言っているのか、よくわからなかった。カミンチュだと言うが、梓はどう見ても混血であり、白人の血が混じっている。白人の血が混じったカミンチュなどいるのだろうか。沖縄人とアメリカ人の混血であると池野からも聞いていた武志は、これまでの梓に対する池野の情報に不安を抱いた。もし彼女に靈感などないとしたら、こんな所に来る意味など全くないのだ。

「もうマジっすかあゝ 知らなかったっすよ」

この言葉を最後に池野はカウンター席で潰れた。時々小さなイビキをかいている。

艶めいた黒髪に大きな灰色の瞳。白い肌。父親はどんな人間だろう。やはり基地のアメリカ人か。

「小さい頃はねえ、『アメリカ』ってよく虐められたさあ、『アメリカじゃやない』って言ったって、『やなアメリカはあっち行け！』って、毛嫌いされた」

敗戦の軌跡は、混乱期の沖縄人から理性を失わせ、米国と大和に挟まれた湧き出るコンプレックスと無知や弱さ、理不尽な虐めとして混血の子供達にも及んでいた。

「大和世になってからは、少しだけ虐めはなくなったけど。あの戦争で沖縄人の半分は戦死したんだ。普通は逆じゃない？ ウチはずっとアメリカ人と思われていたんだから」梓は脚を組んで煙草を吹かし、ぼんやりと時を退らせていた。

粘膜が熱するスモーキーな香りが喉頭から鼻に抜ける。追って立ちあがる味覚は、まるで客人が落としていった様々な情が熟成されたかのように、口内で甘く絡みついてきた。沈黙のままに歴史を物語っている。おそらく、このボトルは、この店の全てを見てきたのであろう。

ヴィンテージのコニヤックは高くないわけがない。梓は何時になく微笑んでいた。急に饒舌になり、自ら武志と池野との間の椅子に座った。

酔いが本格的に回ってきた池野が定まりきれない目で、ソフトドリンクを飲む梓の口元を何度も覗き込んで歯を出して笑んだ。

「梓さんって、さすがハーフだから綺麗ですよねぇ、スタイルも抜群だしさあ」

池野は下唇を舐めていた。

「父親のことはよくわからない。父親はいないさあ。ハーフなのかクォーターなのかもわからない。ウチには教えてくれない。カミンチュには父親はいないさあ」

「あれ、どーゆうこと？」

池野の舌はあまり回っていないが、頭はまだ回っている。「カミンチュは、結婚できないけど、子供は持っているの。そうしないと受け継がれないから。前にも言ったよ。でも、結婚できないから、父親はいないのさあ」

梓は呆れて、池野を見つめた。

「ご両親は健在なんですか？」

「ママは元氣ピンピンよ。でも父親はどうしているのかわからない。子供の時から、『カミンチュには父親はいない』と言われてきたから。ウチもそう思ってきた。子供は産んでいいんだ。でも、父親はいない。父親がいなくて、カミンチュの宿命さあ。ウチもそれがいやだから、島から逃げ出してきたわけさあ」

梓はシニカルに笑んだ。

「それ、ただだいたいいい？」

しゃくつた顎先がボトルを指していた。

突然の彼女の言葉に武志は耳を疑った。

「飲めるの？」

「ほんとうは飲んじやいけないの。特別の時以外は……武志さん、ウチに何か聞きたいことがあるんでしょ？」

梓はお見通しだった。

おもむろに梓が椅子からスッと立ち上がり、カウンター内に回って、取り出した切子調の透明なシヨットグラスにコニヤックを注ぎ、一気に飲んでまた注いだ。それを繰り返したが、一般的なホステスが、意図的に酒を減らす行為のように思えなかった。

「ウチの家系はね、ちよつと変わっているわけさあ。ちよつとどころじやないか……あのね、ママも祖母も、そのまた母親も代々神事をやっていてね、生まれた時から特

別な眼を神様から預かっているの。だから島から離れられないんだよね」

「島？」

「久遠島よ。ママはそこで暮らしているんだけど、ウチは、絶対にアレはやりたくないから帰らない」

梓は頭を左右に振った。

久遠島は琉球列島の東に浮かぶ小島で、琉球始祖アマミキヨ降臨の地とされ、琉球王朝の信仰基盤となる「おなり信仰」が、今なお続く神の島と呼ばれている。

島の男たちの生業は漁師であり、女性たちのごく一部は特別な認証儀礼に参加することでその後、神人となる運命（さだめ）という。十二年ごとに、島で厳かに独特な祭祀が行なわれると言い、梓は続けた。

「一般の神人やノロやユタ、それぞれの役割とはちよつと違っているわけさあ。一等カミンチュは全ての勤めを一身で受け止めないといけないんだよね。だから結局は……」

言葉が一瞬止まった。

「……だから、生涯この身を捧げないといけないみたい。ただね、子供は産んでいいわけさあ、一等カミンチュの血を引く女子だけが神事を守っていくから」

梓は他人事のように武志に伝えてくれたが、彼女の母親が未婚で梓を生んだのは一等カミンチュの血を引く故の事情があった。外国人の血を引くにしても……。

「へえー、こういう世界が、未だにあるなんて知らなかったなあ。こんなにも信仰が廃れた世の中に、厳かに信仰を守り続けている人たちがいるなんて、ある意味素晴らしいことですね。使命があるんですね、梓さんにも」

武志は労った。彼女らは、きつと本土の人間が想像する以上の複雑な心境を味わいながら生きていくのであろう。沖縄はアニミズムと祖霊信仰が根深い。ニライカナイと呼ばれる冥界や、太陽や森、水源の自然霊、そして先祖霊と交信できる女性達は、ユタ、ノロ、カミンチュという呼称の神職が与えられ、十七世紀頃から現在まで存在する。

五穀豊穡、航海安全の祈禱と感謝、そして祖霊との交信などが行われる。霊力はたいがい血族を通して引継がれ、終生職になると言われている。

「ウチはさあ、あの島から逃げ出したから、この眼は閉ざされている」

梓は自分の眉間を指した。

「第三の眼というやつですか？」

「そうとも言いかも……開眼している時は苦しいの」

「へえー、なぜ？」

「人々の不満、思い、絶りが、モノクロ映画の様に覚えてくるわけさあ。うっかり同情の気持ちを入れようもんなら、共鳴しちゃってストレスが半端じゃないのよ。修行不足で、よく祖母に言われていた。ウチはこの血を呪ったけど、

祖母が話してくれたのは、人々を助けようと思うな。人間には自由意志で選択する事が許されているのだからあまり詮索してはいけない。御神の声を伝える、ただそれだけさあ、つて」

梓がグラスをグイグイと空ける内に、彼女の灰色の瞳が微妙に透明感を増していき、武志はしばらく目が離せなかった。

「そんなに、飲んで大丈夫？ 本当はお酒がイける口なんですわね」

「あなたが、初めてこの店に来た時から、ずっとウチに何か聞きたそうにしていたさあ。関わるのなんてまっぴらと思っただけで、洋ちゃんの上司だと聞いたから……ところで、神酒って飲んだことある？ 昔はね、美しいゆえに、不幸にも選ばれた少女たちが、米と麦芽を嚙んでは、素焼の壺の中に吐出すという作業を強いられていたわけよ。唾液中の酵素が発酵を促し、熟成したらお酒になるわけさあ。一晩で一リットル程度の原酒が作れたそうよ。あれは国王に献上されたお酒でもあるけれど、王様を取り巻くノロや神人にとっても、日頃は眠っている眼を呼び覚ます魔法のお酒なの。でも何故、処女じゃなきゃいけないのかしら？」

「汚れないからかな？」

「顎がくたびれてしまつて、数日間は顔が腫れあがったら

しいわ。可哀想に美人が台なし。もしウチがさあ、首里城の寄満（台所）を仕切っていたなら、そんな過酷な仕事は、暇な爺さん達にやらしてるわ。美人神酒だと言つて。あつ、でも歯がないか。それはともかくウチはどんな酒でも眼覚めてしまうのよ。覚えてくるっていうか……それが最大の悩みなわけさあ。ちよつと失礼するわ」

少々ふらつきながら梓はトイレへ立った。

半年前にローズのママが他界してから、この店でホステスとして雇われていた梓が、店の大家に無理矢理に頼まれて嫌々残る形になった。梓が看板を掛けないでいるのは、義理で残っているためだった。

久遠島の神女たちは、特別な時に、酒を飲むのだと言う。祭祀の執り行われる時や、祖霊との交信の際の開眼の為に用いることもある。

かつての琉球王国では、女司祭であるノロが中央政權的に階層化され、国王の妹、月清は、神との契りである聖婚により生涯、人と通じることはなかった。そして最高の「聞得大君」の位置を取った。その名には「名高き霊力溢れる君」という意味がある。そして月清の霊力が王の権威さえも上回っていたと伝えられている。

首里城と久遠島は「おなり信仰」に於いて、何らかの深い繋がりがあるのかもしれない。

池野のイビキが本格的になった。武志は池野に声を掛け

て、広めのソファに無理やり寝かせた。今夜は長い夜になりそうだった。

「じゃ、始めましょうか」

トイレから戻った梓は、カウンターを挟んで武志の正面に立って、ゆっくりと長く息を吐きながら掌を組んだ。

彼女の瞳が、武志の眉間だけを正確にじっと見つめる。

鋭い鎌が頭部を貫通していくような、冷痛に似た感覚を武志は覚えた。

沈黙の時間がどれくらい続いただろう。梓の瞳の色が深い緑色に変わったような気がした時、ゆっくりと彼女の口が開いた。

「土地のことは然り。善三郎は良い選択をした。何が不足か？」

梓は神々しかった。それは靈力に長けていることを示していた。父親の名も、武志が抱えてる問題も知らないはずだ。

「その土地に迷い人がいるのを見えますか？ 何とか、その魂たちが行くべき世界へ導いてくれませんか？」

武志は全身に鳥肌が立っていたが、天音が話した少年のイメージを頭に浮かべて冷静にそう答えた。会社としても、建設に邪魔なものは、とにかく全て排除したい。

梓は目を閉じては、また見開いて、時々小刻みに頷きながら数分間集中していた。

武志も酔いに任せて本音を伝えた。

4

週明けの月曜日の正午、待ち合わせの喫茶店で武志は梓を待っていた。

「お待たせしました」

丈長の白いワンピースに、白いサンダル、淡いクリーム色のつば広帽子を被った女だった。最初、梓とは気付かなかった。スレンダーな体型に、アオザイ姿のベトナムの女学生を思い起こした。彼女が余りにも夜のイメージとは違っていて、武志は思わず立ち上がった。

「梓さん、先日は遅くまですみませんでした。あんなに酔った池野も初めて見ました。ご迷惑ではなかったですか？」

「いいえ、こちらこそありがとう。洋ちゃんはいつもあんなさあ、昔からお酒は弱かったから……」

雰囲気は違うが、相変わらず気怠いオーラが彼女を覆っていた。

「アイスコーヒーでもいいかがですか？」

「ウチお酒いただいいですか？」

「私も車でなければビールで付き合いたいところですよ、この暑さ嫌になります。どうぞ好きなのを」

少しばかりの疑念も持ち合わせる武志に、静寂な時間と空間が重くのしかかる。こんな、オカルト的なことが現実にあつていいのだろうか。幽霊の話なんて本当は最初からデタラメなのかもしれない。池野からある程度の情報を得ていた梓自身の思い込みがあるとも考えられる。こんなことをして、意味があるのだろうか……と頭の隅でその思いが掠めた時、梓の瞳が突然凍り付いたように微塵も動かなくなった。しばらく経って、ゆっくりと氷が溶けだしたように梓の目から一粒の涙が落ちた。

「……ウチが行かなければならない」

梓はそれ以上のことは語らなかった。

彼女が何を考えているのか理解できなかったが、その言葉が武志を打った。武志は頷いた。

「早い方がいい」

とにかく、解決できることはどんな小さな問題も解決しなければならぬ。そうしなければ果たすべき事業も進まないのだ。

腕時計に目をやると、午前二時を回っていた。判断料金込みなのだろう。想定以上の会計を済ませ、泥酔の池野を抱えてローズを出た。

「気をつけて」

梓はフラつきながら珍しく見送ってくれた。

「梓さん、その前歯、元に戻すと絶世の美人さんですよ！」

「じゃあ……ハイボール」

ドリンクを迷ったタイミングで梓が笑った時、武志はハツとした。

「歯医者へ行ったんですね。えーっ、何だか嬉しいなあ」
彼女の前歯がきれいに揃っていた。その一言で梓の頬に朱が差した。

はにかんだ彼女はとても素敵なレディーだった。

その日、梓は言葉が少なかった。外の通りを硝子越しにぼんやりと眺め、時々唇を噛んだ。ふと彼女の胸元に目をやった。素焼きの勾玉のネックレスをしている。

「お代わりしていい？」

梓は心の準備をしている様子だった。

「遠慮なんかしないでください。私の都合で、わざわざ時間を取ってもらったのですから。そのネックレスって焼物ですね。陶器みたいな。珍しいな」

「これ？……」

梓は口ごもって、ただ胸元の勾玉を掌で包みこんだ。

東支那海を見渡せる穏やかな摩文仁の丘で、生温かい南西の風は梓のワンピースの裾を弄ぶ。白い服を特別な神事の際に身に付けるのと同様に、彼女も異界との交信の時には、必ず白い服を身に付けるのだと言った。

人の命や精神を繋ぐ者のみに許された白衣は、聖職者の

しるしだと、どこかで聞いたことがある。その色は特に梓に似合った。

南端の現地に着くと、梓は直ぐにラブ・ホテル廃墟には入らず、崖の上に立つてしばらく海原を眺めていた。

この時の彼女は神聖さを帯びていて、なぜか近づくことができなかった。

梓は青空と潮風とこの丘に溶け込んでいた。この場所が時を駆け抜けて、彼女を歓迎しているかのようにさえ思えた。

梓は何やら辺りを見渡して緩やかな崖を下っていったが、暫くして戻って来た。テッポウユリをたくさん抱えて微笑んでいる。自生していた白い花が、彼女の目に入り、摘んできたのだ。武志は単純にそう考えていた。

武志に、いったん百合を預けた彼女は、長い髪を白い紐で束ねてまとめた。そして、勾玉のネックレスを、首から外してワンピースのポケットにしまった。詳しい説明も求めないまま、彼女は迷いなく二階の角の部屋へ、真っ直ぐに向かった。武志も特に助言をせず、ただ梓の後ろを付いていく。

「失礼します」

誰もいない部屋のドアを梓はノックしてから開けた。

単調な潮騒の音が、古びた窓枠の隙間をくぐり抜けて近くにも遠くにも聞こえた。それは決して侵してはいけな

異次元の世界に誘っているようだった。

「大丈夫よ、怖がらないで！」

突然、梓は言い放った。その声は、武志に対してではないことは明らかだった。彼女は空に語り掛けている。古い床は足を踏み出す度に埃が立つ。その床の中央に、梓は百合の束を置いてから、独言のように続けた。

「長い間待たせてごめんなさい」

武志には何も見えない。

薄暗さの中で、テッポウユリの輪郭が妙に白さを浮き立たせ、壁と床、梓と武志との間の遠近感を狂わせた。やがてその純白の花の輝きが異界の入り口の様にも思えてきた。梓はテッポウユリの傍で跪いた。勾玉のネックレスをワンピースのポケットから取り出して掌に乗せ、空間に差し出す所作をして呪文の様なものを唱え始めた。梓の体が、前後左右に揺れても、彼女の口が奏でる呪文が滞ることはない。しかし声の音域が変わっていく。

梓の声域は、平均的な女性のアルトなのだが、テノール、バリトン、バスとまるで暗闇でオペラの多彩な音域を聞いているように変化していった。

彼女の声は徐々に重いビブラートが増し、水紋が拡がるような空気を醸し出した。

わけのわからぬ伽藍の狭い箱の中に、一人閉じ込められた気分になって急に怖れを感じた武志は、人混みに放り出

された小さな子供が、母親を確認するように梓に歩み寄りその存在に縋った。

闇の声が響いた。

——一九四五年六月のその日、ワタシはここにいた。

辺りは火薬と死臭とに均され、行き場のない粉塵が摩支仁の丘一帯に淀んでいた。

炙り過ぎた黒豚の背肉のようだ。

砲弾の鉄の怒涛と、赤い閃光の交錯。火炎放射器。

底知れぬ苦痛の中で、悲しみを感じる神経は切断され、ただ生きるのを願うだけ。地獄にいる。

ワタシは九歳の少年だった。最後の恐怖を覚えたのは、未だ一歳に満たない妹の竹子を負って、防空壕から追い出されたあの朝。

幼い竹子は空腹と壕内の避難民が薙めく重い空気の居心地の悪さで泣き止むことがなかった。

母親のフミは爆撃による破片で太腿に深傷を負い、既に破傷風の症状が出ていた。意識はすっかりしていたが、時々来る痙攣が徐々に激しくなり、やがて言葉も話さなくなった。それでも幼い竹子には萎えた乳を吸わせた。泣き止ませるためだ。

そしてとうとう息をしなくなったフミを、大人達は大きなゴミを扱うように、その辺にあった男物の着物ですっぽ

りと包んだ。陽が沈むのを待つて彼らは、おもむろに母の亡骸を何処かへ捨てに行った。

そしてワタシも早朝、竹子を負って追ひ払われた。竹子が理性などあるはずもない。竹子の生命力の証である疳高い泣き声は、壕内で身を潜める人々にとって、災いだった。米兵に嗅ぎ付けられれば男は殺され、女は辱めを受ける。手渡されていた小さな丸い手榴弾のピンを抜かざるをえない。だからといって竹子の首を絞めて黙らせる強さはワタシにはなかった。

いよいよ、逃れ場を後にしようとした時、奥に身を潜めていた、寡黙な一人の日本兵が近づいて来て、ちり紙に包んだ黒糖とアルミ製の水筒を渡された。底には「ヤマト」と記されていた。彼の眼は赤く染まり、酷く疲れ切っていた。その眼孔はワタシの目をえぐるように見つめていたが、やがて瞳を落とし踵を返した。

洞穴の防空壕から出て久々に外気に触れた時、草木にみなぎる息吹がこの上ない甘美に感じられた。ワタシの肌に触れ、鼻腔を通って肺へ深く入る空気は、生きること望ませた。清々しい潮風と、いける草の美しさは遙か遠い記憶のようにも思われた。

枯渴した心を清らかな空気が潤していく、そんな感覚をテッポウユリは与えてくれた。白の麗わしさが、恐れて鉛の様に固まったワタシの足を動かしたのだった。

しかし朝陽は、ワタシと竹子の命に全く無関係に徐々に高さを増していった。ワタシと竹子の形を鮮明に捉えて行く。いつ米兵に見つかるとかわからない。余りの恐怖で震えが止まらなかったが、涙が出ることはなかった。身を隠せる岩陰や、洞穴を必死で探し歩いている時、突然背後から、けたたましく熱い何かが迫り来た。振り返る間もなく、ワタシの体は宙を舞い、隆起珊瑚の岩場に叩きつけられた。

……不思議と痛みは感じない。おぶっているはずの竹子の血に染まった小さなおかつは頭が千切れて前にあった。銀色の水筒がカラカラと音をたてて、ワタシの目の前を転がっていった。ワタシは思わず竹子の方へ腕を伸ばした。でも、その腕さえも自分の体に残っていたのかどうか、本当は知らない。

ワタシは生きたい。背に残る胴体の竹子の重みも生きることを叫んでいる。

母が何時も竹子に歌って聴かせていた、あの子守唄が遠くに聴こえてくる気がした。

「いったーあんまー、まーかいがー、ベーベーぬ草刈いが、ベーベーぬまき草やー、畑^{はた}ぬ若^{わか}かんだ、あん小、そーうていーコツコイグアー……」

(おまえの母さんどこ行つた、めえめえヤギの草刈りに。ヤギの好きな草はなに？ 畑の若い葉はみんな好きさあ)

がワタシを襲う。だからここから離れられない。

あの時と同じ暑い季節がやって来ると、この丘で小さな竹子の魂は白百合の群集と化して毎年健気に咲いてくれる。ワタシはずっと竹子といっしょにここにいる。決して離れない……

母親が息をひきとる少し前、ワタシに手渡したものがあつた。フミはお守りだと言つた。

「満男、これ……失くさない様に大事に持つておくんだよ、きつときつと、父ちゃんに会えるから……そしたら父ちゃんに必ず渡してね……」

煉瓦色の勾玉が小さな巾着袋に入っていた。

あれから七十年以上もズボンのポケットにずっとしまっている。家族がどうしようもなく恋しくなるとワタシは何時もそれをギュツと握りしめた。

そしてここからいつも海を見渡す。きつと父ちゃんが大きな船に乗ってワタシを迎えに来てくれる。

「父ちゃん……」

梓の体は徐々に震え出し嗚咽にまみれた声はほとんど聞き取れなかった。

梓の顔はやがて少しずつ歪み始め、気が狂った少女の様に号泣した。

姉さん連れてごつつんこ

母の揺らぐ声の中、無限の空間に吸い取られるように強烈な睡魔が襲つて来た。ゆつくりと瞼を閉じた……

静けさは遠く永く続いていた。

寂しさは感じない。母フミも竹子もそしてワタシも死んだのだということだけしか分らない。父親の満太郎は、どこか見知らぬ地で生き続けているのだろうか。

開戦の前に海人の満太郎は既に遠洋に出ていた。当時の日本は陸海空も緊迫した状況下で国境を容易に渡れることがでぎずに遠洋の漁師達も帰れるはずもなかった。

ワタシと竹子が八つも離れているのも、ほとんど父が家に戻らず、東支那海で手広く漁に勤しんでいたからだ。

崖の淵に座つて水平線の彼方の父親に、ワタシは思いを馳せた。

「満男、母ちゃんと、竹子を頼むよ。お前は長子だから父ちゃん^{チャクシ}の代わりに此処で女を守れよ。そしてしっかり勉強しろよ。父ちゃんがいつばい儲けてくるからよ」

長い旅に出掛ける日の父満太郎の口癖であり、男同志の約束でもあつた。

ワタシは初めて大声で泣いた。父親との約束を果たせなかった。

フミも竹子も守ることができなかった。その後ろめたさ

「見えている？ 今、お父さんも来たよ！ さあ、みんなでいっしょにお家に帰ろう。ここでお父さんを待たなくてもいいよ。みんなでいっしょに帰ろう」

電気もない薄暗い部屋の中で四つの小さな光が梓の身体からゆつくりと天井に向かって抜けていった。それがはっきりと見えた。勾玉が光っている。

その直後、梓は武志の腕に倒れこんだ。

梓が目覚めたのは冷房の効いた武志の車の中だった。急いで病院に向かつていた。

「ごめんなさい、ウチもう大丈夫ですから。集中し過ぎると、何時もこうなるんです。まだ力が足りないから」

梓がゆつくりと上体を起こした。

「本当に大丈夫？」

「……ウチの勾玉と同じ勾玉を、あの少年もたまたま大事に持つていた、二つを上下に組み合わせたら丁度円を描く。そうしたらあの子が待つていたお父さんがうまく現れた。お父さんは海で死んでいた……迎えに来てくれたのだと思う」

「あの少年は成仏できたのですね」

「多分……帰るべきところへ、みんなでいっしょに。真つ直ぐに」

「よかった」

武志は心の底から安堵した。
あのととき武志も襲われた、真っ暗闇に落とされる感情と恐怖。
「何十年も、恐れと孤独を引きずりながら、お父さんの迎えをずっと待っていたのね」
九歳の子供の霊が、瞬間的に武志に憑依していたのだと梓は説明した。

「もう、問題はないね？」
梓の顔色は曇っていた。

「大丈夫。この土地についてはね」

「そうか。よかった」

梓は溜息をつきながら、重い声で言った。

「でも、本当の除霊はこれからよ」

「どういう意味？」

「大和んちゅはまだ償っていない。浮かばれない霊がまだ大勢いるの。でもうち一人では到底無理、一旦島に帰らなければならぬ」

梓は唇を噛んだ。

黄昏から禍時、空には新月から一日過ぎた月がおぼろげに浮いていた。

5

善三郎の認知症は進むばかりだったが、それ以上にプロジェクトの忙しさが武志を駆り立てていた。

「シーサイド・ヒル」の完成直前に、善治郎は死に、それを機に武志は社長に就任していた。「シーサイド・ヒル」は、話題を呼び、予想以上に予約が殺到した。

『ホテルの窓からホエール・ウォッチングを』——SNSで池野の発信する広告が思った以上に功を成し、「シーサイド・ヒル」は中国、韓国、台湾から予約が相次いだ。欧米からも予約が入り、向こう半年予約で埋まった。全てが順調に進んでいた。

そんな時、順調な会社の発展に伴って、池野は三十五歳で開発部長に昇進した。折からの住宅開発ブームに乗って、那覇郊外の新興住宅地を手掛け、これも大成功した。

祝いの酒席で、突然、池野が嬉しそうに姿勢を正して、言ってきた。

「社長にお話しておきたいことがあります」

「何だ？ あらたまって」

「実は、オレ、結婚するんですよ」

「けっこん？」

「県会議員の娘で、不動産屋のペエペエじゃ、なかなかオッケーを出してくれなかったんですが、開発部長になって、やっとOKが出たんです。それにオレ、大和んちゅでしよう、いずれ沖縄から離れることになるんじゃないかっ

あの日の除霊をきっかけに、梓は店をたたんで、久遠島へ帰省した。あれほど嫌がっていた血族的使命から、逃げ出すことが不可能だと彼女は悟ったようだった。
彼女に礼を尽くした後、武志も積極的に動き始めた。不思議と大した障害もなく建設工事もスムーズに進んでいた。

梓のことは気になったが、社運を賭けた大プロジェクトの高波が、彼女の存在を呑み込み、忘れさせた。

二年後、東シナ海を見下ろせる摩文仁の丘の一角に、七階建てのリゾート・ホテル「シーサイド・ヒル」が建った。善三郎と武志の思惑通り、冬を迎えた大海原には、鯨の親子が現れ、その巨体が美しい海を泳ぎ回る姿が、ホテルの窓から見ることできた。増設された広い駐車場の脇とホテルの周りには、この夏から白百合の群生が咲き乱れた。武志と池野がホテルのシンボルとして、たくさんの百合の球根を植えたのだった。それはかつての梓の願いでもあった。初夏に蕾は膨らみ始め、やがて真夏になると、海に向かって咲き乱れる白百合の花群が、この丘で犠牲になった魂への弔いと、供養になるのだと梓は言っていた。
武志は凛と真っ直ぐに咲く白百合に、靈威高き梓の姿を重ねた。その姿は琉球王の妹君、「月清」に見えた。梓はその再来ではなかるか……そう空想さえた。

で、心配してみたみたいで。沖縄に骨を埋めるつもりだといくら言っても信用してくれなくて。でも部長になったんで、彼女がやっと承諾してくれて、近々愛媛の親にも会ってもらうことになってます。親父とお袋、晩婚だったんで、生きている間に孫の顔も見せてくれやと、ずつとうるさくてね」

池野は頭を掻いた。

「そりゃあ、おめでたい。式はウチのシーサイドでやるんだろう？」

「そうしてもらえると嬉しいですよ。こっちでメインにやる予定ですからね。相手のお父さん、県会議員なんで、ブアーッと華やかにがご希望なんです。うちの企画のビーチ・ウェディングも入れたりして。でも、愛媛は愛媛で親にも花を持たせてやりたいんです。愛媛は質素でもいいですから。それにしても会社のプロデュースで挙げるなんて何だか照れくさくて仕方ありませんけど。社長にはずつとお世話になりっぱなしで、今の位置まで導いてくださり、本当に感謝しています。お陰様でやつと、私も家庭を持つことができます。ほんとうにありがとうございます」
真顔になった池野は、持ち上げたグラスに左手を添えて乾杯した。

結婚式は四カ月後だという。勢いに乗った池野は、もう一つの開発プロジェクトを仕掛けた。それはスーサイトと

呼ばれる海岸地の近くだった。沖縄戦でやはり激戦地になった一つで、手つかずの未開発地域と言えた。地価がやはり異常なほど安い。そこを、ホテルではなく、新興住宅地として開発しようと言った。折から、父親の県会議員の力で、そこに通じるバイパス道路ができるという。まったく新しいタイプの、若者を対象にした海辺の住宅地の開発ということになれば、また話題を呼ぶはずだった。

武志は、池野が調子に乗りすぎている気もし、その計画地が、沖縄戦の民間の犠牲者が多いところだったのが気になったが、沖縄に新風を吹かせようとしている池野の企画はわからないではなく、たしかにうまくすれば話題を呼びそう、成功すれば大収穫が見込めた。それに、もし何かあったら、梓という強力な助っ人が付いている。そのリスクを乗り越えてこそ、大きな収穫が得られそうではあった。池野はすでにそこまで読み込んで進めているはずだった。

6

それからまもなくのことだった。池野のフィアンセが交通事故を起こした。カーブでの対向車との接触事故だったが、もう少しで崖下に転落しそうになり、もし転落していれば、命に関わる大事故になるところだった。その数日後、父親の県議員も、お抱え運転手がよそ見運転で、老婆を

跳ねる事故を起こした。幸い一命は取り留めたが、新聞記事にもなってしまった。さらにその一週間後、池野も発熱し、背中に斑点が出た。医者に診てもらおうと猩紅熱（しやうこうねつ）ということだった。

池野の病は抗生物質ですぐ治ったが、一抹の不安が現実になったことを、武志だけでなく池野も危惧した。やはりスーサイトという土地が、問題があるのかもしれない。悪いことが続くのは、やはり何か呼び寄せているともれる。このままではまたよくないことが起こるかもしれない。特に池野は結婚という大事が控えているので、焦りを覚えているようだった。結局また梓の力に頼らざるを得ないようにも思えた。

電話の打ち合わせでは、二人いっしょに久遠島に戻っているはずの梓を訪ねることになったが、池野はその日の前日になってもまだ完全に熱が引かなかったので、結局武志一人で行くことになった。

久遠島を遥か海の向こうに見渡せる南城市の安島港（あじま）から「フェリー・くおん」に武志は乗船した。逸る（は）気持ちを抑えられなかった。

梓の住所など何も知らされていない。池野に尋ねてみたが、池野も知らなかった。そう広くない島だから、行けばなんとかなりそうな気がしていた。梓は優れた霊能力の持

主だし、たとえカミンチュになっても彼女のことだけはだれかが知っていそうな気がした。梓が久遠島で暮らしているのなら必ず見つけられると期待するしかなかった。

安島港から一時間程で久遠島に着いた。

初めて訪ねた久遠島は、想像していたよりずっと小さな島だった。高い建物など皆無で、民家が密集することなくいいバランスで繋がるように建てられ、南国特有の力強い植物や色鮮やかな花々が自然体のまま存在している。波の音と梢（こす）の掠れる音、豊かな土の匂いが何とも心地よい。

タクシー乗場もなく、バスも見えない。切符売場の隣に貸自転車屋があった。店主らしき紅（びん）型染めのエプロンを掛けた初老の女性に梓のことを聞いてみた。

「ああ、京子さんこのアズちゃんね、郵便局の二軒隣の家だから、自転車に乗って行ったらいいですよ。はい、これ！」

自転車屋のおばさんは見ず知らずの男を警戒することもなく、梓の実家をすんなり教えてくれたうえ、手作り感のある島内観光用の地図入りパンフレットをくれた。子供の頃を思い出しながら武志はペダルを思いっきり踏んだ。

この数年、戦国時代の武将さながら、シビアナ波に揉まれ続けていた。不動産や大金の動きを嗅ぎ付け、鋭利な数字の刃を伴った欲望の渦が武志に次から次へと襲いかかってきた。油断や手抜きが命取りになる。激しい欲望と数字

の闘いの中で、喰うか喰われるかのピンチの連続になる。

そんな中で、癒しや安らぎ、優しさを求めることなど許されはしなかった。

先ほどの全く警戒心のない、自転車屋のおばさんの対応といい、清々しい空気と脚のペダルが軽く感じられ、武志は修羅場からの解放感に浸った。

梓は喜んでくれるだろうか、鼓動が熱く弾んだ。地図の示す通りにしばらく行くと、赤いポストが見えた。普通の民家のように見えたが、木材に久遠島郵便局と手書きの看板が、家の表札の横に並んでいた。そこを通り過ぎて二軒目は白い漆喰の瓦屋根の家だった。門扉はないが、立派な琉球黒檀（クルチ）に覆われていて、「仲村屋」と木板に彫られた表札がクルチの下枝にぶらさがっていた。

自転車を降りて玄関へ向かうと、微かに幼い子の声が聞こえた。

「ごめんください」

奥のほうから床のきしむ音が近づいてきた。六十年配の小太りの女性が出て、怪訝な眼で武志を睨む。その眼は確かに梓に似ていて、神女（カミンチュ）の伝統を感じさせる厳かさを湛えていた。直ぐ後ろに小さな女の子が立っている。まだ歩き始めたばかりのようなかわいい子供だった。

「どちら様？」

「以前、お宅の梓さんに摩文仁（マブニ）でたいへんお世話になった

者で、名嘉山と申します。梓さんにお会いしたいのですが、ご在宅ですか？」

女の子が不思議そうな顔で武志を見ている。だれかに目元が似ている気がした。

「梓は畑に行っているんですが、呼んできませんようか？」
母親の京子が下駄を履こうとした。

「いえ私の方で出向きますので、その場所を教えてくださいいただけますか？」

「はいはい、直ぐそこですよ」

畑はさつき通って来た道を戻った途中にあった。小さく分けられた、どの畑にも季節の野菜が丁寧に栽培されていた。丁度、麦わら帽子を被った梓が、屈みこんで葉野菜を収穫していた。すぐそばからゴーヤの畝も広がっている。

「梓さん！」

以前より少し痩せていたが、彼女だと直ぐに分かった。以前より、顔の輪郭も何かクリアになり、鈍い感じがしなくなっていた。何か別の力が備わっているように見えた。

「武志さん……どうしてここに？」

梓は大きく目をクリクリさせてちよつと固まった。喋り方も声も、以前と違っている。

「お久しぶりです、さつきフェリーで着いたばかりなんです。元氣そうでよかった！」

陽に焼けて健康そうな梓の顔を見て武志は安心した。

「あそこはたいへん」

「あそこに若者向けの新興住宅街を造るんですよ」

「どうしてそんな所を選んだの？」

「池野の発案です。成功すれば、大きな収穫になる」

「池野さん、無理をしたわね」

「梓さんにまた頼れると思ったんですよ。今ちよつと裏目に出ている。ここで踏ん張らないと、あいつも困ったことになる。むろん、ウチもね。それでお願いに来たんです」

「池野さんにいろいろ起こっているのね」

「抜き差しならない状態です。——あいつ、今度結婚するんですよ。県会議員の娘とね。うちの『シーサイド・ヒル』で式を挙げるんです。梓さんも招待しますから、来てくださいよ」

いきなりの言葉に、梓は驚いた顔で武志を凝視した。灰色の瞳が深いものを覗き込んでいる。その奥に鋭いものが過った。

「結婚？」

梓はもう一度ゆっくり、今度はむしろ自分に言い聞かせるように、呟いた。

「結婚……」

梓は武志から顔を背け、肩に掛けていた花柄のタオルで額の汗を拭いた。ずっと俯いたままだ。しばらく呆然と、自分を失ったような表情のまま、黙り込んでいた。陽が眩

木陰で涼を取りながら、今の会社の状況や「シーサイド・ヒル」の盛況ぶりを梓に伝えた。彼女も、それらをととても喜んでくれた。

「池野さんはお元氣にしていますか？」

「ええ、ずいぶんと偉くなりましたよ。会社のことを、私以上に頑張ってくれてね。那覇の新興住宅街の開発も成功して、いまはもう開発部長ですよ。頼りになります」

「それはよかった」

梓は懐かしそうに笑った。発する言葉も明確で声に勁さがある。

「ほんとうはいっしょに来る予定だったんですが、猩紅熱なんていう変な病気に罹ってしまったって、大事をとって那覇に留まっています。あいつも会いたかったでしょうね」

梓は病の名を聞いて、怪訝な顔をした。

「実は、今度また来たのは、お願いがあつてのことなんです」

「何？」

「また除霊してもらえないかと思って」

梓はそのことをわかつていたのか、それともまったく知らなかったのか、両方にとれるような面持ちで、汗の浮く小鼻を膨らませた。

「今度はどこ？」

「シーサイトの近くです」

しくゴーヤ畑を照りつけている。

突然子供の声が聞こえた。振り向くと、先ほどの子供が「ママ」とよちよち歩きで近づいてきていた。梓はそちらに手を広げて、その子を迎えた。

威厳と気品を感じる白髪のお婆が後ろに付いている。梓の祖母だった。やはり神女で、子供の頃、梓はその祖母からいろいろ祈禱を習ったという。

子供は梓の腰にもとわりつき、頭を摺り寄せる。それを見て武志は直感した。

「梓さんの子供？」

梓は少し間を置いてコクリと頷いた。そして両手を広げて縄ってきたその子を抱きかかえた。

まさかとは思ったが、目元が似ている。彼女が以前話してくれたことを考えると結婚しているはずはない。娘の歳は二歳くらいに見えた。鼻の輪郭がだれかに似ている気がした。

「結婚したの？」

「前にも話したでしょ。ウチは結婚できない」

「……そうだね。父親は、本島の人？」

梓は黙っていた。

「ユキちゃん。お客様にあいさつね。何て言うの」

「コン、ニチ、ワ」途切れ気味に言って、そのまま恥ずかしいのか、梓の胸に顔を埋めた。その横顔の鼻の雰囲気に、

武志は身近な人間を連想した。
「ユキちゃんか。かわいいね……その子の父親って、興味あるなあ。私知ってる人？」
梓はやはり返事をしなかった。

その子に付き添って送ってきた梓の祖母は、軽く頭を下げて、その場から離れていった。後姿に、不思議な威厳がある。それがこの場に、ある厳かさを伴って、沈黙のうちに圧力をかけてくる気がした。梓の母親は外国人との間に梓を身ごもって後継者を産んだ。今立ち去っていった祖母も、父親のいない子として梓の母親を産んだ。それが違和感と同時に、奇妙な螺旋を想像させた。

武志は今、何か重大なことに立ち入っているように思えてきた。武志は言わない方がいいと思いつつ、重苦しさを破るように言った。

「ひょっとして、その子の父親は、池野？」

まさかそんなことはないだろう、と思いつつ言い放った言葉に、梓は反応した。深く頷き、頬をその子の頭に擦り付けて言った。

「……そう。洋ちゃん……」

「池野？ まさか」自分でも素っ頓狂な声を出していた。

武志の思考は完全に止まり、言葉が途切れた。パニックに襲われ、内部の組み立てが崩れてバラバラになっていく。梓の顔と声が霞んでいく。壊れた思考の断片が勝手に表へ

えなくて座敷牢に入れられる時が来るかもしれない。そんな姿を洋ちゃんだけには見せたくないの。嫌われたくない……」

梓はすすり泣いた。陰悪な空気に、子供が泣き出した。

武志はかまわずに言った。

「座敷牢だなんて……今の時代にそんなことが許されるはずがない。君は嘘を言っている！ 池野を愛しているのにならずと、ずっと池野の側にいたいじゃないか、父親がいなくて幸せだなんてありえない。おかしいよ！ 愛情に嘘をついている」

「それがウチらの使命なの。もし、ウチの全ての役目が終わって解放される時は、ウチの娘に継承される時でもあるの。永遠に続くんです。ウチの家系の身は、迷える魂への捧げものなんです。神に仕える運命なんです。この島は少し不憫なところはあるけど、愛々^{あやう}と本当の豊かさに満ち溢れています。好きな人と結ばれなくても別にいいんです。自分の運命を受け入れた時から、気持ちもきちんと整理ができたし、ウチは幸せです。だから洋ちゃんには決して、話さないでください」

「こんなことが、黙っていられるもんか。許せないよ。自分ばかりいい汁を吸って。ここまで人を踏みにじっておいて。君が許しても、私は許さないよ」

「ダメ。決して言わないで。約束して、お願い」

出ていく気がした。

「い、池野は結婚するんだよ」

「洋ちゃんは何も知らないの。この子のことは。何も知らせていない。ウチたち母娘^{おやこ}がこの島から出ることはないと思っていたし、父親はあつてはならないんだし。だから洋ちゃんには何も知らせていない。内緒にしていってください」

「で……でも君は、ほんとうにそんなでいいのかい？」

そんなんであいつを許せるのかい？ あいつだけいい思いをして、いい道をどんどん昇っていくんだよ。君だけが冷や飯を食うんじゃないか。あいつは男じゃない。男として責任を取っていない。そんなことがあつていいはずがない……こっただけ踏みにじって、許されるわけがない。腹が立たないのかい？ 池野を憎まないのかい？ 君だって、その子を育てるだけでもたいへんだろう？ これからどんなたいへんになる。せめて白黒つけて、慰謝料だけでもいっぱい取るべきだ。取らないと君の立つ瀬がないじゃないか……」

「心配してくれてありがとう。でもウチは洋ちゃんの幸せを心から願って、この島に戻ったんです。ウチは本当の神人^{カミナリ}になるために、色々な試練を受けることになると思う。代々の母親達と同じように精神が不安定になったり、自分さえも見失って人間とはほど遠い形相になったり、手に負

梓は懇願するように、灰色の瞳を武志に鋭く向けてきた。
「もし言ったら、もし池野さんが知ったら、今の池野さんの状況を壊すだけじゃないの。父親が存在することになる。それが御神^{みかみ}を怒らせることになるの。私が危うくなる。だから、言わないで。決して。約束して。お願い」

武志は押し黙った。怒りや義憤がまだ腹に煮えたくていて。まったく意外なことへの驚きがまだ治まらず、どう対処すればいいのかわからない混乱が頭の中を駆け巡っている。黙って自分を沈静化するだけでせいっぱいだった。

梓は泣き出したその子を宥めるように、胸に抱きかかえたまま、ゴーヤ畑に入って、しばらくあやしていた。泣き止んだ子供を梓は下ろして、何か言っていた。子供はすぐ目の前で飛んだバツタに目を奪われて、それを追いかけて始めた。子供が一人で遊ぶのを確認しながら、梓は戻ってきた。武志をまた別な瞳の光で見つめてきた。周囲の緑を反映してか、かすかに緑の光が感じられた。

「武志さん。また困っているんでしょ？」

武志はかろうじて答えた。

「……そう」

「行ってもいいわ。そこへ」

「スーサイトへ？」

「そう……。そこへ」

「ありがとう……それはすごくありがたいけど……。でも、

君が池野とそんなことになっていたとは。その事実があったとすると、それは結果的に君にとって、ほかの女と結婚する池野を助けることになるんじゃないか。君は、池野が結婚すると聞いて、池野を憎んでいるんじゃないのか。恨んでいるはずだろう？ そんな池野を助けたって意味がないんじゃないか。君にとつて逆のことをして、なんの意味があるの？」

梓は下を向き、ひたすら自分に問いかけているようだった。深く内部に沈潜する灰色の瞳があった。武志は追い打ちをかけるように言った。

「もし、ここに池野が私といっしょに来ていたとしたら、君はその子のことを池野に話したのかい？」

「話さない。絶対に。そんなことはしないわ」

「それは結局、除霊もしないということになるんだよね」梓は、姿勢を正すようにして、そして自分に言い聞かせるようにして、はっきり言った。

「やるとしたら、池野さんのためじゃないの。決して池野さんのピンチを救うためじゃない。そんなことは御神が許さない。そのためになんかやらない。あそこに残っている靈魂を救うためよ。迷っている怨念を助けて、行くべきところに行ってもらうためよ。その魂のため。池野さんのためじゃない」

ユキがうれしそうな顔をして、小さなゴーヤを取ってき

を振る動作を示させながら、言ってきた。

「武志さん」

「何？」

「もし私に何かあったら、この子をお願いしますね」

帰りのフェリーに武志は夢遊病者のような意識のまま乗り込んでいた。座席のチケットを取っていたが、とても座る気にはなれず、潮風を顔に浴びてずっとデッキに佇んでいた。

あの子が池野の子供だったとは……。一方ですべてがぶち壊しになる衝撃を覚え、もし梓が手を引いたら、何かとんでもないことになりそうな不安が大きくなってくる。その向こうに、何か今回は前よりもっと怖いものが待ち構えているような気がする。また元へ戻って、池野の勝手な行動に、男として許せない憤りも湧いてくる。まず第一に、池野に何と言うのか。おまえの子供が梓さんのところにいるんだぞ、と言うのか。梓に止められているので、それは黙っているとして、婚約を破棄して梓さんのところへ戻れと言うのか。事実を知った衝撃を軸に、混乱と不安と危惧とが激しく渦巻き続けた。

て、梓に差し出した。梓は頭を撫でながら、それを受け取って褒めてあげた。子供はうれしそうにまた畑へ行つてゴーヤを探し始めた。

「除霊は、魂鎮めなのよ。相手の魂を説得し、成仏させる。迷い、怒り怨んでいるそれを戻すべきところに戻して、鎮めてあげる。それが神女の役割なの」

「でも、それだったら、池野と私が困っているこの今でなくともいいんじゃない？」

「表に出てくるときは、向こうもエネルギーが高まっているときなの。だから対話しやすいのよ。その分鎮めることも可能性が大きくなるの。でも逆にそれだけ危険にもなるけど。ウチもどこまでできるかわからない」

「ほんとうにいいの？ やってくれるの？」

「いいわ。でもちょっと待ってほしい。時間がほしいの。対話はすぐエネルギーがいるのよ。負かされてしまうこともよくあるの。その場合は死ぬのよ。そのエネルギーを貯めこまなければ、大事な時に力を発揮できないの。スーサイトは、きつと報われない魂の力がすごいわ。ウチには太刀打ちできないかもしれない。私の母でも。だからそのために、最大限のエネルギーを貯めておかねばならない。時間がかかるの」

「わかった。すまない……」

最後に梓は再びその子を胸に抱き、手を取って武志に手

戻っても、池野にはまだ何も話すことができずにいた。電話では「梓がOKしてくれた」ことだけ簡単に伝えたものの、直接会って、詳しく話すには至っていない。池野もまだ病院に行く必要があったり、病で休んでいた分、外を駆け回る仕事にも追われていたし、自分も仕事が多まっていた。池野を避ける気持ちもあった。本来、池野には梓の状況をきちんと伝えるべきだったが、どこまで話すべきか、武志自身の気持ちを含めて整理するのに少し時間が必要だった。

丸一エステートという組織を考えると、池野は会社存続が危うい頃から、グチ一つこぼさずに昼夜問わず尽力してくれた。武志にとつて弟のような存在でもある。そして武志を梓に引き合わせてくれたのも池野だった。妻と早くに離婚して後継者のいない武志は、会社に尽力してくれた池野に、後々は代表の座をとも考えてもいた。しかし今、池野を責める気持ちも強くなる。

池野は梓が久遠島へ去って以来、もう三年近く、武志の前で梓のことを口にしたことはない。まったく無関心の域にあるようだった。それがまた言い出すことをためらわしていた。会って、どこまで話せばいいのか、踏ん切りがつかない。

しかしいつまでもこのままにいるわけにはいかない。武

志は意を決して、金曜の夕方声をかけた。

「池野、もう猩紅熱とは完全におさらばできたんだろ？
久しぶりに新世界通りに飲みに行かないか？」

「あの廃れた飲み屋街ですか？ 今の社長には不似合いですよ。あんな、ガラクタの場所はいかなものかと思いませんけど」

シーサイド・ヒルの成功以来、経済界や、政治家との会食も少なくない。会社の経営を交際相手まで優先的に考える池野の指摘は確かに適切だった。

しかし久遠島の報告と同時に、池野の梓に対する気持ちはどうしても確かめたかった。その糸口はあの新世界通りにある気がした。

「池野よう、ウチの会社が大変な時に、よく二人で飲んだよな。わずか三年足らずでこんなにスムーズに事が運ばれるなんて奇跡的だと思わないか？ 遅れがちな給料であっても、不眠不休でよくやってくれたし、池野のお陰でもあるさ。あの店にも本当に世話になったよな。だから急に懐かしくなってるね」

武志は池野の言葉を待った。彼に少しでも梓に想いがあるのなら梓の名を口にするだろうと思った。

池野はパソコンの画面を目で追ひ、カーソルを操作しながら答えていたが、突然振り向いた。

「社長がどうしてもとおっしゃるなら、お供しますよ！」

「ああ、そうしてくれ」

梓の名前は出てこなかった。武志は無性に腹が立った。もやもやとしたものが腹の中で膨らんできたが、なんとか押さえつけていた。

三年近くを隔てて訪れた新世界通りは、以前に比べれば少しばかりの人数があつた。流行りのセンペロ立ち飲み屋が進出しているせいだった。若者がその場所だけ、綿菓子のように不自然に塊りになっていた。

彼等のたぎったざわめきは時々奇声化しては、夜空を切り裂き、やがて無感情な軽々しい笑い声に変わった。

先人の築き上げた、理不尽な社会に埋もれているストレスのような彼らのブルースは、行き場を失い不安定に揺れる。それをたつぷりと湿った闇が無情にも吸い取っていく。街全体に重く淀んだあの頃と変わらない湿気が、今はなきローズと梓の顔を思い出させた。

揺れる赤提灯が手招きをし、嗅ぎなれた甘醬油の焦げた臭いが気持ちを落ち着かせるような気がして、うらぶれた焼鳥屋に入った。

割烹着に身を包んだ頬のこけた大將が、黙々と串を焼いている姿がこの通りの雰囲気にとつたりとハマっている。二重顎の肉付きの良い女將さんは、大將とは正反対で、よく動く唇、派手な化粧を施し愛想もよかった。背中越しか

しょうね。これでなんとかなりそうじゃないですか」

「『少し時間がほしい。エネルギーをためるのに時間がかる』ということだった」

話しているうちに、武志はだんだん腹が立ってきた。遠回しに探りを入れて、脅かしてみたくなった。

「もしかして、池野——君と梓さん、以前は付き合っていたとか？」

「それはいいですよ」

「できていたとか」

かみ砕いた鶏肉が、思わず池野の口から飛び出した。

「そんなこと、あるわけじゃないじゃないですか。フィアンセとは梓さんとの前から付き合ってるんですよ」

「男は二股かけるなんていくらでもあるよな」

「ありえないですって！」

「そうか？」

「まあ、何度か彼女の部屋には泊まりましたよ。飲み過ぎでベロベロになって、目覚めたら彼女の部屋だったとかね。でも付き合っていないません。彼女も特に言い寄って来なかったし、ただのホステスと客との関係ですよ」

池野は眉毛をハの字にして笑い飛ばした。

「でも、君は少しは好きだったんだろ？」

「社長、今日はなんだか変ですよ！ 昔のことですよ、それに自分が彼女を好きになるはずがないでしょう。あの頃

「それで、元気でした？」
やや無関心な態度の池野は、おかみさんが運んで来た串盛りのネギマに手を伸ばしながら言った。
「まあね。彼女も君のことを気にしていたよ。元気だと言ったら、とても喜んでた」
「そうですか。また今度もきつとうまくやってくれるんで

は、除霊の力のある女という噂を聞いたから、あんなやる気のない安酒場で飲んでいただけですよ。好きで通っていたわけじゃありませんから」

武志は腹立ちが、少しずつ怒りに変わっていくのを覚えた。どこかで警鐘が鳴っている。梓の「言わないで」という声が頭の奥で響いていたが、怒りに酔いが加わって、さらに膨張していくのを覚えた。男の「このやろう、許せん」という怒りが、「言ってはいけない」と禁ずる声の防波堤を乗り越えようとする。

「梓さん、おれのフィアンセも守ってくれるだろうな……危なかったからなあ」

怒涛が防波堤を乗り越える勢いで、ついに言葉が出てしまった。

「梓さんには、子どもがいたんだ」

「へえ。結婚したんですか？」

「いや、結婚していない」

「へえ、そうですか。じゃあ、『未婚の母』ってことですね」

「そう。父親は君だと話していた」

「ふぶあ!!」

思わず酒を誤嚥し、池野が咽た。

驚愕した目で、池野は武志を見ていた。武志は自分が残酷になっていることを自覚した。池野の狼狽えた表情の背

池野は、いきなりとんでもなく高い障害の前に立たされて身動きできず固まった鬼のように、鼻腔を膨らませ黙っていた。そしてしばらくして眩きを漏らした。

「……やっ、返事をもらえなばかりなのに」

池野は、両肘をついたまま手で顔を覆った。

「もし、オレの子だって証明されれば、破綻になるってことですね……梓さんが除霊に出てくるってことは、子供といっしょに出てくるってことだ。オレの子として」

「いいや、娘は、一人で育てるつもりでいると梓さんは話していた」

「除霊はとても頼めませんね。全部、パアか……」

池野は激しくかぶりを振って、急に席を立った。

「……ありがとうございます」

女将さんが気まずそうに池野の背中に礼を言い、ちらりと武志の方を見た。ひとり残された武志も居心地が悪くなり、勘定を済ませて赤提灯を後にした。

良心の呵責に苛まれる以上に、梓との言葉を裏切ってしまった後悔が、重くのしかかってきた。あれほど言われていたのに、池野に告げてしまった。大きな罪を犯した気がした。取り返しのない……。

武志は上着のポケットに手をつ突っ込んで背を丸めて新世界通りを抜けた。

後のどこにも、池野が梓を愛していたことを見つけられなかった。池野の中には今も愛情の対象としての梓は存在していない。武志は確信した。

「とても可愛い、目の大きな女の子だったよ……」

首を左右に振った池野は、急に塞ぎ込んだが、グラスは手から離さないで握ったままだ。

「君には絶対に黙っていてくれと、梓さんに頼まれた。迷惑はかけたくないね」

池野は手にある残りのクースをゴクリと喉を鳴らし飲み干した。

「ふん、オレの子だって？ 笑わせる。証拠とか、あるんですかね。そんなに簡単に、勝手に産んで、数年後に突然、あなたの子なんですよ、とか、そんなのがまかり通るんですか？ それって、どう考えても変でしょう。今頃、突然にそんなことを言ってくるなんて。オレの結婚を潰そうって魂胆ですか。まさか結婚式に子供を抱いて出てくるってんじゃないでしょうね？ たっぷり慰謝料よこせてね。それで済めばいい。相手の家へ乗り込んで、『池野の子供です』なんて言うんじゃないですか」

「梓さんは、君が考えているような女じゃないよ。君に迷惑をかけたくないから島に戻ったと言った。それに彼女は、結婚そのものができない立場だと言っし。もし、父親が君だと証明されれば君は受け入れられるかい？」

8

月曜の朝、池野は会社に出動していなかった。携帯電話にも出ない。欠勤届もない。メールも繋がらない。

シヨックで浴びるほど酒を飲んでいのではないかと考えた。やっとき着けた結婚に突然解消される不安を抱えてしまったこともあるだろうし、それ以上に新プロジェクトが瓦解する不安も、輪をかけてしまったかもしれない。自分があのことを告げなければ、こんなことにはならなかった。酒に酔っていたとは言え、大きな過ちを犯したことを後悔し、それが津波のように大きく高まって、自分と会社を押し寄せてくるのを感じた。もう二日、行方不明になっている。

その日の夕方、フィアンセから、池野の行方がわからないとの電話が武志の携帯にかかってきた。

池野のアパートを訪ねても中からの返事はない。どこにいるのか——武志の不安は募っていった。

水曜の朝、会社が目つきの悪い鬼瓦顔のずんぐりとした中年男性と若くて背の高いイケメンが会社を訪ねて来た。警察手帳を出す。豊見署捜査一課警部補狩俣剛太郎、刑事の泉川五郎ですと名乗った。

「池野洋介さんは、御社の社員ですね？」

「開発部長ですが……」

武志は悪い予感的中したと思った。額から汗の粒がじわじわと嵩を増していく。鼓動が高まるのが、自分でもわかった。

「お宅で、スーサイト近くの新興住宅街の建設をやってますよね」

「はい。ウチのプロジェクトです」

「お宅の出張事務所もそこにある。新築住宅の一つの中で、池野さんは意識不明のまま発見されました。池野さんは、何日までご出勤なさっておられましたか？」

若い刑事はメモを取り出し、早い口調で詰問しだした。

「池野は死んだんですか？」衝撃が雷のように飛来して、大声が出た。

「いや。かろうじて助かりました。しかし重体です。さきほど那覇病院に運ばれました」

「フーッ。助かった！ よかった——」どっと腹からの溜息が出た。

「もう少し発見が遅れていたら、危なかった。それで、なぜあそこにしたか、ということなんですが」

「プロジェクトがいろいろピンチなんで、気になってそこへ行ったんじゃないかと……」

「あんなところで、自殺しますかね」

「自殺？ まさか！ ありえない。池野は、結婚を間近に控えているんですよ」

ショックと緊張で武志はよく聞き取れず困惑した。

「先週金曜の夜です……勤務を終えて一緒に飲んでいました」

「池野さんに、何か変わった様子？ 例えば、何かに悩んでいたとか」

「いいえ、特には」

「スピリタスなんて、まあ普通は飲みませんよ。依存症の人でも、さすがにアレには手を出しませんわ。喉が焼けちゃいますからねえ。何か混ぜて飲まない。まあ、ソーダとジュースはありましたけどね」

鬼瓦刑事は眉間を人差し指でポリポリ掻き、社長室の中をそぞろに歩きながら続けた。

「池野さんは、スピリタスを嗜好してはいなかった。……社長さんも三日前、特に何かを認識されてはいない。となると……ちょっと、わからないね」

叩き上げの鋭い目が、何気に室内を注視している。

「あの晩、池野は普段通りに明るくて……私と話してました……」

「分かりました。ちょっと、気になるところがありましたので、伺いました。今日のところは、これで失礼しますが、またご連絡致しますので、その際にはどうか協力願います」

二人の刑事はお互いに目配せし、社長室を出て行った。

「ええ、わかります。もともと婚約者の女性からの搜索依頼があったんで」

「そんな……」

「池野さんと連絡が取れないと言うことで、署に搜索依頼が来た。それで、手配して探したところ、今朝方、そこで見つけることができた。池野さんの車もそこにあった。一命は取り留めましたが、意識はまだ戻っておりません。断定はできませんが、現場の状況では事件とは考えにくい。強い酒の空瓶が三本、池野さんの傍に転がっていましたから」

「池野は酒は弱いんですよ。強い酒って何ですか」

「スピリタスです」

「そんな酒を……」

たしか「スピリタス」はポーランド産のウォッカで、96度の最高に強い酒と記憶している。そんな酒をなぜ池野が飲んだのか、しかも一本ではなく……。

「無理やり飲まされたのなら、他殺未遂の線もあります。しかし、自殺の可能性が強い」

「自殺って……まさかそこまで」

池野の性格からしてそんなことは考えられなかった。「意識が戻れば、はっきりすることではありますが、今のところ危篤状態ですね。それで、池野さんと最後に会われたのは？」

例えようのない罪悪感と後悔が武志の心を食う。全身から力が抜け落ちて、池野とともに、深い泥沼に落ちていく気がした。

池野を死に追いやったのは自分に違いなのだ。武志は今さらながら罪悪感に打ちのめされた。池野は危篤状態になっている。万一池野がこのまま意識が戻らなかつたりしたら……死んでしまったら……。暗雲が包み込んでくるのを覚えた。

池野が運び込まれた病院へ行った。集中治療室に入ったままで、面会はできなかった。待合室に不安げな顔で、池野の婚約者らしき女性が座っていた。初めて見る顔だったが、手短に見舞いを済ませながら、彼女の反応を窺ったが、特に武志に詰め寄る気配はなかった。ただフィアンセを心配する顔だけがあった。梓の子供のことも、一連のことも、何も聞かされてはいないようだった。

「池野さんから聞いていた携帯に、直接お電話してしまつてすみませんでした。——来年の春に結婚式を挙げる予定でしたのに、こんなことになってしまつて……会社では何か変わったことはありませんでしたか？」

「いいえ……特には」

武志は偽りの自分に嫌気が差した。

翌日、豊見署の狩俣警部補から電話があった。
「やはり自殺ですね。近くの酒屋で、車で来た池野さんが『いちばん強い酒をくれ』と言って、買っていたそうです。ジュースと炭酸も。夢遊病者のようで、朦朧としていたようですね。何かに取り憑かれていたみたいで、気味悪かった、と店主が言っていました。」
「……そうですか」

武志は続ける言葉もなく、受話器を置いた。

池野は、そのまま意識が戻らなかった。

クリスマスになって、世の中がジングルベルの音楽で浮かれる季節になっても、面会もできなかった。このまま、あの世へ行ってしまうのか、それとも植物人間になってしまふのか、世の中の明るい彩りとは逆に、世界が重く沈んでいく気がした。もしあのプロジェクトが失敗したら、どうするか。シーサイド・ヒルの方は変わらずに盛況なので、それでなんとか埋め合わせはできるが……那覇の振興住宅街の成功はこのマイナスで吹き飛ばかもしれない。武志は腹をくくった。もし池野が助かるのなら、すっぱりと新プロジェクトは諦めよう。池野の命の方が大事だ。それにしても、今回の事故が、いったいどうやって起こったのか、不可解さがいつまでも残っていた。
クリスマスの賑やかさが恨めしく感じた。

年明け、正月休みを利用して武志は再び梓を訪ねた。池野のことを謝罪しなければならない。
久遠島は、旧正月行事が最も盛んで、元旦は平常よりもっと静かだという。その静かな島の集落を武志は重い気持ちで歩いた。

前に会って話した梓の畑を覗きながら行っただが、彼女がいなかったのを確認して、仲村屋に向かった。

梓は中庭で洗濯物を干していた。

「新年明けましておめでとうございます」

梓は武志に気付くと、驚き、固まった。

「……いつも急なんです」

「今日はどうしても話したいことがあって来たんです。少し時間をいただけますか？」

止めていた手を彼女は再び動かし始めたが、武志の気配を感じて緊張の面持ちを返してきた。

「どうぞ中へ上がってください」

蘭草の香りがする琉球畳間では、子ども向けのビデオが点いていて梓の娘がそれを見入っていたが、武志の存在に気付いて不安そうに梓の陰に付いて歩いた。幸い母親の京子は留守のようだった。京子が戻る前に池野のことを話し

ておきたかった。梓が取り乱すかも知れない。

「おじょうちゃん。ユキちゃんだったね。お正月だからお年玉をあげるね」

武志は用意していたポチ袋をポケットから取り出した。

「すみません、気を遣っていただいて。ほら、おじさんにありがとって言って！」

お茶を運んで来た梓は、ユキを武志の前に座らせようとしたが、ユキはどうしても嫌がった。人見知りなのは梓似かもしれない。池野は人懐っこかった。

「急な話なのですが、伝えなければならぬことがあって今日は伺いました。良い話ではありません。池野のことで。実は今、酒の多量摂取ということで危篤状態です。意識が戻っていませんので、詳しい原因は分かっています」

梓の顔から血の気が引いた。

「そんな！ 洋ちゃんが……どうして、どうして洋ちゃんが」

「会社にも出勤しないので、心配していたら、豊見署の署員が来て、スーサイトの近くのウチのプロジェクトの住宅の中で意識不明になっていたと……」

突然彼女の背筋が伸び、何かが乗り移ったような激しい顔になって武志を睨みつけてきた。

「洋ちゃんに話したんでしょう！ この子のことを。あれ

ほどお願いしていたのに。洋ちゃんには、この子のことをこれっぽっちも話す必要はなかった。洋ちゃんはね、人一倍ストレスに弱いのだ」

「……自分のせいです」

「ええ、全てあなたのせいよ……あの頃は営業成績も思うように伸びないし、給料も遅れがちだったしで、落ち込んでいたわ。でもウチの事情を聞くたびに、あなたはオレよりも、もっとかわいそうな人だね。でも、オレたち、これからきつと良いことがあるさって、二人でよく励まし合った。あんなに優しく繊細な人だから、余計な心配もかけたくはなかったし、ウチは洋ちゃんの幸せを願って、ここに戻ったというのに……」

「君は一人でこんなにも苦労しているのに、応えてくれない人のことをどうしてそこまで思いやれるんだ？ ほんとうに愛しているのか？ 君のことだから、叶わない気持ちもわかっていただろうし、池野がどうせこうなることも知っていて、離れたのかい？ 君には未来を視る能力が十分にあるじゃないか！」

「もうやめてください！ 娘の前です」

梓が突然声を荒げたのでユキが驚いて泣き出した。

「未来なんて誰にも分るはずがないさあ……ウチでも知ることは許されない」

梓は声を押し殺し、震える腕でユキを抱き寄せた。

「すまなかった……でも僕も池野を弟のように思っている。僕も池野を助けない。なんとか力を貸してくれないか。ほんとうに、約束を破って、申し訳なかった。あれほど禁じられていたことを、酒の勢いとは言え、破ってしまった。すべて自分の責任だ。申し訳ない。……何でもする。自分にできることは何でもする。頼む。助けてくれ」

「ウチも助けない。でも、できない……怒らせてしまった」

「どうすればいい？ 僕も罰を受けよう」

「そんなことをしても何にもならない。ウチにみんな来る。ウチが武志さんに話したのが、そもそもいけなかったから……でも……」

「もう絶対助かる道はないのかい？」

「池野さんの状態を、もう少し知りたい」

「状態って、何を？」

「池野さんが、飲めないはずのあんな強いお酒をなぜ飲んだのか……」

「署の人は自殺だと」

「あの人は自殺なんかする人じゃない」

「じゃあ、なぜ？」

「取り憑いたの。何かが」

「それが飲めない酒を飲ませたのか」

「そう。そうとしか考えられない」

「そんなことができるのかい？ 酒を飲ませるなんて——」

「憎しみと怨念が強ければ、取り憑いて朦朧とした状態にすることはできるの。夢遊病者のようにして、崖から突き落とすこともできるわ」

武志は得体のしれないものの存在を想像して、ゾツとした。摩文仁のときに襲われた恐ろしい闇が蘇ってくるのを覚えた。

「池野はどうなるの？」

「たぶん危ないと思う。よくても、植物人間になるかも」

「そんな……」

「武志さん。スーサイトのどこにいたのか、教えて。母にも聞いてみるわ。母の助けもいるかもしれない」

武志はスマホを出し、地図を引いて、そこを拡大した。

「やはり……一番危険な所だわ。どうしてわざわざあんな所へ……」

「あそこを売るのが仕事なんだから、思わしくないときはどうしたって足を運びたくなるんだ」

「悩んだり、悲嘆したりして、魂が抜けているようなときがいちばん危ないの。でもきつと、ほかに何かあったんだわ」

「何か？」

「今は何かわからない。助けないけど、今ここからじゃ、遠すぎる。直接そこへ行くか、病院へ行くか、それとも

……」

「病院は集中治療室にいるから、入れない」

「この二、三日が、分かれ目の気がする」

「直接、現場に行くのなら、僕も行こう。案内する」

「だめ。ウチは明日から三日、御獄で儀式があるの。重要な儀式なので、抜けられない」

「じゃあ、どうにもならない。……池野は結局……だめなのか」

「ここからでも、できることが一つだけあるけど……酷いことだわ。でも、スーサイトの霊たちはもっと酷いことをされた……」

突然梓は、半狂乱のようになって叫び、髪を逆立てた。獣のような唸り声を上げる。

「そうするしかない。そうするしか……ウチは絶対に洋ちゃんを死なせたりはしない!!」

獐猛な顔だった。武志は、その凄まじい姿に圧倒されて、後ずさった。

10

二日後、池野のフィアンセから武志に電話がかかってきた。池野の状態が好転したという。病院から知らせってきたと、安堵している声が伝わってきた。

梓の母親の京子から武志の携帯に電話がかかってきたのはその三日後だった。

楓榔の森へ梓が入森したままである。もう四日目だが、一言伝えておきたいことがある、と電話口の京子は言った。その森の奥には、この島の最も神聖な御獄があり、十二年に一度の特別の神事の際にしか人間の立入が許されない。もし梓に何かあった場合、梓は、あなたにユキを任せると言ったそうだが、それはほんとうか、直接会って話をしたいということだった。

武志は直ぐに久遠島の京子の元へ向かった。暫くぶりに会う、少しやつれた顔の梓の母親は、武志に向かつて嘆いた。

「御神にすべてを委ねるという信仰は、何事にも憂える必要がないということです。そして個人的な幸せを願うことも許されず、ただただ与えられた環境を甘受しなければなりません。」

私たち神女は与えられた使命を受け入れるまでとことん試されます。自分の思い通りになんかなるもんですか！やることなすことが、すべて裏目に出るのですから。私と同じようにあの娘も相当苦しかったのだと思います。私たち一等神女は、自我を捨てることから、本当の人生の扉が開くのですよ。

梓が島から逃げ出した時から、あの娘は普通じゃなかったんです。梓は、自分が特別な家柄に生まれたと言う事に納得しませんでした。『自分の人生は自分で切り開く。だから一切かまわないで欲しい』そう言ったんです。島を出たあと、あの娘はずいぶんと人が変わってしまったて手に負えませんでした。でも、摩文仁で除霊をしてから、自分の役割がわかったようで、それから戻ってきて、修行に打ち込みました。子供も産んで……。その子がかわいかったんでしょね。父親のことは伏せて。その子の父親は好きだったようで、一人で泣いていました。私にはその父親の名前は決して言いませんでした。それが掟であることはわかっていましたから。私も不憫でしたが、黙っていました。今、その人が死にかけている、ということ、梓は狂ってしまったて、掟を破りました」

「どういう掟ですか？」

「ウチら神女はね、御神に尋ね伺い、人々への導きの伝達が使命なのです。しかし、自身の未来は視ることは出来ません。御神に全てを委ねるといふ信仰は、何事にも憂える必要がないと言うことです。だから、産んだ子供の父親を明かしてはならないのです。人間の細胞は借りますが、梓の子宮に宿るのは御神の子供です。親権を主張されないために父親に知られてはならないのです」

「別に、池野も子を引き取る気はなかったと思います」

益に使うとしてはいけないのです。梓はその禁を犯してまで、彼を救おうとした。第三は、救うために、特別な方法を用いた。禁じられている手を使ったのです」

「それは何ですか」

「私には言えません……」

「彼は助かったようですが」

「それは梓がそうしたからです。梓が全霊を込めて、禁を犯してまでそれに傾注した。その力が彼を救ったんです……でも、まだ彼は完全に救われたわけではありません」

「正直言つて、私にはすべてが理解しがたい。梓さんは、確か大事な儀式があるとか言っていました」

「そうです。梓はユキもそこへ連れて行きました。ユキは将来神女の後継者になるので、そこへ行くこと自体は問題ありません。それが執り行なわれている夜に、梓はこっそり抜け出して、自分で秘密のことをやっただけです。それも御神の怒りを買いました」

「秘密のこと？ 何です、それは」

「口外できません、そのことは」

「梓さんは今、どこにいるんですか」

「電話でもお伝えしたように、枇杷の森に入っています。御神の試練を受けています。怒りに堪えています。堪えきれないかもしれません」

「どうということなんですか」

「例えそうであっても、梓の信仰心が試されたのですよ。あなたにいい口を滑らせてしまったことが問題なのです。それから……」

京子は急に気詰まりして声のトーンが落ちた。

「それから？」

「人知れず子種が付いたら、必ず島に戻らねばなりません。御神の花嫁として契りを結ぶのです。子の父親とは縁を持たなくても、御神は、彼らを祝福し守ってくださいます。しかし、想いを持ってしまつと、御神の逆鱗に触れてガードを外してしまわれる。昔から神女に情欲や怒りを抱くと禍が起こり、悪霊が憑きやすくなると言われています。それも、神女のお腹に子種を蒔いたせいなのです。だから、池野さんも悪霊が憑きやすくなっていたんです。基本的にウチらは他人を巻き込むわけにはいかないんですよ。ウチたちが夫を持たないのは、御神の使命を全うするためです。しかし、梓は、掟を破り、御神を試すと言う過ちまで犯してしまいました。森に入り、彷徨う試練を受けました」

その言葉の強さとは裏腹に京子は肩を落とした。

「梓は今回、三つの掟を破りました。第一は父親の存在を明らかにしてはいけないという掟です。それは名嘉山さん、あなたにも関係があることです。それがまず災いと呼んだ。御神の怒りを買ったんです。第二は梓が個人的に関係深い人間を救おうとしたことです。神女の力を個人の関係や利

「ただ森を彷徨い続けることが試練からです。あの子は命じられるままに、飲み水も食べ物も持たずに入森していきました。今日で四日目です」

「そんなことをしていたら、命に関わるじゃないですか」

「御神に試されるのです。死ぬこともあります」

「あなたはそれでも親ですか。梓さんが死んでもいいんですか。どうして連れ戻さないのですか」

「御神の懲罰に堪えることか、今のあの子の運命なのです」
武志はそのとき、不安になった。家の中に子供の姿がない。ユキちゃんがない。儀式から帰っていないのか。どこかへ預けたのか。ひどく気になって言葉を母親にぶつけていた。

「ユキちゃんはどこにいるんですか、ユキちゃん？」

「……ユキは梓といっしょです」

「何ですって!! ユキちゃんもいっしょなんですか。森に？」

「……そうです」

「何ということだ。あんな子供まで。二人で死ぬかもしれないじゃないですか」

一刻も早く梓を見つけ出さなければならぬ。武志は焦り、怒鳴った。

「私をそこへ連れて行ってください!!」

「それはできません」

「あなたの娘と孫が生死を彷徨っているんですよ。京子さん、私を連れて行ってください。そこへ！」

「いいえ、それはできません……」

「では、私が、必ず連れ戻します、森の入り口まで案内してください。私が全責任を持ちます！」

武志は京子に板の間の床へ額を付けて懇願した。京子は一等神女のカミンチュの威厳を正して、響くような声で言った。「ふつうは、部外者がその神聖な森に入ることはできません。しかし今回の事件は、底に大きなものが潜んでいます。それがあそこに出てきている。それをどうするか、ウチたちにとっても、とても大きな事件が立ち上がってきているんです。それは大きくて深い。根深い怒りと恨みが凄まじい力で渦巻いています。それはとても梓一人の力で立ち向かえるようなものではありません。ウチが加わってもダメかもしれません。私たちにとても命懸けの仕事になります。霊を鎮められるかどうか……。あとのその大きなことまで考えると、名嘉山さん、あなたにも力を貸してもらうことになるかもしれません。今回は一時的に彼のことを救えても、もっと大きな力が潜んでいて、それがあとから立ち上がってくるでしょう。そのためにはあなたの力が必要かもしれません。……いいでしょう。案内します」

枇杷の森の入り口で京子は跪き、掌を胸のあたりで擦

り合わせた。森の主らしき姿なき存在に疎明の言葉を復唱していた。

すべてを御神に委ねる因循な態度の京子を残して、武志は枇杷の葉が高く生い茂る森を進んだ。

揺らぐ植物、小動物の奇声、物の怪に監視されている気配に怯え、脚を止める気はしない。森の魂が息づき、熱を発している。横敷から太古の生き物が出て来ても不思議ではないほど、この森は遠い時代に刻が止まったようだった。枇杷の葉が空を遮り、冷や汗が余計に体温を奪っていく。梓の名を呼ぶ武志の声は、孤独に震えながら木々の間を抜けて消えていった。

生きていてくれ——そう念じながら必死で突き進んで行くと、梢に見え隠れする鳥の声に混じって、女の高笑いが微かにこだましてきた。武志は全聴力を集中させ、人間の気配のする方向へ慎重に歩み寄った。

青の世界が永遠に続くと思われていた森に、天がようやく開け、天界とそのまま繋がっているようなサークルが突如として現われた。水紋が円状に拡がって見える、草一つ生えていない平地の中央に女がいる。汚れた天女が恍惚と空を仰いでいた。

やがて、気怠く舞いながらケツケツケと笑い、歌を口遊む。白い衣裳の胸元と大腿部はハダけ、長い黒髪は羽根を筆り取られそうになった黒鳥の如く逆立っていた。ユキ

はその足元で風車を持って、放心したように戯れている。

「梓さん!!」

武志は駆け寄って梓に声をかけた。衰弱しきった灰色の瞳に武志が映って、梓は微笑んだ。けれどそれは一刹那で、彼女の認識力のない瞳は宙を遊び、そして、琉歌い笑った。

「野ぬ、蝶々やていん 花どう頼ている、 生ちよりの
我、真肝ぐとうに 手綱 定み引き難しや

朝焼ぬ、温さ 床ぬ 袖ぬ 下ぬ 香さ
肝に 染みていん 花や、咲ち出らん 哀り 思詰り
……ケツケツケツ……」

野の蝶々でさえ、花を頼りに生きていけるのに、私の真心は思うようにはなれない。
夢一夜のまだ温かな布団の中で、貴方の香りを胸に刻んでも、わたしの想いを届ける事は許されない

梓の瞳に武志が映ることはもうなかった。ユキはその足元でぼんやりと歌を聞いているように見える。風車を見つめているようにでもあった。ふと、何気なくこちらへ向いたその顔を見て、武志は愕然とした。左の眼が死んでいる。片目がこちらを見ている。武志はおどまじさに歯を食いしばった。梓は自分の子の片目と引き替えに、池野の命を

救ったのだ。そのためにユキをここに連れてきたのだ。武志は呻いた。

武志は自分も懲罰を受けてここで死んでもいいと覚悟して、梓とユキの手を強く引いて枇杷の森を出た。

武志は梓を入院させた。母親の京子は神女には、神ダリーは昔からよくあることだと言い、試練なんだから、それから立ち直ることが霊力を付けることだと、梓の入院に反対したが、梓とユキの尽きかけている体力を考慮して、武志は京子を説得した。

「神ダリーはね、神女や、ユタには昔からよくあることなんです。ある日、黄泉の国に入り、突然正気に戻ったりする。その繰り返しなのだから、医者も統合失調症としか判断しませんよ。梓も決して気が狂れているわけではないんです。お遍路巡りのように異界を旅しているようなものです。苦しい道のりですが、私たちが辛い目や憂き目を避けていると、窮地に立つ人々や霊を導けるはずもないですから。ユキもかわいそうなことをしたけど、片目で霊力を持つ神女も昔いたから。むしろこれが、こんなに幼いうちからこの世界に入るなら、大きな霊力を得ることに結びつくでしょう。それよりこのあと、もっと大きなことが待っています。そちらのほうが、ウチには心配です」

京子は、時が全て解決するのだとつねに気丈な姿勢を崩

さなかった。そしてその京子の言葉通り、数日後、梓は回復し退院した。池野の退院も同じ頃だった。

11

その後の梓がどうなったか、気になっていた武志に、二週間して梓の方から電話がかかってきた。

「もうよくなったの？」

——もう大丈夫。すっかりよくなったわ。

「ユキちゃんは？」

——ユキも元気になったわ。……ちよつと変わったけど……

武志は言葉が出なかった。

おぞましいものを思い出す余裕もなく、梓は続けて強く、「案内してほしいの」と言った。

池野がスピリタスを飲んだ場所へ行きたいと言う。

池野にもそこへ来てほしいということだったが、ちょうどその直前に、池野の回復はまだ真の回復ではないと言っていた京子の言葉どおり、池野はまた様態が悪化し始めたという連絡がフィアンセから入ったばかりだった。それを告げると、

——そう……。でも、本除霊では、きつと呼び出されることになると思う。

と言った。池野も立ち会うとなると、何か大事になりそうだと、武志は不安を覚えた。

三日後、武志は船着場で、梓を迎えた。

「心配したよ。思ったより元気そうで、安心した」

梓は、海からの風に髪を舞わせながらニッコリした。

「よくなったんだな。ほんとうに」

助手席に乗せ、シートベルトを付けてもらって、そのまま現場に向かった。

「終わっていないの、まだ」と梓は言った。

「お母さんが、もっと大変なことになると言ってた、それ？」

「そう、除霊。霊がみんな集まってくるんじゃないかな」

「みんな？」

「たくさん、大勢なのよ」

ユキの眼のことを言おうとしながら、梓にすでに漲っている何か覚悟のようなものを汚す気がして、言葉が出てこなかった。

「除霊はまだ終わっていない。本当の祓いは、これからよ。それを伝えに来たの。それと、その様子も、具体的にどうなっているのか、しっかり確かめたいと思って。準備がいるの。きつと母たちも来ることになるので……」

スーサイトに近づくにつれ、梓の顔に緊張感が漲った。

手に勾玉を握っている。ハンドルを握る武志の横で、その手が少し震えているように映った。

現場は海がきれいに見える所だった。ドアを閉めて、立ったとき、どこからか声が聞こえた気がした。池野が倒れていた新築住宅の鍵を開けると、闇が湧き出してくるような、不穏な空気が包んできた。スリッパを履いて、中へ入る。若者向けの斬新なデザインで造られた部屋が繋がっている。

「きれいな造りね」

「ああ。沖縄で一番の新進デザイナーに頼んだからね」

外は風が強くなっている。窓や壁に何かが当たってくる音がした。朽枝か、だれかが窓を叩いているような音が聞こえる。

「ここに、池野は倒れていたんだ」

武志は警察の写真を思い浮かべながら、指差した。

少し暗くなった気がした。梓は両手を耳に当てて、眼を閉じ、そこに跪いた。

「——ごめんなさい」と言った。すでにだれかと話しているようだった。摩文仁のときと同じように、濃い闇に引きずり込まれていく気がした。武志は危険を覚えて、ドアのノブを掴んで、いつでも外へ出られるように身構えた。梓は泣いている。「ごめんなさい」を繰り返している。空間の黒さが増し、張り詰めたものの中に、引きずり降ろ

される恐怖のしかかってきた。

「……そう……そうなの……」梓の頷きが繰り返される。

恐怖にすべてを奪われそうになったとき、闇の奥から武志にもわかる言葉が響いてきた。

彼を連れてきて……

武志は胸がかきむしられるように、苦しくなってくるのを覚えた。意識が消えていく……

気が付くと、梓の笑顔が目の前にあった。

「あのときと逆ね」と梓は言った。

——そうだ。あのときは梓が気を失って、武志が支えた。それが逆になっているということは、梓の霊力がそれだけ強くなっているということかもしれない。そして霊力など鈍感な自分が気を失ったということは、ここに渦巻いているものの力は、はるかに大きいということになるのかもしれない。

「武志さんに聞きたいことがあるの」

「何？」

「ここは宅地造成しているでしょう？」

「ああ。かなりね。大工事をしたんだ」

「このすぐ近くに、大きな洞穴があったでしょう？」

「ああ。ほとんど、この真下だよ」

「そんなところに建てたの？」

「まあね。金もなかった。やるなら全部で、一気に埋めた」
「その大洞穴で女の子たちがたくさん死んでいるのよ」
「たくさん？」

「二八六人」

「ええ？ そんなに……」

武志は「知らなかった」という声を呑み込んだ。

梓は続けた。

「この辺りがなぜスーサイトと呼ばれるか、知っているでしょう？」

「ああ。米軍の手を逃れて海に飛び込む女性たちがたくさんいた。その姿を見て、米軍が名付けたリアルな地名だろう？」

「そうよ。でもそれ以外に海に飛び込まなくて、洞穴で自決した少女たちもたくさんいるの。ここはその一つなのよ。きつといちばん大きい。ずいぶん理不尽なことが行なわれたみたい」

「それを聞き出したのか？」

「そう。もう一つ重要なことがわかったわ」

「何？」

「池野さんのこと」

「池野？」

「池野さんのお祖父さん、ここの守備隊の中隊長だったのよ。その中隊長がすべて命令しているの」

「それ、武志さんをお願いできないかしら。無理？」

「お安い御用だが、ひょっとして、その霊の数の分だけ？」

「そう。二八六本。もちろんそれ以上であれば何本でもいいわ」

尋常な数ではない。しかし揃えなければならない。軽トラック一台分あるいはそれ以上になるにしても、鎮魂に必要であり、池野の命にかかわり、しかも半ば諦めているこのプロジェクトに希望が持てるのであれば、それくらいのことはやらなければならないと武志は心に決めた。
「命には、命を懸けて立ち向かわねばならない。どちらも覚悟がいるわ」

梓の声には柔軟さを帯びつつも、悲愴感が感じられ、それが武志の心の底に、ユキの眼を思い起こさせた。
そして眉根に皺を寄せて梓は最後に言ってきた。

「いちばんむずかしいことだけど」

「オレがやること？」

「そう。池野さんがここに呼ばれているの」

気を失う前、武志の耳に聞こえた「彼を連れてきて……」という言葉はそれだったのかと、武志は闇の声を思い出した。今の池野の状態を思い、さらに池野への恨みがそこに加えられることを思うと、彼に「来てくれ」とは言いにくかった。

「ええ？ ……それで取り憑いたのか。その恨みが大きいのか。何という偶然だ……。じゃあ、池野がこうなったのは、君との約束を私が破ったからじゃないのか」
「両方ね。御神の罰と、この少女たちの恨みと、二つが重なった。だから重症で当然なのよ」

「三代前のことが、まだ……」

梓はまたあらたまった顔になって、言った。

「さっきこの辺りを歩いてみたけど、洞穴らしいところほとんど全部塞がれてしまっているわ。それも恨みを買っているんだけど、一カ所だけ、この家のすぐ北に、わずかにそこに繋がっていたらしい跡があるの。その前の空いているところを、除霊の儀式に使わせてほしいんだけど、いい？」

「いいとも。いつ？」

「この次の満月の夜」

梓が言うには、禊から次の満月が沈むまでにみんなを浄化させたいと言う。

昨日、夕暮れの空に浮かんでいたきれいな三日月を思い出した。あと十日後。いよいよか……と武志は緊張した。

梓はさらに言ってきた。

「周りを回ってみたけど、この辺りにはテッポウユリがなかったわ」

その灰色の眼は除霊に使う花のないことを、心配していた。
「テッポウユリ？」

「池野は無理じゃないかな」

「でも彼がいないと、納得しないわ」

「池野だって、罰が加わることになるかもしれないところへわざわざ来ないと思うよ」

「池野さんも、さらに危険になるかもしれないけど、うまくすれば、完全に解放されるかもしれないの。それを通してでないと、それはできないのよ」

「説得はむずかしいが、やるしかないか……」

船着場でまた見送るとき、梓は別なことを依頼してきた。
「次は、すべて揃えてくるわ。車も一台別に用意してくれるとありがたいんだけど」

「わかった。二台で迎えに行く」

「そのときは、母も、祖母もいっしょに来るわ」

「お祖母さんまで来るの？」

武志は気になって、つい尋ねた。

「ユキちゃんは預けてくるんだよね？」

梓はためらいを見せたあと、毅然と言った。

「いっしょに連れてくるわ」

悪くなったり、よくなったり、不安定な体調を繰り返している。病院の看護師の眼を盗んで、夕方のドサクサ時にこっそりと池野の病室に潜り込んだ。追い出されたら「ハイハイ」と素直に従うつもりだった。逆に携帯で呼び出して、連れ出すことだってできるだろう。

「よう、池野。助かってよかったな。命拾いしたなあ」

「社長、うまく看護師の眼を盗みましたね。さすが……。今回は御迷惑をおかけしました。ほんとに、何が何だかわからなくて……」

武志は、あまり構えずに、いつものくだけた調子を装って、ストレートに言った。

「池野。あと一週間で、外へ出てくれるか」

「社長、無理ですよ。一度死にかけたくらいですから。私もあのプロジェクトが気になるんで、なんとかしたいとは思ってますが、まだ体調十分じゃないですよ。まだよろめいてるような状態ですから」

「口は元気じゃないか」

「口が取柄っすからね」

「さっき、夕空に半月がきれいだったぞ」

「そんな風流なこと言って。いつもの社長らしくないじゃないですか。また何かあるんですか」

武志は池野を騙すことになるかもしれないと思いつつ、言った。

いは梓たちの助力で和解と許しを得られ、除霊が成立するかもしれない。そうでなく、池野が来なかった場合、池野はまた別な形で、怒りを受けるだろう。病院にいるから安全とは限らない。他の方法でいくらでも池野を破滅させることはできるだろう。となれば、池野が助かる道は、そこへ行くしかない。その除霊の場で何らかの許しと和解を得るしか道は残されていないことになる。どちらにしても、池野を失うことになる確率の方が高いのだ。

「池野。おれにすべてを預けてくれないか。おれはおまえを死なせたくない。助かるか、助からないか、賭けに出るしかないんだ。もし今から少しでもよくなったら、いや、少しくらい悪くなっても、無理してもおれといっしょに来てくれないか。あと一週間、おれがこっそり着替えを持ってくるから、トイレで着替えて、ここを抜け出してくれ」

池野はキョトンとした顔をしていたが、武志の真剣な眼に見つめられ、答えてきた。

「わかりました。何か重大なことがあるんですね。フィアセンセのことも、プロジェクトのことも、みんな気がかりだが、抜き差しならないことがオレを待っているようだ。わかりました。あそこって、あそこですよ。こうなった以上、オレは逃げませんよ。行きましょう」

池野は今度のことと、少し人間が深くなっているようだった。今までにないものを感じた。

「池野。その病を完全に治すには、もう一度あそこへ行ってもらわなきゃならないんだ」

「完全に治す？ この病気に何かほかの理由があるんですか」

「池野。……わかつているだろう？」

「梓さんとのことですか」

「そうだ。それともう一つ、大きな理由があるんだ」

「何ですか、それ」

「おまえ、自分のお祖父さんのこと覚えてるか。熊本って言ってたよな」

「お祖父さん？ 覚えてますよ。沖縄で最後まで戦ったって」

「生き延びたのか」

「ええ。それがどうしたんです」

「そのお祖父さん、スーサイトの守備隊の中隊長だったそう」

「ええ？ だれが言ったんです、そんなこと」

「あの新しい家の地下にいる霊がそう言ってるそうだ」

「何ですって。信じられないな。それでオレが何かその霊たちに仕返しを喰らったってわけですか。そんな馬鹿な……」

武志は腹を決めた。除霊の場に池野が呼ばれる以上、池野に何かを報復する確率が高い。しかしうまくすればある

病院をまたうまく抜け出したとき、かすかに西へ傾いた半月がひどく赤さを増して輝いているのを、武志は立ち止まってしばらく見つめた。

13

久遠島のイシキ浜から、井泉へと続くロマンスロードには、万年キク科のキダチハマグルマの黄色い小花の群衆が人々を誘うように自生している。少し南下して行くと三角の自然岩に囲まれた泉が見える。そこから湧き出る水は聖水と信じられていて、古くからそれを使って神女が禊のために沐浴を行っていた。

祝詞は日出る前の早朝に御獄で毎日捧げている。

その朝、いつもの祝詞のあと、梓と、京子、祖母の一等直系の神女三人は、各々の所有する勾玉の首飾りを掛けて井泉の水で身を清めた。さらに幼いユキも裸の体に聖水を掛けて、浄化された。四人とも白装束に身を固めている。しばらく祈りをささげたあと、さらに枇杷の葉で編んだ杓子に井泉の聖水を汲んで入れた。

現場で拜所に敷く白布も、聖水も、そして額に巻く聖絹の鉢巻も、そこに立てる神符も、そして、御神酒も、すべて整え、神布に収めて、神女一行は、頼んでおいた車に乗って船着場へ向かった。

快晴の空は、夜、満月となって、神女を迎えるだろう。海は透明な青さを湛えて、眩しく輝いている。浄化は紙一重の熾烈な戦いになるかもしれない。太陽の光を受けるように、船の甲板上で、梓たちはそれぞれの勾玉を確認した。梓の手には、摩文仁でも使った素焼きの勾玉が一つ握られている。京子の手には、翡翠の勾玉が二つ握られている。そして美しい白髪のお母の手には、水晶の勾玉が三つ握られている。一等神女だけに継承される龍の爪を意味する勾玉である。三代神女が合わせ持つ、合計六個の勾玉は、三つ巴の円形が二セットとなり、形を変えて、龍の両手の爪を模る。そして、彼女らさえも視えぬ、何かの大きな力が龍の口となってそれが加わり、七数が完成する。

三人でそれを見せ合ったとき、祖母の柔和な眼がユキに注がれ、水晶の勾玉の一つを自分の掌から取って、ユキの掌にそっと乗せた。それは厳肅な儀式のように、簡単な呪文といっしょに執り行なわれた。ユキは片目を上げて、曾祖母の眼を見つめていた。梓には、むしろ潰れた方の眼が呪文に答えて何かを言っているように見えた。そしてしばらくして、それを返すようにユキの頬に微笑みが宿った。

病院から抜け出した池野といっしょに、武志は梓たちを船着場に迎えた。池野と梓は三年ぶりの再会でいろいろあったことを伏せてぎくしゃくした挨拶だったが、池野は

て、清らかな、厳かな雰囲気、辺りに立ち上がってきた。そして霊を迎える方向へ、それを包むように、テッポウユリを配置した。たくさんユリを並べ替えるのは、かなり手間取り、池野も武志も手伝って、馬蹄形の花壇をこしらえた。かなりの広さになって、たくさんユリに囲まれている雰囲気が出てきた。

日が傾き、真っ赤な空が広がり始めている。池野の状態も心配だったので、声をかけたが、「だいじょうぶですって」と笑顔を返してきた。そして一呼吸置いてから、そつと武志に囁いてきた。

「あれがオレの子ですか」

「バカ野郎。黙ってろ」

「なんで片目なんですか」

「ぶっ殺すぞ」

トラックも帰り、社員のワゴンも今日はもう帰るが、明日何時に迎えに来たらいいか不思議なものを見ている面持ちで聞きに来た。武志は社員に答える前に、気になっていたことを聞きたいため、テッポウユリの配置を仕上げている梓の所へ寄っていった。

「ユキちゃんはどうするの。どこかに預けるんでしょ？」武志は、懸念を全開した。

梓は首を横に振って、答えてきた。

「ここにいさせるの」

他の神女たちの威圧感に圧倒されて、病み上がり体を小さくしていた。まな板の上の鯉のような顔つきを見せている。社員の運転する用意のもう一台の大型ワゴンに久遠島からの一行と荷物を乗せ、池野の方は自分の車の助手席に乗せて、スーサイトへ向かった。

武志は、「ユキをいっしょに連れてくる」と言っていた梓の言葉が気になっていて、実際に見たら連れてきていたが、その出で立ちが奇妙に映った。他の神女と同じに白装束を纏っている。除霊祈祷の最中、ユキはどこに預けておくのだろう。ゴーヤ畑にいたときのように、一人で遊んでいる姿も考えられたが、ここにはそれに類したものはない。ずつとそばにいさせるつもりなのか、危険はないのか、気になってしかたがなかった。池野も、晒し物のように、前へ出されておくことが考えられる。どうするつもりなのか、気になったまま、スーサイトへのアクセスを踏み続けた。

指定の場所には、すでにテッポウユリを満載したトラックが来て、降りし始めている。

「わあ、すごいわね」と梓ははしゃぐように言った。

洞穴への隙間がわずかに残る場所に、積み荷を降ろし、一行はすぐに白布を敷き、祭壇を設け、聖水や御神酒を配置して、除霊の準備を整えていった。祭壇は白木で作られている。白布と聖壇、テッポウユリの色がいっしょになっ

「まだ二歳だよ。泣き出したらどうするの。それに、巻き込まれたら危ないんじゃない？ そんなことが出来る年齢じゃない。今、社員に預かってもらったほうがいい」

「あの子は、もう立派な神女よ。神女として祈禱してもらうの」

「だって、言葉もろくに喋れないでしょう？」

「『ゆるしてください』『てんにのぼってください』それだけを覚えさせたわ。一人でも、少しでも、力がほしいのそれに洋ちゃんは、あの子の……」

「反対だ。そんなことをすべきじゃない。あの子まで死ぬことになったらどうするんだ。『万一のときはお願いします』って言ったじゃないか」

「あの子の眼を犠牲にして洋ちゃんを救ったの。それはあの子自身にもわかってるの。必ず力になってくれるわ」

武志は梓の眼を外し、池野の方を見ながら言った。

「あのバカ野郎はそんなこともわかってないんだよ」

「わかってちょうだい。みんなで命を懸けなければできないことなのよ」

「あの子までも……」武志は堪えて、社員を呼んだ。

明日の朝までにはすべての決着がついている。成功するか、奪われるか……

「夜が明けるころでいい。五時に来てくれ」

武志はワゴン車を返した。

簡単な干飯の聖餐を済ませ、さらに拝所を整えた。周囲に聖水を撒き、テッポウユリにも聖水を噴霧する。

梓は、武志の額に白い粉を塗って、おまじないをかけた。「これは何なの」

「あなただけは特別という存在。ウチたちとは違うという印。霊たちもあなたには手を出さないわ。みんなが打ち負かされても、あなただけはここに残って、みんなの処理ができるの。そのときはお願いね」

陽が西の海に沈み、辺りは暗くなって、東の海から大きな月が昇ってきた。満月が赤く見える。海に月の光の広大な道が広がってきた。

池野を呼び、第二神女^{カミシチュ}の京子が、特別な御神酒を飲ませた。

「おいおい、もうスピリタスはごめんだぜ」池野は緊張と恐怖を冗談で紛らわせるようにして、震える声を発した。「だいじょうぶだ。スピリタスより早くあっちへ行けるぞ」と、武志は励ました。

池野はそれを飲むと、ほどなく眠気を覚え、配置された三重の白布の上に身を横たえた。まな板の上の鯉のように、ズボンとワイシャツの池野の姿が浮かび上がる。

「池野、早いな。もう眠ったのか」

武志が声をかけても、池野はもう反応しなかった。

梓たちは池野の眠りを確認して、池野を真ん中にし、祈

禱陣を組んだ。渡り鳥が編隊飛行するように、強い霊の盾となるべく、正三角形の先端に、若手の神女^{カミシチュ}である梓が着き、右位置に京子、左位置に祖母が着いた。祖母の後ろにユキがいる。

月が四十五度まで昇ってきたとき、梓たちは招霊の祈禱を始めた。

風が吹き始めた。辺りにざわめきが押し寄せてくる。月光はあるはずなのに、暗く閉ざされていく。濃密な重苦しい空気が圧してくる。洞穴と繋がっていたはずのところから、何かが広がってくる。声が響いてくる。

——ワタシを呼ぶのはだれ？

それは反響するように、木霊の連鎖を繋げてくる。それは一人の声から、二人、三人、四人とあとからあとから押し寄せてくるように重層的な響きを轟かせてくる。地の底から呻き湧いてくるような苦し気な声が割れ響いてきた。さらにあとから、違う声が追ってくる。

——ワタシを呼ぶのはだれ？

闇の声が洞穴跡から地全体を揺るがせるように聞こえてきた。あのときと同じだ、と武志は思ったが、今回はその声が少女たちの声であり、複数がいっしょになって重層的に響いてくるのが、いっそう地を震わせている気がした。それに向かって立つように、祈禱する梓たちの声も高くなっている。武志は、前に気を失ったような不覚がないよ

「続けるんだ。続けろ、きこま。命令を聞けんのか」

銃声。

うに、必死で、だんだん高まってくる闇からの声に自分を強く保とうとした。砲声が鳴り響いている。銃撃音が続いている。こちらへ近づいてくる。手榴弾の爆発音が聞こえる。木々が根こそぎ打ち倒される。硝煙の匂いが充満する。地の声が怒涛のように押し寄せた。

「行かなきゃいけんですか」

「行くんだ」

「いやです」

「行け。撃つぞ」

走る音。銃声。爆発音。

「馬鹿者。手榴弾のピンを抜くのが遅すぎる」

「女にこんなことをやらせるのが帝国軍人なんですか」

「敵兵を一人でも倒すんだ」

間近に爆発音。

「いやです」

「行け」

泣き叫ぶ声。

「いやあー」

駆ける音。爆発音。

「次。行くんだ」

砲撃音。ザーツという音。

「隊長。こんなことはもうやめましょう」

梓たちはただ、聞いている。武志の耳に、すさまじい戦場の音が鳴り響いている。

一瞬置いて、また別な声が届いてきた。砲声は遠ざかっているが、それでも断続的に続いている。あちこちですすり泣く声が聞こえる。

「七人で固まれ。七人だ」

「用意ができたならピンを抜け。一、二、三で手榴弾に覆いかぶされ」

爆発音。ドスンという音。あちこちで泣く声。爆発音。

ドスンという音。叫び声。爆発音。

「あと、何組残っているんだ」

「まだ十組あります」

「早くせい」

「池野中隊長。敵が迫っております」

「わかつとる。急がせろ」

爆発音。ドスン、ドスンという音。

爆発音。ドス、ドスンという音。

梓の声がした。

——聞こえるわ。こんなだったのね。

武志の耳にもはっきり届いていた。「池野中隊長」という声もはっきり聞こえた。池野はこれを聞いているのだろ
うか。眠っているはずの池野の顔が、ピクピク動いている。
武志はユキの方にも目をやった。ユキは耳をすましてい
る。教えられた言葉をぶつぶつけなげに言い続けているよ
うだった。しかし同じ音が耳に聞こえている気がした。
まったく別な声が届いてきた。

「いやだ、いやだ、死にたくない」

「どうして自決しなきゃいけないの」

「いやよう。助けて」

「たかえッ。たかえーッ 首が転がって……」

地中から津波のように凄まじい声と音が湧き出してくる。
地に溢れ、すべてをなぎ倒していくように、闇の勢いを増
幅していく。

また地の底から、新たな声が聞こえてきた。

——ワタシはカズコ。級長だった。みんな手榴弾で自爆
していく。頭が飛び、腕が飛び。私の足元へケイコの腸が
飛んできた。ダメ。なぜこんなことになるの。なぜこんな
ことをしなければならぬ。狂っている。みんな狂って

へ袈裟に切り通した。首と左肩がワタシの胴から離れた。

ワタシは、天と地が逆さまになり、地面に転がった。ワ
タシの頭を拾い上げ、隊長はワタシの長い髪で、血の付い
た刀を拭いた……

池野の顔が青くなっている。もう死んでいるのか。武志
は闇の声の怒涛の下に、池野が奪われていく危うさを感じ
た。梓は何をしているんだ。抗しきれないのか。和解は、
霊鎮めは、除霊はどうなっているんだ。武志は自分も祈り
に参加し、皆の魂を鎮めたいと願った。

もうわからない。池野をここに呼ぶなんて、無謀だった。
初めからそんなことをしなければよかった——ユキも死ぬ
のか。梓も……みんな……

遠のいていく武志の視界に、異様な光景が映った。池野
は老人のような老けた顔になり、眼に異変を起こしている。
その眼から血が噴き出している。真っ赤な血が。何だ？

何か見えない矢が眼に突き刺さったようだった。
そのとき同時に突然、梓の祖母がスツと立ち上がるのが
目に映った。輝く水晶の一つの勾玉を、首から外して天に
差し出した。

風が強く吹きだした。月光は雲に覆われ、激しい稲妻が
走った。突然、天が一筋割れて、その亀裂から巨大な白龍
が現れた。

いる。なぜなの、なぜ、止めないの。

ワタシは隊長の所に走ってがむしやりに縋りついた。

「どうして、こんなことをするんですか。こんなことをし
て何になるんですか。やめさせてください。なぜ、死なな
きゃならないんですか。こんなひどいことを。後生だから
やめさせてください。お願いします。やめさせて」

「どうせ、アメリカ兵の餌食になるんだ。火炎放射器が黄
燐弾で焼き殺される。よくて凌辱だ。潔く自決しろ」

「こんなひどいことをどうしてわたしたちにさせるんです
か。わたしたちに生きさせてください。生き延びさせてく
ださい」

「皇国の女子は、敵の手にかかる前に潔く自決するんだ」

「『潔く』って、こんなひどい死に方が、『潔く』ですか」
ワタシは隊長を押し倒さんばかりにして「やめさせてく
ださい」と絶叫した。爆発音が周りに続いている。「やめ
させて」と隊長に必死で取り続けた。

隊長はワタシの剣幕に目を背け、タジタジとなった。絶
叫が聞こえる。私はみんなのすさまじい死の声を受けて、
さらに隊長を押して、胸に取り続けた。

「やめさせて！ こんなこと！」

隊長は、ワタシに押し倒された。

「きさま！」

隊長は軍刀を抜いた。振りかぶり、ワタシの首横から胴

京子が悲鳴をあげながら両手で臉を抑えて、苦しそうに
身をかがめた。銀色の太い鉤爪を剥き出し、白龍は凄まじ
い勢いで、地を被うように降りて来た。梓はとっさに、飛
ぶようにして後ろへ行き、ユキの身に覆い被さっていた。
祖母の勾玉の繋ぎの水晶が弾けて散らばった。祖母が倒
れ込んだ。白龍が何か大きなものを掴んで舞い上がる気が
した……

14

朝焼けの空が、金色の光を湛えて広がっている。

池野の看護を兼ねて、後ろのシートに座ってもらった梓
は、全力を出し切った脱力感のまま、朝の光を窓越しに浴
びている。梓の左側にぐったりしている、白布を切り裂い
て巻いた池野の顔半分には、まだ血が滲み出していたが、元
の所では止まっているようだった。いずれにしても、病院
に逆戻りで、急がなければならなかった。病院では、無断
で抜け出したことに、大きなお目玉を喰らいそうだったが、
またこの眼を見れば、黙って受け入れてくれるだろう。
傷が眼だけで留まってくれることを祈った。

梓の右腕の中には、昏々と眠り続けるユキがいる。よく
最後まであのような場で持ちこたえたと思う。確かに梓が
言っていたように、もうこの子には常軌を逸した特別な力

が備わっているのかもしれない。白髪の祖母からもすでに何かを引き継いでいるようだった。

そしてまた武志は、三人をバックミラーの中に認めるとき、三人が親子としてこのように一カ所に座るのは、もうないかもしれないとふと想った。もう永遠に訪れない、血の繋がった者どうしとしての稀有なひとときにちがいない。そして今二人を父と子として見れば、池野も片目を失い、ユキも隻眼の宿命を負っている。新たな絆が、奇妙な一つの運命として、二人に結ばれたようにも思える。もう気軽に親子として会うことは難しいが、だれにも犯されない二人だけの絆にはちがいがなかった。

さつき、梓が疲れた体から絞り出すように言った言葉が、また武志の頭の中を駆け巡った。

——祖母は、代わりに死んだの。最初、あの子たちをとでも鎮められなかった。洋ちゃんのお祖父さんへの怒りがものすごかった。それが洋ちゃんに集中したの。とてもそのままでは治まらなかった。聞いてあげるだけでは、無理だった。どうすればいいの？と聞いたら、洋ちゃんの眼をくれて要求してきたのよ。そうしないと怒りが治まらなと言ったの。はじめは両眼だった。それはやめてほしいと言ったの。私も必死だった。そのうちやと妥協してきて、じゃあ、その子供の、ユキの残った眼でいい、と言ってきたのよ。それはもつとできない、とウチは激しく拒ん

武志はあのあと、事件の場所だったプロジェクトの家の一つと、その隣のもう一軒を壊し、梓に言わないのに、慰霊碑を建て、二八六人の名を刻んで、そこに何があったのかを記し残した。そしてその周りを包むようにたくさんの木を植えた。枇杷の木も植えた。テッポウユリも厚く囲わせた。また、洞穴の入り口を別の所に探し、だれもがそこへ入り、見ることができるようにした。

そんなことをすれば、だれも不吉な土地に住もうなどという気になれず、住宅地としてのプロジェクトは失敗に終わると、社員全員から反対されたが、逆にそれが新聞記事になり、話題を呼んで、買い手が付いた。住んでみるとむしろ何か落ち着き、それらに守られているような気分になるということだった。

完売したとき、武志は霊たちに、そして梓たちに感謝すると同時に、あることに気づいた。もともと神社も祠も、そうしたものは多かれ少なかれ、過去の深い傷の上に建てられ、今生きている者を見守り、安らかにしてくれるものだ、と——。

武志は、海を見ながら、また梓に会いたくなった。

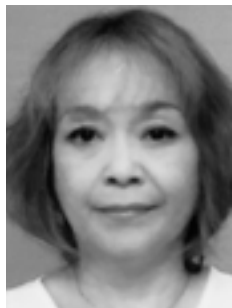
だわ。でも、あの子たちは納得しなかった。隊長の曾孫が罰を受けて当然だと言うの。「私たちはもつと酷いことをされた」と。鎮まらなかった。あの子たちに圧倒されそうになったとき、祖母が「私が身代わりになる」と言ったの。それで、祖母が立ち上がって、龍を呼んだ。身代わりに死んでくれたわ。それでみんなが、やとと龍に乗ってくれたの——

美しい白髪の顔の閉じた眼が、やはりこの朝の陽を浴びていることを、武志は厳肅に想像し、感謝を捧げた。

海岸を走る車の行く手に、朝日に輝く海が広がっている。それは永遠へ続く光の海として、未来をどこまでも切り開いていくようだった。

15

池野は眼を治し、会社に戻ってまた働き出した。フィアセンセは、池野のすべてを受け入れ、共に生きる道を選んだ。正月、眼帯を掛けたままの顔で、池野は結婚式に臨んだ。古風なモーニングは似合わなかったが、タキシードは池野を、むしろ眼帯の顔に映えさせた。武志も型通り祝辞を述べたが、各テーブルにライトを点けにウェディングドレスの彼女と回ってきたとき、「ダンディだな、池野。本物のダンディだぞ」と本音を混ぜてからかった。



大城由乃

おおしろ よしの
1961 沖縄県旧糸満町生れ
97 飲食店経営の傍ら詩作
2015 頃より小説を手掛ける
21 同人誌「四人」入会
沖縄県在住



(「四人」105号・106号より改稿の上転載)

四人 東京都

錚々たる書き手が連なる

『四人』の創刊は、一九六〇年。『隊商』の残留組——小松郁子、星川道之助、峯島正行氏、辻千鶴氏の四人が始めた。四人が始めたので『四人』と名付けた。それから、三七年後の一九九七年、長く編集を続けてきた永松習次郎氏が逝去され、六一号から九四号までの一七年間、成清良孝氏が編集を担当された。その成清良孝氏も世を去られた。ここで少しばかり、『隊商』について説明しておきたい。

『隊商』は、東京で出版されたが、実は九州で長く文芸運動の中心的役割を果たしてきた文芸誌『九州文学』に繋がる同人が多かった。

九州出身者の『隊商』を経て

『隊商』は一九五〇年（昭和二五年）七月に創刊し、一九五九年（昭和三四年）七月に最終号を出している。同人には、火野葦平や長谷健がいて、編集の中心は永松習次郎というように九州出身者が多いのが目立つ。『隊商』や『四人』の編集発行を長く務めた永松習次郎、成清良孝、長谷健などは、現在の福岡教育大学の前身、福岡師範学校、福岡学芸大学を卒業、上京し公立の小、中、高校の教師の職に就いた。

同人雑誌全盛の時代には、多くの逸材が同人雑誌から輩

出した。『四人』についても、その六〇年の長い歴史の中には、有名な文学賞を受賞した方や候補になられた同人が多く加わっていた。今は、昔と違って同人雑誌からばかりではなく、いろいろなきっかけで職業作家が生まれる世の中になった。

私が編集に携わるようになってからは、それまでの同人誌出身の著名作家の系譜につながる方々ばかりではなく、働き盛りの時には適わなかったが、退職後に書き始めたという同人も増えてきた。

最近については、『四人』に『鎮魂』を五年間連載してきた古川貞二郎氏が内容に手を入られるのを嫌って自費出版により単行本を出したところ、NHKや新聞で評判になって、意外にも自費出版では珍しい、即、増刷という現

自分の思いを書き続ける

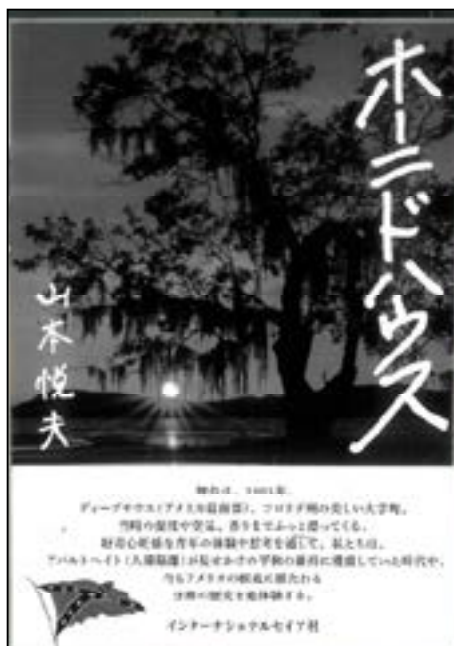
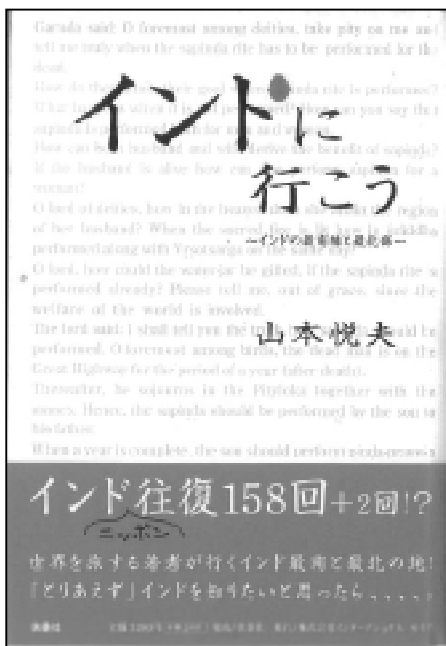
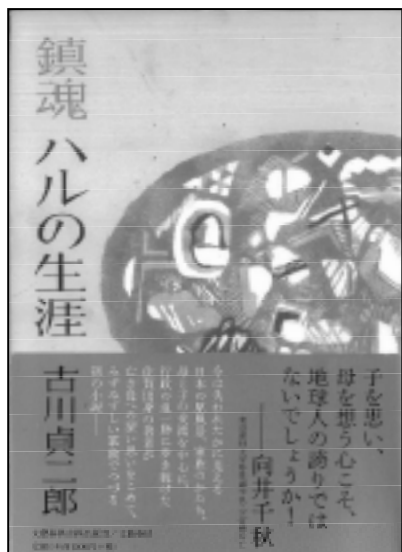
象が起きた。

一つの例を挙げると、読売新聞十一月二日朝刊は、「胸迫るほど母思いに満ちた自伝的小説が出版されました。内閣官房副長官を八年七カ月も務めた古川貞二郎さんの『鎮魂 ハルの生涯』（文芸春秋企画出版部）です。……」と写真入りで書評を出した。

ゴーストライターが書いた政治家や官僚の自叙伝は多いが、忙しいスケジュールの間を縫って、こつこつと自身自身の指と筆で書き進めて行った自伝的小説は数少ないだろうと思う。

商業出版の会社の思惑に委ねるのではなく、自分の思いを書き続けるのが本誌の願いである。

（『四人』編集発行人）



関西の同人雑誌事情

島田勢津子

——二本柱に関わって——

●大阪文学学校

関西の同人雑誌事情というと、まず浮かぶのは「大阪文学学校」（以下文校）だろう。これは私も卒業生であり、十年前からはチューター（講師）として関わっている場なので、手前味噌になるかもしれない。しかし、事実として文校のチューターが生徒に呼びかけて創刊した同人雑誌、生徒が自分たちで創刊した同人雑誌は、数多く存在している。

チューターが創刊した雑誌は、ほぼ生徒が後続しているもので、「あるかいど」（高島寛↓高原あふち）。「飢餓祭」（竹内和夫↓夏当紀子）「黄色い潜水艦」（川崎彰彦↓島田勢津子）「てくる」（高村三郎↓平野千景）など。創刊者が健在な冊子としては、「せる」（奥野忠明↓津木林洋）「たまゆら」（佐々木国広↓中川一之）「あべの文学」（奥野忠明↓森口透）。

文校生が立ち上げた冊子としては、「igne a」「カム」「組香」「ココドコ」「白鴉」「茶話歴談」「星座盤」「雑木囃子」「babe」「文の鳥」「メタセコイア」「mon」



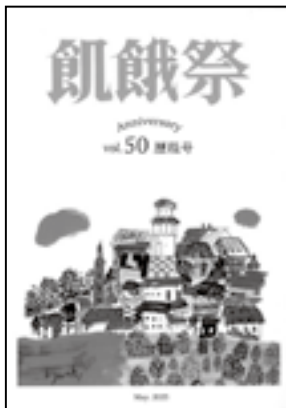
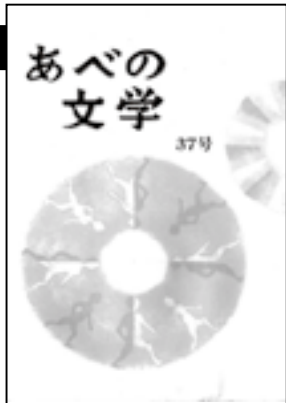
に島京子の「あめんすい」。地域の草の根を掘り起こす「淡路島文芸」「播火」など枚挙にいとまがない。他に、随筆を主に掲載している雑誌がある。

忘れてはいけないのが老舗の「VIKING」「AMAZON」だろう。歴史のある由緒正しい同人雑誌であると同時に、今も新鮮な作品を送り出していることは素晴らしい。

などで、ここには新旧の文校チューターも含まれている。そして数だけでなく質的にも、これらの冊子から「同人雑誌評」に採り上げられる率は高い。「三田文学」「季刊文科」「文学界」「文芸思潮」などに転載される作品も少なくはない。ここに文校の機関紙である「樹林」を入れるとなると、もうかなりの列強集団といえるだろう。

そんな中で、カルチャー系の同人雑誌も健闘を続けている。「八月の群れ」「港の灯」は竹内和夫の文章教室の受講生有志が創刊、後継者にバトンを繋いで健在である。他

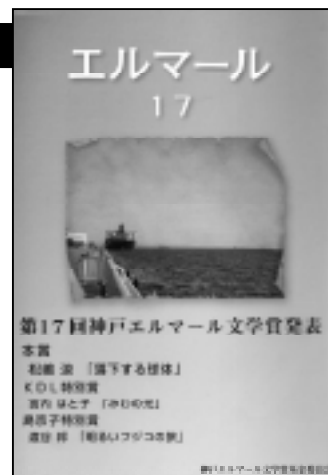
雑誌の名前を列挙してしまったが、同人雑誌が高齢化して低迷していると言われる中で、関西はまだまだ熱気を孕んでいるのである。まだ伸びしろがありそう。やはり、新雑誌を生み出していく土壌とエネルギーがあることは大きい。



●神戸エルマール文学賞

次に「神戸エルマール文学賞」のことを書かせていただく。二〇〇七年に第一回の授賞式を行なった、同人雑誌を対象にした文学賞であり、私は前年の秋から設立準備に携わらせていただいた。その中心にあったのが神戸新聞の文芸欄と同人誌評を担っていた作家、島京子と竹内和夫であった。二人は前身の「神戸ナビール文学賞」でも選考委員を務めるなど関西の文壇の中心にいた方たちである。

エルマールの選考委員は、ここに大塚滋（杉山平一と同人誌「文学雑誌」を発行）、三田地智（「風群」から「鬼子」創刊）が加わった。事務局と選考委員が決まり、大塚が命名した「エルマール」（スペイン語の海）と言う名称が決まり。新たな文学賞が船出した。この場に居合わせたことを、今も誇りに思う。



冊子「エルマール1」から、当時代表だった島京子の巻頭言を挙げておきたい。
——「神戸エルマール文学賞」は、同人雑誌上に発表された作品を対象とする文学賞であ

る。人間関係の本質的な問題や、実態を捕えようとする真摯な作品と容易く出会えるのも、同人雑誌上が多いということ、私は経験的に知っている（中略）この文学賞が、受賞者にとって一瞬の光芒のみではなく、持続への一つの足がかりとして機能することを、文学賞設立委員一同願っている——

この十七年間の同人雑誌の推移を一言では表わせないが、毎年新たな同人雑誌に出会い、新しい受賞作品に出会っているのは確かである。

インターネットの世になってからも、同人雑誌の世界は、原稿は郵送、合評会是对面で行うところが多かったと思われる。メール添付でつまずき、ZOOMの導入などは、四苦八苦するばかりだ。

筆者もさっそく導人を考えたのだった。ところが、先輩の同人たちには、なかなか難しいことだった。皆、スマホでラインはしているという。そこで、ライングループを作り、画面での合評が実現した。これまで合評に参加できなかった関東の同人、コロナ禍で外出を控えたい人も参加できることになった。多くの同人誌がその運びになったわけではなく、メール合評をしているうちに、間遠になった例もあっただろう。

した文学賞があることは、近畿圏の書き手にとって大いなる励みになっているはずだ。また大阪には「大阪女性文芸賞」があり、同人誌作家が多くボランティアで下見や運営に関わっていた。こちらは惜しくも昨年三月に第四〇回の贈呈式をもって休止となった。人材とスポンサー不足、資金難はどちらも抱えている問題である。

●同人誌評の減少と今後の展望

二十年前と比べると、同人雑誌評はかなり減少していった。朝日、毎日、読売、神戸の各新聞の紙面にあった「同人誌評」も、今は神戸新聞のみである。全国的には、「文学界」の欄がなくなっただけで、「季刊文科」「三田文学」が継続しているおかげで、両雑誌への転載や、そこから「文学界」への糸口が見えているのは有難いことである。文芸機関紙の「樹林」も同人誌評はネット上だが、継続されている。「週刊読書人」の評はなくなったが「図書新聞」は継続。「民主文学」の評もある。評者の負担が大変多い仕事だとは思いますが、どこにも採り上げられない期間が続くと、編集者も雑誌も覇気がなくなるとある。ぜひ続けて

著である。三十代、四十代は、仕事に追われて書くどころではないのかもしれない。既存の同人雑誌という形態に抵抗があるのかもしれない。ネット上で研鑽の場もあり、一人で賞応募を目指して書く層もあるだろう。文学フリマの存在も大きい。決まったメンバーの限られた空間から、もっと広く読者と繋がっていきける場である。

それでも今の高齢世代は、精神的、肉体的に、また外見も活気のある人が増えた気がする。我々にしか書けないこともある。先の島京子の巻頭言から「いま、大河内昭爾氏のひとつの言葉がフレイズのように頭を過る。『年配者の実力を同人雑誌の存在感としてアピールしたい』」。若い世代には違和感があることと思ひ、あえてこの章に出させてもらった。このくらいの気概を持って、書いていききたいものである。

（文中敬称略）

※全国同人雑誌協会ZDKニュースレター7号に掲載しました、神戸エルマール文学賞のデータは、応募総数ではなく、一次選考通過数の誤りでした。訂正して、お詫び申し上げます。



活気があると言っても、関西の同人雑誌にも高齢化の問題は顕

父のマリア

入江修山

その集落は小さな港町で、隠れキリシタンの里であった。波静かな入り江のほとりにカトリック教会の高い尖塔が建ち、その上に十字架が掲げられている。この地は江戸時代の禁教令以後、激しい弾圧を受けながら二百四十五年間に渡って「潜伏キリシタン」として信仰が守られてきた。

教会は「海の天主堂」と呼ばれて、周囲の漁港一帯の集落は、その景観から貴重な文化遺産となっている。

文夫がこの地を訪れたのは、晩秋の頃であった。教会ではクリスマス用の電飾の取り付けが行われていて、中に入ることが出来なかった。尖塔の回りにも、クレーンを伸ばしての作業が行われていた。教会を後にした文夫は路地の入口にある商店に立ち寄った。店先の幟旗に書かれている、杉の葉を添えた羊羹を飲み物と共に注文した。その菓子は

一般にいう羊羹とは異なり、桃色の線が入った、うるち米でつくられた餡入りの餅であった。杉の葉が添えてあるのは、防腐剤の効果があるとのことであった。店主がお菓子の由来について語ってくれた。

「こん羊羹は江戸時代から伝わります。徳川の將軍様の祝い事で、薩摩の殿様へ貢物を届けようとした琉球の王様の使節団の船が嵐にあって、こん港の沖に漂着しよったとです。うちの御先祖たちは、総出して助けに行きよりました。そん御礼ばゆうて、琉球の人が、こん羊羹の作り方を教えんさったとが、始まりと言われとります」

語り終わった店主が文夫に聞いた。

「お客さんはどちらからきんさったと」

文夫は自分の住む町の名を言った。

「そげんでしたか、子どもの頃にそちらの方から葉を置きに来る方がおられました。なつかしかですな」と店主は言った。

文夫は葉売りをしていた父の名を言った。

「うちに來ていた方とは違ふござります。店の前の路地の先にある漁師の家に行つて聞かつしやると、知つてゐるかもしれせん」と店主は答えた。

その小さな路地は「トウヤ」と呼ばれて軒と軒に挟まれて海へと続いていた。

集落は、東シナ海に開口する湾の北岸にあり、湾には海蝕による小湾が多く形成され、最奥の懐深い入口にあった。集落は山が海に接する狭い土地に形成されている。古来より集落では漁業を生業としている。生活空間を効率的にするため、トウヤとカケが造られた。「トウヤ」は軒と軒に挟まれ海へと続く「小路」のことで、「カケ」は、護岸から海に突き出た構造物のことで、船舶の碇泊や干物作り、漁具の手入れ、物干し場など漁業集落特有のものである。トウヤを進むと、先にはカケにつながるものがほとんどで、集落と海を簡単に行き來する手法が昔から成立していた。

教会を訪れる人々を主な客とする土産物屋がある軒と民家の軒との間を行くと、海に着いた。波の立っていない静止したかのような水面が目に入った。その傍らにカケがあ

り、ランニングシャツ一枚の日焼けした顔に深い皺を刻んだ坊主頭の老人が漁網を広げて破れ目の繕いをしていた。

「こんにちは」と声をかけたが、老人は「ああ」と言つて、文夫の方を見ることなく手にした網目を広げて新しい糸で結んでいた。

文夫は先ほど、羊羹を食べた店で話したことを伝えた。

老人は文夫の顔を上目づかいに見ながら、「あんだ、葉売りの末裔か」と言つた。

「そうです。私の父は木原和一といひます。御存知でしやうか」と文夫が言つと網を手繰り寄せて言つた。

「ああ、知つとるよ」と言い、網目を見せながら「あんだのおやじさんは、ここを破つて入つて來た」と言つた。

文夫は何のことかわからなかつたが「それは、父が何かいけないことをしたということでしょうか」と聞いた。

老人は「そうじや、それも繕いがつかん大破りじや」と言つた。

集落にはキリスト教の禁教下の潜伏から、仏教への転宗、その後の教会への復活という歴史がある。禁教下において、仏教や神道へ転宗していた信者は、潜伏キリシタンとして信仰を継続し、明治のキリスト教解禁以降教会を建てて、教会に帰依するようになった。集落にはキリスト教復活と共に潜伏としての信仰は途絶え、今日まで複数の信仰が共存している。

父の和一が、若い頃にこの集落に置き薬の商いで訪れていた時代、この地は海産物や隣町の木材や木炭との交易によって栄え、街中^{まちなか}には木賃宿や旅館が建ち並び、日中から三味線の音が鳴り響いていた。和一是トウヤに面した軒の一角にある宿にいつも滞在していた。和一が宿泊したある日の晩、宿の女中が二階の部屋へ布団を運んだかえりに階段を踏み外した。和一是持っていた塗り薬をつけて手当をしてやった。その女中は二十歳前後のよく笑う明るい娘であった。次の日、和一が宿を出るときに娘に「足の痛みはどげんね」と聞いた。「おかげさんで薬が効いたみたいで痛みも腫れもなかとです。ありがとうございます」と娘は答えた。

晩秋のある日の宿で、和一是背中^{うしろ}の荷を下ろすと急激な眠りにおちていた。眠りのなかで、幼い頃のことを思い出し、うなされていた。

小学校入学直前の春の彼岸に和一同じ年の子どもが親に連れられて集められた。

親から偉い人といわれた大人が唱えるお経を聞かされてから、その日の夜に人里離れた暗く狭い穴のある所に連れて行かれた。そばには、杉の太木が何本もあり昼間でも繁る枝葉で空が見えないと思えるほどであった。根元には大きな岩があった。その下に大人一人が背を屈めて入れるほ

どの入り口があり、和一たち子供は、そこから中に大勢が入らされた。穴の中に円筒状の石があり、そこに線香が立てられていた。壁には土を削りとったいくつかの台に蠟燭^{ろうそく}が立てられ、火が灯されていた。立っている子供たちの頭上には、外に見えた大きな岩の底が天井になって被さ^{かぶ}ってきた、背を屈めた一人の大人の線香に蠟燭で火をつけると、線香の煙と人の息が子供たちを苦しめた。和一是、皆と合わせて「助け給え」と連呼しているうちに何かの印があらわれると、ミトドケと呼ばれる大人が「ご成就した」と言いつて、外へ連れ出された。穴の外で親は、我が子が「ご成就」頂いて早く連れ出されるのを待っていた。和一是その印というものが何かわからなかったが、目の前で光っているもののようにも見えた。今思えば、穴のなかの恐怖からくる幻視だったようにも思えた。

和一是子どもの頃の記憶から遠ざかるべく、宿を出て、港のはずれの海岸^{かたがは}に行った。

湾の入り口の突堤^{とつてい}の先端に立って、東方を見ていた。湾が奥まったところの海面から水煙が上がった。あたりに朝霧が立ち込めた。山裾の樹林を裂いて差してきた朝の陽が、そこを照らした。霧の粒が輝き虹が生まれた。「きれかねえ」と声がした。

和一が振り向くと、宿の女中が立っていた。

「あんた何でこんなところにおると」

「うち、宿の女将さんに言うて、日曜日の朝は教会に行かしてもらとると」

「教会にお祈りに行きよるとね」

「そう、イエス様にお誓いの祈りをする。いつまでも汚れない人でおれますように」

和一是この娘は幼子^{わらわ}のようだと思った。

「うち、子どものころから朝晴れたらここに来て虹を見よるの、いつ見ても同じ形ではないけどみんなきれいでうれしくて元気になると」と娘は言った。

和一是自分が幼い頃に暗い穴の中で見た、お印とは何だったのだろうか、娘が祈りを捧げるものと同じようなものだったのか、そうではなかったのか、戸惑いの目で虹を見つめた。

和一是娘に向かって言った。

「宿ではお客さんとしか呼ばれないけど、おいの名前は木原和一。二八歳になる」

「うちは松下文^{まつしたあや}、二十歳になったばかり。うちの家はここから見える山の中にある。学校出たらあの宿で働かしてもらうと」と娘が微笑みながら言った。

和一是薬の行商で、この地へ通っていた。和一が住んでいた地域は、現在は大中小の製薬会社が現代的生産をする

薬業地域となっている。これは、江戸時代からの売薬の歴史が主な立地要因となっている。狭小な領域での商売は領外への行商しかない、格別な商品がない領民にとって、付加価値が高く軽量で、旅先の人々に迎えられる売薬ほど行商に向いた商品は他になかった。売薬（家庭薬）行商の形は家庭薬需要の特性によって、配置売薬となった。配置売薬は売薬人が得意先を軒別に、その家の需要を見計らって数品の合薬を入れ置いた。定期的に廻って使用分だけの代価を受けとり、使用分の薬は補充し未使用分は新品と入れ替えるという仕組みで互いに信用が得られ顧客にとっては無駄がなく、その上「備えて安心」の利も得られる。江戸時代では店の顧客は、ほとんどがつけで買い、代価は盆と正月の両季に支払う、という商習慣であった。売薬行商の行きついた形が配置売薬であった。

和一の父は専業で配置売薬を行っていたが、戦争中と戦後に物資がなくなつたときに廃業して勤めに出ていた。長男の和一是中学を卒業して十五歳の四月に親の決めた配置売薬家に住み込みで番頭見習いに入った。当時は、ほとんどの見習いは住み込みであった。見習いに入る日は母親に付き添われて身一つで行った。身の回りの物や商売道具、衣類などは、オヤジサンと呼ばれた奉公先の主人が用意してくれた。住まいは薬の倉庫として使用していた蔵の二階で、一人で寝泊まりした。中学を卒業したばかりの十五歳

の少年にとつて、配置売薬の就業は厳しいものであった。オヤジサンは何事にも厳しい人で、毎日叱られない日はなかった。朝一番の仕事は座敷の掃き掃除から始まった。オヤジサンは掃除の仕方を細かく教えてくれた。家では掃除一つしたことなかった十五歳の少年は叱られるばかりであったが、後になって考えるとオヤジサンの教えは理にかなっていた。旅に出るまでの期間はイエシゴト（家仕事）といって、薬の調合や包装、薬袋の糊付け、預け袋の糊付けなどを行い、薬の名前も覚えた。薬の仕事はいくらでもあつて、蔵の二階にある仕事部屋で毎晩十時ごろまで行われ、仕事部屋で寝泊りした。

和一是連日の厳しい就業が辛く、母屋のみんなが寝た後に蔵から出て、歩いて実家の母のところに行った。寒い冬の夜中の十一時過ぎに実家に着くと、母はほとんど火鉢の残っていない大きな火鉢の前で繕い物をしていた。火鉢にほとほと涙を落としたながら「仕事辛いから辞めさせてほしい」と母に訴えた。

「お前が辞めたら、とうちゃんが困るばい。辛抱してくれなしようがなかない」と母から諭されて、来た道を泣きながら帰った。

父親の縁故を頼つての就業は辛いところもあつたが、オヤジサンの教えは筋が通つていて和一が恨んだことは一度もなかった。十年後に独立させてもらったときに、オヤジ

サンの厳しい教えで配置売薬人として生きていく上で大事なことを身につけさせてもらえてよかったと心から思った。見習いの時代は、「将来は必ず自分のお得意さんを持つて、一人前の薬屋さんになる」という意気込みで就業を続けた。

四月に見習いに入つて一か月もたたないうちに、得意先回りの旅に出た。初めての旅はオヤジサンと出掛けた。木賃宿に十日ほどずつ泊りながら、一か月間に得意先を回つた。

得意先では、古くなった薬の引き上げや新しい薬の入れ替え、売掛金の記入、集金などが主なしごとであつた。オヤジサンの後について、三日間だけ得意先を回つた。このときオヤジサンは何も教えてくれなかった。四日目からは一人で回つた。一日に一里（約四キロ）も離れた山の中のお得意さんのところを回り、暗くなると宿に帰ってきた。得意先では、薬を入れた柳行李を上り段に置かせてもらい、立つたまま薬の入れ替えや帳面を付けた。そろばんは独学で覚えた。お客さんのほうが得意で、計算を代わつてあげようかといわれたこともある。見習いでも、一日に二十軒のお得意さんを歩いて回らなければならなかったが、慣れないときは予定の得意先を回りきれないこともあつた。今でも少なくとも回つてオヤジサンに怒られる夢をみることもある。

中学を卒業したばかりの少年には初めて聞く旅先での言葉はわからず、お得意さんとの会話に苦労した。薬のことも商売のことも何一つわからないで行つたので、お得意さんから叱られて涙したことも度々あつた。夜になると一日の厳しい仕事で母が恋しくなり「今度帰ったら母の肩を揉んであげよう」と泣きながら思つた。

商売道具の柳行李は五段重ねで、紙袋入りの薬や外用薬などがぎっしり詰まつて重い。これを背負つて得意先を回るのだが、十五歳の少年では、最初は立ち上がることもすらできなかった。お得意さんの家では、立ち上がるときに手を貸して支えてもらい、後はどうにか歩いて回つた。慣れない間、得意先回りする日の宿での朝食は、緊張で喉を通らなかったが、仕事を終えてからとる夕食は美味しく食べられた。夕食が終わると、夜中の十二時くらいまで帳簿付けや古い薬の仕立て直しなどの仕事があつた。

オヤジサンは和一到薬のことと同時に、「お得意さんに信頼される人間になることをいつも考えなさい」と、人としての精神を教えてくれた。「薬屋さんは信用が第一」「薬を売るのでなく自分売れ」「お得意さんを可愛がる」とも教えられた。このほか、「バラのとげの中に自分はいる」とも教えられた。お得意さんに反発すると自分にとげが刺さるから、何でも「はい」といっておきなさいといわれた。和一是「どうしたらお得意さんに自分が信用してもらえ

か」を考えて仕事をした。

和一是初めての三年は見習いで、後の三年は御礼奉公として勤めた。見習い時代にはなにもわからないまま得意先に行くので、お得意さんの感情を害して薬の売り上げが減ることもあつた。お礼奉公の三年間は、見習いの期間に売上げが減つたお得意さんを、元どおりのお得意さんに戻す意味もあつた。

和一是就業に入つて十年後の二十五歳のとき、独立して一人業者になった。

和一是宿に一月ほど滞在して三百軒ほどのお得意さんを回つた。正月あけから春の農繁期前と稲刈り後から正月前の年二回、この地を回りに来た。

配置売薬の旅に出る朝は、母親がサンマの尾頭付きとお酒を一杯出して見送ってくれた。出掛けるときは仏壇を拜んで無事に帰れるように祈り、帰ってくると仏壇を拜んで、無事に帰れたことに感謝した。

和一是晴れた日の早朝に突堤に行き、虹を見て手を合わせた。

日曜日には文もやってきて、二人は語りあつた。文はイエスの話をした。

……最後の晩餐の席でイエス様がお弟子さんたちに言いました。

「このなかに、私を売り渡す者がいる」「その者は生まれてこなかった方がましだったろうに」と言われました。その者とは、お弟子のユダのことです。……

文は「うちはイエス様の教えを信じて生きていく。決して裏切らない。ユダにはならない、なつてはいけない」と声高く言った。

そして、この土地に漁師の信者が多くいると言い、イエスの最初の弟子は漁師だったと言った。……「イエス様は海辺を歩みながら兄弟の漁師が海で網を打っているのを見た。彼らは漁師だったのです。そこでイエス様は彼らに言われました。『私の後についてきなさい。そうすればあなたたちを、人間を捕る漁師になれるようにしてやろう』と言われました。そこで、彼らはすぐに網を棄て、イエス様に従ったのです。また少し進んでいくと、イエス様は別の兄弟が舟のなかで網を繕っているのを見られました。そこですぐ彼らと呼ばれました。すると彼らは、父親を雇い人たちとともに舟のなかに置き去りにして、イエス様の後について行きました」……

文は和一に言った。「うちは一生イエス様の教えについて行く」

和一は、自分と違う神を信じている文の話を聞いて、自分が生まれ育った神のことを考えていた。

たカトリック教会の神父を追い返しに行つたところ、逆に説き伏せられた。住民の大半が内信心の集落の人々は三名を完全な村八分にした。それは、四・五年続いたが「今後は他人を決してヤソには引きずり込まぬ」との約束で、村八分は解かれた。キリスト教は、明治の初期に邪宗の邪を外されたのちは、その信仰も自由になったが、国民のうちには未だ偏見と疑心をもつ者が少なくなかった。それにしても実質的には村落共同体的な集落の宗旨となつていた内信心、その仲間の異教に対する排除心は極めて強いものであった。しかし、村八分を解かれた一人の受洗者は、以後も堅信を崩さず、婚姻は一族内、あるいは他地域のキリスト者と結んで、子孫は繁栄し聖職にある者も十指を数えるに至つた。

地域集落の宗旨である内信心では個人や個々の都合で仲間から離散することは人間関係が許さず容易ではない。信教の自由など自己本位の勝手は通らない。

内信心での入信儀礼は小学校入学直前の春彼岸にまとめで行われた。

入信の儀礼は「お聴聞さを頂く」といって、信者の頭の「善知識」と呼ばれるものか信心練達の「お客人」のもとで執り行われた。「お聴聞」の儀礼で阿弥陀如来と縁を結び、「ご成就」の秘儀によって弥陀の救済にあずかるのである。命終をまたずに浄土往生が約束される正定聚つまり菩薩と

その山里は「内信心」が盛んで、住民の大半が、信仰仲間であつた。離島の藩の飛び地であつたこの地において、住民の生活面で特異なものが二つあつた。

一つは精神面での「内信心」他は経済面での「配置売業」である。

両者とも江戸時代に始まり、素朴な姿では戦前までに最盛期を迎えて、現在では余命を保っている状態である。内信心は信者の高齢化と継承者難で下降しているが、その大勢を下で支えているのが、村落共同体意識である。内信心は初め個人の「信歓喜」に始まり、ついで家族の信仰となり、近隣・隣組に及び、複合して小名集落（ムラ）に拡がり、さらに村落（藩政村）に充満し、各々が相続されて、実質的に家や地域の宗旨となつた。

内信心は共同体の精神的紐帯となつている。「内信心」とは檀那時の宗旨信仰をタテマエとする、いわゆる「寺信心」に対する呼称であつて、江戸時代の寺檀制度の陰にあつて、ホンネの信仰として寺僧抜きで在家同志が内々に信心を歎んできたものをいう。今も集落では、内信心が江戸時代同様、寺信心の対になり、人々の間に信奉されている。明治中期におけるある集落における、キリスト教受洗者に対する「村八分」の処置は地域共同体の精神的紐帯を損なうものとしてとられた。内信心の信者三名がキリスト教カトリックの洗礼を受けた。受洗のきっかけは町に進出し

同じ位につけて頂き、新しい後生が開けるのである。これは、弥陀の本願が成就したことになる。こうして、弥陀の救済にあずかったという自覚は体験的に得られる。幼少のことで忘失しても周囲の大人が保証し知らせてくれる。幼少期に「ご成就を頂く」ことは、信仰をとおして幼少時から地域社会に密着することになる。多くの集落では、内信心は村落共同体的な地域社会の信仰宗旨となつていた。

内信心に無縁な者が内信心の家に縁づいてきたのを機会に入信儀礼をうける場合は、信仰を変えて新たに家・地域社会の一員となるわけである。

和一が、この地でのお得意さん回りを終えて、明日は旅立つという日曜日の朝は晴れていた。突堤に行き、文と会つた。

「自分はここでの仕事が終わつたので明日は宿を去る。次に来るのは来春になる」

文は海の朝霧にかかる虹を指して言った。

「うちは、あそこへ行ってみるか」

「虹は太陽が霧の粒を照らすから見えると、あの霧の中に入ったら見えなくなるよ」と和一が言うと言は答えた。

「それでもいい、何も見えなくてもいい」

和一は「舟がいるよ」と言った。

文は「うち、小舟なら漕げるよ」と言った。

和一是その日の昼間、教会の前にあるトウヤの先にある漁師の家に行った。

カケで網の繕いをしていた漁師に言った。
「隣のトウヤの宿に泊まっています、葉屋です。木原和ひと申します」

漁師は「葉屋がわしに何の用かい。葉ならいらんよ」と顔も上げずに言った。

「明日の明け方に、そこに繋いである小さい方の舟をお借りできないでしょうか」

「舟借りてどこへ行く。釣りにかい」

「湾の隅に霧が立ち込めるところがあつて、晴れた日には虹ができます、そこへ行ってみたいのです」

「そげんことでかい」

和一是お札を入れた包みを漁師に渡した。

「お願いします。朝の一時間ほどです」

漁師は札を数えながら言った。

「あんた、舟漕げるとかい」

和一が「宿の女中さんが漕いでくれますので」と言うと、漁師は怪訝そうな顔で和一を見たが、「そげんことかい」と言い微笑んだ。

海に発生する霧は、舟には危険だが、湾の回りを山に囲まれて盆地のようなこの地の朝霧は小さな塊で発生するので、漁師も舟を貸す事に同意した。

「霧が深くて大きいようならやめとくんだな」と漁師は和一に言った、

その日の朝は晴れだった。

二人が目指すところの海面には霧が立ち上がっていた。文はそこに向かって、櫓をこいでいた。和一是舳先で霧の大きさを見ていた。「霧が深く大きいならやめとけ」と言った漁師の言葉を脳裏に浮かべていた。

湾の奥の入り込んだ、その場所の波は静止しているかのように穏やかであった。

文が櫓漕ぎを止めた。霧の中に入ったようであった。二人は船の真ん中にきて、朝陽が差ししてくる方を並んでみていた。水滴が陽に弾かれて色をつけていた。

和一是突堤から見えた虹が色のついた霧の粒子が射してくる陽の方向で微妙に変化して七色になるのかと思えた。文は「ほんと、なんもなかとね、いろんな色の水玉がたくさんあるかと思っていたのに」と言った。和一是文に舟を漕ぐのは誰に習ったかと聞いた。文は「お父さんの弟の叔父さんが漁師で子供の頃によく舟にのせてもらい覚えて」と言った。和一是子どもころに暗い穴のなかで見たお印のことを思った。霧の中で周りは何も見えず陽に当てられた水滴が光って見えるのと、自分があの日に見た光るものとはどう違うのだろうかと思った。

和一是文に言った。

「何も見えないところで、見えるものがあつた。それは光っていた」

その言葉を聞いた文は「それは、神様の仕業かもしれない」と言った。

和一是「イエス様には、そんなことができるのかな」と文にたずねた。

「そうよ、自分の心の奥にある魂を神様がお照らしになるの。それが光になるとよ。イエス様はその道を導いてくださるお方なのよ」

文の言葉を聞いて和一是言った。

「自分にはイエス様はいない。自分にとっての神は生まれ育つたところの隠し念仏の神だけだ。それを自分たちは神様とは言わずに仏様と言っている」

文は「それは、うちとあんたは信じているものが違うということになるね」

和一是頷きながら「そういうことになる」と言った。

「うちのところでは昔はかくれキリシタンと言われていた。今は潜伏キリシタンだったと言われている。それとあんたの隠し念仏というのとどう違うの」と文が言った。

「心から信じるものがあるのに、表向きに信じているふりするのは同じだが、信じているものが違っている」と和一是答えた。

「それは、うちとあんたは通じ合えないということになる

の」と文は言った。

「そうなるかな」と和一が言うと文は「いやだ、そんなのいやだ」と言い泣き崩れた。

和一是文の背中^{やまむら}に手を置いて「何で泣く」と言った。「うちはあんたとずっと一緒にいたい。また、虹を見たい。でもあんたはもうここを出て行く。来年の春まで来ないと言った。うちのこともなんかなんとも思っていない」

和一是言った。「二人は信じているものが違う、だから」

文は背中の和一の手を振り払い向き直って言った。

「だから駄目だっていうの。うちはイエス様を信じている。それでもあんたを信じたい。いけないの」

和一是文の肩を掴んで引き寄せた。

小さな虹が生まれる朝霧のなかの小舟の上でふたつの印がひとつとなった。

商いの旅から帰ると和一是、幼馴染で同業の一人親方である、山村一博^{やまむらかずひろ}と近郊の大都市のネオン街へ出かけた。駅から何分か歩くと大きな川があり、そこに架けられた石造りの橋を渡るとネオン街に辿り着く。橋を通る時、和一是いつも川面に映し出されるネオンのきらめきを見つめていた。澱んだ水面に浮かぶ原色のネオンの色は、その日はくすんで見えた。和一是旅先で見た虹と異なる色合いに戸惑うようであった。

いつも行く居酒屋に入り、山村と焼酎を飲み語り合った。山村は酔いが回ると和一を罵倒し責め立てるのが常であった。その日も、和一が旅先での話をする、目を吊り上げて言った。

「お前は偽善者だ。朝の海の虹のなかで結ばれたなどと、きれいいをいいやがって、それで責任とって一緒にいるうなんて言語道断だ」

「どうしてだ。おいはあの娘に対して責任をとらんといいかん」と和一は言った。

「無理だ、止めとけ。お前に人を愛する心があるのか。お前にあるのは欲望だけだ」と山村が叫ぶように言った。

「お前においの何がわかる」と和一は山村の肩を押した。

「おまえもおれも隠し念仏の子だ。同じ洞穴でお印を見た仲だ。あれはおのれの全てを仏様に委ねる儀式だ。欲望に翻弄されたいかんと仏様はおっしゃるのだ。欲をすて仏を信じろとおっしゃったのだ」

幼い頃に洞穴で「助け給え」と叫び、最初に「ご成就した」と大人に言われて連れ出されたのは山村であった。山村は怒りから涙声になって言った。

「確かにそうだった。しかし、凡人のおれには欲を捨て仏に身も心も委ねることなどできん。商いで稼いだ金を博打や色事に使った。全ては欲のなせることだ。仏様の教えに抗って生きている。おまえもそうだ」

く前へ歩いて行った。

頬に冷たいものが触れたと思った時、突風が道端の紙屑をさらっていき、その跡に雨滴が落ちてきた。黒い猫が道を横切り店の横の繁みの中に消えた。その上に白と紫の紫陽花の花が見えた。花びらを包む葉に浮かぶ雨滴に店先の電球の光が色をつけた。小さな虹のようであった。

「上がっていかんね、濡れとるよ。雨宿りしていかんね」という声がした。店の中の階段の下から、その声は届いてきた。それが、和一と秋枝の初めての出会いであった。

和一は女に手を引っ張られながら、階段を上り廊下の部屋へ通された。中は六畳の畳敷きで、床の間に花瓶があり、白い花びらの紫陽花がさしてあった。その傍に小さな円卓があり、紫色の傘をつけた電燈が置いてあった。

女は痩せた体型で三十代半ばに見えた。和一は濡れた服を脱がされて浴衣を着せられた。着せ終ると笑みを浮かべながら、和一に向かって言った。

「あんた、ここへ来るとは初めてね」

和一は頷きながら体を硬くした。女はその様子を見て、目を細めて言った。

「あんた、こういうことも初めて」

和一は俯き加減に「なんも知らんとここに来た」と言った。女は自分の名前は秋枝と言った。「秋になると葉を落として、冬になると枝だけの裸になる木があるでしょう、あ

和一は項垂れて聞いていた。

「おまえは耶穌教の生娘と間違いを起こした。その責任をとると言うが、その娘の人格や人生をどう考えているんだ。イエス・キリストを信じ、マリアになろうという娘ではなかったのか」

和一は自分の心を見透かされたような、山村の言葉にうろたえて目がしらをおさえた。山村が和一の手を払い言った。

「おまえ、柳通りのおんなはどうした。まだ通っているとか」

初めて二人でネオン街へ来たときに、山村は川の下流にある木橋を渡った先にある柳通りという街へ和一を連れて行った。橋を渡り終えると、山村が言った。

「おまえの知らん世界がこの先にある、おれはここで別れるから一人で行ってみろ」

杉板が何枚か重ね合わされて色の違う電球のつけられた鳥居型の門をくぐると、路地が真直ぐに延びていた。

川岸の方に枝垂れ柳が連なり、道を挟み向いに木造の二階家が並んでいた。店の屋根の先に色つきの電球がぶら下がり、軒先には、「めし・酒・やど」などの暖簾が下がっていた。そちらに目をやると「お客さん、寄っていかんね」という声がした。和一は初めてで勝手がわからず、応じることな

れと一緒に、わたしも、違うのは春になって新しい葉がでないところ」と言って声を立てて笑った。

和一は「そげんことはなかよ」と言った。

和一はその後、旅から帰ると秋枝の元へ通うようになっていた。

山村は酔いが回ったのか、怒りの声が大きくなってきた。「お前、今夜も行くところ、柳通りの女のところへ」と言い立ち上がった。そして、和一に向かって「いいか、きれいいとじゃすまんぞ、きちんとけりつけろよ。要はカネ次第だ」と言うと、ふらつきながら勘定書きを見て、和一に数枚の札を渡して店を出て行った。

和一は二階へ上り、いつもの部屋で秋枝と向かいあった。「もう、ここへは来れんことになった」と和一が言うと秋枝は「そう、ちょうどよかった。この店ね、もうすぐなくなるよ」と言った。和一が「どうしてだ」と聞くと、

「八年前にお上が、公にこの商売をしてはいけんことにして、店の体裁変えてやってきとったけど、それもできんことになった」と秋枝は言った。和一が「そうなんか、知らなかった」と言うと「あんた、いい人ができたかね、所帯でも持つとね」と秋枝が言った。

「そげんことだ」と和一は言った。床の間の花瓶に紅葉の枝がさしてあった。

「きれいな色の葉になって落ちていって裸木になるとやろ

うけど、次の春には新しい葉が出るよね。わたしもそうありたいけど駄目ね、このまま枯れてしまうのね、きつと」と秋枝は花瓶を指さしながら言った。「これから、どうすると」と和一が聞くと「わたし、店が閉まったら、年寄の世話をするところで働くつもり。これまで稼がしてもらったから、恩返しのもりで老いた男のお世話することにした」と言い秋枝は笑った。

「あんた、おいがここへいる時に、商売を忘れることはなかったとか」と和一が聞いた。

秋枝は少し笑みを浮かべて「あんたは、いいお客さんよ。それだよ」と言い、さらに

「あんたも、ここへこんごとなったら、普通の女のひと所帯を持って、まっとうに暮らせればとわたし思っとなった」とも言った。

「普通の女のひととはどんな人だ」と和一は聞いた。

「母になって、マリアのようになりたいと願う女の人かも知ね」と秋枝が言った。

「あんたは違ふとか」と和一が言う、秋枝は「もう、わたしは無理だわ」と言った。

和一は「これから金が必要とじゃないか」と言、懐から取り出した封筒を渡そうとした。秋枝はそれを手で押しやって「要らないわ、充分稼いだから」と言った。

階段を下りて、店先で和一は秋枝に言った「世話になっ

のだろうかと思った。

信徒は表向き、仏教寺院に所属し、地域の守り神である神社の氏子となり、庄屋役宅で「踏絵」を行い、キリシタンではないように振る舞っていた。現在の教会堂は神父の強い願いにより、復帰の象徴としてかつて「踏絵」が行われた庄屋役宅のあった場所が選ばれた。天主堂の祭壇になっているところは、キリシタン弾圧の日々に踏絵が行われていた信徒の血と涙の流れたとある。

文夫は夕暮れの突堤に行きマリア像の立つ岬の断崖の先に広がる海原を見つめていた。

朝方にトウヤの先の漁師と話した後に、教会へ再び行って、神父に父の和一のことを尋ねた。神父の話で父が、この地で何をしたのかを知ることが出来た。

父の和一は晩年まで、配置売葉の仕事をしたが、この地に来ることは、そのこと以来二度となかったという。

文夫は沈みゆく夕日に背後を照らされているマリア像を見つめながら、この地に伝わる、その伝承について思いを巡らせた。

それは、「海を渡るマリア」についての伝承である。現在の教会が建っているところへ向かって、対岸からマリア様が番傘をさし下駄を履いて渡ってきた。だから、あの場所に教会を建てることになったという話である。

で、ありがとう。楽しかった」
「お幸せにね」と言、秋枝は和一の背を押した。和一是振り向かず路地に出了た。

門に向かって数歩歩いたところで、和一は振り返って店を見た。秋枝が階段の前の電灯の下で、しゃがみこんで泣いているのが目に入った。

和一は門を出て木橋を渡った。川面に浮かぶネオンの反射が、和一の視線を遮り、山村の言葉が脳裏に浮かんできた。「おまえは、神も仏も信じることができない。人を愛することもできない偽善者だ」「おまえには虹の向こうにあるものなど見えない」

文の生まれ育った集落では、その昔の禁教期の時代にもひそかに組織的に信仰が続けられ、共同体の指導者がキリシタンの儀礼や行事を司っていた。長期にわたって独自に信仰を続けるなかで、集落の潜伏キリシタンは、生活や生業に根ざしたアワビの貝殻など身近なものを信心具として代用し拝むということによって信仰を実践していた。

文は和一到りて潜伏キリシタンのことを語った。

「うちのおじいさんが子供の頃。山の水を汲んできてアワビの貝殻にいれて拝んだとゆうた。拝んでいると貝殻の底にマリア様が見えよるとゆうた」

和一はアワビの貝殻の底の文様が、お印となって見えた

また、現在マリア像が立つ岬の断崖にはマリア様の立ち姿が見えると子どもたちは教えられてきた。断崖の岸壁が崩れ落ちた後に現在のマリア像は建てられたという。

夕陽がマリア像を浮かび上がらせて沈んでゆくときに、文夫は自分はキリスト教徒ではないが、深く切れ込んだ湾をはさんで見える教会と、夕陽に照らされるマリア像を見て、この地では暮らして信仰が深く結びついているのを感じさせられた。

春になり、和一は文のいる宿に滞在した。

二人は日曜日の晴れた朝に虹をみた。

和一は自分のなかにある歪んだ思いを清算できないでいた。

和一は文に言った。

「家へ帰り、ふたりのことを家族に話した。一緒になりたいたと言ったら家族は反対と言った。耶蘇教の信徒とは夫婦にはさせられないと言った。どうしてもというなら、信仰を変えするために、家の内信心の入信儀礼を受けんといかんとゆう」

文は言った。

「生まれてからずっと、イエス様を信じて生きてきた。信仰を変えることはできんよ」

ふたりが見つめる虹の生まれる朝霧を透過した陽の光が

海面のさざ波にきらめいた。

「うちもお父さんにあんたのことを話した。信じる神様が違う男とは一緒にさせられんと言った」と文は涙を浮かべて言った。

文は、生まれた時から、親が信じる神を与えられて育ってきた。それを信じないとか変えるとかいうことなど考えたことなどなかった。しかし、一緒にいるには、被せられている信仰の網を破らなければならなかった。

「うちは、あんたと一緒に暮らしたい。でも、信仰を変えることは出来ん」と言い、文は泣き崩れた。

和一是自分には、文の思い程に一途な仏への信仰心がないことを感じていた。

和一是宿に滞在し、得意先回りに出かけた。

ふたりは月の明るい夜に、人目を避けて、教会を見下ろす高台の神社の石段を登り、この地のキリシタンが氏子をしていた社のなかで、お互いを確かめあった。

和一が得意先回りを終えて、宿を去る日が近づいてきた。

和一是文の家へ行き、父親に会った。

「わしは洗礼を受けている。親代々のキリスト教徒だ。潜伏の時代の御先祖は仏教徒であったが、形だけで心はキリシタンだった」

和一是文の父親に向かって言った。

「おいの家は仏教徒ですが、お寺の仏に仕えるのは形だけ

で、隠し念仏といって、地域の中で自分たちの方法で仏様を崇めます」

「わしの親父は、神社の側にあった昔の木造の教会を建てた大工だった。わしらの家族は教会とは一体で暮らしとる」父親はそういうと和一に背を向けた。そして言った。

「もう二度と来てくれるな。娘とのことはなかったことにしてくれ」

和一が宿を立つ前日の朝にふたりは突堤に行った。文が虹に背を向けて岬の断崖の方を見て言った。

「小さい頃に、舟に乗せてくれた叔父さんが教えてくれた。陽が沈む頃に、あそこの岩壁にマリア様がお立ちになっているのが見える」と

文の指さした岸壁の裾を荒い波が激しく叩いているのを和一是見ていた。

「うちは、あんたとは一緒にはなれん、今日が最後の夜になる。だから、あそこに行つて、マリア様のお立ちになるのを見たい」と文が言うと、和一是「マリア様になを祈ると」と聞いた。「うちは、これから先、あんたの他に男の人とは決して結ばないと、お誓いすると」と文が言った。和一是自分の邪悪さにうろたえながら、文に引きずられるようになっていた。和一是文の身体を引き寄せて言った。

「わかった。夕暮れに舟を借りてあそこへ行つてみよう」

和一是トウヤの先の漁師に舟を借りに行った。漁師は言った。「マリア様が見えるなんてことありはせんよ。日が沈む前にもどれ」

ふたりは小舟で突堤の先端を通り過ぎて、湾の外へ出た。内海の静かな波は、外海へ出た途端に激しいうねりの高波に変わった。船は大きく揺れ、文は懸命に櫓を漕ぎ、マリア様の見えるという岸壁に舟を近づけて行った。海原の向こうに沈んでいく夕陽が岸壁を照らした。大きなうねりの波が、そこへ打ちつけて、砕けた波の滴が照らす夕陽で色をつけた。文が叫んだ。「マリア様があそこにおらす。うちたちを見とらす」

岩壁に砕かれて飛散する波の滴が描く文様が沈みゆく夕陽に照らされてマリア像の姿となって、ふたりの前に現れた。文は胸で十字を切り、手をあわせ言った。

「マリア様、うちはこん人の他の誰とも結ばずに生きていきます。お誓い申します」

荒波が大きく舟を揺らし、舟を沖へと押し流した。漕いでいて櫓を離れた文が和一にしがみついた。陽が沈み舟の周りが暗闇になった。「うちは、このまま、あんたと別の世界にいく。神様がおられんところにふたりで行く」と泣き叫んだ。ふたりが抱き合ったままの舟は、さらに沖へと流されて行った。

翌朝、漁船が沖合の離れた小島の岩礁に打ち上げられて

いる小舟を見つけた。

舟の中で抱き合ったまま気を失っている二人を引き離し、それぞれを別の漁船に乗せた。

陸へ運ばれ、数日後に意識を取り戻した二人が、その後に会うことはなかった。

文夫は船着場から歩いて、そこへ向かった。樹林を切り裂いたような道が続いた。

九十九折りの坂道を上り、途中で軽トラックが対向してきたので、道を聞いた。

「すいません、教会はこの先にあるのでしょうか」

「あんた、港から歩いてきんさったとかい」

「そうです。ずいぶん歩きました」

「ここで半分くらいじゃろう。こん道ば上りつめんしゃつたら教会に着くけん。用心して行きんしゃい」

文夫が教会で神父に、父の和一のことをたずねたときに、この島のことを聞いた。

「松下文さんは、その後どうされましたか」

「当時の神父の世話で近隣の島へ行きました。そこにある教会の養護施設で働いておられます。こちらに戻られることはありません。ご両親も亡くなられております」

その島は本土の港から客船で四十分くらいのところにあつた。元々、その島は神道と仏教の教徒が住んでいたが、

島外からキリシタン弾圧を逃れるために、カトリックの信徒が移住して来ていた。島は四つの集落からなり、港のある中心の集落は、ほとんどが神道と仏教徒である。他の三つの集落はほとんどの住民がカトリックの信者であり、千人足らずの住民の半数にあたる。隠れキリシタンが上陸したと伝えられる浜の上の丘に教会が建っている。

文夫が坂道を上り切り、息をきらしながら、しばらく緩やかな平坦道を行くと目前に大きな天主堂が現れた。歩く途中に見て来た樹林とアスファルト道から急に別の世界が広がったように見えた。天主堂の右手に小さな庭があり、聖母像が立っていた。左側にはキリシタン墓地があり、十字架の墓標が整然と並んで立っていた。純白の木造の天主堂は、丸屋根の前に十字架が光っていて、背後には雲がなぐ青々と澄み切った空から陽の光が包み込んでいた。

文夫は扉を開き中に入った。人影も音もなく、ステンドグラスの窓から差し込む陽光が虹のようになって、床や天井を照らしていた。天主堂の裏手に神父の住居らしき建物があり、文夫は軽くドアを叩いた。応答がなかった。そこで、「こんにちは」と叫んでもみたが、不在の様子であった。文夫は天主堂の前にある民家をたずねた。敷地に軽トラックが止まっていたので、在宅と思い「こんにちは」と大きな声で呼んでみた。しばらくして、家の中から、年老的な婦人が出てきた。

の保育園・小学校・中学校で海と山の自然に触れて生き生きとして過ごした子供たちは、学校を卒業すると島を出て行った。

馬木^{まき}という名の老婦人は松下文さんのことを知っていた。「島を出て行った子供たちは、盆や正月には、島のお母さんの文さんのところへ戻ってきた。みんな、島が故郷で、マリア園の文さんを実のお母さんのように思うとった」と馬木さんは言った。

「あんだ、船着場から歩いてきんさったと」

「そうです。上り坂ばかりで、きんさったです。帰りは下りなので楽かもしれません」

「あたいが車で送りたい。ほろか車ばってん、船の出る時間まで島は案内してやりたい」と、馬木さんは言った。

文夫は同乗させてもらって、島で一番高いところにある展望所に案内してもらった。車を停めて歩いて展望台に上った。馬木さんは島の周囲にある海の向こうに見える島々や陸地のことを説明してくれた。

「あんだ文さんとはどげな関わりのあると」と馬木さんが文夫にたずねた。

「昔、私の父が親しくしていた人です」

「そげんこつね。あそこが、あんだが船に乗ったところたい。そこからバスで一時間くらい行ったところに、文さんのいるホームがあるけん行ってみんさい」と馬木さんは言

「すいません。神父様がご不在のようなので、おたずねします。こちらの教会の側にマリア園という養護施設があるという事で参りました」

婦人は文夫を、じっと見ながら言った。

「あんだ、マリア園にきんさったと」

「そこで働いておられるという松下文さんにお会いしに来ました」と文夫は言った。

「そうかい、それは御苦労なことやったな。マリア園は天主堂の前の道を右に行き、しばし行くと左に曲がる道がある。そいばいくと、建物が見える。そいばってん、誰もおらんよ。去年の春に閉園してしもうとる」

「そうですか、知りませんでした。調べてくれればよかったですね。それで松下文さんは、どこかへ行かれたのでしょうか」

「そげんと。文さんは長い間、寮母さんばしとられた人たい。とてもよか人で、園のこどもたちはお母さんと呼んで慕うとった」

マリア園は昨年の春に閉園していた。約九十年前に、キリスト教徒の女性たちが、ボランティアで孤児を預かったのが始まりであった。開園当初は親の事情で園の玄関前に置き去りにされた子供もいた。戦災孤児も多かった。生後まもなく親の都合で捨てられた子供は、本土にある乳児院で育てられて、幼児期に海を渡って島へやってきた。島

い、さらに「文さんはマリア園が閉園する前に、目を患って島は出て行った。教会の神父さんがお世話くださり、そのホームに入んさった」と言った。

馬木さんは文夫に、ホームの名前を覚えてくれた。船着場に着くと文夫は馬木さんに謝礼を渡そうとした。

馬木さんは「そげなもんいらん。あたいの話ば聞いてくれてもらい、よかったたい。文さんに会ったらよろしゅうゆうというて」と言って去って行った。

文夫は玄関の屋根に十字架の立つ、入口に「聖愛園」と書かれた看板のある建物の前に立ち、呼び出しのベルを押した。しばらくして中から応答があった。「どういふご用件でしようか」と扉は開かずには聞かれた。文夫は少し声を大きくして言った。



アジアカ文化社 1000円

「こちらにおられる松下文さんにお会いしに来ました」
間をおいて「どういう関係の方ですか」と聞かれた。「私の父が昔に親しくさせて頂きました」と文夫は答えた。「お名前は」と聞かれ「木原文夫です。父の名は和一です」と言う。「しばらくお待ちください」という返答があった。数分後に扉が開き、中からシスターの制服の女性が出てきた。「お入りください」と言われて文夫は玄関の中に入った。「松下文さんにお名前をお伝えしましたところ、お会いになるということです。お連れしますので、その椅子でお待ちください」と文夫は言われた。少し長く待たされた。先ほどの女性が出てきた。

「お待たせしました。こちらへどうぞ」と言われて面会室というプレートのある部屋へ案内された。女性が引き戸を開けて「お入りください」と言い、文夫は中に入った。

目の前に盲人用杖を手にしたシスター服の老婦人が立っていた。案内の女性が「松下文さんです」と言い「着替えをされましたのでお待たせしました」と言った。

「木原文夫です。和一の息子です」と文夫が言うと「松下文です」と小さな声で答えた。「ごめんさいね、わたしはあなたのお顔が見えません」と文が言った。

「木原和一は昨年亡くなりました。寝床の下にノートがあり、そこに文さんのことが書かれていました」と文夫が言

現在、文の生まれ育った集落に近い岬では、海上に向かってマリア像が佇んでいる。

この像は漁人たちに海の道しるべ、心の灯となるようにと建立された。漁師たちが今も航海の安全と豊漁を願って祈る信仰のシンボルで、波静かな時も、荒天の日も海を見つめ、漁船の往来を見守っている。漁に出る信徒たちは必ず行きと帰りに船から手を合わせている。

松下文の墓は島の天主堂の隣にあるキリシタン墓地にある。マリア園で育った子供たちは、島に帰るところを訪れて、手を合わせて十字を切り、文への思いを募らせた。

◇参考文献

- 内信心念仏考 長忠生 海鳥社
田代入れ薬 長忠生 中富記念くすり博物館
田代の売薬習俗 制作・さいたま民族文化研究所
企画・文化庁文化財部伝統文化課
天草キリシタン史概説 天草キリシタン館
世界文化遺産 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産4
天草吉利支丹史跡探訪 天草キリシタン文化史研究会

（「ガランス」31号より転載）

うと文は「あーっ」と言って泣き伏した。
文夫は言った。「父は、ノートに『文ゆるしてくれ、すまない。すまない。……』と何度も書いておりました」「お父様は何をされてましたか」と文が聞いた。
「病で歩けなくなるまで薬屋をしていました」と文夫が言ううと、文は涙を手で拭いながら「そうでしたか」と言った。「私の名前は文さんから頂いたものです」と文夫が言うと「あのひとがそんなことを」と言い目に手を当てた。
「父は死ぬまで文さんのことを思い続けていました」と文夫は言った。

文は胸の前で十字を切り言った。
「イエス様はお弟子のユダに言われました。『その者は生まれてこなければよかった』と。わたしは和一さんと結ばれて、生まれてきてよかったと思えました。これまでずっと、その思いで生きてきました」

文夫は別際に文に言った。
「いつまでもお元気でいてください。島で育ったたくさん子供さんがおられますから」

文夫が文に会った翌年の春に、聖愛園から手紙が届いた。……「松下文さんは天に召されました。最後に残された言葉として『和一さんありがとう、島の子供たちありがとう。生まれてきてよかった』と言われました」



入江修山

いりえ しゅうぜん

1951 宮崎県生まれ

30代に福岡県で塩野実（松原新一）氏の文学学校に学び、同氏主宰の「河床」同人として小説を本名で連載する

51歳で脱サラ就農し、有機稲作農業経営の傍らに随筆と小説を「ガランス」に投稿する。同誌の会員となり、近年は郷土史を基にした作品を筆名で創作している



出版と並行しての同人雑誌

『ガランス』は、平成六年（一九九四）五月に創刊され、昨年令和五年（二〇二三）十二月に31号を発行しました。年一回のペースで三十年間発行を続けることができた同人雑誌と自負しています。旗揚げしたのは、田瀬明子（故人）、鈴木比嗟子の両名で、発足当時の会員は八名でした。「ガランス」と名付けた理由をよく聞かれることがありますが、フランス語であかね雲、あかね空の意味です。往年の映画ファンなら知っておられると思いますが、「天井桟敷の人々」のアルレッティ扮する女主人公の名前もガランスでした。創刊当時は今ひとつしっくりこないと感じられたようですが、掲載作品の多くが同人誌仲間や一般読者の反響を呼び、またメディアの同人誌批評で取り上げられるうちに、「ガランス」が親しみのある自他ともに許す名前になった感じがします。

私が『ガランス』に入会したのが、平成一三年（二〇一一）で、田瀬さんの後を継いで編集人を務めたのが、平成一八年（二〇〇六）十二月発行の十四号でした。それから新型コロナウイルス感染症が流行りだす令和元年末（二〇一九）まで定例的に合評会を開いていました。会員

の作品はもちろん、芥川賞受賞作や会員から推薦のあった作品を、口角泡を飛ばして批評し合いました。言いっぱなしでは責任ある批評ができないということで各自文章にあらかじめコピーして臨みました。合評会の場所の確保が難題でしたが、会員の田部光子さん（今年三月六日ご逝去）が渡辺通りに開校された（二〇一五年六月）通称「三丁目芸術学校」をお借りしてからは、出前を取って開放的な雰囲気で開催することができるようになりました。芸術学校の恩恵はそればかりでなく、田部さんのお知り合いのアーティストの繋がりによって、『ガランス』に入会する新人会員にも恵まれました。当時の会員は十名程度で、若手、中堅、ベテランと各年代層が揃っていました。発行のたびに新聞各紙や文芸誌の同人雑誌評に取り上げられ、今振り返ると、私にとってその頃が『ガランス』の活動が最も充実していた時期のように思われます。

今も編集人の心に強い印象を残していて、広く読まれて欲しい作品名を挙げてみます。

ガランス14号「ろくろ侍」（小説） 周防凜太郎
ガランス16号「卯の花腐し」（小説） 鈴木比嗟子
ガランス19号「共犯者」（小説） 宇内帰一
ガランス20号「石橋忍月について」（評論） 新名規明
ガランス23号「電波塔」（小説） 大原祐

ガランス24号「企み小説の前語り」（評論） ミッコ田部

新型コロナウイルスの蔓延は、感染予防対応で私たちの暮らしに大きな変化をもたらしました。3密、ソーシャル・ディスタンス、在宅勤務、キャッシュレス決済、WEB会、家族葬などの新語が表わすように、人と人との接触をできる限り減らし、情報通信技術を駆使して社会経済を効率よく動かす潮流が一段と強まりました。私たちガランスの会も影響をもろに受けました。合評会を中止し、会員間の連絡は電話と郵便とEメール中心になりました。フェーストゥフェースのように十分に納得の行く議論はできませんが、それでも、寄せられた原稿を添削し、コメントを付して送り返し、完成度の高い作品作りに努め、年一回の発行を続けました。

今年になってようやくコロナ禍が一段落し、社会全体に活気が見えてきています。ガランスの会も交流を再開しようとした矢先、『ガランス』31号掲載の入江修山氏の「父のマリア」がまほろば賞優秀作として『文芸思潮』に掲載されることになり、コロナ禍で沈滞していた会のムードを吹き飛ばす、活動に弾みをつける朗報でした。会員一同にとって大きな励みとなります。『ガランス』がまほろば賞優秀作に選ばれるのは、25号掲載の拙作「擬似的症候群」に続き二度目です。

同人誌は、商業誌と違って営利目的で発行していません。



「ガランス」メンバー



州文学』紙上に掲載された宮崎康平氏の「まぼろしの邪馬台国」が評判になり、単行本化、映画化されるに至り、それまで一部の研究者だけのものであった邪馬台国の所在地論争に、一般の民間人が加わっての論争に発展していった。所在地のほとんどが、近畿と北部九州の二箇所にしぼられていました。「これだ、北部九州の福岡の出版社だから、邪馬台国論争に加わり発信を続ける雑誌を出す資格も意味もある」というひらめきから、邪馬台国を中心とする古代史の研究雑誌『季刊・邪馬台国』を発行することになりました。幸いなことに、編集者として長崎県諫早市在住の芥川賞作家の野呂邦暢氏が手を上げてくださりました。野呂氏は歴史小説の『諫早菖蒲日記』や『落城記』などの著作もあり、本人ご自身が古代史研究にも意欲的に取り組んでおられ、編集にも熱心にあたってくださいました。四号が、残念なことに、四号の編集途次に急逝されました。四号が

らは、京都大学教授で邪馬台国の研究家として著名な安本美典氏が編集者となってくださっています。この雑誌が発行された当時、「三号雑誌で終わるだろう。下手したら梓書院自体が潰れる」と噂されたこともありましたが、現在145号に達しています。ただ、読者の高齢化、邪馬台国ブームの鎮静化、活字離れなどの要因で、当初の発行部数を大幅に減らしています。元々地味で硬い広告の取れない赤字雑誌で、この先発行を続けられるか不安ではありませんが、今や邪馬台国問題の研究資料として多くの人々の役に立つ存在となっていることを考えると、赤字だからといって簡単にはやめるわけにはいきません。梓書院も創立者が高齢となり、代表権を持つ会長に退き、現在二代目を子息が継ぎ、若い感覚を活かした事業展開を進めています。インターネットの躍進などによって書籍や新聞などの活字媒体の利用率が低下する状況下、こうした活字離れ現象を逆手に取って、漫画やアニメによる表現を好む世代に向けて、漫画の出版物を手がけることにしました。最初に刊行したのは、元九州大学医学部教授で、ペースメーカーの父として医療界ではよく知られている田原淳氏（大分県中津市）の評伝でした。地元の偉人でありながら忘れられている人物の業績を知らせる意義は大きい。ただ、それには、活字ではなく漫画がいい、という読者からの提案があったからです。社内で検討の結果、漫画だけで

引き続き、『ガランス』を発行している梓書院を紹介させていただきます。梓書院は、『ガランス』を旗揚げした鈴木比喩子（田村明美）さんが興した地元の出版社で、そのご縁で創刊時より同社に発行をお願いしています。ガランスの会の所在地も梓書院内にしています。梓書院が福岡市で立ち上がったのは、昭和四七年（一九七二）、五十二年前、株式会社として発足しています。地方出版社の使命の一つである地域の埋もれた人や作品の掘り起こしに務め、火野葦平ら著名作家が多数参加していた文芸同人誌『九州文学』の創作篇を一冊にまとめ、九州文壇の歴史を記録する貴重な資料となった『記録九州文学』を刊行したこともその一例です。九州から全国に向けて継続して発信できるものは何か、それは雑誌だということから、雑誌の刊行を企画しました。文化雑誌や政治・経済雑誌を福岡からというのはどうい無理があり、それでは何があるかと考えました。当時、『九

自腹を切っても優れた作品を発表し、期待の持てる作家を育てるためにあります。その原点は、人間が何者にもとらわれず自由に、創造的に生きたいという欲求に根ざしています。言い換えれば、書くことによって、一つしかない人生を想像的に生きる目的そのものをかなえたいからだと思います。



梓書院

は内容の情報量が乏しいため、田原氏の評伝を簡潔にまとめた活字の媒体を併存させて、教育漫画として特徴あるジャンルが築けるのではないかと、新たな発想が生まれました。

現在、その発想で九州各県市町村の自治体に、それぞれの地域の偉人や著名人を地域の誇りとして住民に知ってもらうことを提案し、梓書院の事業の拡張につなげていっています。教育漫画は、学校の生徒に配付してもらう、あるいは地域の団体ぐるみで購入してもらうという販売形態によって当社の安定した事業になります。好評を博している偉人・文化ものがありは、大分県宇佐郡の双葉山、佐賀県の鍋島直正、対馬の宗義智、博多商人の神谷宗湛、長崎の長岡半太郎、沖縄の屋良朝苗、福岡の海の民宗像など相当数が挙げられます。



梓書院社内の様子

沿って進んでいます。九州という地域にとらわれず、全国的に通用する出版を目指して研鑽を積んでいます。すでに暮らしのハウツー物やビジネス書の実績があります。社会の動きに取り残されないように、そして何よりも読者のニーズに答える、あるいはニーズを掘り起こす活動を社員一同続けていきたいと思っています。

最後に受賞歴を挙げさせていただきます。

地域文化向上に寄与したということで福岡市文化功労賞を受賞（二〇〇一年）。邪馬台国関連の著作で奥野正男氏と版元である梓書院が共に毎日出版文化賞を受賞（二〇〇四年）。

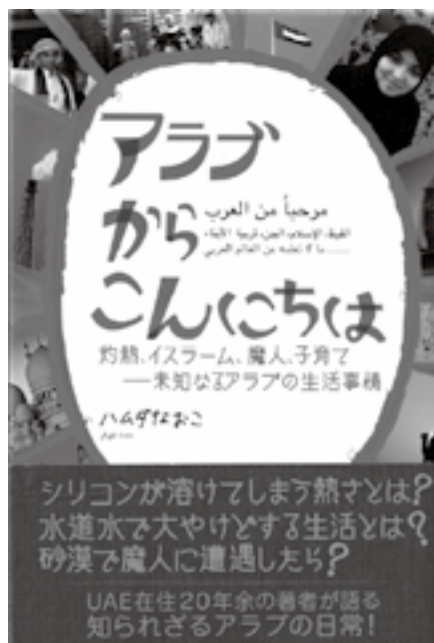
（文責／小河原範夫）

ガランス 〒812-0044

福岡市博多区千代三丁目二一 梓書院内

編集発行人／小河原範夫

☎〇九二・六四三・七〇七五



黄昏の朝

藤原伸久

目に見えない物が見えるというのはひとつの特殊な才能には違いない。しかしそれは案外厄介なことかもしれない。

一 白い蛇

高橋キリコが初めて店にやってきた時は雨降りだった。しつこい梅雨の雨がしとしとと屋根を濡らしている夕方だった。

入り口のドアにつけられた鈴がチリチリと鳴り、紫の傘をすぼめながら女が入ってきた。ジーンズに白いTシャツ、右手に小さな緑色のバッグを持っている。髪はしめつてい

る。――女は傘を傘立てに入れ、ゆっくり歩いて、カウンターのすぐ前のテーブル席に腰を降ろした。

「いらっしやいませ」

微笑んで声を掛けると、女は微かに頭を下げた。

「コーヒー、ホットで」

二、三度瞬きをして、カウンターの奥に目をやり、ささやくような声で女は言った。ハイ、と答え、お冷やを持っていくついでに、

「タオルどうぞ。髪、濡れますよ」

と、新しいタオルをテーブルの隅に置いた。女は薄く笑い、頭を下げたが、それを使おうとする気配は全くない。

笑った瞳は黒目がちで、眼鏡越しに深い色をたたえている。頬に赤みがなく真っ白で一分の熱も感じない。髪をうしろで束ねていたが、化粧づけはさらさらなく、解れ毛に細かい水滴がうっとうしそうに光っている。

女は笑ったまま少しの間こっちを見ていた。それはあまりにも熱のない視線だった。怪談話に出てくる幽霊みたいだなと思ってしまった。コーヒーを淹れている間、女は時々視線を送ってきた。五秒ぐらい見ては瞳を反らし、また数秒こっちを見ては目をふせる。これはあまり気持ちのいいもんじゃない。どうにも気になってたまらないので、

「僕の顔、何かついてます？」

と、少し皮肉っぽく茶化して言った。すると女は目に見えてうるたえたが、数秒ののち、まっすぐにこっちを見つめ返し、

「ごめんなさい。失礼ですよ、私」

と、案外はつきりした声でつぶやいた。

「いやア、あんまり見つめられるもんで」

照れもあって、頭を掻き掻き言う。

「私、人が見えないモノが見えるんです」

突拍子もないことを平然と女は口にした。呆気に取られて、ハア？と聞き返してしまった。女はいたって真面目な顔つきだ。

「左の手首、痛くはありませんか？」

エツと思った。おとといの晩、階段でつまづきそうになって、慌てて左手を出して痛めたのだ。びっくりして彼女の顔を見た。

「どうして分かるの？」

女は少しホッとしたように息を吐いた。

「左の手首の所に、白い蛇が巻きついてます」

「蛇？ 白い蛇？」

言っておくが左手首には湿布も何もしていない。手首自体の動きに違和感があるというわけでもない。なぜ分かるのか？ しかもいきなり白蛇と言われれば誰だって驚く。呆然とカウンターに棒立ちになってしまった。

「信じてもらえないのは分かっています」

言うなり、女はすっと立ち上がりカウンターの前まで歩いてくる。

「腕をカウンターに置いて下さい」

あまりの静かな口調に圧倒され、言われるままに腕を置いた。女の髪はまだ湿っている。

「取りますね」

女は絡まったヒモをほどくように、両手を手首の辺りで動かしている。何だか手品を見ている気がした。女の手が腕に触れたが、ひどく冷たかった。冷たかったが、人間の肉の感触は確かにあった。

ヌルリと何かがはがれた。いや、そう感じた。

「取れました」

言ってから、自分の右手を顔の前に差し出す。蛇の尻尾をつまんでいるかのような手つき。しかし、もちろん何も見えない。

「痛い、ですか？」

ハッと我に返る。痛みが消えていた。全く痛みがないのだ！ゴクリと生唾を呑み、まじまじと彼女の瞳を見つめた。

「蛇は放っておくと、また巻きつきます。何か入れ物ないですか？」

「入れ物？」

声がひっくり返りそう。

「ダンボールか何かでいいんです。囲いのある物に入れれば出てきません」

奥からあたふたと小さなダンボールを持ってくる。野菜の入っていたヤツだ。

女はひょいと、蛇（らしきもの）を箱に入れ、ポンとフタを閉じる。

「え？コレで出て来ないの？」

完全に信じ切っている自分がそこにいた。

「大丈夫です。出てきません」

女は穏やかに笑った。頬に紅みが差している。彼女はゆっくりとイスに腰かけた。

「気持ち悪いですよ、こんなこと……」

「いや、何とっていいか。信じられないですよ、まだ」

「コーヒークップをテーブルに置いて言う」と、

「そうですね。それが普通ですよ」

「そういうのって、しょっちゅう見えるんですか？」

お盆を抱えたまま何となく尋ねていた。

「見える日と見えない日があります。こんな雨降りの日はよく見えます」

「へえ。幽霊みたい？」

コーヒーを飲む女の白い歯がカチツとカップに触れた。笑っていたのだ。

「いいえ。実物そのものです。私にとっては全部リアルな実体です。重さもあります」

実物と聞いてちよつと背中中に冷たいものを感じた。本物の蛇が腕に巻きついてる姿を想像してしまったからだ。

「実物そのものの蛇をよく掴めますね」

「初めは怖かったけど、そのうちおそろおそろつまんできました。今では平気です。噛みついたり、攻撃したりしませんから」

女はコーヒーにミルクを垂らし、スプーンでゆるく掻き混ぜた。マール模様がとろろを巻いた白蛇っぽく目に映り、だんだんとフチからその形を崩していく。

「どんな物が見えるんですか？」

女は顔を上げ、しばらく宙を見つめた。

「多いのはヒモ、鎖、モヤモヤ」

「モヤモヤって何です？」

蛇やヒモ、鎖なら何となく分かる。何かに縛りつけられるという意味あいに分かる。だが、モヤモヤって何だろう。

「私もよく分からないけど、エネルギーを持った感情だと思います」

「感情ねえ」

「プラスの感情よりマイナスの感情の方がよく見えます」

マイナスの感情はどす黒いんです。それが取りついた所が痛み出して病気になるたりします」

「それも取れるの？」

女はコーヒーを飲み下してから一息つき、

「取れます」

と、ハッキリ答えた。

「でも雲みたいなのですから、スッキリとはいきません。多少残ります」

「取ったモノがあなたに取り憑くことはないの？例えば蛇とか、モヤモヤとか」

「全くとは言えないけど、ほとんどありません」

「どうして」

「波長が合わないからです。TBSのチャンネルにNHK

が映らないのと同じです」

笑ってしまった。女も笑っている。比喻としてはスッ飛んでいるが、何だかよく分かる。

「何でそうだと分かるの？」

「何というのか、相手に触れた途端、心の画面にノイズが飛びます。放送終了のテレビ画面みたいな模様が出ます。拒否反応なんでしょうね」

「ノイズが出なかったら？」

「危ないと思います」

二人はしばらく黙った。クーラーが効いて心地よいが、空調の音が妙にうるさい。

「家とか建物とか部屋とかの持つ雰囲気も分かります。イヤな感じの建物やっぱ黒っぽいです。いい感じの家はピンク、争いごとが絶えない家は赤っぽい」

「この店は？」

「透明でした」

女は顔を上げ明快にキツパリと言った。

「透明？」

「ハイ。透明な場所は全てをまるまる受け入れるという特徴があります。ピンク色の幸せそうな所でも波長が合わないければ弾き出されます。個人個人の幸福の波長は違います。透明な場所は全部の波長を受け入れてくれます」

「なるほど。波長ねえ……」

大学で多少物理をかじっていたので感覚的にボンヤリと分かる。人間も植物も堅固な実体のように見えるが。実は原子レベルで見るとスキマだらけなのだ。だから α 線や β 線は苦もなく透過してゆく。物質を形作る大もとである電子も突き詰めれば振動する波にすぎない。言ってみれば、この世界は神様が造り出した巨大な幻かもしれない。その幻を人間が五感でどう捉えるかだ。ただそれだけだ。その人間の感覚器官も電気仕掛けなのだ。赤い色の波長は長い。逆に紫の光の波長は短い。その光の波長の違いを、目を通して人間は感じ取り、色としてこの世に体现する。

彼女の言うことは『普通』を生活する人々にとって理解しがいなものかもしれない。しかしその反面理になっっているようにも思えた。

「波長ねえ……」
もう一度つぶやく。

「今までいろんな所で働いてきたけれど、長続きしませんでした。どの職場から弾き飛ばされてしまいました。どの色の波長にも合わずことはできませんでした」

女の顔を少しの間じっと見る。女は瞬きしない。長い睫毛が凜として、物怖じせずまっすぐに視線を返してくる。ドキリとして多少慌てた。だが、女の次のひとはそれ以上の狼狽と困惑を心の内に呼んだ。

「ここで働かせていただけませんか」

女は額にうっすらと汗を浮かべてまっしぐらな瞳をぶつてくる。どうしてそんなにこの店に固執するのか訳が分からない。

「何でもこやないといかんの？ 他に店はいくらでもあるのに——」

たまらずきいた。

「分かるんです、私。ここできなきゃ、ダメなんです。私の生き死にの問題なんです」

彼女は目に涙をためてそう言い切った。瞬間、胸の中でごった返していた言葉がなぜかガラクタみたいに飛び散るのを感じた。言葉はどれもこれも口の先まで出かかっては次々に飲み込まれていった。

「お願いです。一生のお願いです」

震える声で頼み込まれ、もはやなす術は完全に消滅してしまっただけだ。

「お客さんは必ず来ます。今以上に来ます」

彼女はそこで初めて二、三度瞬きし、涙のたまった目でかすかに笑うのだった。

二 もじゃもじゃの亀

——彼女、高橋キリコはもともととは名古屋の方に住んでいたらしい。どんな理由かは聞いてないが、二年前に家を出てあちこちを転々としていたらしい。パチンコ屋やバー

やはり女は瞬きせず、ごく静かに、しかし明確すぎるほど明確に言った。言葉に一分の揺るぎもない。もはやそれが決定事項であるかのように耳に響いた。
確かにうろたえた。うろたえはしたが、もうこれは断りきれないだろうという感覚が頭の片隅にあって、突然の現実を冷静に分析している自分がいた。しかし、脳のもう一方が、今という構図を健気に否定する。

「でも、その、客もあんまり来ないさびれた喫茶店だし、給料だってたいして払えないと思うし——」

「それがかまいません。お金は関係ないんです。何とかお願いできませんか」

思いつき言葉で遮って彼女は平身低頭する。頭が真っ白になってしまい、あたふたと言葉を探したが、的を得た言句はひとつも思い浮かんでこない。とんでもなく焦った。「関係ないって、そんな……あんだ、何言うてるの。それなりの報酬はあるやろうし——」

「最初は無給でもいいです。役に立つと思ったらいくらください。千円でも二千元でもいいんです」

「無茶言うたらあかんわ……」

相手は必死である。訴える瞳が真剣そのもので、一歩も退く気配がない。

「使い物にならなかつたら、すぐ放り出してもらってかまいません」

やら、スーパーのレジ打ちやらさまざまな仕事をしたと言っていた。

「安いアパート借りてそこから職場に通ってました。どのアパートも雨、漏ってました」

皿を洗いながらそう言う彼女の顔は飄々としていて、初めてここにやって来た時のような奇妙な冷たさは感じない。

「ここへ来る前は何してたん？」

「松阪の城跡近くのファミレスで働いてました。半年ぐらいいちました。長い方です」

「意地悪とか嫌がらせとかされたの？」

ふと、彼女は手を止め、こっちを見て口元だけで笑った。かすかなとまどいを感じられた。

「それはないです。いつも大事にしてもらいました」

その瞳をしばらく見つめ、

「じゃ、なんで」

と聞き返す。彼女の瞳にずっと影がさした。

「本性かな……」

「本性？」

「自分の本性が生かせる場所じゃないような気がするんです。波長もどことなく合わないし……。それをずっと我慢していると体が痛み出します。自分じゃどうにもならないし、もちろん薬も効きません」

「子どもの時からそんな体なん？」

「いいえ、三年前に突然になりました。いろんなモノが見えるようになったのも三年前からです」

彼女が数瞬遠くを見る目つきになったので、三年前に何があったのか聞き出すことができなかった。どことなく陰りのある瞳だった。

彼女はあまりしゃべらない。黙々と仕事をこなす。どこで働いても大事にされたと自分で言っていたが、その理由がよく分かった。食器洗いや片付け、料理の盛り付け、全ての動作が機械でまちがいがいいない。接客も柔らかいし、にこやかだ。最初出会った時の印象とは大違いだ。

彼女はあまり化粧をしないのか多少フケて見えた。今ではほとんど見かけることのない黒縁の眼鏡をかけていることもその一因だろう。二十八だと言っていたが、三十代のなかばに見える。気まじめな事務員さんというイメージだ。笑うと何となく可愛さを感じるけれど、色気をそこに見ることはまずなかった。店に来る常連の若い男どもは彼女のことを、カゲで「オバハン」と呼んでいた。いたって失礼な言い方だが、まあ、的を得たネーミングだと、ちょっと笑ってしまった。彼らは、面と向かつては、「キリコさん」と呼んでいた。中年のオヤジ連中や、オバサン客は「キリちゃん」と呼んでいる。

ここ風来亭は祖父母の代からの喫茶店兼小レストランだ。朝は八時に開店する。この海辺の街は観光地だが漁業も盛

り店に来る。夜の部が三時から九時までなので片付けと翌日の準備で、仕事の終わりは十時頃になる。体力的にどうだろうかと気をつかったが、今のところ問題はなさそうに思えた。

「嫁、もらったんか？ タカシ？」

キリコが店で働くようになって十日目、久し振りに店にやってきた禪福寺の文福和尚は開口一番にそう言った。

「いいえ、とんでもない。アルバイトを雇いました」

若い衆にもさんざん言われていたことなので、慌てもせず、落ちついて笑って返した。

和尚はちよつとヘンな顔をした。七十過ぎのこの人はガタイのいい体つきで、顔も丸々としていて本当に福々しい。眉毛はぶつとくでダルマさんのようだ。

「いっしょに住んどのやろ」

野太い声でいう。

「ハナレを貸しとるだけですわ。いっしょには住んでません」

キリコの方をちらりと見る。知らん顔でグラスを洗っている。

「一切衆生の男、ことごとく下心あり」

ニヤリと和尚が笑った。何言ってんだか……。

「アホダラ経だわ」

んだ。当然漁師も多い。ひと仕事終えた漁師たちが朝食を食べに寄ったり、コーヒーを飲みに来たりするのは当たり前のことだった。だから早目に店を開ける。

漁師連中は、魚の話や今日の潮のよしあしをひとしきりしゃべり、だいたい三十分程度で帰っていく。ヒマな年寄りやオバサンたちは、二時間ぐらい、べちゃくちや、ダラダラと過ごし、十一時頃やっと腰を上げる。この連中はちよつと遅く、九時過ぎにやって来る。

店は一時にいったん閉める。三時までには休憩と仕込みだ。キリコは初め近くのアパートから通っていたが、そのうちにハナレの家を貸してやった。両親も祖父母もとうに亡くなっていたので家も部屋も余っていたからだ。

ハナレは店から二十メートルぐらい離れた山裾にある。店の裏に出て十五段ほど石段を登らなければならない。祖父母が住んでいた家だ。高い所にある分見晴らしがよく、晴れた日には神島や伊良湖まで見えた。

彼女は、毎朝、真正面から陽が差し込んでくることに感激したらしく、

「水平線から朝がやってくる」

とことあるたびに言っていて喜んでいる。家賃をとるのも気が引けたのでタダで貸した。電気代とガス代だけはもらっている。

朝が早いので心配したが、彼女は七時半には必ずきつち

冷たく投げ返してやったら、

「おみやあも四十一だで、いいかげん嫁もらつてもええ頃だがや」

と、逆に突っ込まれた。

すると、不意にキリコが顔を上げ、

「あのう、お客さん、名古屋人？」

と真面目すぎる顔でき返したのだ。

「岐阜の寺で修業しとった。こつち来て三十年以上たつたけど、言葉が岐阜弁と伊勢弁でぐちゃぐちゃだで、まーかんて」

和尚の言葉に彼女はクスッと笑った。和尚はそれを見逃さず、我が意を得たりという顔で、

「アンタはどここの産な？」

と、すかさずきく。

「生まれは郡上です。ずっと名古屋で育ちましたけど」

手を止めたキリコの顔が薄く笑っている。

「そうなの？ 岐阜の生まれやったんや」

「文芸思潮」編集部員募集

有給

大卒以上／要編集経験・文章力
履歴書送付 編集部まで

bungeisc@
asiawave.co.jp
五十嵐まで

初めて知った。思わず割って入っていた。

「ハイ。あれ？ 言ってなかったっけ」

彼女が小首をかしげると、

「やっぱりおみやあはとろくさい」

と和尚はひとしきり高笑いをした。それから右手をぐるぐる回し、肩を上下させた。

「この頃は毎日雨で首が凝ってでえれえ痛い。整体いっても治らんでかなんわ。あの整体の岡井はヤブだわ」

そうぶつくさ言ってまた腕を回す。ふとキリコの方を見ると、じつと和尚の顔に視線を送っている。ああ、そうかと思い当たった。

「何かついてる？」

と、小声でつぶやいたら、ハイ、としっかり返事が返ってきた。

「小さい亀が二匹……」

和尚はその言葉を聞き咎めて、こつちを振り向き、

「亀がなんな？」

といぶかしんで尋ねた。

「右肩と首のところに亀がってます」

和尚の瞳をまっすぐに見て、キッパリという感じでキリコが答える。

「かあめえエ？」

どう言っているのか、ひっくり返ったと表現したらいい

のか、そんな声を和尚は頭のとっぺんから出した。

「カメ？ あのカメ？」

もう一度彼は声をあげる。

キリコはと見ると、和尚の席につかつかと歩いていき、横に座ると、

「取りましようか？」

とくそ真面目な顔で言い、本当に亀を掴むような手つきで——彼女にとっては本物そのものののだが——二度、和尚の肩の上辺りをさわった。和尚は目玉をぐりつと見開き、おまけに口まで開きっぱなしで、微動すらせずその様子を見つめている。

キリコは動作を終えると、

「あの……、ダンボールの箱……」

と遠慮がちに言った。ハッと我に返って、厨房の隅に置いてあった野菜の箱を取りに行く。キリコは両手に持った亀？ を「ここに入ってね」と、大事そうに箱に入れた。

和尚はポカーンと口を開けたまま彼女を見ている。

「どうですか？」

言われてやつと口を閉じ、目をパチクリさせながら肩を動かし、首を曲げた。

「これは……、治つとる……」

まん丸の目玉がキリコの顔を映して瞬きひとつもしない。和尚は息をするのも忘れてしばらく彼女を見つめていたが、

「どういうことや？ 不思議や……。亀……カメ？」

と、ようやく口を開いた。

「一匹は夜店で売っているような緑色の小さな亀で、もう一匹はそれより少し大きな黒っぽい亀でした。尻尾が馬の尻尾みたいにもじやもじやでした」

「もじやもじや……」

「甲羅に苔も生えてました」

「そりや、孫が飼うとった亀や。うまいこと冬眠できんと、冬が終わる前に死んだ亀や。背中に苔が生えとってな、縁起物の養亀みのかめそつくりやいうて大事に飼うとったんやけどな……。そうか、ワシの体についてったんかあ。二匹ともついとったんかあ」

和尚は、ホーと長い息を吐き遠くを見る目つきになった。疑う素振りには微塵もない。

「何やこれ……。信じられん……。アンタ何者？」

キリコはニツと笑って、こともなげに立ち上がり、サラリと言った。

「ただのアルバイトです。アルバイトのオバハンです」

アレッと思った。若い衆が陰口たたいてたのを知ってたんだ。横向いて笑ってしまった。

和尚の目はますます丸くなるばかりだった。

三 ペンギンの涙

水族館のペンギン飼育員、日田良英よしのでは日々女の影におびえている。一年前に結婚したにもかかわらず、以前からつき合っていた女と切れることができないのだ。

良秀はこの店の常連客だ。もう七年も店に出入りしている。出身は知多だが、今は松阪に新居を構えて奥さんと二人で住んでいる。

三年ほど前、彼は、髪の毛の長い上品そうな女性を連れて店に来た。お盆の少し前頃だった。良秀は嬉しそうにカルボナーラを二つ注文し、二人でワインを飲んだ。女性はスラッとした色白の美人で、色黒でいかつい顔の良英とは対照的に見えた。ぺらぺらしゃべる良英に比べると彼女はとてもおとなしく、時々にはかんだように笑って、ええ、とか、そうね、とか言っつてうなずいただけだった。

女が席を立てトイレに行った時、

「お前さんにしては上等な彼女やん」

とからかったのを覚えていて。すると良英は顔をくしゃつと崩して、

「今日これから二人で仙鋒閣に泊まるんです」

と小声で言った。へえ、と驚いたが、その時の良英の嬉しさでは切れそうな顔を忘れることができない。

——小暮美奈こくれみな。それが彼女の名前だ。美奈は元水族館の

受け付け嬢で、同じ職場の良英と知り合ったのだ。彼女は既婚者だったが、夫のDVが原因で、夫とは別居し離婚調停中だった。その時彼女はもう水族館はやめていて、どこかの書店でアルバイトをしていた。

美奈と良英はそれはそれは仲睦まじいカップルで、デレデレしている良英はいつも若い連中に冷やかされていた。

良英は、スマホに小さなペンギンのマスコットを付けていた。スイッチを押すと「好きだよ」と高い声でしゃべる。もちろん美奈にプレゼントされたものだ。店に来た時、同僚に「好きだよ」とペンギンのまねをされてしょっちゅうからかわれていた。

もうすぐめでたく結婚かな、と思っただけで二年目の冬、突然二人の歯車が狂い始めた。ちょうど二月十四日のバレンタインデーの夜だった。珍しく粉雪がちらつく底冷えのする晩、閉店まぎわに入ってきた客が一人。良英だった。髪は雪でところどころ白く、顔も青白い。なんだか元氣、というより精氣がない。彼はホットコーヒーを注文すると、ドサリとカウンターの前の席に腰を下ろした。

「どしたん？ 元氣ないやん」

尋ねても返事がない。仕方なく、黙ってコーヒーを淹れていた良英がボソリと言った。

「男が……来てた」

要領を得ない返事に、

「男？ どこに」

と、聞き返した。良英の頬は蒼白だ。

「美奈の……部屋に……」

「美奈ちゃんの部屋？ 誰が来とったの？」

「——前の……ダンナ……」

その日、良英は結婚のことを切り出そうと、思い切った彼女の部屋に行ったらしい。そこで男とハチ合わせをしたということだった。

「保険のセールスマンじゃねえの？」

笑って茶化すと、

「違う。前のダンナや」

と投げ捨てるみたいに言う。

「顔、知っとんの？」

「写真で見たことある」

良英はそれきり何も言わない。

「彼女に会ったの？」

「会ってない」

「何かワケがあるんやないの？ 離婚の手続きとかさ」

「何もあるはずない！」

良英はスマホをテーブルに叩きつけた。その途端、青いペンギンが「好きだよ」とカン高い声を出した。それが二人っきりの店の中に響いた。——良英は黙ってテーブルを見つめていた……。

の!!」

と、宙を見据えて何度も叫ぶ。

「どうしたんさ、何があったの？」

困り果てて肩に手を置いて話しかけた。

くしゃくしゃの顔のまま、美奈は、

「別れてくれて言うんだよ。信じられる？」

と、顔を上げて瞳をぶつけてくる。

「また、どうして……」

「私のことは好きだけど、会うとどんどん苦しくなるから……。自分のことが信じられなくなるから苦しいって……。そんな言い草ってある？ 好きならなんで別れるの？」

小心で臆病な良英のことだ。疑惑を感じたまま関係を続けてゆくことに耐えるだけの、強靱で柔軟な心を持ち合わせていなかったのだろう。アホ、アホ、アホ、美奈は際限もなく繰り返した。そして、ビールを六本も空けた。

結局、美奈は酔い潰れてしまい、アパートまで送るハメになった。

階段を担いで上がり、ドアを開け、布団を敷いて寝かせた。寝かせる時、美奈の体から強い女の匂いがして、ゾクツとした。こりゃイカン、と頭を叩き、妄想を振り払って彼女に背を向けた時、

「いっちゃうの？ 抱いてよ！」

結局、前の旦那がしつこく美奈につきまとい、彼女の住まいをつきとめて復縁を迫ったということがあとで分かった。女は拒否したが、男は執拗で、暴力的に彼女を犯してしまったのだ。美奈は泣く泣く警察に訴え、ようやく男から解放された。

けれど、一度心の隙間に入り込んだ疑念はたやすく振り払うことができない。美奈のことが好きでしようがないのに、良英の心のシコリはどんどん大きくなっていく。二人の間に幾つものヒビ割れが目に見えず、そして、目に見えて増えていった。良英も美奈も時々いっしょに店に来た。だがそこに以前のような輝きはなかった。それを見ているのが切ないぐらいに——。

それから半年ぐらい、良英は店に顔を出さなかった。そして……。

港まつりの花火大会の日だった。突然、美奈が店に来たのだ。やはり閉店まぎわだった。

「タカシさん、ビール。お酒ちょうだい」

聞こえるか聞こえないかわからない声で彼女はつぶやき、出されたビールをたて続けに三杯飲んだ。これはマズいな……ひよっとして……と勘ぐった途端、彼女はテーブルに突っ伏して泣きじゃくった。ここに来るまでにすでに相当飲んでいたらしく、足元もおぼつかなく、

「良英のアホ、アホ、アホ!! どうして分かってくれへん

と、美奈が唐突に起き上がって叫んだのだ。びっくりして振り向いた。美奈の瞳の奥に青い炎を見たような気がして、一瞬その場に釘づけになった。

「抱いてよ!!」

もう一度美奈の瞳が胸を貫いた。

「抱けるわけない」

笑って穏やかに言ったつもりだったが、声は震えていた。時計の音が薄闇に響いていた。

逃げるように部屋を出、ドアを閉めた――。

――そのあと三ヶ月ぐらいして、良英は結婚した。名古屋に研修に行った折に知り合った、自分より十も歳下の女性と……。

そして、あろうことか、良英はいまだに美奈と二月に一回の割で密かに逢瀬を重ねているのである。美奈との糸を断ち切ることができなかったのだ。もうすぐ子どもも生まれるというのに……。

――なぜ、こんな話をいきなり思い出したかというと、昨日久し振りに良英がやってきた時、キリコが彼の方を数秒間じっと見て、

「青いペンギン……。泣いてる」

と、いきなり言ったからだ。息が止まるぐらい驚いた。彼女に良英の話はしてなかったし、彼はもうスマホにペンギンのマスコットを付けてはいなかったから。

「見えるんだ、キリちゃん」
小聲で聞く。キリコはかすかにうなずき、ポロリと涙をこぼしたのだ。

「ごめんなさい。でも、すごく悲しい」

そうつぶやいて、彼女はカウンターの奥にしゃがみ込んでしまった。

良英はそんなことに気づく様子もなく、ひとしきり世間話をしたあと、

「予定日は七月の末です。俺も父親になるんですよ」

と能天気な笑った。その前にケリつけろや、と思ったが口には出さなかった。

その時、キリコが立ち上がり、

「ペンギン、泣いてます」

と良英に言った。彼は、うん？ と顔を上げて、入り口のドアの方を見、

「いい耳してますね。でもあれはアシカ。ペンギンじゃない。でもそろそろ昼休み終わりや。行かなきゃ。マスター、この人新人さん？ 初めて見た」

と笑った。キリコの顔に比べると良英の顔は呑気そうに見えたが、その笑顔にはかげりがあった。

「アルバイト。先月から」

カウンター越しに答えると、「そうなの」と良英はキリコの方を見た。キリコは小さく会釈した。

「気がするの」

店に客がいない時、彼女はこっそり打ち明けてくれた。

「どうしてだろ。何でそう思うの？」

キリコは小さく息を吐き、ちよつとの間宙を見つめた。

「体の痛みは生活の障害になるだけだけど、心の痛みはそうとは限らないでしょ？ それがその人自身を形作る土台になることだってあると思うんです……」

「そうか。無闇やたらに取っちゃいけないんだ」

キリコが眼鏡をはずし、何気なくティッシュで拭いた。

その横顔はどうしてかひどく無防備に見えた。無防備さゆえに息を呑むほどの女を感じた。思いがけず引き込まれて、じっと見ていたら、

「どうしたんですか」

そう言って首をかしげ、再び眼鏡を掛ける。

「あのさ、キリちゃん、今度の休み月曜やろ。前の水族館にペンギン見に行こうか」

とんでもなく困惑して、驚くほど脈絡のない言葉が飛び出した。

彼女は数秒間じいっ！とこっちを見つめていたが、いきなり頬をほころばせた。

「ペンギン？ あの飼育員さんのペンギン？」

「そう、良英ペンギン……」

するとキリコはいたずらする子どものような瞳になった。

昨日のキリコの言葉はあまりにもいきなりすぎて、かなりびっくりした。だが、彼女はあの一瞬で全てを感じ取ってしまったのだろう。彼女の想像を絶する能力には度肝を抜かれる。けれど、こんなふうになんか悲しみをいちいち感じ取っていたらひどく疲れるだろうな、といささか同情するのだった。そう思っただけで彼女の方を見たら、わき目もふらずに、黙々とカップを洗っているのだった――。

四、はてしない紐の先

この店にキリコがやってきてひと月が過ぎた。見えない物を見、人の痛みを柔らげることでできる彼女の能力は、静かに、静かに、そして着実に店に来る客の間に広まっていった。彼女は頼まれれば、その人に憑いている何かを取り除き、頭痛や腰痛を治した。だから例のダンボール箱にはもう三十個以上、取り除かれた何かが入っているはずだ。その箱は、今は厨房の横の小さな応接室にひっそりと置かれている。心なしか、箱はほんの少し重くなっているような気がした。

キリコは、肉体的な痛みに関しては迷うことなく取り除いたが、精神的な苦しみに対してはあまり積極的ではなかった。精神的な何かが憑いている場合、彼女は、何も見えませんよ、と笑って返すことが多かった。

「本当は、見えてるんです。でも、それは取っちゃいけない」

「それってデートですよな？」
心が冷や汗をかいて、三歩退いた。キリコは目だけで笑っている。

「いや、そういう意味じゃ——」

言うのを遮って、キリコは答えた。

「連れてって下さい。でも——」

「でも……何？」

冷や汗タラタラだ。

「でも、その前に、あの飼育員さんの肩にとまってる青いペンギンの話を聞かせて下さい。何か知ってるんでしょ、マスター？」

「どうして分かるん？」

「だってこの前、マスターは、見えるんだ、キリちゃんって言うってもの。その言い方ヘンですよな？」

真っ直ぐな瞳に観念した。

——その日は早めに店を閉めた。そうしてキリコに良英と美奈の話をした……。

キリコはじつと話を傾け、時々グズグズと鼻をすすった。話が終わってもしばらくの間、彼女は黙ったままだった。何だか気まずくて、「コーヒーでも飲む？」ときくと、コクリとうなずく。サイフォンでコーヒーを淹れていると、

「その青いペンギンのマスコット、もう持っていないのか

な？」

ときいてくる。

「スマホには付けてないみたいやな」

「捨てたのかなあ」

キリコは独り言みたいにつぶやく。

「好きだよ」ってしゃべるマスコットをスマホに付けてたらちよっと問題なんやないの。誰にもらったって奥さんやキモチやくかも」

「そうですね。捨てますよねえ。だからああやって魂になって憑りついてるんですよ」

出されたコーヒーをスプーンでぐるぐるかきまぜながらキリコはうつろな瞳を宙に向ける。そして、

「辛いだろうな……」

と、ポツンと言う。

「誰が、辛いのか？」

「美奈さん……。どっちつかずで放っておかれるのが一番辛いでしょ。別れるより辛い」

「良英は？」

「無責任。かわいそうだけど。全部自分の弱さが招いたことだから」

「厳しいな」

すると、彼女はスッと顔を上げた。

「本当はマスターもそう思ってるくせに」

「大人一枚、割引きで」

キリコはアレツという顔をした。

「二枚じゃないんですか？」

「俺はパスポート持ってる。同行者は何人連れて来ても三割引き」

ニツと笑って答えると彼女は、へええ、と驚いた。子どもっぽい笑顔だなと思った。同時にいつもと何か違うぞと思う。陽の光の下で見る彼女はとても若く見えた。二十八という年齢以上に若さを身にまとっている。あの黒縁眼鏡を掛けていないせいもあるだろうが、それだけではないような気もした。

——とにかく暑かったので、とりあえず館内の大型円形水槽の前に行った。大小様々、色とりどりの魚が同じ方向に泳いでいたが、一匹だけ二メートルぐらいの黒い鯨が逆方向に泳いでいる。頭のところに小さな傷があった。ビー玉のような目が不機嫌そうに動く。

「あの鯨、赤いモヤモヤ引っ張ってる」

「そんなのまで分かるの」

「大きいから見えちゃった。やだな」

「世の中のありとあらゆる不幸や痛みを感じてたらキリない。それこそ不幸だよ。何とかならないの」

ハアアーとため息をついたら、

「寝てる時とおながいっぱいの時は何も見えませんから

「メガネ、どしたん？」
彼女は左手で前髪を流し、ちよっと笑う。
「街に出る時ははしします」
「なんで？ 不自由やないの？」
「見たくない物が見える方が不自由なんです」
なるほど、感心してうなずいているうちにチケツト売場に着いた。

大丈夫です」

と笑う。これってひそかにお食事の催促？　と思っ
まい案外カワイイなあと笑ってしまった。

「じゃ、先にペンギン見て、レストランで何か食べる？
ペンギンの水槽、屋上で暑いよ」

彼女は顔をほころばせ、ハイ、と答えた。
と言っでもまだ暑いので一階から三階の展示のうち、一
階だけざっと見てから売店でソフトクリームを二つ買い、
体なるべく冷やしてから屋上に出た。まだ四時だから陽
は全くかげつておらず、一旦涼しい所に入ったあとなので
よい暑い暑さを感じた。

ペンギンの水槽は屋上の一番南の端にあったので、陽の
光にさらされて百メートルぐらい歩いた。この暑さの中、
ペンギンを見ようという人などなく、屋上にはたった二人
だった。歩きながら顔の汗をハンカチでぬぐってキリコ
の方を見たら、何やらずっと空を見つめて、目で何かを追っ
ている。

「青い紐が空から降りてきてる。どこからやってきて、ど
こに続いていくんだろ？　こんな初めて。紐が青く輝い
ててすごくきれい」

思わず見上げた。だが、山並みの上のまばゆい太陽しか
目に入ってこない。

「紐？　青いの？　キリちゃん？　見えないよ」

良英も公然とさわれるじゃないか。あいつとしてはよく考
えたもんやと思うけど」

「でも……やっぱり可哀想だよ」

キリコは怒っているようでもあった。そして、そつと腹
のボタンに触れた。「好きだよ」という声はとても小さく
て切れ切れだった。多分電池が切れかけているのだろう。
それとも壊れかけているのか。

キリコは水槽のペンギンなど見ていなかった。いきなり
振り向き、

「この紐の結び目、ほどこいていいですか？」
と真剣な表情で訴えかけた。

「ほどことどうなるのさ？」

「分からない。分からないけどほどこします」

「まあすよ。でも、どうなるんだろな」

「何か切れて、何かが始まります」
キリコのしなやかな指が目に見えない結び目をゆっくり
と解き始める。傾きかけた陽射しをまともに受けて、生き
物のようにその指は何もない空中を漂っている。

「なかなかとれません」

キリコの額は汗でいっぱいだ。見てるだけでは申し訳
ないので、ハンカチで汗を拭いてやった。彼女はそんなこ
と気にもかけない様子で結び目と格闘している。Tシャツ
の背中が汗で濡れてきている。そして……

キリコは小走りに駆け出した。

「今、手につかまえました。なめらかなシルクの紐です。
これを辿っていきます」

キリコの足は速かった。とても追いつけない。キリコの
いる所まで、のたのた、ゼイゼイと走ってやっと着いた。
キリコは涼しい顔で突っ立ち、ある一点を見つめている。
彼女はそれを指した。アツと声を上げてしまった。それは、
水槽の前に両面テープで貼り付けられたあのマスコットペ
ンギンだった。ペンギンの下にはこんな貼り紙がしてあっ
た。

みんなのことが好きでたまらないペンギンさんです。
おなかのボタンを押してね。好きだよーとおしゃべ
りします。

「紐はこのマスコットにつながってます」

「あの野郎、こんな所に置いてたのか」

ペンギンは多くの人の手に触れられて少し黒く汚れてい
る。

「捨てるよりひどいよ。さらし者だよ」

キリコは両手を握りしめた。

「でも考えてもみなよ、キリちゃん。こうして堂々と出し
ておく方がマスコットも集客に一役買うことができるし、

「とれました」

五分後、彼女は汗まみれの顔で振り返り、肩で大きく息
をし、右手を顔の前にさし出す。

「指を放します」

こつちを見ていた瞳をペンギンのマスコットに戻すと、
彼女は右手の親指と人さし指を高々と上げ、パツと開いた。
一瞬、その指の先がまあるいトパーズの光を放つのが見え
た。太陽の光ではない、火の赤さが意志を持ったようなま
ばゆい輝きだった。

目はそこに釘づけになった。指先から立ち登ってゆく何
かが確かに存在している。

「登って……。どんどん高く登っていきます」

見えないけれど、そんなイメージがハッキリとあった。
その時、触ってもいないのにペンギンが、「好きだよ」と
鳴いた。でも、その声があまりにも切れ切れで、どうして
も「好きだったよ」としか聞こえなかった。

キリコは空を見上げている。額の汗の粒をぬぐいもせず、
ただ黙って、目を細め、高い高い夏空を見上げている……。
突然水槽の中のペンギンが「ハッハッハァー」と鳴いた。
すると、まわりにいた十匹ぐらいのペンギンもそれに合わ
せるみたいに「ハッハッハァー、ハッハッハァー」と鳴く。
まるで大合唱だ。辺りに「ハッハッハァー」と声がこだま
した。ハッハッハァーハッハッハァー。

二人はポカンと突っ立ってその声を聞いていた。
「笑ってる」
キリコが言った。そして初めて額の汗をぬぐった——横顔が静かに微笑んでいる。
ペンギンの合唱はしばらく止むことがなかった——。

五 タツノオトシゴの炎

キリコと二人で水族館へ行った三日後の夕方のニュースを見て仰天した。何と飼育員の一人が円形大形水槽を清掃中に鯨に手を噛まれて、二十針も縫う大怪我をしたというのだ。見たところ水槽に鯨は一匹しかいなかったから、キリコが赤いモヤモヤを引っ張っていると言った鯨だろう。確か、赤は争い事の色だと彼女は言っていた。水族館などで飼われている鯨は普通人を襲うことはない。TVのニュースでは、何かストレスを溜め込んでいたんだろうと解説していた。

「鯨も人間も同じということかあ」

テレビを消して言うと、

「頭に傷あったでしょ。あれですね」

と、キリコはテーブルを拭きながら平然と答える。

「キリちゃんすごすぎる。何でも分かっちゃまうんや」

「それが辛い時の方が多いんですよ」

相変わらずテーブルを拭きながら言う。

「俺には何もついてない？」
すると彼女はヒョイと振り向き、
「残念ながら無色透明です」
と、ニッと笑って言った。
その時、ドアが開き客が入って来た。この店には珍しい親子連れだ。もうとくに七時を回っているというのに——。

「ミックスパフェ二つとアイスコーヒー」

父親と思われる三十過ぎの男はそう注文し、小学校二年生ぐらいの男の子に、

「パフェ食べたら、それ、逃がしてやるんだぞ」

と、子どもの持っているプラスチックの小さな虫カゴを指さして言った。よく見るとそこには真っ白いタツノオトシゴが入っている。

「すぐ死んじゃうんだからね。可哀想でしょ」

子どもの横に座った若い母親が口をはさむ。

男の子はじいっと黙ったまま虫カゴを注視している。顔色が異様に白いのが目についた。

「家じゃ飼えないんだからさ」

父親が言っても口をへの字に曲げて何もしゃべらない。

男の子は長袖のシャツを着、ジーンズを履いている。見るからに暑苦しそうだ。夏風邪でもひいているのかなと思った。

——パフェとコーヒーをキリコが運んでいき、テーブルに並べる。その間も子どもは虫カゴを持ったままだ。

「珍しいですね。白いタツノオトシゴなんて」

キリコが虫カゴを覗き込む。男の子はぎゅうっとプラスチックケースを抱きしめた。

「夕方、近くの浜で遊んで見つけたんです。今から名古屋に帰るんですけど、家じゃとても飼えないし……。もつとも家に着くまでに死んじゃうでしょうけど」

父親は苦笑いした。

「どうしても持って帰るってきかなくて……」

キリコはニコッと笑顔を男の子に向けた。

「それ抱えてたら食べられないよ。溶けちゃうよ、パフェ」
男の子はパフェの方に目を向けた。

「おばちゃんさ、カウンターの所でそれ見ててあげるからさ。食べれば？」

男の子はしばらく黙っていたが、やがて小さくうなずいた。

「すいません」

母親が頭を下げる。いいえ、とキリコは答え、虫カゴのケースをカウンターのの上に置く。

ようやく男の子はパフェを食べ出した。

「おばちゃんやったんや」

ちよつとからかってやったら、

「みんな陰で言ってますよね。マスターだってそう思ってるでしょ」

とあつさりやり返された。今日は、彼女はやっぱり黒縁眼鏡をかけ、髪をアップにしている。そうするとどうしても三十代に見える。もう少しおしゃれな眼鏡がコンタクトにすればいいのと思ってしまう。

その時、外でドン、という音が響いた。花火が上がったのだ。この時期、毎日七時二十分から十分間花火が上げられるのだ。

「花火？」

母親がドアの方を振り返った。

「店の外に出れば見えますよ。えーと、今日は港の方で上がるかな」

「毎日上がる場所が変わるんですか？」

父親が聞く。

「いえ、一週間ごと。場所によっては見えない地区もあるの」

へえー、と母親が感心すると、男の子が、

「見たい」と初めて口をきいた。

「おう、見てこい。パフェは食べといてやるから」

父親がニッと笑うと、子どもは慌ててパフェを口にかき込み、走ってゆくのだった——。

「あの子、色素性乾皮症という病気なんです。二万人に一

人の確率に当たっちゃいました」

父親の笑い方には寂しそうな翳りがあつた。
「ちょっとでも日光に当たると皮膚がヤケドしたみたいに腫れるんです。皮膚ガンにもなりやすいといわれて……。それであんまり外でも遊ばせてやることができないんです。だから暑いけど長袖着て、陽が落ちる頃に外で遊ばせるんです。今日は水族館で魚見て、さつき浜で少し遊ばせました。その時、タツノオトシゴ見つけちゃって。僕といっしょで白いつて喜んでちゃって……」

父親は一気にそこまで言つて、長いため息をついた。

「そうだったんですか。それで長袖を——」

また火花が三つ続けて上がる。ドアの外で、わっ、きれい、と母親の音がする。

「ちよつと辛いですね」
そうつぶやくと、

「海で泳がせてやることもできなくて」

と父親はまた肩で息をした。

その時、キリコがカウンターの外に出て、あのう、と遠慮がちに声をかけたのだ。

「失礼を承知言うんですけど、身内で火事で亡くなられた方、おられますか？」

途端に父親の顔が驚きでいっぱいになった。

「どうして……。何でそんなことを——」

彼は射つくす瞳でキリコを見つめた。キリコは目をひとつも反らさず、静かに言う。

「お子さんの体に、黒焦げのお地藏様がついてらっしゃいます。すごく寂しい目をしています。そのお地藏様は右手に真っ赤な布を持っておられます。その布が病気を引き起こしています」

父親は、ひきつった表情でキリコを凝視する。時が止まつてしまったように。

「バカな——。そんな……。まさか」

「お地藏様はまだ子どもの顔をしています。額に三日月みたいな傷跡が見えました」

父親は息を止めて黙り込んだ。それが三十秒近く続いた。キリコは臆することなく、

「ご身内の方だと思います」

と淡々ととした口調で言い切った。数秒後——

「——それは……たぶん……私の弟です。子どもの時、裏山の火事で逃げ遅れて死んだ弟です……。見えるんですか？」

キリコは小さくうなずく。

「私が……三年生の時、山で遊んでいて山火事が起きました。キノコ採りの人の火の不始末で——。火事に気づいて二人で山を駆け降りて逃げましたが、途中で煙にまかれて弟を見失ってしまったんです。私は何とか逃げのびました

だけ元気になっている。

父親はこつちに向き直つて小さく目礼し、それから子どもに笑つて言った。

「さあ、火花も見だし、タツノオトシゴ逃がして帰るか」それを聞いた瞬間、男の子は猛ダッシュしてカウンターの上のケースを抱きかかえた。

三人の大人は呆然と立ち尽くした。ただ一人キリコだけは穏やかな笑みをたたえ、子どもの頭をなでた。

「あのさあ、あそこに水槽あるでしょ？ 赤いお魚のいる水槽。今度来るまで、このおじちゃんがあそこで預かってくれるよ。このおじちゃんさ、魚飼うの名人なんだよ」いきなりだったので動揺しまくった。何を言い出すんだと、まじまじとキリコの顔を見つめた。多分、口も開きつ放しだったろう。

子どもは少しだけ潤んだ瞳を上げた。
「ホント？ 生きてる？」
「生きてるよ。ね、マスター」

突然無茶振りされて、「えっ？ ああ、そう、絶対生きてるから」と、モゴモゴ言つてしまった。どうなることかと子どもの方を見ていると、

「分かった。生きてるならガマンする……」
と意外にすなおに応じたので心底ホッとした。ホッとしたのは父親と母親も同じらしい。

が、弟は焼死体で見つかりました。判別できないほど真っ黒に焼けただれて——。いまだにその時の責任を感じています。私の両親はショックを引きずったまま早死にしました。私は大垣の実家を離れ、名古屋で就職し、妻と結婚しましたが、いまや実家は空き家、墓も荒れ放題だと聞いています……」

キリコと二人、黙つて顔を見合わせる。

「額の傷は、弟とケンカした時、私が棒で叩いてできた傷です……。そうですか……。弟が……」

父親はうつむいた。火花がまた続けて上がる。そうですか……。弟が……。父親は再び言った。

「キリちゃん、取れないの？」

キリコはドアの方に視線を注いだ。

「赤い布は仏様がしっかりと握つてらっしゃるので私の力では取れません。物や動物だけなら取ることができますが、人の霊を取り除く力はありません。ごめんなさい」

キリコは本当に深々と腰を折った。

「そんな、頭を上げて下さい。にわかには信じられないことですけど、これは私の問題です。心の問題です。今までずうっとそのことから逃げ続けてきた私の心の問題です」

何にも答えることができなかった。

——火花が終わったらしい。「あー終わった」という男の子の声をして、ドアがチリチリと開いた。男の子は少し

「いいんですか」

申し訳なさそうに父親が言う。

「何匹飼うのも同じですから」

言ったものはたして上手に飼えるか自信がない。キリコがこんな突拍子もないことを言うとは思わなかった。本当にびっくりさせられる。こうなったら世話係は彼女だ。

男の子は一応納得したようだ。名残り惜しうに、プラスチックケースのタツノオトシゴに「バイバイ」と手を振って店を出て行った。キリコはそれを見送っている。

父親は一人レジに残り、会計を済ませ、

「本当にありがとうございます。今年の盆は実家に行つてみます。まずはそこからです」

と二人に向かつて最敬礼をしたのだった。

「よくなるといいですね」

キリコが笑って返すと、

「ありがとうございます。奥さん」

と、また深く頭を下げた。そして、

「死んだ弟もタツノオトシゴ、飼ってたことありました。三日で死んじゃいましたけど」

とニッコリ笑いドアを開けて店を出ていった。

店の中に静寂が戻る。キリコは知らん顔でテーブルを片付けている。

「さて、キリちゃん」

キリコはピクツと動きを止めた。

「ごめんなさい。ああ言うしかなくて」

ひよいと見ると彼女の瞳からポロンと涙がこぼれたのだ。これには驚いた。ちよっといじめてやろうと思った戦意が急速にしぼんでしまった。これには参った。

「ええ？ 泣いてんの？」

「ごめんなさい。私、世話します」

「うん、ああ、俺も勉強するで、いいよ……」

女の涙がこんな破壊力を持つていることに生まれて初めて気がついた。もう、しどろもどろになってしまった。

「あのう、奥さんて言ったよな。キリちゃんのこと。そんなふうに見えるのかな？」

キリコは潤んだ瞳のまま、慌てふためいて、

「それは、場合によりけりです」

と、これまた訳の分からぬことをつぶやくのだった――。

六 猫が鳴く

タツノオトシゴはちゃんと生きている。十日たったが死んじやいない。なんせ強力な味方がついてるからだ。

タツノオトシゴ事件の翌朝、良英に電話をかけて、昼休みに専門の飼育員を連れて来てもらったのだ。

「うわー、すごい。真っ白だ」

水槽を覗いた途端、野本奈々は声を上げた。ボーイッシュユ

に刈り込んだ前髪を左右に払い、クリクリの目玉をアクリルガラスにくつつけんばかりに近づけ、彼女は白い龍の子どもを追いかける。

「アルビノですかね？」

尋ねると、彼女は水槽を覗き込んだまま、

「うーん、たぶん、そうかな」

と目を細めた。

「アルビノって何ですか？」

キリコの問いに、

「遺伝子の突然変異で体が白くなることです」

と、奈々はアクリルガラスから目を離してハキハキと答える。

「エサは何をあげたらいいの？」

アイスコーヒーをテーブルに置きながら言うと、あ、どうも、と頭を下げ、彼女は、

「冷凍エサを与える場合が多いですが、捕まえてきてすぐには食べないと思います。そんな時は小さな甲殻類を生で与えます。イサザアミとかヨコエビなんかです。三日分ぐらくらいすすねてきたので置いときます」

「おい、何てことするの？」

良英が横から口を出したが、奈々はペロツと舌を出して屁とも思っていないという顔をしている。

「これ、生きてるの？」

キリコが物珍しげに、テーブルの上の小さなプラスチックケースに顔を近づける。

「いいえ、でも生エサです。ペットショップに予約しといたら取り寄せてくれます。これをスポイトで吸い上げて、目の前にビュツで出してやるんです。スポイトも置いときますね」

「それさあ、備品じゃねえの？」

良英が口をとんがらせる。

「ざあんねでした。この前、家から持ってきたヤツでエサす」

奈々がケタケタ笑ったので、良英はむくれた。

「タツノオトシゴはなかなかタフな魚ですけど、エサやりが難しいんですよ。よく餓死しちゃうんです。それから、他の魚といっしょに飼わない方がいいですよ」

「ええ？ コレ、魚なの？」

キリコが目を丸くした。

「ちゃんとエラ呼吸してます」

よくよく見ると、首のつけ根の所に小さなエラがあり、それが細かく動いている。

「ホントだ」

キリコはますます目をまん丸くした。

「これ、メスですね。一匹じゃ寂しいから、オスを一匹持つてきます」

良英がパッと顔を上げて、

「水族館の水槽からか？」

と睨んだ。すると、また奈々はケタケタ笑い、

「家からです。ウチでも飼ってるんですけど、増えすぎちゃって」

とおどけた。良英はあきれて両手を広げた。

「家でも飼育員、職場でも飼育員!!」

キリコが大げさに驚いてみせた。

「好きなんです」

奈々は翳りなく笑うのだった――。

帰りしな、良英は、

「子ども、生まれたら見せにきますね」

と笑って言った。その耳元に口を近づけて、

「美奈ちゃんとはどうなったんや？」

と低く囁いた。良英はボソボソ言った。

「五日の火曜日に会ったけど、その時、彼女が、もう別れてあげるよって言ったんです。ちよつとびっくりした。何か彼女、スッキリした顔してた。それからは会ってません。メールも来ないし……」

日田さん、早くしてよ、昼休み終わっちゃうよ、とドアの所で奈々が手招きしている。

ハイハイ、と良英は答え、「じゃあ」と右手を上げて店を出ていった。

ハアアと長い息を吐き良英を見送る。キリコがお盆を持ってきて、二番テーブルを片付け始めた。その姿を何げなく見ていた。

「ペンギン、まだ肩の所についてましたよ」

キリコは顔も上げずに言う。

「やっぱりなあ……」

するといきなりパッとこつちを見た彼女は、

「でも、色が薄くなってる」

と真顔で言うのだ。

「薄い？ 色が？ どういうこと？」

「消えかけているのかな？ 炎が」

よっこらしょつと、キリコが盆を抱えて立ち上がる。

「そのうち消えるの？」

彼女を目で追い、きいた。

「さあ……。場合によりけりです」

すつとぼけたみたいに言い、彼女はせつせと洗剤を泡立て、グラスを洗っているのだった。

次の日、ジャスコで中型のアクリル水槽を買ってきて、前からある水槽の横に据えた。汚れ防止用のプロテインスキマーも付け、タツノオトシゴが尻尾でつかまれるように、海草の形をした止まり木も入れた。無論、生エサも予約した。その翌日に、奈々が自宅から黒いオスのタツノオトシゴを持ってきてくれたので、白いのといっしょの水槽に入

れた。

「わあー、結婚したの？ 夫婦だ」

キリコは変なはしゃぎ方をした。

「夫婦は寄り添ってみなきゃ、うまくいくかどうか分からないよ」

「そうですね、そうですね」

彼女は妙にすなおに納得し、水槽に顔を近づけるのだった――。

七月も終わりに近いある日の夕方、文福和尚が久し振りにやってきた。なんと両手で白い子猫を抱いている。

「猫？ どこで拾ったの？ 動物持ち込み禁止」

「まあそう言わんで。段ボールか何かあらへんか？ こいつ入れとくで」

かなわんなアと言いなながらキャベツの入っていた箱を渡す。和尚がひよいと猫を箱に入れると、猫はミャー、ミャーと鳴いた。

「キリコさんは？ どこ行ったな？」

「駅前のスーパーに買い出しに行った」

「車でか？」

「歩いて」

「あのこ、車、乗れやせんのか？」

「さあ……。免許はあるって言っとったけど」

「おみやあはいっしょに働いとるくせに何も知らんのか。」

もともとどういう人間なんな？」

さあ……。と首をかしげると、和尚はハアと長大なため息をついた。

しかし、彼女について本当に何も知らないと思う。特殊な能力があることと、決して悪い人間でないこと以外は……。そして、なぜか知りたと思う欲求がまるでないのだ。不思議なほど……。確かに初めて会った時の、あの冷たい驚くほどの熱のなさと、今のすなおな明るさにはギャップがありすぎる。まあ、何を言い出すか分からない大胆さと唐突さは最初から変わらないが……。いきなり初対面で働かせてくれと言われた時は、気持ちが一歩二歩ではなく、十歩ぐらいあとじさりしてしまった。考えれば考えるほど彼女は変わっている。あの黒縁眼鏡だってそうだ。まるで自分の女らしさをわざと隠蔽しているようにも思える。眼鏡をはずし、おしやれをした時の彼女は人並み以上に美しいのに。

そこまで考えた時、勝手口のドアが開いた。

「意外と店が混んでて遅くなりました」

キリコが汗だくになりながら、ドサリとスーパーのレジ袋を調理場に置いた。玉ネギとキャベツ、そして豚肉でいっぱいだ。

「ごろうさんやな」

和尚が声をかけた。アレツという表情で彼女は顔を上げ

る。

「いらっしゃい。もうどこも痛くないですか」
おかげさんでな、と和尚が笑った時、テーブルの下で小
猫が、ミャウオーと鳴いた。和尚は、猫をひよいと抱き上げ、
「散歩しとつたらな、船着き場のゴミ箱の横に捨てられて
鳴いとおったんや。愛嬌のある顔しとおつたでつい拾ろてしも
た」

「何匹飼うつもりなん？ 寺は猫だらけや」

そう突っ込むと、

「まだ六匹や。こいつも合わせて」

と、子猫の頭を撫でている。

「エサ代だけでも馬鹿にならん。奥さん怒ってませんか？」

「あいつも猫好きでな。問題なしだわ」

いい気なもんだと思いがら、ふとキリコの方を見た。
キリコの顔は真っ青で、頬がこわばっている。瞬きもせず、
視線は小猫に集中している。まるで凍りついたみたいに
……。明らかに様子がおかしい。

「キリちゃん、どしたの？」

声をかけたら、ハッと正気に戻ったが、

「猫、拾ったんですか。そう、猫。あの、私、スーパ―に
忘れ物しました」

と落ちつきなく言ったかと思ったら、あたふたと勝手口
から再び外に飛び出してしまった。

二人、ポケットとその姿を見送り、顔を見合わせた。
「どしたんな？ えりやあ慌てとおつた。財布でも忘れたか
や？」

それこそ首をひねるばかりで、さあ、と言うほかなかった。

——キリコはそれから三十分ぐらい帰ってこなかった。
心配になって電話すると、

「あの、和尚さん、帰りましたか」

と小声できく。

「帰ったけど」

そう言葉を返すと、

「ごめんなさい。今から帰ります」

と言つて電話は切れた。

五分ほどで彼女は帰ってきた。

「どこ行つたの？」

「——定期船乗り場の待ち合い室……」

頭の中に疑問符がともる。

「スーパ―に忘れ物したんやないの？」

彼女は口をつぐんでうなだれた。それきりひとことも
しゃべらない。ただ突つ立ったまま黙りこくっている。そ
してそのうち肩が震え出し、それが刻々と激しくなった。

「キリちゃん？ どしたの？」

彼女はいきなり顔を上げた。瞳は涙でいっぱいだった。

あまりのことに息を呑んだ。

「キリちゃん!!」

叫んで抱き起こして額に手を当てた。異様なほど火照つ
ている。

「キリちゃん！」

もう一度問いかけると、彼女はトロンと目を開けた。窓
から遅い朝陽が差し込んですこく暑い。すぐにクーラーを
入れた。

「ごめんなさい……。私……ネコ、だめ……」

唇が動き、切れ切れの言葉が胸を刺した。

「そんなことどうでもいい。いつから熱あるの？ 昨日の
晩からか？」

「分からない……。覚えが……ない」

水、ください、と彼女は弱々しく言った。すぐに台所に
飛んでいつて、冷蔵庫からミネラルウォーターを持ってき
て飲ませた。多分彼女は脱水症状を起こしかけている。

「病院行くぞ。今すぐや」

すると意外なほどの力強さで腕を掴まれた。キリコは小
さく首を振った。

「私の……バッグの中……、病院でもらつた解熱剤……あ
るの。それ飲んだら……治ります」

「アホか。脱水症状起こしてるんだぞ」

彼女はゆるく笑った。汗まみれの顔で……。

「大丈夫……。時々、こんなになる……。いろんな物を取っ

「ごめんなさい。私、私、猫、ダメなんです。どうしても
ダメなんです」

みるみる涙があふれる。それはボタボタと床に黒いシミ
を次々と作つた。

「どうしたの？ 何があつたの？ キリちゃん？ 何で泣
くのさ？」

何が何か分らず、彼女の背中に手を置いて必死でなだ
めた。それでも彼女は、ただ、

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と肩を震わせて泣くばかりだった。

——結局その日の夜、彼女は仕事を休んだ。

次の日、キリコは三十九度の熱を出して寝込んでしまつ
た。朝、起きてこないでハナレに見に行った。玄関に鍵
が掛つていない。部屋に入るのは気が引けたが昨日の今日
だ。恐る恐るハナレに上がり、

「キリちゃん、上がるよ」

と奥に向かって声をかける。——返事がない。ものすこ
く不安になった。心拍が上がっているのが分かる。

「開けるよ」

襖を開けて驚いた。キリコがエプロン姿のまま畳の上に
「く」の字になって横たわつていたからだ。この暑さの中
でクーラーもつけていない。息がひどく荒かった。顔は青
白く大粒の汗でいっぱいだ。

た……反動……。薬、ください……」
部屋の隅に投げ出されていた緑色のバッグの中を慌てて
ゴソゴソやり、薬を探した。

「財布の……中……」

赤い財布を出し、横のポケットから白い錠剤を取り出す。
その時、不意に運転免許証が目に入った。宮里桐子 平成
七年八月十五日生まれ、はつきりとそう書かれていた、高
橋ではないのかと瞬間的に思ったがそれどころではない。
急いで薬を口にふくませ、水を飲ませて流し込む。キリコ
は二、三度激しくムセた。

キリコを寝かせてから体温を計ったら三十九度三分も
あった。保冷剤をタオルで包んで額に当て、両脇を濡れタ
オルで冷やした。

「これで熱下がらんかったら医者行くぞ。何かあったら電
話して。一時間したらまた見に来るで」

意識が次第に戻ってきたらしく、彼女はしつかりうなず
いた。少しだけ気分が落ちついたので、襖を閉めてハナ
レをあとのした。石段の横の木でセミがやかましく鳴いて
いる。今年一番の暑い日だった。

——キリコの熱は除々に下がり、昼には三十七度三分に
なった。

店を閉めて、遅い夕食をハナレに持って行く時分には彼
女の熱は平熱になっていた。

夕食のソーメンを食べさせたあと、ハナレの流しで洗い
ものをしていたら、キリコが起きてきて、手伝いますと言
う。冗談でしょと軽くあしらひ無理矢理寝かしつけた。
洗いものが終わったので帰ろうとすると、

「お願いですから、もう少しいて下さい」

とキリコは静かな口調で訴えた。アッパにした髪は昨日
のままで、乱れがちに見えた。

「高橋じゃなかったんや」

言葉が何も出てこなくて、仕方なく免許証の名前のこと
をきいた。キリコは布団の上に半身を起こし、「免許、見
たの？」と言う。

「高橋は、私の育ての親の苗字」

「育ての親？」

「はい。私の本当の母親は病気で私を育てることができ
ず、私を施設に預けたんです。でも私が三つの時に亡くな
りました。父親は行方不明です。小学校三年の時に高橋さ
んという方が私を引き取り育ててくれました。鉄工所の社
長さんで、すごく穏やかな優しい人だった。その社長さん
も、私が十三の時に亡くなり、奥さんは女手ひとつで私を
育ててくれたんです。だけど、あるうことか、私が十七の
時、奥さんも白血病で亡くなってしまいました……」

息をすることも忘れてしまった。キリコの瞳から視線を
反らすことができない。

「私はその奥さん、高橋由起恵さんを本当の母親だと今で
も思っています。短い間だったけど忘れることができませ
ん。彼女は子どもがなかったんです。自分の子として私を
育ててくれました。高校を卒業して、名古屋の出版社に勤
めました。そして、二十二の時、同じ会社の編集者の人と
結婚したんです。やっと落ちつくべき場所が見つかった幸
せでした。子どももできました。男の子でした……」

キリコは宙に視線をさまよわせる。でした、という過去
形にとんでもない悲しみの予兆を感じた。それ以上は聞き
たくなかった——。

「子どもが二歳になる少し前、夫が……猫を拾ってきたん
です。小さな小さな子猫でした。子どもは喜び、毎日猫と
遊んでいました。それがある日、猫が家からいなくなつて
しまったんです。窓の閉め忘れが原因でした。気づいたら
子どももいませんでした」

「どこに……いたの？」

「すぐ近くの踏み切りの上です……。子猫はそこで鳴いて
た。遮断機の降りた踏み切りの上で……。何も考えずに子
どもは遮断機をくぐり、子猫といっしょに電車にはねられ
ました——」

そこまで話してしまうと、キリコは突然無表情になった。
瞳は乾いている。

「私はその時、人の心を失いました。猫を拾ってきた夫を

責め続けました。今考えれば全く筋違いもはなはだしいこ
とです。夫はずうっと悲しい目をしていました。筋違いだ
と分かっているもひとつとも文句を言わない。それを私は
責めて責めて責め続けたんです。こんな人間じゃないで
すよね。薬にも手を出しました。そして、体は少しずつ壊
れていきました。結局、夫とは別れました——」

キリコの歩いてきた壮絶な道のりに息を呑み、ただ彼女
を見つめていることしかできなかった。言葉はもはや何ひ
とつ役に立たない。

「その頃からです。いろんな物が見えるようになったのは
——」

前の道を救急車が駆け抜けてゆく。キリコはビクツと身
をよじり音のする方を見た。ゆっくりとその動きを追い、
同じように首をめぐらせて窓の外を見る。ガラスに映った
白い蛍光灯の光の向こうに、真つ暗な海があった。海は空
から降りてくる静寂におし包まれ、けじめのない闇をどこ
までも漂わせている。

「それから先はここに初めて来た時お話しした通りです。
人の心をなくした私は、自分の悲しみを忘れようとして自
分だけの世界に閉じこもりました。そのあけくに人の痛み
ばかりが見えるようになってしまったんです。自分の心を
癒すために人の不幸を見るようになったんです。私はまとも
な人間とは言えません。私の心はずっと真つ黒でした

……。ここに来るまでは……」

その言葉がありとあらゆる蔑みを——自分自身に対する蔑みをこめたものだということが辛いほど伝わってくる。だが、彼女の人間としてのあり方を否定する言葉はひとつとかけらも思い浮かばない。そして、慰めの言葉もひとつとして存在しなかった。悲愴と昂揚が果てしなく絡まり合い、胸からはみ出しそうだ。

「だから、誰かから優しい言葉をかけられることを恐れました。自分の醜さを見破られそう……。それで職を転々としました。黒縁の眼鏡を掛けているのもそのせいです。自分を隠すためです。——でも……あなたの前ではそれができそうもなかった。私のこと、何ひとつ聞かずに受け入れてくれたから——。だから何かひとつでもあなたに返したくて……」

キリコはじつとこっちを見すえたきり、ぎゅっと口を結んでいる。

「キリちゃんが生きててよかった」

そうと右手で髪をなでた。キリコは身じろぎもしなかった。少しだけ鼻をすすり、聞き取れるか聞き取れないような声で、

「ありがとう——隠していてごめんなさい」

とささやいたのだった——。

と大げさに両手を広げるのだった。

この頃キリコは昼の休みに出かけることが多い。どこに行っているのかは知らない。本人は「散歩してきます」と言っただけで出ていく。「この暑いのに」と言ったら、「地域探索」と笑っている。だからそれ以上は聞かない。多分それだけではないことは確かだが。

八月の第一週のある日、文福和尚がやってきた。和尚はズルズルと音をたててトマトジュースを飲みながら、タツノオトシゴの水槽を眺めている。

「オスとメスで尻尾を絡めて踊るとる。まぐわっとんの？」

「下品な言い方せんといて。求愛しとるんや」

「キューアイ？ 同じやがね。求愛いうたら、タカシ、おみゃあ、キリコさんに何した？」

貴将と同じことを言うなと思った。

「何って？ なんや？」

「あのこ、急にでえりゃあベッピンになった。おみゃあ、怪しい」

「何もせんよ。いっしょに仕事しとるだけや」

和尚は訝しむ顔つきになったが、すぐに、

「あのこ、何でいつもうちの寺の前の踏み切りに立つとんの？」

ときく。

「踏み切り？」

七 踏切の上の空

次の日から、キリコは眼鏡を掛けなくなった。美容院に行つて髪も切った。ショートボブがよく似合っている。店によく来る漁師の貴将が、首をひねりながら、

「マスター、あれ誰？」

とキリコを指してきく。思わず吹き出してしまった。

「分かんのか？ このマヌケ!!」

言つてやつたら、奴は「へっ？」と言つて首を突き出してキリコをじいっと見た。

「もしかして、キリコさん！」

「もしかせんでもな」

「うっそっだあ！」

貴将は本当にびっくりした顔になっている。

「ええー。何それ？ 何この変わりよう？」

キリコは知らん顔でテーブルにアイスコーヒーを置き、

「オバハンです」

と、ニツと笑う。

「マスター、何したの？ まさか!!」

「さあなあ、何したんやろな」

こっちもニツと笑つてやつたら、

「ヒエエー」

思わず聞き返したが、ハツと思い当たった。

「ずうつと遮断機の前に立つとる。何か思いつめとるみたいやつたで、飛び込むとちがうかと思つて、何しとんの、と声かけたらニコツと笑つて頭下げよる。ほんで五分ぐらいしたら帰つてくんや。それで、次の日も次の日も同じことしよる。何本も電車が通るの見たる。あのこ、電車オタクか？」

それはないだろうと笑い、同時にそうかと思つた。彼女は多分、踏み切りが渡れないのだ。そして、猫にもさわれない。だから……。

「おい、タカシ、何か言え」

言われて我に返つた。

「ああ、キリちゃんな、『特急しまかせ』が見たいんやて」和尚は思いっきりヘンな顔をしたが、それ以上はきかなかった。

キリコはちょうど郵便局に行つていなかった。そろそろ帰ってくる頃だ。

「待つとつてもしょうがないで、もう帰るわ」

と和尚が腰を上げた時、キリコが帰つてきた。

「おお、キリコさん。きれいになったって言うとなつたこや」

キリコは汗を拭きながら口だけで笑い、

「そうなの？ 前からキレイですけど」

と和尚に向き直っておどけてみせた。

「こらまた言うようになったがね。タカシ、おみやあの教育が悪い。あー、回数券、一枚切つて」と

「トマトジュースの回数券はないぞ」

「こっちの方が安いやろ。カタいこと言うな」

そう言うと、ひょいと右手を挙げて出ていった。ドアの外から「あつっ」という叫び声が聞こえる。

流しの所で赤いエプロンをつけているキリコに向かって言った。

「和尚さんに聞いた。キリちゃん、今、無理する必要はないと思うけど」

彼女はすっと顔を上げた。

「知ってたの？」

「うん、今、聞いた」

「でも私、電車にも乗れないし、踏切も渡れない。猫も……さわれない……だから、私……」

「月曜日、電車、乗りに行こうか？」

「電車……」

「伊勢のペットショップにエアープンプ買いに行こう」

キリコの顔をそっとうかがう。頬がかすかにこわばっている。

「私……できるかな」

「俺が隣についてる」

「遊園地でデートしてるみたいや」

キリコはやつと体の力を緩めた。そしてしっかりと窓の外風景を見、

「私にとってはジェットコースターです」

と、泣き笑いの表情になった。

「ジェットコースターは乗れるの？」

「平気です」

前の席の女子高校生がポカンとして二人を見ている。ニカッと笑ってピースサインを出したら、その女子高生も白い歯を見せてピースサインを返してくるのだった――。

店に帰ってから、買ってきたポンプに「八月八日 桐子」とマジックで書き、タツノオトシゴの水槽に新しく据えた。書きながら、ふと、免許証に書いてあった彼女の誕生日の日付けが頭に浮かんだ。

「キリちゃん、送り火、見たことある？」

「送り火？」

「お盆に帰って来たご先祖様を送り返すために焚く火」

「ないです。一回も」

「こころへんは十五日の夜に焚くんや。この大通りの方はあんまり焚かへんけど、お寺の前の家は一斉に焚く。見に行く？きれいやよ」

「見たい。でも店は？」

「十五日は月曜。定休日。遊びに行く？」

キリコの瞳に光が宿るのが見えた。そして小さな声で「うん」とうなずくのだった。

――結果から先に言うと、キリコは何とか電車に乗ることができた。ただし、行きはものすごく緊張して、窓の外を見る余裕すらなかった。キリコは座席に座ったままうっ向き、きつく目をつぶっている。見かねてその手を強く握って耳元でささやく。

「キリちゃん、目、開けろ。外、見ろ。見なきゃダメだ。キリちゃん！」

キリコはきつく閉じていた目を少しずつ開いた。手を握り返す力はほとんど強くなる。その時、この人の傷の深さをはっきりと皮膚で感じた。人は他人の心の痛みを本当に知る時、体でしかそれを感じることができないのだと知った。

キリコの体はガチガチにこわばっている。

「キリちゃん、名古屋からここまでどうやって来たの？」

「バスを……乗り継いで……来ました」

「すごいな。何かの番組みたい」

「途中、あちこちで働いてましたから……」

「そうか、そうやったな。――キリちゃん、手、痛いよ。ジェットコースターじゃないんだからさ」

気づいて彼女は手を放し、赤くなった。

「ごめんなさい」

「どこに連れてつてくれるの？」

「うーん、水族館かなあ」

「また？ ペンギンですか」

「今度はオットセイ」

「好きですね、水族館」

「何回行ってもタダやから」

そう言うとキリコはおかしそうに笑うのだった。

お盆の間中とても忙しかった。観光客がひっきりなしにやってきたからだ。なかには、どこで聞いたのかキリコの特長な能力を知って、物珍しさにやってくる客もいた。キリコは嫌な顔ひとつせず、憑いている何かを取り、段ボールの箱に入れていった。

「キリちゃん、箱、いっぱいにならないの？」

「大丈夫です。空間がゆがんでますから」

「ブラックホール？ 四次元ポケットみたい」

「でも入れすぎると床が抜けるかも」

「うっそお。ホント？」

「冗談です。でも、どうなんだろうな」

キリコは笑ったけれど、少し疲れた顔を見せた。――忙しいのは十四日の夕方まで続いた。

十五日は朝から店の掃除をし、昼前に水族館に行った。まず、レストランでパエリアを食べてからアシカのショーを見た。

「おなかふくれたからヘンなもの見えへんやろ。落ちついて回れるやろ」

熱を出して倒れた日以来、キリコは、人に憑いてる何かを取り去ることに美しくなっていた。しかしその反面、疲れを見せることも多くなっている。だから、十五日から十七日まで店を休みにした。

「本当を言うとな、この頃見える回数が減りました。ほんやりとしか見えないことも多いし」

シフォンスカーートの裾をひらひらさせながらキリコは通路の窓際を歩く。大きな丸窓の向こうの海が目もくらむほど眩しく光り、真珠島との水道を観光船が横切るたびに、ギラギラが拡散される。キリコはふと足を止めた。

「こわいんです、私……。幸せな目を過ごせば過ごすほど、いつかともない不幸が天から落ちてくるような気がして……。それを思うと、どんな眩しい朝でも、何だか急に黄昏れていくような気になるの」

キリコは窓枠に手をついたまま海を見ている。

「捨てればいい。そんなもの」

えっ、と言って、彼女は小さく振り向く。

「捨てちゃいな。今すぐに」

「どうやって？」

「それはキリちゃんが考えなよ。幸せや不幸せなんて人が勝手に決めるだけやろ。不幸せがあるから幸せもある。どっ

ちも精一杯受けとめて生きたらええやん。黄昏も暁もおんなじや。地球がぐるぐる回つとるだけや」

キリコはプフツと小さく吹きだし、

「すごい発想。おもしろすぎるよ。でも、何かホツとします」と笑い、再び歩き出した。あー、しまった、適当なこと言っちゃまったと内心反省しながら歩いていると、「あれ、マスター、タツノオトシゴ元氣ですか」とうしろから声をかけられた。野本奈々が笑って立っていた。

「元氣やよ。二匹で毎日ダンスしてる」

「そうですか。あと半月ぐらいしたら、子ども産みますよ」

「子ども？ 卵じゃないの？」

「子どもです。メスがオスの育児嚢に卵を産みつけて、そこで卵がかえります。それからしばらくするとオスが子どもを産むんです」

いかにも楽しいといわんばかりに奈々は説明した。しかし、オスが子どもを産むとは！

「オスが産むの？」

キリコが素頓狂な声をあげた。

「ええ、子どもを守るためです。それはそうとマスターも求愛のダンスですか、キリコさんと？」

奈々は意地悪くニヤける。ちよつとあたふたしてしまった。

「俺とキリちゃんでは釣り合へんだろ」

すると奈々はニカツと破顔して言った。

「すつごいお似合いですけど。すでに夫婦ってカンジ。キリコさんセンスいい。お洒落」

キリコは決まり悪そうにうつ向いている。

「あ、それから日田さん子ども生まれたって言ってました。じゃ、仕事があるので」

ペコリとお辞儀をして、言いたいことだけ言うと、奈々は行ってしまった。まったくよくしゃべる娘やとぶつくさ言っていると、キリコはクスクス笑って、「若いんだからいいんじゃないですか、楽しそうで」と言う。

「どうせ俺は年寄りですわ」

ふてくされて言ったら、キリコはまたクスクス笑うのだった。

その日の夕方、店で軽く夕飯を食べ、二人でワインを少し飲んだ。食事はしょっちゅういっしょに食べていたが、酒を飲むのは初めてだった。それから禅福寺に出かけた。七時頃から寺の中にある広場で盆踊りがあるのだ。ここの盆踊りはCDなどいっさいかけず、地元に伝わる盆踊り歌を若い衆が交替で歌い継いでゆく。歌詞は三十八番まであるから覚えるのが大変だ。若い頃は結構覚えていたが今では半分も思い出せない。ちよつと踏み切りの前まで来たところで歌が聞こえてきた。太鼓の音は遠くからでも聞こえるが、歌はマイクを使わないので近くまで行かないと聞こえない。

キリコはちらりと踏み切りの方を見たが、すぐに視線を戻し、

「ちよつと恥ずかしい」

と小声で言う。なんで、ときくと、「私、よそ者だし、マスターといっしょだし……」とぼわぼわつぶやく。

「じゃ、一人で行く？ 帰る？」

「どっちも嫌だ」

「キリちゃんはよそ者じゃないよ。みんな知ってる。キリちゃんにいつぱい世話になってる。いろんな物、取ってる」

「そうかなあ……」

彼女は団扇でパタパタと顔を扇いだ。

寺に着くなり、マスターやるやん、と若い衆にいきなりひやかされ、コップ酒を二杯飲まれた。キリコさんも、と貴將が紙コップを突き出す。どうするんだろと氣を揉んで見ていたら、キリコはそれを一息で飲んでしまったのだ。おおうと歓声が上がリ、すかさず二杯目が差し出される。すると彼女はそれも平然と飲み干してしまった。目が点になる。

「キリちゃん、ひよつとしてザル？」

「四杯飲んだら倒れると思います」

シレッと言ひ放ち、「あれ食べたい」と、青年団が出している屋台を指さす。

「ワタアメヤン」

「由起恵お母さんによく買ってもらった」

何だか急に胸が痛んだ。でもそんなことは顔に出さず、ワタアメを二つ買う。サービスしてくれたので特大だ。寺の縁側に腰掛け、踊りを見ながらちびちび食べた。

「キリちゃん、酔わないの？ 俺はもう大分怪しいけど」

「もうすぐ酔います。まだ大丈夫ですけど」

ケラケラ笑って彼女は言うのだった。

八時になると、十分間だけ花火が上がった。港の台船から打ち上げるので山に邪魔されて半分しか見えない。ちよつとイラつく。

「よう見えん。山削つてまえ」

野太い声に振り返ったら、和尚が子猫を抱いて立っていた。ああまずいぞと思つて見ていると、和尚は、よつこらしよ、とキリコの横に座るのだった。サアツと背中中に緊張が走る。——キリコはわずかの間身を硬くした。でも、逃げなかった。動けないのだろうか？

「タカしい、おみゃあ、スミに置けへんなあ」

からかわれたが、それどころではない。キリコがどういう反応を示すのか気がでなかった。ゴクリと生唾を飲み下し、キリコの横顔を凝視した。ところが……。

キリコは本当にゆつくりと和尚の方に向き直り、静かに、落ちていた声で言った。

「猫……抱かせて下さい」

息が止まるかと思つた。まじまじとキリコの瞳を見つめる。「ああ、ええよ」と何も知らない和尚は、ひよいとキリコの手の子猫を乗せた。猫は拾ってきた時よりも少し大きくなっている。心拍がやたらと早くなった——。

キリコは、一瞬、ビクツと肩を震わせたが大切な物を（いた）るように、そうつと子猫を胸に抱いたのだ！ とてもゆつくりした動作で……。

——キリコはしばらく動かなかった。十数秒そうしていたが、突然、肩を小刻みに震わせ、大粒の涙をこぼして泣き始めたのだった。

猫がキリコを見上げ、ミァオウと一声鳴いた。彼女は途端にぎゅつと猫を抱きしめた。また猫が小さく鳴いた。時間が一瞬止まった。

「——ごめんね……ごめんね……」

誰に言ったのだろう。それは分からなかった。でもその声は確かにとても優しかった。

ごめんね、ごめんね、彼女は何度も何度も繰り返した。猫の白いフカフカの背中毛が、涙の分だけ、小さく、まあるく濡れていた。

キリちゃん、どしたん、と慌てふためいて、和尚はキリコの顔を覗き込んだ。それでも彼女は泣き続けた。

和尚は訳が分からず、ポカンと口を開けてキリコの顔を

呆然と見守るだけだった。

最後の花火がポーンと上がり、キリコの横顔を薄淡く染めた。その頬は透き通るほど青かった。刹那のきらめきを発して、火花が夜の空に吸い込まれると、彼女の頬の色はもう分からなかった。けれど、さっきの一瞬の青さに、背をつらぬかれるような寂しさを感じた。そしてその時、彼女は一人っきりだった。

——盆踊りは十一時に終わる。キリコの腕の中で子猫は眠つてしまい、彼女は猫を抱いたままずっと縁側に座り、見るともなく踊りの輪を眺めていた。和尚の奥さんがスイカを出してくれたが、その時は猫を膝の上に乗せて食べた。種をブブツと飛ばして——。

十一時前に、彼女はちよつとだけ踊った。いっしょに踊っている、やんやの喝采を受けスマホで写真を撮られた。キリコは踊りをすぐ覚えた。なかなか上手に踊る。動きがしなやかだ。

「小さい頃、施設の人に郡上踊りに何回も連れていってもらった」

三杯目を飲まれ、赤ら顔で彼女は答えるのだった。十一時を過ぎると辺りは一気に静かになる。あちこちの家から人が出てきて、玄関先の通りで火を焚く準備を始める。暗がりの中で、ボンボン話し声が聞こえ、かすかに人の気配を感じる。百メートルぐらい向こうにポツと火がと

もった。それを合図にするように、道の両側に次々と赤い

火が揺れ始める。山の竹藪に遮られて月の光は届かない。風は吹いていない。三十近い火が、ゆらりゆらりと闇の中に立ち上がり、火勢を増した。酔いのせいもあるのか見ているうちに頭がボーッとし、果てしなく遠い日月がそこに眠っているような気がした。ゆらめいているのに一枚の写真のようだ。現実か夢か何だかよく分からない。

火は踏み切りの所で終わっている。だが、その先の暗さのせいで、まるで海まで続いているように思える。湾口の広場に立つ水銀灯がポツンと寂しげに見えた。船の灯はひとつもなかった。炎は道標（みちしるべ）のようだ。

最終の下り列車がトンネルを抜け、踏み切りを通り過ぎてゆく音が聞こえる。

「歩きませんか」

ポツリとキリコが言った。境内から出て山門をくぐり、二人、ゆつくりと並んで歩いた。

先につけられた火がだんだん小さくなる。やがて闇に滲むように、二つ消え、四つ消え、しばらくすると半分ぐらいの火が暗がり溶けていった。一本の糸のような寂しさが胸の内に広がる。静か過ぎてこわいぐらいだ。

「キリちゃん、誕生日、おめでとう」

キリコが驚いて振り向き、穏やかに笑った。「ありがとう。この世で一番美しかった……」

踏み切りまで来た時、火はみんな消えていた。「消えたね」と言ったら、彼女はただ黙ってうなずく。——竹林が切れ、月の光がだしぬけに降り注いできた。立ち待ちの月が東の高みで煌々と輝いている。一面、青だ。

横で水槽に顔を近づけた。
「おんなじ形!!」
キリコが妙な感動の仕方をする。出産なんだから当たり前だと思ったが、それにしても彼女は無防備に顔を近づけすぎる。おくれ毛が頬に触れている。気恥ずかしくなって水槽から顔を離れた。彼女は水槽を見たまま、

——キリコは踏み切りの前で立ち止まった。鈍く光る線路をじっと見つめたままで……。

「エサはどうするんですか？」
と問う。

「誕生日プレゼント、胸に染めました……」
彼女はそうささやくと、ためらいがちに前に一歩踏み出した。そうして、心を決めるように大きく息を吸い込み、歩みを進めた。黒々とした影が、くつきりと線路の上を滑ってゆく。数秒後、向こう側に辿り着いた彼女は、鮮やかに

「自然界と違って水槽で生まれたんやから、最初から冷凍エサでええよ」
「そっちの方が楽ですねえ」

クルリと振り向き、背筋をまっすぐに伸ばして、両手を高々と空に向かって突き出したのだ。かすかな南風にキリコの前髪がほんの少し流れた。彼女の白い指の先には、青く透き通った天のお月様が光っている——。

「じゃ、キリちゃんエサやり係」
そういうことで、やっとエサ当番からのがれられるはこびとなった。
彼女は毎朝スポイトで喜々としてエサを与えた。それでも、日に何匹も死んでいく。多い時には十匹も死んだ。そのたびにキリコは辛そうな顔をしたが、それでも毎日せつせと世話をし、最終的に八匹が生き残った。

八 ペンギン空を飛ぶ(終章)

慌ただしい夏は足早に過ぎてゆく。九月の声を聞く頃、タツノオトシゴが子どもを産んだ。朝、店の水槽を覗いたら、黒いオスの下に五、六十匹のミニタツノオトシゴがモアモアと固まっていたのだ。

「キリちゃん、見てみな。子ども生まれてる」
子ども? と声を上げてキリコが隣に走ってきて、すぐ

「八は縁起ものの数字や。自然界では三パーセントしか大人になれへん。上等でしょ」
「厳しいですね」

「エサやり過ぎるとあかんよ。野生の生き物は飢えには強いけど食べ過ぎには弱い」
へえ、と目を見開いて彼女はこつちを見た。何だか彼女は若返って少女のようだ。店に初めてやって来た時の影はカケラもない。

「私、ヘンな夢、見ました」
テーブルを拭いていたキリコは唐突に振り向いて言った。
「夏にペンギンの水槽の前で紐ほどいたでしょ。あの紐がまた天から降って来たの」

があるらしく、
「これで断ち切れなかったら俺はホンマのアホですわ」
と遠い目をして言った。ちなみに今は美奈にずっと会ってないとも言っていた。
キリコにはそれらのことはひとことも話してない。しかし、人並はずれた能力を持つ彼女のことで。見えない何かを察したのかもしれない。それにしても変わった夢だ。天から降りてくる紐? 飛んでくペンギン? 考えれば考えるほど分からなくなった。

「天から?」
「そう。そしたらペンギンが笑いながら空に飛んでった。アッハッハーって」
「まさに、変な夢やな」
「何の予知夢かな?」
「予知夢? キリちゃんの夢、当たるの?」
「さあ……」

秋分の日が近づいてくるにつれてだんだん不安になってきた。人のこととはいえ、何ごととも起こらなければいいがと気を揉んだ。秋分の日が醜聞の日になるのは御免こうむる——その日は朝から雨降りだった。昼前にはあがる予報だったが二時を過ぎても、まだシトシトと雨粒が大通りのスズカケの葉を濡らしている。車のタイヤが湿った路面をこする音が店の中まで聞こえてくる。

キリコは首をひねる。——実は今週の秋の彼岸に、良英が奥さんといっしょに子どもを見せにくることになっていった。そして、こともあるうに美奈にもそれを知らせたというのだ。「アホちゃうか!」と言ったら、「美奈があなたの奥さんと子どもを見てみたいと言うので」と答えたのだ。美奈は、アカの他人のフリしますから、と言ったらしい。どこまでバカなのかと思ったが、良英は何か秘するもの

良英が来るのは三時半の予定だ。キリコには事前に話を伝えてあるので、彼女は時計ばかり見上げて何だかソワソワしている。
「キリちゃん、落ち着きなよ」
「緊張する。何かコワイよ、マスター」
「当事者は良英なんやから。キリちゃんが緊張してどうすんの」

「そうですね」

キリコがフウーと大きく息を吐いた時、ドアが開いて女性客が入って来た。キリコの頬が、ビツとこわばる。

美奈だった。なぜか黒の礼服装だ。彼女はかすかに口端で笑い、小さく頭を下げた。

「アイステイーを」

入り口に一番近いテーブルに座り、彼女は静かに言った。髪をゆるいアップにしており、前よりはるかに落ちついた雰囲気だ。

「葬式でもあったの？」

その問いに、彼女は外に向けていた視線をこっちに向けた。「伯母が亡くなって……。それに今日は私自身のお葬式ですから」

それを聞いてドキリとする。キリコが心配そうな瞳を向けてくる。

美奈は前よりいくぶん痩せて見えたが、顔色は存外明るく、憂いは感じられなかった。

「あの人が、美奈さん？」

小声でキリコがきく。そう、とうなずくと、

「青いシルクの紐が肩から出て光ってる」

とささやく。そう言われても何も見えないけど、やっぱりちよっと緊張してしまう。

「マスター、結婚したの？」

突然の美奈の問いにいささかとまどう。

「なんで？」

「その女の人、どなた？」

「ああ、この人はアルバイト。六月から」
ふうん、そうなんだと、美奈は興味ありげにキリコに視線を送る。ペコリとキリコはお辞儀をした。

——良英は三時半きっかりにやって来た。こんなにちは、と勢いよくドアを開けたが、美奈の姿が目に入った途端、短い間表情を硬くした。だがそれも一瞬のことで、そのあとすぐに、

「入っておいで、めぐみ」

と、ドアの外に手招きした。

開いたドアから赤ん坊を抱いた小柄な女が顔を出した。極端に髪を短くした、子どもっぽい顔つきだ。どこことなく野本奈々に似ているなと思ったが、それよりずっと幼く見える。

美奈は、ちらっと上目で女を見た。ほんの一瞬のことで、あとは知らん顔をしている。少しホッとした。キリコも小さく息を吐いた。

良英たちはカウンターのすぐ前の席に腰掛け、アイスコーヒーを注文した。良英は多少ソワソワしていたが、表面上は健気に平静をよそおっている。美奈の落ち着き払った姿との対比が笑えたが、それを顔に出すわけにはいかない。

「めぐみ、です」

良英は女を紹介した。赤ん坊を抱いたまま女は笑って会釈する。

「この人もペンギンの飼育員？」

「いいえ、名古屋の水族館でアシカの世話をしました。今は育休中です」

女は目を細めて笑い、

「日田がいつもお世話になっています」

と続けた。その笑顔にこれぼっちもかげりはなかった。今この瞬間がいわゆる修羅場であることなど微塵も知らないのだ。そう考えるとハラハラする。

子どもの名前を問うと、良英は、

「男の子なんでヒデヨシにしようと思ったんですけど、あんまり大そうなのでヒデトにしました。英語の英に、飛翔の翔です」

と、赤ん坊の頬を二、三度撫でた。

その様子を眺めながらも、美奈のことが気になってしょうがない。

美奈はやっぱり良英など見向きもしない。良英はというと、時々入り口の壁に掛けられた時計を見るフリをして美奈を盗み見している。やはり気になるのだろう。自分から仕組んでおいてアカンタレなやつちゃと思った。どうする気なんだろ？ 何事もなく終わるのか。良英の瞳には落ち

着きのなさがモロに出ている。だが、妻はそれに全く気づかない。目をさました赤ん坊をあやすのに一生懸命だ。

——良英は十五分ぐらい延々と身の上話をした。美奈は聞いていないフリをしてはいるが、その実、聞き耳をたてているのが分かる。緊張感がないのは妻のめぐみだけだ。そう思うと彼女が村八分のように少々哀れさを感じたが、まあ、それでいいのだ。かわらずに過ぎてゆくのが幸せなのだ。

良英の妻がトイレに立った時、良英は訪れた静けさに耐えられない様子で、ちらりと美奈を見た。二人の目が合った。息を止めて二人に視線を注ぐ。キリコは二人を交互に見比べている。

二人は数秒間じっと見つめ合っていたが、美奈が唐突にニイーッと笑ったのだ。

「どこでも飛んでっちなまえ、クソ野郎」

小声だったがハッキリと聞こえた。キリコと二人呆然と美奈の顔を見ていた。良英もボカアと口を開いていたが、子どもを抱いたまま、急に慌てふためいて、口の中でモゴモゴと、「ごめん」と言った。まったくマヌケな構図そのものだ。

めぐみがトイレから帰ってきた時、美奈は再び知らん顔で外を見ていた。

「そろそろおいとましましょうか？」

めぐみが言い、うん、と良英が立ち上がった。それから二人はレジの所へ歩いていった。レジは美奈の目の前にある――。

良英が気もそぞろにレジの前に立つ。そのうしろ姿を美奈はじっと見ていた。

良英の隣に立っためぐみの腕の中で、赤子が急に泣き出した。まるで痙攣を起したみたいだに。めぐみがあやした。が子どもは全然泣きむ気配がない。

「帰るのが嫌なのかなあ」

めぐみがつぶやいた時、美奈がスッと立ち上がった。そして二人に近づいてゆく。

ハツとしてキリコのレジ打ちの手が止まる。良英が何事かと振り向く。

「ちょっと私にかけて下さい」

予想もしていなかった言葉に、良英もキリコも固まっている。もちろん自分もだが……。

めぐみは短い間逡巡したが、黙って赤ん坊を美奈の腕に乗せた。おそろおそろだった。

美奈とめぐみ以外の三人の時間は無限大に停止してしまつたみたいだ。

美奈は赤子を軽々と胸に抱くと、リズムを取ってあやし始めた。母親であるかのように。

「ちっちゃいすねエー。ちっちゃいペンギンさんでしゅ

式だったんですヨ」

キリコの瞳は潤んでいた。彼女はすばやくエプロンで目頭をぬぐった。

赤子は泣き止んだ。今は美奈の胸で静かに眠っている――。

「寝ちゃったよ」

美奈はそう言って笑うと、そうとそうと赤子をめぐみの腕に返した。赤子に気を取られて、やっぱりめぐみは美奈の涙に気づかなかつた。美奈はめぐみがうしろを向いた一瞬の隙に良英の方に向き直り、口の形だけで

「バーカ」と言ったのだ。

良英はただ立ち尽くしているだけだった。本当にバカのように立ち尽くしているだけだった――。

「すごいですね。ありがとうございます」

めぐみの言葉に、美奈は、

「いいえ、こちらこそ」

と、深々と頭を下げるのだった。

――二人が店を出ていったあと、ドアの外の歩道で、「雨上がったねー」とめぐみの声がした。遅いセミの声が小さく聞こえる。

美奈は窓の外に目を移し、雲間からのぞく薄陽をしばらく眺めていた。

「私も帰ろっかな」

ネー。でも、重たいんですよ」

赤子に向かって話しかけ、両手でユラユラと揺らす。そして顔を覗き込みバツと笑った。

「よく泣きましゅネー。ペンギンちゃんでも笑うのにネー。何か悲しいことあったのかなあー？ とつてもつても悲しいのかなかァー？ でもねえ、これから楽しいコトもあるんでしゅヨー。だから泣くのやめようネー。ペンギンちゃんも笑うんだヨー」

すると、赤ん坊はピタリと泣きやんだのだ。彼女はそのまま赤子を揺らし続ける。

「泣いちゃだめでしゅヨー。笑おうネー。なくなる命もあれば、生まれる命もあるんでしゅネー、不思議でちゅネー。これが命の重さなんでしゅネー」

赤子に向かって話しかけながら、美奈は小気味よくリズムを取って揺らす。

「いい子だねえー。ほうら、アカンベー。どこかの水族館のアザラシみたいですよー」

美奈はベロツと舌を出して、不意に顔を良英に向けた。目にはいっぱい涙が溜まって、それが一粒だけポロリとこぼれた。

良英は立ち尽くしている。めぐみは気づかない。美奈はすぐに下を向いた。

「おばちゃん、今日大事な人を亡くしたんですヨー。お葬

彼女はバッグをひょいと肩に掛け、静かに立ち上がる。

「どうなることかと思つたよ」

正直に言つたら、

「大人になったんだ、私」

と、ふつ切れたように笑う。

「マスター、その人大事にして下さいね。分かるんだ、私――。二人はちゃんと呼び合つて。二人の距離はゼロだよ」

いきなり言われて、えっ？ と驚いていたら、美奈はまたニーツと笑い、「じゃあお幸せにね。また来ます」と、ドアを開けて出ていくのだった。

あとにはドアの鈴がチリチリと揺れているばかり――。

キリコは黙ってテーブルを片付けている。

「疲れたねえ、キリちゃん」

照れ隠しもあつてそう話しかけたら、彼女はシレッとして、「ペンギン、飛んでつちやいましたよ。シルクの紐といっしよに――」

と言つた。

「ペンギン？ 良英の肩のやつ？」

「うん。美奈さんが頭を下げた瞬間、パアツと飛んでいきました」

「キリちゃんが紐ほどいたおかげ？」

彼女は顔をあげ、「さあ」と宙を見つめる。

「でもさあ、伯母さんのお葬式の日と重なるなんて偶然やっただね」

そう言ったら、キリコはちよこつと首をかしげてこつちを見た。

「そう思います？ 友引だよ、今日は」

へっ？とカレンダーを見たら、確かに友引と書かれている。ポカンとキリコの顔を見た。

「ニブイですね。女心に」

彼女はそうひとこと言い放ち、これまたニーツと笑うのだった――。

その日以来、キリコが何かを見る回数は極端に減った。

あそこが痛い、ここが痛い、店にやってくる人もあつたが、キリコがそれらの人を治療をすることもほとんどなかった。そして彼女はびっくりするほど若返って見えた。

それはキリコ自身も感じているらしく、どうしてかなあとしきりに首をひねっている。

「今までの苦勞をみんな吐き出したんだ。しなくてもいい苦勞まで背負ってたから」

「そうなのかなあ」

「全部捨てる日が来たんや」

――キリコは何も言わない。ただグズグズと鼻を鳴らすのだった。

放り投げたのだった。そのたびに髪が乱れ、切れ切れに、澄み渡った秋陽をきらめかせた。それは五分ぐらい続いた――。

三十個以上のあらゆる物を投げ終えたキリコは、肩を大きく上下させ、呼吸いきをしている。

ふと見ると、箱の中には一つだけポツンと油ゼミなまがらの亡骸なきがらが残っていた。

「これは何？ キリちゃん」

キリコは前髪を左手で撫でつけている。

「美奈さんと日田さんが店に来た日の夕方に裏庭の石段で死んでたんです。セミってさあ、必ずあお向けになって死ぬんです。力尽きて体が支えられないの。死んでゆく時も青空さえ見られない。それって、あんまりじゃないですかだから――」

彼女はそう言うと、臆する様子などこれっぽっちも見せずにセミの死骸を指で掴み、

「セミ飛んでいけえ！ ペンギン飛んでいけえ！ 青空のあっちまで飛んでいけえ！」

と、声の限りに叫び、海に投げた。

セミは、クルクル回りながら落ち、やがて白い航跡に吸い込まれて波間に見えなくなった。

キリコの頬は薄紅く上気し、若々しさに満ちていた。彼女のはるかに遠い日月じつげつをその掌の中に再び握りしめている。も

十月十日の祝日は月曜日で店は休みだった。抜けるような青空がどこまでも広がっていた。

その日、二人で伊勢湾フェリーに乗った。別にどこに行こうというあてはなかった。ただ二人で乗ったただけだ。客室には入らず、ずっと後部デッキのベンチに寄り添って腰を降ろしていた。キリコは膝の上にダンボール箱を抱えている。例の、さまざまな人の、さまざまな物が詰まった箱だ。

キリコの髪は夏の頃よりだいぶ伸びた。それが強い北西の風に吹き払われている。彼女は何かしゃべらず遠ざかる鳥羽の街を見つめている。静かな澄んだまなざしだ。

彼女は何かしゃべらない。黙ったまま風に吹かれている。船が答志島を過ぎるあたりまで来た時、彼女はそつと手を握ってきた。

「いっしょに来て下さい」

二人、立ち上がって手すりの所まで歩いてゆく。キリコは段ボール箱のフタを開けた。フタがバタバタと風に煽られる。

キリコはしばらく海を見つめていた。そしてそれから箱の中に無造作に右手を突っ込み、

「カメ飛んでけえ。へび飛んでけえ。モヤモヤ飛んでけえ」と叫びながら、見えない物たちを、次々と空に向かって

う彼女の眩しい朝が黄昏れていくことは二度とないだろう。そう思った時、初めてキリコを力いっぱい抱きしめることができたのだった。

キリコの髪から、ふと、レモンの匂いがした。

「キリちゃん、レモン……」

言いかけるのをさへぎるみたいに、彼女は笑いながら空の一角を指さすのだった。

見上げると、はてしない高みから、一本の透明なきらめく青い紐が、今まさに二人向かって舞い降りてくるところだった――。

〔文宴〕139号より転載



藤原伸久

ふじわら のぶひさ

「文宴」同人

中部ペンクラブ・津文研会員

三重県文学新人賞・同奨励賞受賞

中部ペンクラブ賞受賞

原稿はすべて手書き

トライアスロン・登山・ボルタリングなど多才

文宴

三重県

「文宴」の仲間たち

『文宴』は昭和三十七年以降、脈々と続く来歴を持つが、その源泉には同人の一人ひとりの継続への意志が途絶えることなく受け継がれてきたことがある。

今回『文芸思潮』主催の「まほろば賞」（令和六年・二〇二四年度の優秀作に同人の一人である藤原伸久の「黄昏の朝」（139号）が選ばれたことは、『文宴』の長い歴史のなかでも特記すべき出来事であり、同人一同に対する大いなるエールと受け止めている。

現在の同人は、詩人二人を含む九人。同人歴の古い順に以下に紹介。文芸評論の戸田真樹は「鏡花・露伴」研究の第一人者であり、全国各地で開催される研究会活動のメンバーとして活動を続けている。鈴鹿市在住の伊達まさは、軽妙な語り口の作風で日常の喜怒哀楽を綴り、連載を続けている。華道の師範としても活躍中。宮本由紀は文芸評論一本槍の書き手だが、洋書を原文で読み独自の解釈を試みるという他に類を見ない書き手である。橋倉久美子は川柳をもっぱらとするが、「明解国語辞典」を初版から最新版に至るまで仔細漏らさず読破し、エッセイや短編などその文体にゆるぎない力を発揮。中田重顕は満州生まれ。戦



「文宴」合評会後の飲み会

文宴

139

巻名	著者	頁数
● 巻頭 ため息の海	藤原伸久	44
● 巻頭 鏡花・露伴	戸田真樹	52
● 127号 中野千秋	伊達まさ	54
● 128号 空に落ちる	宮本由紀	61
● 129号 星の群れ	橋倉久美子	70
● 130号 まだ見ぬ夢	中田重顕	80
● 131号 空に落ちる	藤原伸久	110
● 132号 ため息の海	藤原伸久	132
● 133号 星の群れ	橋倉久美子	134

後以来熊野在住。同人誌推薦作として『文学界』に二度も作品が転載されるなど、世界遺産熊野の語り部として、講演や文学講座の講師をも務め、受賞歴、著書多数。

今回優秀作に選ばれた藤原伸久は、いわゆるマルチ人間で、ボルダリングをはじめ陸上競技・水泳・自転車などをこなすかたわら、海釣りの名人として、また三〇〇m級の山岳登頂を目指す登山家として、野球では選手兼監督を務め、演劇の世界では主役を張れる才能を持つ逸材。彼にとっての文学とは、その間隙を縫うての創作。自称文学音痴を吹聴しながら、美しく潔癖で実直、愛と死をめぐっての様々な葛藤を描き出す。三年前に出版した『雲を掴む』の好評に続きこの五月には第二作品集『星ひとつ』を出版予定。ノリノリの勢いは止まるところを知らない。今回は

好機を得て、藤原伸久の作品を以下簡単に紹介したい。

「標識」（123号二〇一五年）「主人公「僕」を中心に、慧という十八歳の少女とその母、寺住職の祖父を描く。それぞれ陰影に満ちた人物造詣の妙は、藤原作品の原点ともいえる風景が広がる。

「星座の群れ」（124号二〇一五年）「前号の連作と思しき一作。「僕」は慧とともに鈴鹿の銚子岳へ。慧の無邪気で純粹な一言一言が、僕の気持ちを高ぶらせていく。

「神様の箱庭」（125号二〇一六年）「ひたすら壁と対峙する。登るという動作は、箱の中で困窮した拳の身もだえに近いものだった。高度に対する恐怖はもうない。

「まだ見ぬ夢」（126号二〇一六年）「連作の三作目。慧を海から救い出したとき、「僕」は強烈な意思を持った慧の瞳を見つけたのだった。

「蟋蟀」（127号）「昭和の経済復興の余禄がまだ海辺の村にまでは届かなかった頃のこと。桐野千秋は母の交際相手の男に犯されるといふ過去を持つ。物語はその千秋と再会するところから動き出す。

「空に落ちる」（128号）「翔子を初めて見たのは、昨年春の佐多神社の境内だった。以来どんどん翔子に惹かれていく。山に登ったとき空を見上げて、ああ、空は落ちてゆくためにあったのだと初めて気づいた。一人称を一回も使わない作品。

「箱の中」(129号) 家から三〇メートル程離れた場所で一人暮らしを始める。テントの中から眺める風景からは、両親やおばあさんとの繋がりが見えて来るのだった。

「空あり」(130号) 生きていることと死ぬことはおんなじやん。タライからタライに移るだけ」その思いが一途な生き方しかできないジレンマとなつて、純正と沙絵の心を乱す。

「雲を掴む」(131号) 中部ペンクラブ賞受賞作。三編からなる単行本の一作。性から離れた男と女を設定することで、真のプラトニックを描きだそうという意欲作。

「アンダー・ザ・ヘブン」(132号) 原真季ことハラマキと直の心と心の触れ合いを、ユーモアとペーソスを織り交ぜて描きだす。

「夜光虫」(133号) 二〇年度の温度がなかなか落ちず、一二月に入っても二〇度を越える日が続いた。そのせいか夜光虫がやたらと多い。祖父母の代から両親、娘夫婦までの四代にわたる相克を描く。

「ミトコンドリア」(134号) 路地裏にある古ぼけた古本屋「Q館堂」。「基礎の生物学」を読破した中二の愛はミトコンドリアに興味を持つ。「明日世界が減びると分かっている、今日、林檎の木を植えますか」とQさんから尋ねられる。

「天の焰」(135号) 押し入れに隠されていた一枚の絵画を発見。青衣の女性像に翻弄される主人公の純粋な心を描く。



タイのすべてがここに
特価 2000 円 (税込/送料共)
注文はアジア文化社まで



「ユキノハナ」(136号) 市内の中学校に勤務する「俺」は、交換留学生であり教育実習生として着任してきたルーラム王国の王妃の妹ソナム・タンディの指導教官に指名される。さて二人の行方は。

「星ひとつ」(137号) 第二作品集『星ひとつ』のタイトルとなった一作。登山用品を扱う「ジャンダラム」を父から受け継いだ京ちゃんといひかりの物語。

「綿帽子の家」(138号) 夫婦は、町のはずれにある山に登った。その時二階建てで屋根のてっぺんが真っ白に塗られている家を見つけたが……。

「暖かな闇」(140号) 闇は空間でも大気でもない。意志なのだ。主人公の男は、不愛想な三十女の指示を受けてハマグリの密漁にどっぷりとはまり込んでいく。

藤原作品に描かれる愛と青春の物語は、いずれも閉塞する現代社会に風穴を開ける力となる。『文宴』はじめ藤原作品をご希望される方は、遠慮なくお申しつけください。

(発行人/松嶋節)

『文宴』

〒514-0817

三重県津市高茶屋小森町一六七・三一

TEL 059・234・1484

主宰/松嶋節

広告承ります

文芸思潮の読者に 文学愛好者に
知らせたい情報を掲載します

広告掲載料 文芸思潮●発行部数 1000 部

1P	2 万 5000 円	
1 / 2P	1 万 5000 円	
1 / 4P	8000 円	1 / 6P 5000 円
表 4 カラー	12 万円	
表 2・表 4	8 万円	

その他御相談に応じます。ご連絡ください。

文芸思潮広告部 ☎ 03-5706-7847 mail: bungeisc@asiawave.co.jp